
狡猾なゴン

浦波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狡猾なゴン

【Nコード】

N7542S

【作者名】

浦波

【あらすじ】

最低非道な北郷が今度はハンター×ハンターの世界に転生した。まさかのゴンに転生という不運に見舞われた北郷は自分だけでも幸せになるために懸命にもがく。

注意書き 2011・5・1修正

この小説はアンチ小説です。
原作キャラを真っ向から否定する文章が多々あります。

この小説の主人公は前作の「ネギ？スプリングフィールド」から転生した主人公です。

この主人公は最低です。

原作を崩壊させたり、あえて遵守したりなど矛盾した行動がありません。

この小説は作者の妄想です。
基本的に都合主義です。

たまに下ネタがあります。

これらの事が一つでも気にくわないという方や、原作をとてても大事に思っている。
という方は見ない事をお勧めします。

2011年4・30日修正

原作と違う設定やおかしい設定などがあります。

この小説の独自設定となっておりますのでご了承ください。

1 最低な現実

現実には甘く無かった。

いきなりこれから始まるのはどうかと思うが、これが偽り無い今の気持ちのため、こうなった。
何故甘くないかと思っただ経緯を説明しよう。

俺の名前は北郷一刀。

これで何回目の注意だが分からないが、「真・恋姫十無双」の北郷一刀とは同姓同名の全くの別人だ。

見た目も性格も全く違う。

この名前のせいで学校ではバカにされたことさえあった。親に何故この名前にした？ と聞いた事もあった程だ。

まあ、良い。

俺の苦い青春時代は思い出したくも無い。

高校受験に失敗し、中卒ニートという世間で言えばクズ生活を満喫していたら突然、俺のニート生活は終わりを告げた。

朝、起きれば俺は憎しみさえ抱いている恋姫の世界にいた。

神だか悪魔だかは知らないが、何かが俺を漂流させていた。

そして代わりにある力を与えた。

それはあらゆる物をコピー出来るというチート。

しかし、制限として生物はコピー出来ない。それ以外は結構自由だったけど。

大きさや個数に制限は無いし、見たり触ったりしただけでコピー出来る。

この能力を使って俺は中国を支配し、更に領土を拡大して、かのモ

ンゴル帝国のような超大国を建国した後に、寿命で死んだ。

それで終わるかと思ったが、今度は「ネギま！」の世界にネギ・スプリングフィールドとして転生した。

前回と同じようにコピー能力を貰い、魔法をコピーしまくって無双して原作を崩壊させて終わりを迎えた。

そしてまた目を覚ましたら違う世界にいた。

何故違う世界と分かったかと言うと、自分の体が縮んでいたからだ。流石に三回目では慣れた。

「また転生か…。」

と甲高い、変声前の声が出た。

しかし今回は見たことの無く、とても長閑な風景が広がっていた。もしや今度こそ二次創作では無い平和な世界か？ と年甲斐もなく（精神年齢100歳以上）はしゃいだ。

しかしそれは長く続かなかった。

喉が乾いたので水を飲もうと、綺麗な清流のような川を覗き込み、その水面を見た瞬間、現実逃避したくなった。

ツンツンとした現実ではあり得ない髪型、真ん丸としたデカイ目。

あ、ハンター×ハンターのゴンだ。

そして冒頭に戻る。

何でよりもよってハンター×ハンター？

この世界って現実の三國志の世界みたいに人の命が紙より軽い世界じゃん。

ジャンプにしては珍しい程に人がよく死ぬ世界。

主要キャラでも死ぬというある意味リアルなマンガ。

見るのは好きだったが、実際に自分が登場人物、オマケに主役とかマジ最悪。

「ネギま！」の世界ならまだ現実世界に行けば平和を謳歌出来たけど、この世界じゃ平和なんて言葉は存在しない。

唯一平和っぽいこのクジラ島？ でもキツネグマという巨獣がいる。俺に原作ゴンみたいな動物に愛される能力なんて無いだろうから食われる可能性が非常に高い。

これでは逃げ場が無い。と絶望した。

しばらく経ち、このままうずくまっただけでも何も始まらないので、恒例になった能力チエックといくか。

そこらにあつた石を手に取り、コピーしてみた。

結果は成功、寸分変わらず同じ石が出来た。

そして、ただ見ただけでのコピーも出来た事から前回と変わらないらしい。

試しに魔法も使ってみようとしたが、やはり出来なかった。

出来れば苦労しないが、現実は厳しい。

三回目の世界移動も現実的とは言わないが、それは仕方がない。受け入れなくては前に進まないからな。

今の年齢は見た目から多分2〜3歳。

運動能力はこの年齢にしては高いと思う、走ってみたら小学一年生ぐらいの早さは出た。

しかし、勿論念能力も使えない。

この事から、現在の俺はちよっと運動能力が常人より高いだけのガキだ。

それもこの世界ではこの程度の運動能力は少し珍しい程度だろう。
何せ素手で地面を砕いたり、何十mもジャンプ出来たり、小学生が
殺し屋をしている世界だ。
生後間もない赤ん坊が歩くぐらい簡単に出来そう…。

いかん、いかん。絶望してても始まらない。

幸い？ な事に俺はゴンフリークスだ。

あの超人ゴンだ。今から鍛えればかなりのモノになる筈だ。

先ずはテンプレとして念能力を身に付けなくては。

近くに念能力者はいないからゆっくりと我流で精孔を開くしかない。
瞑想や座禅などで精孔を開くイメージを構築しなくてはならない。

幸い時間だけはたっぷりある。

何せ子供だ。

この島には学校は無く、通信スクールだから問題無い。
それにある程度の知識はもう付いているからはっきり言って勉強な
どいらない。

しかし所詮養われている身だから言われたらやるしか無い。

これが孤児の悲しさだ。

前の世界と同じだが、親がロクな遺産？ を残して無いからな。

どっちとも自分の事しか考えていない奴ばかりだ。

まあ、でもまだジンの方がマシか？

捨てた事を自覚しているから下手に会いに来ないし、トラブルを持
ち込む訳でも無い。

一般的にはジンの名前は広まっていないからそんなに自立たないし、
自分の情報は隠しているから息子の俺の事もバレていない。

唯一ム力つくのは、俺に残したのはあんまり意味が無いROMカー
ドとゲーム内でしか意味の無い指輪、そして自消機能付きテープ。

ふざけてんのか？ と思える物ばかりだ。せめて金とか役に立つ物

を残しとけよ。

まあ、良いか。

この世界ではおかしい程に簡単に金が手に入る。

それに俺の能力を使えば金なんか簡単に増やせるし、食い物にも困らない。

とりあえず今は念の修行だ。

これが出来ないとその世界で生き抜くレベルがスゲエ上がる。

そうだったら一般人として生きていくしかない。

それも悪く無いがな。

2 念修行

ようやく精孔が開き、纏を会得した。

原作ではウイングがゴンはゆっくり起こしても一週間ぐらいで起こせるという記述があったが、実際は半年もかかった。やっぱり3歳では原作並みとは言えないか…。

それに、精孔を開いても何回か失敗して纏が出来ず、全身疲労になつて一週間ぐらいマトモに動けなくもなつたりした。そのたびにミトさんが必死に看病してくれた。

そのせいで初めは病弱な子供と勘違いされて、しばらく家から出してもらえなかった。

まあ、普通3歳の子供を一人で外には出さないとと思うがな。

纏をようやくマスターして元気に走り回り、何とか病弱な子供という認識は解けた。

初めはこの纏も魔法みたいにコピー出来て楽になるかと思いきや、現実やはり甘く無かった。

まだ凝が出来ないからオーラを見る事が出来ないし、自分のオーラを触るという事は出来ないからコピー出来ない。

オーラは触るというよりも感覚の問題だから触れない。よほど強いオーラなら触れるだろうが、まだ弱々しい俺のオーラは触れないからコピー出来ない。

とりあえず、今は真面目に修行するしかないらしい。

原作みたいに世間知らずにはなりたく無いので情報収集や勉強を始めた。

何せこの世界では微妙に今までいた世界とは違うからその差異を知らなくてはならない。

しかし何で飛行船技術が発達したのに飛行機が開発されなかったのだろうか？

航続距離や居住性は飛行船が高いのは分かるが、早さは明らかに飛行機の方が上だ。

急いでいる人には便利だと思っただが？

まあ、良いか。

別にどうしても飛行機が必要な訳では無いし。

飛行船でも事足りる。

それにしてもこの世界は電子技術が高いんだな。

郵便などもメールが主流だし、老人もみんな使っている事からかなり昔からパソコンがあったのだろうか。

そっち方面は進んでいるんだな。

困った事はこの家には余分なパソコンが無い。

パソコンはあるのだが、店やミトさんが使っているから俺が勝手に使う事は出来ない。

流石にガキの身分で「パソコン買って。」なんて言えないしな。

というか3歳ではゲームすら買ってくれないだろう。

この家を見る限り金持ちとは言い難い。

多分普通か少し下のレベルだろう。

まあ、こんな島では金持ちになるなど難しいからな。

金はコピー出来るが、3歳のガキが大金持っていたら不自然過ぎる。

キルアみたいに金持ちの子なら持っていて不自然は無いが、俺はこの島では何処に住んでいるのかを知られているから買物は不可

能だ。

だから電腦ページも見ることが出来ない。

仕方ないからしばらくは書物から知識を得るしかない。

ネカフェも無い島だが、本屋ぐらいはある。

本屋に行き、片っ端からコピーして知識を得る。

本当ならゲームショップに行つてジョイステーションとかをコピーして家でやりたいが、ミトさんにバレると万引きしたのかと思われるだろうから店頭でやるしかない。

いと悲しきは養われの身分。何かこんな身分ばかり。

前回の世界ならほとんど放置されていたから自由にやれたが、この世界ではきちんと保護されているから動きにくい。

普通の家庭ならありがたいんだけど、俺にはキツイ。

精々許される自由は暗くなるまでは外で遊べるぐらいか…。

早く基本の纏、絶、練、発の4大行をマスターしなくては。

凝さえ覚えれば後は簡単なのだから。

ていつかそれを覚えないと怖くて森にも入れない。

3 第一段階クリア

4 大行の修行を行い一年。

4 歳になり、ようやく4 大行をマスターした。

練や凝を覚えるのになんまり苦労したが、努力とゴンの才能で何とかマスター出来た。

凝さえ出来ればこっちのモノだ。

しかし纏をコピーして常時展開させると肉体年齢が取りにくくなるから今はしない。

流石に4 歳の体でストップはしたくない。

水見式で自分の系統を見てみたら、コップが消えた事から特質系と分かった。

最初はゴンの体だから強化系になると思っていたが、やはり中身が俺だからかなり変化したな。

まあ、俺はゴンとは似ても似つかないからな。

ミトさんにも「ゴンは子供らしくない性格ね。」と言われた。

やはり4 歳で論理的に喋って我が侂言わないからかな？

だって我が侂行ったって叶わないんだから言うだけ無駄じゃん？

「パソコン買って。」とか「一人暮らししたい。」なんて言うだけ無駄に終わる。

だから極力我が侂は言わず、言う通りにする。

養われている身分だから好き勝手やると追い出されかねない。

幾ら親権を持っていても所詮他人。

ていうかこの世界に俺の本当の家族や親戚はいないから情など持てない。

まあ、今までの人生のせいで情など完全に無くなってしまったがな。

基本の4大行をマスターしたんだからこれからは硬、周、流、堅、陰、円など4大行の応用と発の開発だ。

大体は俺のコピー能力でやれるが、自分で出来ていた方が良く、自力を付けなくてはいざという時に自分を守れないからな。

幸い、原作が始まるのはゴンが11歳の時だから後7年ある。

一人で師匠も無く、やることになるから原作よりもかなり時間がかかるだろうが、何とかなるだろう。

それと問題なのは発だ。どんな能力にするかが悩む。

出来るなら使える能力を複数使いたいのが、複数を覚えるとヒソカが言ったように「メモリの無駄使い」になる。

しかしこの問題は俺なら解決出来る。

何故なら俺は生物でなければどんな物でもコピー出来る。

それは念でも変わらない。

既に纏や練などで実証済みだ。

だから一度でも見れば十分なのだ。

制約に「一度使えばこの能力は消去される。」と条件付けすればメモリの空きが出来るし、一度しか使えないという厳しい制約を付ければ能力も飛躍的に上がる。

それに、もし万が一能力を盗まれても俺以外には一度しか使えないから問題無い。

一石三鳥だ。

まだどんな能力にするか具体的には決めていないが、構想はある。

先ずは自分を治す能力だ。

もしも大怪我や大病を患い、命の危機に瀕する事になれば大問題だから癒しの力が必要だ。

あの「大天使の息吹」のような完璧な治癒能力。

更に除念能力も付けて念による攻撃も癒す。

制約に一度しか使えないのと、自分にしか使えないというのを合わせれば多少無理は効く。

自分以外を治す必要も無いからな。

次に避難先の確保だ。

ノヴの四次元マンションみたいな世界から隔離した空間に逃げ込む。これならどんな奴からでも逃げられるし、例えキメラアントが世界制覇を成し遂げた後でも逃げ込める。

空間に屋敷のようなデカイ家を建てて、念で作った使用人を用意すれば住める。

食料や水などはコピーすれば良いから死ぬまで籠城出来る。

制約に一度しか使えない、自分しか入れないとすればイケるだろう。

それと攻撃用の能力だ。

念じるだけで相手を縛り、強制的に絶の状態にして全てを操る。

例えば俺が質問すればどんなに抗おうが素直に真実を答えてしまう。それとどんなに抵抗しようがピクリとも動けなくなる拘束力。

そして人数制限は無く、対象がダメージを受けても自分に跳ね返って来ない。

こんな能力が欲しい。

制約は一度しか使えない、有効半径は50m（対象は任意）、見たことのない人間は不可、生物以外には無効。

最後に普段使う能力だ。

上記の能力を隠すために通常の場合使用する能力も必要だ。

しかし、実質無限のオーラを持っているようなものだから、強化系のようにただオーラを込めて殴れば必殺技になる。だからほとんどいらぬが、聞かれたりした場合のために作つとく。対象の肉体を操作し、筋力を増大させたり減退もさせる。筋力の他にも血液、神経、心臓、脳など肉体を操作する能力。制約は有効半径は10m以内で、対象に口答で言わなくてはならない。

制約に「一度限りしか使えない。」を使用出来ないから多少制約が弱い、オーラでカバーする。

二次創作によれば、膨大なオーラ量を誇ればそれなりの無理は効くという設定が多いしな。

それにこの能力なら自分にも他人にも使えるから応用力が高い。

以上4つの能力を獲得するのが最終的な目標だ。

原作開始までの7年で全て会得出来るのが望ましい。

まあ、全部出来なくても最初の3つが出来れば問題無い。

最後はあくまでオマケだ。

それに、最悪発が無くても念が使えば大抵は問題無い。

マンガのキャラみたい正面から堂々なんてバカはせず、全力で一気に奇襲して片をつければ良い。

もしくは演技をして敵に侮らせてから騙し討ちすれば良い。

別に主人公になるつもりは無いから勝てればどうだって良い。

例えば、ネテロが王に特攻仕掛けたけど、何で特攻にしたんだろう？

あの爆弾を10発ぐらい王のいる宮殿に投下するなり、念能力で移動させて起爆させれば手っ取り早く王を殺せただろうに。

後始末はかなり面倒になるが、確実に対象を始末出来て尚且つ被害は最小限に済むだろう。

王さえ死ねば女王がいぬのだから何れカメラアクトは滅ぶか隠れる。

それを早期にやればカイトが死ぬことは無かつたし、かなりの数を救えた。

騒ぐ奴らを黙らせる方法なんて幾らでもある。

それをしないのはやはりマンガだからだろうな。

それをやるとストーリーにならないからな。

多分一部にはウケるだろうが。

4 何ともベタな別れ

更に二年が経ち、6歳となった。

応用系の修行は順調で大分使えるようになった。

流や堅などは中々難しいが、周や硬などはコピーを使えば簡単だ。でもコピーを使えばどんな念でも長時間持続や威力を高めることは可能だが、それでは基礎能力が鍛えられない。

やはり自分自身も強くならなくては意味が無い。特にこの世界では初めからこの世界で生まれ育った奴らは当たり前なのだろうが、幾ら三度も転生や漂流をした俺でもこの世界は滅茶苦茶だと分かる。

何で普通の池に足が生えた魚？ がいるんだよ。あいつらどんな進化の過程を歩んだんだよ。

何で人間が簡単に岩やコンクリートを砕けるんだよ。話かけてみたら普通の漁師だったしよ。

確かに魔法世界に行った時も理解不能な事は多々あったが、ここまでは無い。一応理解出来るまでの理論はあった。しかしこの世界は理解不能なことばかりだ。

何よりも一番理解不能なのは自分自身だ。

念を使えるんだから常人よりも遥かに強いのは分かるが、念を解いた状態でも少し鍛えただけで大人を簡単に凌駕する身体能力を得られた。

簡単なランニングから始まり、腕立て腹筋背筋、崖登り、岩砕き、1トン近くある岩を持ちながらスクワットなど、今までの世界なら出来る訳が無い事も容易く出来た。

ゴンの体ハイスペック過ぎ。

どんな遺伝子だよ。多分売ればかなりの値段がつきそうだ。

とりあえず基本や応用は一通り終わり、今は他系統の修行や発の開
発に力を注いでいる。

放出系や変化系など遠い系統だが、使えばかなり便利になる。

放出系なら使えるようになればコピーでかなりの威力を出せるよう
になるし、変化系も応用力が高いから使い勝手が良い。

後は発さえ出来ればほぼ最強だ。

一撃死さえ回避出来れば何とでもなるし、敵の姿さえ見れば操作出
来る。無理なら逃げれば良いし。

しかしこの島では最近窮屈になってきた。

行動は制限されるし、収入はミトさんからのお小遣いか簡単なバイ
トぐらいだ。

まだ幼稚園児の年齢のせいか、金を貯められるバイトには就けない。
まあ、既に金は全部コピー出来るから収入はいらぬが、自由に使
える金が欲しいからゴミみたいに叩かれる時給でもバイトをやるし
かない。

かつてアジアを支配し、魔法界や現実世界を裏から操っていたこの
俺が、時給200ジエニーというふざけた時給でレジやウェイター
を頑張るとは…。

前の世界の俺の狂信者達が知ったら攻めて来そうだな。

そろそろ金や経験を積むためにクジラ島を出る必要がある。

この島には飛行場が無いから出るには船しかない。

6歳のガキに船賃は高過ぎるが、問題無い。

たまに入港してくるシヨタコンの女漁師達を口説いて連れて行って貰える約束を取り付けた。

このために持てる経験を生かして口説き、抱いてやったからな。少し覚えた肉体操作で快楽中枢を弄ってやったからイチコロだ。何せ麻薬並みの快感が得られるからな。

俺のお願いに簡単に頷いてくれた。

さて、最後に最大の障害が残っている。

我等がビッグマザー、ミトさんとの交渉だ。まあ、何を言われようとも行くがな。

ここは敬愛（笑）する我が父、ジン風に強引に行くか。

「ミトさん、お願いがあるんだ。」

「お願い？ ゴンがお願いなんて珍しいわね？ 何？」

俺のお願い発言に少し嬉しそうだ。

まあ、この歳の癖にほとんどお願いなんて言ったこと無いからな、数少ないお願いはバイトがしたい。と帰宅制限を緩めて欲しい。という微妙なものしか無い。

「俺、しばらくクジラ島を出る事にするよ。」

俺の発言にミトさんは凍りつく。

「…な、何言っているのよゴンっ!？」

アナタまだ6歳じゃない！ そんなの許さないわ!!」

当然ミトさんは猛反対。まあ、一般常識から言っても妥当だが。

「うん、そう言うのは分かっていた。でも俺決めたから。」

その一言でミトさんは気付く。

この子は何を言っても聞かないと。

普段は大人しくて言うこともよく聞く子供だけど、決めたら最後、必ず実行する。

そういうところがジンによく似ていた。

「でも島を出るには船でいくしか無いけど、船賃はあるの？ バイトを頑張っているみたいだけど、それだけで足りる額は稼げたの？」それでも諦め切れないのか追撃してくる。

「確かに船賃は高いけど問題無いよ。知り合いの漁師さんに乗せて貰えるよう約束を取ったから。」

「……っ！ だとしても生活費はどうするの！？ 生きていくにはお金が必要なのよ！？」

「それこそ今まで貯めたバイト代やお小遣いを使うよ。」

それに、向こうに行けばここよりは多少良いバイトも見つかるだろうし。」

どんなに攻めても返されてしまい、ミトさんは多少怯んだ。

現実世界ではあり得ないが、この世界では子供でもある程度働ける場所がある。この世界は自由度が高いからな。

それに俺は金を使う必要も無いし、使う場所も無いから基本的に貯めっぱなし。

だから預金通帳にはそれなりの額が明記されている。

だから俺の言葉に多少は説得力が出るのだ。

時給200ジェニーで5時間労働し、それを大体毎日行き、一年頑張った。

更にそこに月々500ジェニーのお小遣いを足せばそれなりになる。ちなみにバイトした店は飲食店だったが、子供が頑張ってウェイターやレジ打ちする姿がウケたのか、リピーターが結構出来て儲かっていた。

だったらその分俺の時給を上げるや、せめてあと100ジェニーでも上げてくれれば儲けはかなり違ったのに。

「……どれくらいで戻るの？」

説得が無意味だと分かったのか詳細を聞いてくる。

やっぱりこの子はアイツの子供ね、とでも言わんばかりの諦めた表情だ。

まあ、別にハンターになりに行くとは言っていないし、何れ戻ると宣言しているから原作よりは穏やかだな。

「10歳になつたら戻るよ。」

その一言で和やかになりかけたムードが壊された。

「10歳!?!?...つまり4年も戻らないという事!? どうして?!」

「外の世界をゆっくり見たいんだ。

何時までもクジラ島にいるんじゃなく、自分の目で世界をゆっくり見たいんだ。」

まあ、嘘は言っていない。

本当はある程度金を稼ぐには時間がかかるし、自由に修行したいからこんな長期間になった。それに自由も欲しいしね。

俺は曇りの無い目(演技)でミトさんを見続ける。

2歳の頃からおよそ子供らしく無かったから、いつかこういう日が来るだろうとは思っていた。

しかしそれはジンと同じ11歳ぐらいだと思っていた。

まさか僅か6歳で出ていく事になるうとは...

家事などもほとんど自分で出来、5歳で既に働き出した。

これらの行動から、この子はジンのような滅茶苦茶な事はしない常識人に成長するだろうと思っていたが、根っこの部分はやはり親子か...

とミトさんは諦め「好きにきなさい。」と呟き、自室に引きこもった。

ふ...。

ようやく終わったか。中々手こずったが何とかなったな。

一応とは言え、許可は取れたんだ。

後はお言葉通りに好きにさせて頂きます。

出発の日、予定通り漁船に乗せて貰い、クジラ島を出ようとしたら「ゴンっ！！！」という声が聞こえた。

振り返って見たらやはりミトさんがいた。

ああ、恒例のお見送りという奴ですね。やはりこれは鉄板なんですね。

出発を中断して船を一旦降り、ミトさんと向かい合う。

「ミトさん。行ってきます。」

笑顔で言う。いかにも少年誌っぽい別れ方だ。

ミトさんは俺を抱きしめ、泣きながら「体に気を付けてね？」と言う。

そして少しの間マツタリとした後に、船に乗り出発を指示する。

段々遠ざかっていくミトさんに手を振り、別れを告げる。

そしてミトさんも振り返ってお別れとなる。

いかにも連載の一話目みたいな展開だな。

まあ、この後は少年誌とは言えない展開になるがな。

とりあえず今は船賃代わりに要求されたご奉仕といきますか。

どうせ陸地に着くまで暇だし、新記録を達成でもするか、あえて何をか言わないが。

5 初めての自由

ようやく陸地に到着した。
これで解放される。

陸地に着いたのでこのジャンキー共はいらないから全員殺して船ごと沈めた。

今頃は魚の栄養になって何れ人間が食うだろう。もしかして俺に回って来るかもな。

さてと、先ず一番大切なのはホテルを確保しなくてはな。

金はコピー出来るが、紙幣をコピーするとNo.までコピーするから一度に多くは使えない。

だから綺麗な金が必要なのだ。

そして、ある程度は実戦経験もつけたいからここはテンプレ通りに天空闘技場を目指す。

貯めてた金を使い、天空闘技場までの飛行船に乗る。

俺の一年間の稼ぎが一気に吹っ飛んでいく様を見ると何か泣きそう。あの屈辱にまみれながら稼いだ金が、飛行船の片道キップだけでいとも容易く無くなっていく。

後は100階に上がる迄の旅費にしよう。多分それぐらいは保つだろう。

今は飛行船で初めての自由と久しぶりの一人を満喫しながら寝よう。

でも節約のために三等客室にしたから三段ベッドで寝る事になり、上段と下段の奴らのイビキで眠れん。

あまりの五月蠅さにいっそ息の根止めてやろうかとも思ったが、ハインターライセンスも無しに殺人を起こすと裁判で勝てるとは思えな

いから今は我慢だ。

漁船の時は目撃者がいても直ぐに逃げられるが、空の上では逃げられん。

イビキに慣れるか徹夜をするしかないな。

初日がこれかよ…。

クソ五月蠅いイビキのせいで二時間しか眠れなかったが、ようやく天空闘技場に到着した。

地上251階、高さ991m、世界第4位を誇る高さ。

何を考えてこんなにバカ高い建物を建設したんだろう。

何か大地震が来たら倒れそうなんだけど。耐震構造は大丈夫なんだろうか？

受付に行きたいが、とんでもない行列が出来ているから俺も並ぶしかないのか。

基本的に並ぶのが嫌いな俺には苦痛だ。

30分してようやく俺の番が来た。

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要事項をお書き込み下さい。」受付嬢の言葉に従い、記入する。

早めに参加したいから格闘技経験の欄には4年と記入。

間違っっては無いな、その頃に「俺」が目覚めて修行を始めたから。

しかし、よくこんなガキを受け入れるな。年齢制限ぐらい設けとけよ。

記入が終わり提出する。

「…はい、それでは中へどうぞ。」入口に向かう。

よく考えればあの受付の人は大変だな。
一日に何千人と来る頭が悪そうな奴らを相手にするんだから。
こんな所に来る奴らがマトモな訳が無いからな。
俺もその一人だが。

会場では、4×4の16個のリングで殴り合いなどをやっている。
やっぱり一番ランクが低い階だから観客はあんまりいな。
ほとんどが出番を待つ出場者達だ。

空いていたイスに座り、他の奴らの試合を見ながらぼくっと出番を待つ。

しばらく待っていたら番号を呼ばれたので行った。

リングには6歳の俺と筋肉ムキムキのいかにも「脳みそまで筋肉です」というコイツが俺の対戦相手らしい。

俺達がリングに上がると、明らかな身長差に目立ったらしく、観客が俺達のリングに注目する。

「おいおい坊や、間違っつて無いかい？

ママはここにはいないぜ?!」

など後は似たような罵声を浴びさせられる。

まあ当たり前だろう。自分達が人生かけてやってきている？ のにガキがいたらムカつきもする。

「ここを舐めてんのか？」

対戦相手の筋肉野郎も、ただでさえ浮き出ている血管が更に浮き出ている。

血管が切れるのでは？と多少心配したが、別にコイツが死んでも問題無いかと思ひ、無視する。

筋肉の血管が更に浮き出た。コイツ単純。

「ここ一階のリングでは入場者のレベルを判断します。
制限時間3分以内に自らの力を発揮してください。」

事務的な口調で説明する審判。

多分今日だけで今のセリフを何百回も言っているのだろう。ご苦労な事だ。

「それでは、始め!!」

審判のGOサインが出た瞬間、筋肉は突進してきた。

そこで俺は原作のようにただ思いつきり押しした。

ドン!!!! というデカイ音が鳴り響き、筋肉は観客席に吹っ飛んだ。

日々の筋力トレーニングのせいかな原作のように吹っ飛んだ。

俺が手を見ながら少しボクとしていたら「50階への入館を許可します」という審判の声が聞こえた。

「100階へは無理?」という俺の質問にただ首を横に振られ、さっさと降りると目で言われた。

やっぱりいきなり100階は無理か、原作から見るに、初めての挑戦者は多分50階までが最大なんだろうな。

いきなり100階に行ければホテルを確保せずに済むのに。

仕方なく諦め、リングを降りてエレベーターに向かう。

案内役が来て説明を始めた。

「こちらへどうぞ。」

このビルでは200階までは10階単位でクラス訳されています。

つまり50階クラスの選手が一勝すれば60階クラスに上がり、逆に敗者は40階クラスに下がるシステムです。」

エレベーターの中で長い説明を聞き、丁度終わった辺りでエレベーターが50階に着き、「50階です」という言葉が出たので降りた。

原作ならここで会話でもあるのだが、俺は一人だから黙って歩き、

報酬の受付に向かった。

「いらつしゃいませ、ゴン様ですね。チケットをお願いします。」
チケットを受付に渡して直ぐに「はい！こちらが先程のファイト
マネーです。」と封筒を出された。

封筒を受け取り、中を見るとやはり中身は152ジエニー。

缶ジュース一本分だ。この世界の缶ジュース高いよな。

とりあえず近くにあった自販機でジュースを買い、飲みながら控え
室に向かう。

控え室は部活のロッカールームみたいな感じだ。

しかしこのロッカーに服や貴重品を置いていく奴はいるのか？

見たところカギがついていないから簡単に盗られるだろうし。

案の定、ロッカーは見たところ全部カラだ。

何の意味があるんだろう？ 雰囲気作り？

とりあえず僅かに空いていたベンチに座り自分の番を待つ。

しばらくジュースを飲みながらコピーで出した小説を読んでいたら
呼ばれたので、指定された闘技場に向かった。

戦闘は早く終わった。

始めの合図と同時に手刀を対戦相手の首に食らわせて一発KOだ。

そして受付に行き、また報酬を得る。封筒の中身は6万ジエニーで
そこそこだ。

今日はもう俺の試合は無いらしいのでさっさと天空闘技場を出て宿
探した。

出来るなら今日手に入れた6万ジエニーだけで泊まれる宿を探すか、
やはり6万では難しいのか中々無い。

しばらく探し、街から少し離れるが6万ジエニーピッタリの宿があ

ったのでそこに泊まった。

記帳の際に店主から「家出か？」と言われたが、天空闘技場に出ていると言ったら直ぐ納得してくれた。

普通それだけで納得するか？ 見た目5、6歳のガキが一人で治安の良いとは言えない街の安ホテルに泊まる事を簡単に許可しても良いのかよ。

まあ、良いか。

こっちも好都合だしな。

元の世界なら今頃警察に引き渡されて養護施設入りか強制送還だな。

この世界では初めて自分で泊まったホテルは薄暗く、隣の部屋の（恐らく娼婦と）やっている音が聞こえて来るといって正に安ホテル。金が無いつて大変だよな…。

改めて実感したゴン、6歳（精神年齢100以上）であった。

6 準主人公との出会い（前書き）

この小説は念の制約など、様々な所で独自解釈をしているので、「これおかしくない？」と思われるかも知れませんがご了承ください。

6 準主人公との出会い

闘技場参加から3日が経ち、5戦してようやく100階に到達した。

初日は隣の騒音のおかげで最悪な目覚めの朝を迎えたが、翌日は階が上がった事で報酬も上がり、そこそのランクに泊まれたからグツスリと眠れた。

そして今日、90階を勝つたので100階レベルに上がり、個室を与えられた。

これで宿泊費を気にする必要は無くなった。

防音もしっかりしているのであの悪夢の夜を過ごす事も無い。

ようやく快適な生活を手に入れられた。

これからしばらくは150階〜190階をウロウロして金を稼ぐ、後々大量の金が必要になるからな。

この階になると毎日試合がある訳でも無いので暇な時間が増える。その時間を使い発の開発に費やす。

ちなみに一つ目の能力、相手を強制的に操作する能力を会得出来た。

能力名 『理不尽な支配』

半径50m以内にいる任意の生物を操作出来る。

操作される対象は任意で強制的に拘束され、更に絶の状態にさせられ一切念能力は使用不可になる。

操作対象が如何なるダメージを受けても術者に帰って来ない。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

無生物の操作は不可能。(術者が生物と断定すれば有効)

これでとりあえずは安心だ。俺が一撃で仕留められ無い限りな。既にコピーしたから消去されてメモリに空きが出来たから次の避難のための能力を開発中だ。

それと肉体や念の鍛錬も継続中だ。クジラ島の時と違いバイト時間が無く、時間制限も無いから幾らでも鍛錬に費やせる。

それに残念ながら俺は主人公というタイプでは無いので主人公補正が受けられるか分からない。

だから有事に備えて自分も鍛えなくてはならない。

何せこの世界では俺のチートを凌駕する化物がうようよいるからな。気配察知や敏捷性、瞬発力、持久力、逃走能力などを上げないと能力を使う前に簡単に殺されかねない。

しばらく経ち、120階をクリアした辺りで待合室でモニターを見ていたら、原作キャラを発見した。

白髪とは言わないが、薄い色素の髪、生意気そうな目、大体俺と同じ背格好。

キルアだと分かった。

現在150階に挑戦しているが、やはりまだ6歳という事もあり苦戦している。

いや、たかが6歳の念も使えないガキの分際で150階まで行くのはとんでもない事だな。

もしも将来、キルアが敵キャラになるのなら今すぐ仕留める方が良いが、上手く導けば原作のように味方になってくれる可能性が高い。当初の予定ではキルアは救済せずに無視しようと思っていたが、何れ敵になりかねないから縁を作っておくか？

それに、以前の世界では原作破壊をしまくったせいで未来予知が難しくなって苦労した覚えもある。

だからこの世界ではある程度原作に沿うようにする。でも原作みたいな危険は犯さないが。

原作のゴンはヒーロー症候群なのか、それともヒソカ並みにイカれているのか、やたら危険を犯したかった。

俺は他のオリ主みたいに活躍したい訳では無いので安全第一でいく。壊して構わなそうなフラグは折るし、友情もいらさないが、恩は売ると後々役に立つからハンター試験でレオリオ、クラピカを助けるぐらいはするか。

クラピカの復讐はどうでも良いが、レオリオの夢は叶えて欲しい。何かに利用出来そうだし。

更にしばらく経ち、俺は150階クラスに勝ち、振り込まれた報酬額を見て廊下で少しニヤついていた。

マトモに働いたなら稼ぐのに一生かかりそうな額がいと簡単に手に入るとは、ある意味ここはこの世界の唯一良い所だ。

「よ、よお…。」

誰かに話しかけられたから振り返って見るとそこにはキルアがいた。若干顔がひきつっている所を見ると、俺が通帳を見ながらニヤついていた顔に引いたのだろう。失礼な。

「ん…確か140階のキルア、だよな？」

ほとんど同じ階層にいるなら名前を知っていてもおかしくないだろう。

「あ、ああ。良く知っているな。」

キルアは少し驚いたようだ。

「そりゃね。」

同じ歳ぐらいで同じクラスにいる奴の名前なら覚えるさ。」

キルアは「ふーん。」と言うだけ。

まあ大体検討がついていただろうからな。

「それで？ 何の用だ？」

俺の質問にキルアは答えた。

「ああ、俺もアンタと同じで同い年ぐらいの奴が同じクラスにいたから気になったんで話しかけてみたんだよ。」

「ふーん。」

まあ、確かにお互い気になる存在だな。何せこんな所に普通、ガキがいる訳無いもんな。」

「ああ、それにアンタはここまでストレートに勝って来ているしな。俺は150階まで来るのに2ヶ月もかかったのに。」

普通、たかだか2ヶ月で来れるものではないのだがな。

一年かかっても未だに100階にさえ行けてない奴らも珍しく無い。

「まあ、運が良かったのさ。」

それに、これから停滞する予定だし。」

俺の答えを不思議に思ったのかキルアは聞いてきた。

「運って、アンタこのクラスまで一撃で決めているじゃん。それなのに停滞するって、何か目的でもあるの？」

「まあ、ね。」

勿体ぶったように言うのとキルアは不機嫌そうに聞いてくる。

「何だよ、教えるよ。」

敬語で言えとは言わないが、もう少し言い方を考えろよクソガキが。「人に尋ねる時はもう少し言い方を考えようね。」

…それにただ俺が答えるだけではフェアじゃ無いな。

うーん……では俺の質問に答えたら話してやっても良い。」

そう言っただけで廊下にあったベンチに座る。

キルアは同い年ぐらいの奴に話し方の注意をされて多少ムカついたが、気になるのでベンチに座った。

「で、何が聞きたいの？」

キルアが聞いてきたので

「何で天空闘技場に参加してんの？」

と質問した。まあ知ってるけど。

「ああ、親父にさ、急に連れて来られて無一文で放り出されてさ、

「200階まで行って帰ってこい。」って言われたから。」

普通に考えるとそれって捨てられたのと同じだよな？

だってこここの200階まで行ってくつて普通かなり難しいぜ？

まあ、コイツ普通じゃ無いけど。

「スゲエなお前の親父…。」

本当に呆れたので素直に驚く。

「それで、次はコツチの質問に答えてよ。

何で停滞するの？」

まあ、話しても問題無いか、と思い正直に話す。

「俺がここに来たのは金儲けのためだ。

だから今からは150階〜190階までを勝ったり負けたりする。」

何で200階から報酬が出ないんだろう？

念で戦うんだからファイトマネーぐらい出せよ。

「何で200階に上がらないの？」

どうやらキルアは知らないようだ。まあ200階に行けば帰るんだ

から知る必要が無いか。

「200階からは原則ファイトマネーが出ないんだ。

何か名誉のみを求めるんだとき。くだらない。」

名誉で生活出来るのかよ。

名誉つてのはゆとりがある者が有り難がりモノであって、ゆとりが

無い者には無意味なんだよ。

「ふーん。そうなんだ。

…ねえ、君何歳？」

「6歳。」

「へー。やっぱタメなんだ？

話し方からもしかして年上かと思った。」まあ肉体年齢はな。

精神年齢ならお前の親父より上だよ。ゼノじいちゃんには勝てるか

分からないけど。

「まあ、よく言われるな。

よく大人から「お前と話しているとたまにお前は同年代か年上と間違えそうになる。」って。」

本当に会話しているとたまに昔の話題を出されたり、「〴〵の時代は良かったよなあ？」とか言われる。

残念ながらこの世界では俺は一桁しか生きていないから昔など知らない。

三國志の時代で良ければ沢山あるが、この世界に中国は存在しないので無意味だ。

「あゝ…。」

まあそうだろうね。俺も話している途中でお前は実は童顔なだけな大人なんじゃないかとさえ思ったし。」

ハハハ…。と誤魔化し笑いをするキルア。

そりゃあそうだろう。

何せ口調こそ変わっていないが中身は立派な爺さんだ。

だから話し方がどうしても年寄り臭くなったりする。

今更直すのは不可能だ。まあ直そうとも思わないが。

「にしても…。お前って強いよな？

この年にしてはかなり強い方だと思う俺でさえ150階にたどり着くだけで2ヶ月もかかって、更に最近では中々上がれず悩んでいるのに。」

「まあ、ね。

そこそこ強い分類に入ると思うし。」

でもこの世界なら俺ぐらいの年で俺より強い人間は結構いると思う。環境さえ揃ってれば念は早く覚えられそうだし、最高の指導者や仲間がいれば俺よりも強くなる事は可能な筈だ。

流星街に住んでいる住人なら十分あり得そう。

「おお、自信満々だねえ。

…ま、良いか。それじゃあ俺そろそろ行くわ、じゃあなゴン。」
ベンチから立ち上がり後ろ手を振りながらキルアは去っていった。
にしても最後でようやく名前と言ったな。

まあ別にアンタやお前でも良いんだけどさ、立場を分からせるのは
早目が良いからな。

一度きりの付き合いなら別に良いけど、今後そこそこの付き合いに
なるんだ。だったら立場を分からせた方が良い。

そう思いながら俺もベンチから立ち上がり、自分の部屋に向かった。
これから部屋で発の開発だ。

逃避のための発なら別に部屋の中でも出来るしな。

ちなみにミトさんにはたまに手紙を出している。

手紙には現在住み込みのバイトをしていると書いた。

流星に天空闘技場で殴り合っただけで稼いでいますとは書けないからな。

証拠として金で雇った店主役と店の前で撮った写真も送った。

これで信じるだろう。

7 キルアとの対戦

しばらく経ち、150階〜190階までを勝ったり負けたりして前後している間に逃避の能力が完成した。

能力名 『現実シエルター』

任意の場所に異空間へのゲートを作る。

異空間内は北海道ぐらいの広さを持ち、グリードアイランドの島のように村や山、川、海などがある。

念で作った人も住んでおり、複雑な会話や動作なども可能。

出口は任意に設定でき、一度行った場所や直接会った事のある人の場所なら自由に行ける。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

自分以外の生物は入れない。

ゲートをくぐる際に現実世界（外界）の物を持ち込む事は不可能。

（ただし自らが所持しているか手にしている物なら可）

核シエルターではなく、現実から逃げ込むシエルターだ。

厳しい制約を決めてようやく完成した。

最初はただ異空間に家を作ろうかと思っただが、長時間隠れるなら他人がいないと俺の精神衛生上不味いかと思い、念で作った人間などを作った。

まあ、グリードアイランドをまんまパクっただけだね。

そのせいで制約を予定よりも強くするしかなかったけど、俺には関係無い。

何故ならこの能力を他人にバラす事は無いし、コピーのおかげでゲートをくぐる時は何も持てないけど、くぐった後は幾らでも出せる。

だからこの制約は無いも同じだ。

さて、次は癒しの能力だ。

幾重にも纏や堅が張れても万が一の怪我や病気が怖いから必要だ。ちなみに実験として、何重にも纏を張った状態で高い崖から飛び降りてみたけど何とも無かった。

衝撃は精々一階の窓から飛び降りた程度。つまり何とも無い。でも普段は纏を張らない。やっぱり肉体年齢を取らないと色々面倒だからな。

この世界は変な所が現実的だから年齢制限がかかる事もある。この年では娼婦を買うことも出来ない。

前の世界では姿を変えたりして幾らでも出来たが、この背格好ではマトモに出来ないし、シヨタぐらいにしか相手にされない。だから18ぐらいになるまでは緊急時以外は纏を張らない。原作が始まったらしばらくは張る予定だけど……。流石にハンター試験などは怖いからな。

調整しながら順調に金を貯めていた俺だが、ここで面倒なことが発生した。

何と、今回の対戦相手はキルアだ。

一時期下がっていたが、最近また上がってきたキルアとクジのせいでかち当たる事になってしまった。

別に不戦敗にして戦う必要も無かったのだが、今後の事を考えて戦う事にした。

一方キルアはヤル気らしい。

やはり自分よりも多分格上の同い年の強さが知りたかったのだろう。ちなみにキルアとはあれ以来、たまに廊下や待合室で会うと話すぐ

らしい関係にはなった。

まあ精々知り合い程度の仲だ。

周りは自分よりも最低100コは上だからな、同じ年の奴は俺しかないから自然に仲良くなる。

それでも戦った事は無かったからキルアは俺の力は知らない。

試合では調整しながら戦っているから実力が読みにくいからな。

一回その事でダメ出し食らった。軽く流したけど。

『さあ、いよいよ注目の一戦、ゴン対キルア戦が幕を開けます！！
ゴン選手はご存知の通り150階まではストリートに勝ち進んできましたが、ここからは成績は一進一退を続け、中々このクラスを脱出出来ていません。』

一方、キルア選手は最近勝ち進んで来ており、乗りに乗っています！！

一時期は100階クラスから落ちるのかとさえ思われましたが、不屈の精神で勝ち進み、今回もこの170階のゴン選手に勝ち、勢いを更に伸ばしたい所です！！！！』

アナウンサーが叫んでいる。

あの女、毎回あんなに叫んでいるけど、声がよく持つな。もしかしてアレも何かの念能力か？

あり得そうだな。

200階クラスになるとアナウンサーや審判などもたまたま念能力者の時があった。

だからアイツが念能力を持っていても不思議は無い。

さて、長い前口上は終わったのでリングに上がる。

キルアは既にスタンバっていた。

少し笑いながら俺を見る。

『さあ、皆さん、ギャンブルスイッチの準備はよろしいですかー
ー！？』

…それではスイッチオーン！！』

投票結果はキルアが優勢。

『投票の結果、倍率ではキルア選手が優勢です！

やはり今勢いに乗っているからでしょうかー？』

別に良いけどね。倍率なんて。

『それでは3分3ラウンド、P&KO制、始め！！』

スタートの合図と同時にキルアが凄い勢いで走って来た。

どうやら一発で決める気らしい。

まあ、今までの試合ではそれほど早く動いていなかったから、自分の方が早く動けると思ったのだらう。

しかしあえてダメージを食らう必要も無いので普通に避ける。

「ちっ！」と少し悔しそうなキルア。

一発で決める予定だったのかな？

それから6歳にしては驚異的な早さで蹴りやパンチを繰り出す。

しかし俺はそれらを全て紙一重で避ける。

俺も普通じゃないけど、キルアの攻撃スピードや重さはまるで一流格闘家並だった。

たまに肉體操作をして突き刺して来るのだから尚怖い。

念能力が無かったら殺されていたな。と今までの自分の努力に感謝する。

しばらく避け続けていたらキルアは攻撃を止めて下がった。

「お前、やる気あんのかよ！？」

キルアが若干怒りながら言う。

「勿論あるさ。」

としか俺は答えない。

そして俺は普通に歩きながら間合いを詰める。
のんびりと、まるで散歩でもするばかりに歩いて来る俺を警戒しながらキルアは構えていた。

そしてキルアが攻撃を仕掛けた途端、俺はカウンターのよう後ろに周り、首が折れないように手刀を叩き込んだ。

その結果、キルアは昏倒して試合は終わった。

倍率が高かった俺が勝った事で観客席では罵声が上がったりしていた。

ちなみに俺は毎回代理人を雇い、勝つ日の試合には自分にかんりの額を賭けている。

今回は倍率がそこそこ高かったからそれなりの儲けだ。

キルアは担架で運ばれ医務室送りだ。

現実を知っただろう。自分よりも強い同い年がいるという現実を。

そして俺は会場を後にし、代理人から払い戻しを受け取り、大満足で自室に戻った。

キルアサイド

今日の対戦相手はゴンか。

たまにアイツの試合を見ているから分かるけど、アイツは実力を隠している。

まあ、本人が金儲けのために150〜190階に留まると宣言してんだから当たり前なんだけどさ。

でも俺でもアイツの実力はどの程度かがよく分からないから対応に困るんだよなあ。

たまに会って会話ぐらいはするけど、今まで戦った事が無いから分からないし、どんぐらい強いのか？とか聞いても流されるのがオチ

だし。

まあ、でももしかしたら今回の試合は調整してわざと負けるかも知れないし、それに今まで見てきた試合では、早さなら俺に分があるかも知れない。

そういう希望を持ち、会場入りした。

観客席は満員で俺とゴンの戦う所を今か今かと待ってるみたいだな。まあ、同じ6歳同士の試合だ。イベント制は高いだろうな。

そう思っていたらゴンも会場に入ってきた。

ゴンは何時も通りに冷静で、回りの野次に全く興味も無さそうだ。その雰囲気は明らかに俺と同じ6歳児のものとは思えない。

何か歴戦の戦士のような落ち着き方だ。何処と無く親父やジイちゃんに似ているな。

でも今日はそのゴンに勝って150階クラス脱出の弾みにしてやる！

審判の合図と同時に俺は走り出した。

唯一のアドバンテージだと思うスピードに賭けて一気に決めてやるつもりだった。

しかし俺の渾身の一撃は紙一重でかわされた。

やっぱりスピードもゴンが上だったのか？

いや、今更後には引けない！ とラッシュをかけて様々なフェイントを混ぜながらゴンに攻撃を仕掛けるが、全てゴンは紙一重で避ける。

同じ子供を相手にしているとは思えない。まるで兄貴を相手にしているみたいだ。

攻撃を一旦止めて後ろに引き、「お前、やる気あんのかよ!？」と怒鳴ったが、ゴンは全く気にする様子も無く、「勿論あるさ。」と

しか返して来ない。

その余裕な様子が気に入らなくて更に怒鳴ってやるうかと思ったらゴンが歩きながらこっちに来る。

まるで気負う様子も無くのんびりと歩いて来る。

何かの構えか？ と警戒したが、どんなによく見てもただ歩いているだけ。

理解不能なため、ただ歩いているゴンを警戒しながらも見ているしか無かった。

そしてお互いの間合いにまで接近した事で、俺は一気に勝負を狙うために肉体操作をした指でゴンの首を狙い、放った。

しかしそれはゴンにアツサリと避けられ、そして気付いた時には俺は医務室にいた。

どうやら俺はゴンに首に手刀を決められて気絶したらしい。

明らかな差を感じた。

同年代でここまで圧倒的に倒されたのは初めてだ、いや、同年代に負けた事なんて今まで無かった。

物心ついた時から地獄みたいな拷問や修行を受けてきて、家族以外には負けた事なんて無かったのに、同じ年の奴に大敗した。

もしかしてゴンも俺と同じような育ち方をしたのか？

アイツとはたまに話はするけど、アイツ自身の事はほとんど聞いた事が無い。だからゴンの人生はあまり分からない。

分かる事と言えば、ゴンの目はまるで親父やジイちゃんみたいに揺らぎが無い。

かと言って兄貴みたいに何考えてんのか分からないような目では無い。

ゴンはたまに笑うしな。

ウー……。

ゴンの事はよく分からないけど、とりあえず今度からもし対戦相手に当たっても戦うのはよそう。勝てないし。
後は、まあ、その時考えるか。

8 休憩

一年経ち、俺は7歳となった。

とうにかまだ7歳なんだよな。

7歳で一人暮らしして、大金を稼ぐために闘技場で戦うって何処の主人公だよ？ ていう設定だな。

まあ、この世界では主人公みたいな奴がうじゃうじゃいるからな。俺ぐらいは珍しく無いか…。

ようやく癒しの能力を会得した。

やはり癒しは強化系の面が強いから特質系の俺には難しかった。

能力名 『都合の良い祝福』

ありとあらゆる怪我や病気を癒す。

念で受けたダメージや呪いにも有効。

任意での発動が可能。（使用后1月以内に仮死状態になった場合には自動で発動。）

制約

この能力は一度使用すると消去される。

対象が生きていないと発動しない。

自分以外の者には使えない。

それと予定には無かったが、思いついたのでもう一つ会得した。

能力名 『完全なる隠匿』

この能力を発動すると姿や気配、その他何もかもを認識されなくなる。

生物は勿論、無生物にも認識されない。

円など念能力を使用しても認識出来ない。

この能力の発動状態で攻撃された対象は、攻撃された事は認識出来るが、攻撃対象を認識出来ない。

制約

この能力は一度解除すると消去される。

姿形が消えるだけで、攻撃を受ければダメージはそのまま受ける。

メレオロンのパクリだ。

代わりに俺は息を止める必要は無いから半永久的に持続可能だが。

これで奥の手は全部完成した。

後は通常使う念能力の習得だ。

原作のゴンはいじゃんけんを利用して強化、放出、変化をバランス良く使っていたが、俺は対極の特質系だから出来ない。

それに、俺にはコピー能力があるから強化系に関しては極めたも同然だ。

何故なら硬で拳を強化しながら、更にコピーして威力を高められるし、硬をしながら堅さえ可能だ。

だから直接の攻撃力、防御力なら負けない。

まあ、通常の戦闘では能力がバレないように普通に戦う必要があるから体も鍛えなくてはいけない。

最強オリ主にはなれない悲しさ…。

まあ、それ以前に俺はオリ主じゃなくて主人公だけど。

キルアとはあの後会ったが、関係はあんまり変わっていない。試合については少し話したけど、お互い深くまで踏み込まなかったから精々キルアの「お前強いんだな。」で終わった。「どうやったらそんなに強くなれたんだ？」と聞かれたので「2歳から鍛えているからな。」と返したら苦笑いされた。やはり流石のキルアでも2歳では鍛えていなかったのか？

その後は別に前と同じだな。

廊下で会えば軽く挨拶して、待合室で会えば出番まで話して、たまにかち合う事になればお互い相談して、どちらかがわざと負けるかギブアップする。

キルアは俺との差を感じたせいかやりたがらないからな。

まあ、賢い選択だな。

戦えば必ず負けるけど、相談すればたまに勝てる。オマケに無傷でキルアがこの年齢にしては頭が良い子で良かったよ。

もしもゴンみたいにワガママな性格だったら面倒だった。

もしそうだったら早く200階まで上げて、天空闘技場から追い出すか、トラウマを残すぐらいの洗礼を与えるしか無かった。

でも下手をすると家族から睨まれるから最悪、ゾルディック家を敵に回す事になる。

そうなったら流石の俺でもヤバイ。

一生、異空間に引きこもるしかない。

ようやく安定した日々を送れるようになったから買い物でもするか。まずはハンター必須のケータイ、パソコンコード、ホームコードを買いよう。

まだハンターじゃないから別に依頼とかは無いけど、とりあえずケータイとホームコードを買っとく。

ちなみにミトさんには教えていない。
ミトさんのやり取りは手紙で十分だ。

そしてこの世界の Wikipedia、 電脳ページを見るための電
脳コードとして、 自分専用回線と登録ナンバーコードを買った。
全部ネットで出来るから便利で良いね。

ハンターライセンスを取れば無料で見れるようになるけど、それま
で結構時間かかるから自分で買うしかない。

こつからは実戦経験を積みたいから旅に出たいが、 200階クラス
と違って、 150階クラスでは最低でも週に一回は試合があるから
長旅は出来ない。

なんせ試合に出ないとランクが下がって、 何れは登録を抹消される。
でもまだ金を貯めたいからここを離れられない。

難儀なことだ。

200階クラスに上がれば念能力者と戦えるが、 ファイトマネーが
出ないからヤル気が起きない。

別にフロアマスターになったからと言って賞金が出る訳でも無いし
な…。

バトルオリンピックなんてハナから興味が無い。

でもたまに念能力を持った奴が来たりするからたま〜〜に経験を
積める。

幸いにもヒソカみたいな化物は来ていないから良い経験レベルで終
わっている。

もしもヒソカが来たら逃げよう。

アイツとかち合ったら絶対面倒事が起こる。

もし万が一戦うって事になれば、直ぐに『理不尽な支配』を使って

動きを封じて殺す。

俺は別に原作を楽しむ気は無い、ただ壊しすぎると不都合だからある程度守るだけで、俺にとって不都合になるのなら徹底的に破壊する。

ヒソカを原作前に殺すのも良いけど、そうすると原作が変わり過ぎて面倒になるから少なくともハンター試験が終わる迄は殺さない。天空闘技場編はどうしようかな…。

別に会いに行く理由は無いらしい、キルアと行動を共にする事も無いだろうから行かなくて良いか。

リングの上で殺すのも良いが、ヒソカを殺したら旅団関係に影響を及ぼす可能性が微かでもあるから手は出せない。

まあ、その後なら別だが。

9 実戦開始 改正2011・5・5 (前書き)

都合の良い解釈が多々ありますがご了承ください。

9 実戦開始 改正2011.5.5

更に一年経ち、8歳になった俺はようやく通常用の能力を会得した。

能力名 『理不尽な拘束』

半径10メートル以内の任意の対象を操作する。

対象の頭に触れれば記憶を読む事が出来る。

個々の部位に限定して命令すればより効き目は増す。

対象に直接触れていれば強制的に絶の状態に出来る。

制約

対象の念能力の操作は不可能。

対象に聞こえるように口頭で言わなくてはならない。(対象に触れているなら不用)

制約が弱いから微妙だけど、そこそこ応用力はある。

この能力なら秘匿能力を使わなくても大抵の敵なら対処出来る。

それに、この能力では自分も操作出来るからより細かく命令すれば痛覚神経を遮断したり、筋力や瞬発力、持久力、気配察知能力など自分を強化も出来るし、敵を逆に弱らせる事も出来る。

対象を限定していないから無生物にも可能だ。

物質名が分からないと命令出来ないけど、そこはコピー能力で得た知識を活用する。

これで理不尽な支配が例えバレても説明が出来る。

基本的にバレたら殺す方針だが、もしも殺すと後々厄介になる奴らに見られたら不味いのでダミーを作る。

ハンター試験でヒソカと戦う事にでもなったりすれば不味いからな。ヒソカはハンター試験編が終われば死んでも良いけど、試験編の時に死なれると原作が分からなくなるから殺せない。アイツマジ面倒くさい。

それと秘匿用の能力をもう一つ増やした。

能力名 『物真似念人』

自分そっくりの念人を作れる。

数はオーラが続く限り何人でも出せるが、より少ない数に絞れば複雑な命令が可能になり、思考や念能力の使用が可能になる。

姿は基本自分と同じだが、他人に化ける事も可能。

対象の顔や名前、性格、記憶、血液など対象の情報をより詳しく知っているならその対象のように振る舞う事も可能（しかし自分が知っている事以上の真似は不可能）

この能力の発動時に術者がダメージを受けると念人にダメージが移動する。（術者が致死量を超えたダメージを受けると念人は消える）

この能力の発動時に念人と本体の位置を入れ替える事が可能。念人が術者に逆らう事は無い。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

術者の能力以上の事は不可能。

念人の使用出来る能力は『理不尽な拘束』のみ。

これで危ない状況になったらコイツに任せれば良いし、グリードアイルランドの「一坪の海岸線」の入手条件もクリア出来る。

ゲートの中で念人を一人作って俺がゲートから出て念人は有効らしい。

怪我をしても痛みや傷は念人の方にいった。

良いニュースが届いた。

キルアが原作通り200階に到達したので家に帰りました。

「応知り合いとして「おめでとう。」と言っといた。

本音は「早く帰れ。」だけ。

キルアも「サンキュー。」と軽く返すだけ。

まあ、別に友達でも無かったからな。

例えるなら同じクラスだったけど友達では無い。という感じ。

だからアツサリと別れてキルアはパドキア共和国に帰っていった。

出来れば二度と会いたく無いけど、ハンター試験で会っただよなあ
）。

ハンター試験を受けないならほとんどのフラグを折れるけど、ハン
ターライセンスは欲しい。

あれあるとマジ特権階級になれるからな。

そこらの貴族なんて目じゃ無い程の特権を得られるから是非欲しい。

それに、試験内容は原作のしか分からないから結局は287期の試
験を受けるしか無い。

だから必然的に原作組とバツチり会う事になる。

更に、原作通りの展開にすれば何が起きるのが高確率で分かるか
ら出来るだけ原作を守る。

あんまり展開に関係無ければ弄るけど。

以上の事から、ハンター試験までは原作を守り、その後から変えて
いくしか無い。

とりあえず今はやっと得た本当の自由を満喫しよう。

既に欲しかった金額は手に入れたから、これからは実戦経験を積むために200階クラスに上がる事にした。

ストレートに勝ち、200階に行く、そして登録受付に行く。

エレベーターが着き、受付に向かうと原作の奴らと違うが案の定、新人狙いの奴等が俺を見ている。

「200階クラスへようこそ、こちらに登録の署名をお願い致します。」

と受付の女は言い書類を出してくる。

俺は普通に署名して登録をする。

「早速、参戦の申し込みもなさいますか？」

「はい。」

「ではこちらの申し込み用紙にもご記入下さい。」

もう一枚書類を出されて記入しようとしたら、新人狙いの奴等が集まって来たので「何か用？」と聞いた。

「別に、ただ俺たちも申し込みしたいから並んでるだけ。」と答えたので「だったらお先にどうぞ。」と譲ってやる。

しかし男は「いや、君が先で良いよ。別に急いでいないし。」とあくまで俺を先に書かせようとする。

コイツらが初戦でも良いか、と思ったので書類にチェックを入れ、提出する際に敢えて「いつでもOKです。」と宣言した。

そうしたら待っている奴等がバカにするように含み笑っている。

まあ、見た目は10歳にも満たないガキが意気がつているようにしか見えないからな。

受付からルームキーを受け取り、部屋に向かった。

そう言えばなぜこんなに電子技術が進んでいるのに、ルームキーは鍵なんだろう？

カードキーにした方が何かと楽で良いと思うんだが？

単に原作が結構古い作品だったからか？

鍵を開けて部屋に入ると、シャンデリアが天井からぶら下がり、デカイベッドがある広い部屋が目に入る。

しかし部屋に鎮座するテレビもデカイが、やはりブラウン管テレビだから幅もデカイ。

何故かこういう所は昔だよな。

と思っっていたらテレビが点き、明日に試合がある事を告げる。

やっぱりアイツ等いきなりか。

まあ、アイツ等にして見れば、世間知らずなクソガキに現実を教えややる。という感じなのだろう。

纏を張っていたから念を使える事は分かっている筈だが、あの態度では「所詮ガキ」としか見ていないだろう。

まあ、別に良いけど。

その後はモーニングコールを頼んでデカイベッドでゆっくりと寝た。

翌日、モーニングコールで起き、ルームサービスで食事を取った後に指定された時間に指定された会場に向かった。

会場は満員で地響きが鳴る程ウザい。

子供が戦う所がそんなに見たいのかよ。なんかグラディエーターになつた気分だな。

『さあいよいよ試合が始まるうとしています！！』

本日のメインイベントであるゴン選手対 選手戦！！

選手は現在3勝1敗とまずまずの成績。

一方ゴン選手は150階までをストレートに勝ち進みましたが、そこからは大ブレイキ！！

苦節2年もの歳月を重ね、ようやくこの200階クラスにまではい上がって来ました！！

その小さな体で2年もの年月を頑張つて来たことを思うと、実況で

ある私も同情を禁じ得ません!!

しかし、この天空闘技場は実力社会の縮図!!

果たしてこの200階クラスでゴン選手に祝福があるのか!!」
随分長い説明だったな。

まあ、2年かけて8歳のガキがここまで上がって来たんだ、十分サ
クセスストーリーみたいで話題性が高いな。

しかし対面には試合相手の新人狙いがニヤニヤしながら立っている。
欠片も自分が負ける事を考えていないな。

多分俺に念の洗礼では無いが、200階クラスの洗礼を与える気だ
ろう。

まあ、精々頑張ってくれよ? 実験台さん。

「始め!!」

審判の合図と共に相手は俺との距離を詰めて来た。

多分その僅かに凝で集めたオーラを纏った右ストレートで決める気
でもいるのだろう。

しかし、わざわざ俺の射程距離に来てくれるなんて良い奴だな。

だからその期待に応えてやらねば。

「動くな」

と言い、『理不尽な拘束』を発動した。

後少して俺を殴れる、と思っていたら突然体が動けなくなっただ、
驚いて自分の体を見ようとすると、首が動かせないたため目しか動か
ない。

「何なんだ!?! これは?!」
と混乱する相手。

別に説明する必要が無いから黙って自分の能力の考察をする。

体は命令に従うが、口や目など細かい部位は俺の命令に逆らえるの
か?

そう思ったので「目を閉じる」と命じたら命令通り閉じた。
相手は更にパニックって騒ぐが無視。

どうやら細かい命令を出せばちゃんと効くらしい。

それに凝で見る限り、相手の纏は解けていないし、凝で集めた所も変化は無いので、やはり念能力は操れない事が分かった。

ついでに触ったら絶になるのかも試したかったが、大勢に見られて
いるし、テレビにも写っているのでこれ以上はバラすと不味いから
ここで終わらせる。

「窒息しろ。」と命じた。

そうした途端に相手は悶え苦しみ出した。

しかし、動くなと命じてあるので手は俺を殴ろうとした体制のまま、
目を閉じながら小刻みに震え、「あ…、があ！ は！あ…。」な
ど小さく叫ぶ。

しかし、そんなにも必死に喘いでいるのに、観客には分からないの
で止まっている相手に罵声を上げる。

多分子供が相手だから手加減しているんだと受け取っているのだろ
う。

おかげで審判も「どうした！？ 闘うんだ！」と言うだけ。

男の必死の呼びかけには俺以外は気付かず、そして勿論俺はあえて
助けてやるつもりは無いので、相手が死ぬのを待つ。

そしてとうとう何の反応も見せなくなり、死んだと分かったので能
力を解いて自由にしてやった。

その途端、男は倒れ込み、動かなかった。

審判は不審に思い、男に近付いたら意識が無い事に気付き、急いで
試合終了の合図を出した。

そしてドクターを呼び、「勝者！！ ゴン選手！！！」と宣言した。

観客はいきなりの勝負決定に何が起きたのか分からないので戸惑っているが、そんなの俺の知ったこっちゃ無いので会場を後にする。

新人狩り闘士サイド

念が使えない奴らは分からなかったが、俺達にはハッキリと分かった。

〇〇が早速決めにかかった時に、アイツは能力を発動して〇〇の動きを封じた。

恐らく操作系能力者なのだろうが、恐ろしい能力なのは分かる。

念こそ封じられてなかったとは言え、完璧に体の動きは封じられていた。

〇〇が途中から少し震えて何か苦しんでいた所を見るに、気管を絞められて窒息させられたんだ。

オマケに苦しむ〇〇を、何も感じさせない目でただただあのガキは見ていた。

更に『〇〇選手は原因不明の発作を起こし、亡くなりました。』との発表さえあった。

アイツ……殺しやがった。

何の感情の起伏も見せずに殺した。

「おい！ どうするんだよ!？」

隣に座っていた奴が俺に問い詰める。

コイツも俺と同様、新人を狩るつもりでゴンと闘う登録を済ませていた。

勿論コイツも念能力者なのでゴンがやった事が分かる。

そのせいか顔色は最悪だ。

そしてコイツが俺に聞きたい内容も分かる。

答えは決まっているが。

「決まってるんだろ。戦わない。」

俺の逃げる発言に何も言わずに頷く。

当たり前だ。

このままでは5日後にはコイツが戦い、更に5日後には俺がゴンと戦う事になっている。

あんな場面を見せ付けられれば戦う気など失せる。

だからゴン戦は不戦敗とする。

流石に逃げる迄はしないが、絶対にゴンとは戦わない。

新人は他にも来る。

ソイツを狙えば良い。

後日、宣言通りゴン戦には会場に姿を現さず、ゴンの不戦勝となった。

能力一覧

普段使う能力

能力名 『理不尽な拘束』

半径10メートル以内の任意の対象を操作する。

対象の頭に触れれば記憶を読む事が出来る。

個々の部位に限定して命令すればより効き目は増す。

対象に直接触れていれば強制的に絶の状態に出来る。

制約

対象の念能力の操作は不可能。

対象が人間なら聞こえるように口頭で言わなくてはならない。(対象に触れているなら不用)

秘匿用能力

能力名 『理不尽な支配』

半径50m以内にいる任意の生物を操作出来る。

操作される対象は任意で強制的に拘束され、更に絶の状態にさせられ一切念能力は使用不可になる。

操作対象が如何なるダメージを受けても術者に返って来ない。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

無生物の操作は不可能。(術者が生物と認識すれば有効)

能力名 『都合の良い祝福』

ありとあらゆる怪我や病気を癒す。

念で受けたダメージや呪いにも有効。

任意での発動が可能。(使用后1月以内に仮死状態になった場合には自動で発動。)

制約

この能力は一度使用すると消去される。

生きている者ではないと発動しない。

自分以外には使えない。

能力名 『現実シエルター』

任意の場所に異空間へのゲートを作る。

異空間内は北海道ぐらいの広さを持ち、グリードアイランドの島のように村や山、川、海などがある。念で作った人も住んでおり、複雑な会話や動作なども可能。

出口は任意に設定でき、一度行った場所や直接会った事のある人の場所なら自由に行ける。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

自分以外の生物は入れない。

ゲートをくぐる際に現実世界(外界)の物を持ち込む事は出来ない。

(自分が所持しているか直接触っている物なら可)

能力名 『完全なる隠匿』

この能力を発動すると姿や気配、その他何もかもを認識されなくなる。

生物は勿論無生物にも認識されない。

円など念能力を使用しても認識出来ない。

この状態で攻撃された対象は攻撃された事は認識出来るが攻撃対象を認識出来ない。

制約

この能力は一度解除すると消去される。

姿形が消えるだけで攻撃を受ければダメージはそのまま受ける。

能力名 『物真似念人』

自分そっくりの念人を作れる。

数はオーラが続く限り何人でも出せるがより少ない数に絞れば複雑な命令が可能になり、思考や念能力の使用が可能になる。

姿は基本自分と同じだが、他人に化ける事も可能。対象の顔や名前、性格、記憶、血液など対象の情報をより詳しく知っているならその対象のように振る舞い真似る事も可能（しかし自分が知っている事以上の真似は不可能）

この能力の発動時に術者がダメージを受けると念人にダメージが移動する。（術者が致死量を超えたダメージを受けると念人は消える）

この能力の発動時任意に念人と本体の位置を入れ替える事が可能。

念人が術者に逆らう事は無い。

制約

この能力は一度使用すると消去される。

術者の能力以上の事は不可能。

念人の使用出来る能力は『理不尽な拘束』のみ。

初期から所有している能力

能力名 『コピー』（特に名称は無い）

直接見た物、触れた物をコピー出来る。

個数や大きさに制限は無い。

この能力を使用しても術者は疲労しない。

制約

生物をコピーする事は出来ない。（術者が生物と認識しないなら可能）

ちなみに念能力は主人公が生き物と認識していないのでコピー可能。

10 厳しい現実

あのショーがお気に召したのか、新人狙いの奴等はみんな会場には姿を現さず、不戦勝を勝ち取った。何もせずに2勝したからこれで3勝0敗。

それ以降はあまり試合は無くなったな。

新人狙いは完全に俺を避けているし、他にも俺の能力に恐れをなしたのか、対戦要求は少なくなった。

しかし、たまに腕に自信がある奴等は勝負を仕掛けてくる。

そういった奴等も実戦経験と実験台とした相手をした。

やはりあの戦い以降、俺の能力を見極めるためか、200階闘士達が試合を見に来るようになった。

だから能力は使わず、基本的な念と肉体攻撃しか用いない。

それでも良い経験にはなった。

硬の状態で殴るとどう壊れるかや、わざと殴られて纏がどれほど頑丈か、念の高速移動をしてどこまで素早く動けるかなど様々な実験をした。

勿論能力についての実験もしている。

長い準備期間を得られるから一般人と念能力者の賞金首など、様々な人種に試した。

そのおかげで能力にも大分慣れてきたし、ある程度の実戦も経験出来た。

しかし、所詮はまだ8歳のガキでしかない俺では高額賞金首ハントなどが出来ない。

ハンターライセンスでも持っていれば箔がつくんだが、まだ持って

いないからちよつと強いガキでしかない俺に任してはくれない。
天空闘技場の200階クラス闘士だと言っても、そこまで有名では
無いし、何よりまだ10歳にもなっていない俺ではマフィアですら
雇ってくれない。

だから必然的に情報網は貧弱で、偶々偶然見つけた賞金首を狩って
名前と金を稼ぐ。

キルアはかなり小さい頃から殺し屋として活躍していたが、あれは
ゾルディック家という箔があったからこそ認められていた。

一方、俺の親父はハンターの間ではそこそこ有名だが、世間での知
名度はゼロに等しいから箔が全く無い。

オマケにハンターライセンスを持っていないからハンター専用サイ
トも使えないのでどん詰まりだ。

更に、残念ながら俺にコンピュータの才能は無いので、ハッキング
などは不可能だから完全に利用出来ない。

コンピュータ関連の雑誌は粗方コピーしたからハッキング自体は出
来るが、ハンター専用サイトに侵入する技術も度胸も無い。

ハッカーハンターにでも襲われたら厄介だしな。

結局は天空闘技場ぐらいしか念能力と闘う所は無い。

グリードアイランドも探してみたが、やはり見つからない。

というか原作では簡単に念能力者に会えたけど、現実的にはそんな
にいないんだよなあ。

街歩いていてもいる訳無いし、たまにいたとしてもスポーツ選手か
格闘家、芸術家、政治家など無意識に使っているだけで戦う価値が
無い。

念が使えるという事は、ある程度有名だから殺すと面倒になるので
戦えない。

他の転生オリ主みたいに初めから実戦経験を持っていれば良かった

んだけど、俺はほとんど戦った事が無い。

恋姫の時の商会創業時は自分でも動いていたが、直ぐに自分で動くのを止めて駒達を動かしていたし。

ネギまの時はたまに戦う時もあったが、ほとんどが魔法で一撃で殺していた。

だから直接的に戦うのはこれが実質初めてだ。

何せ今まではいちいち相手に近付く必要すら無かったからな。

魔法が使えれば何の心配も無いけど、念では直接的に戦うしか無いんだよなあ。

能力に頼り過ぎると、相手に対策立てられたら勝てなくなるし…。だから鍛錬は未だに欠かせない。

11 フラゲ折り準備

9歳になり、200階クラスで10勝を上げてフロアマスターにまで後一步にまでなったので、天空闘技場から出ていった。

フロアマスタークラスにはそれなりの念能力がいて、かなり良い経験になったが、フロアマスターに勝つとそのフロアを得る代わりにバトルオリンピアへの出場資格を得る事になってしまう。

それではかなり有名な選手になってしまい、動き難くなる可能性が高いのでフロアマスターに参戦してはワザと負けるを繰り返し、4回負けて自分から登録を抹消した。

これで大した評判にはならないだろう。

フロアマスターになれなかった闘士なんて幾らでもいるからな。一年もすれば人々は俺の存在など忘れ去る筈だ。

さてと、クジラ島に帰るまで後一年、原作が始まるまで後二年。

本当ならクジラ島に戻らずに原作に突入したいが、一応保護者であるミトさんを安心させないと後々面倒になりそうだ。

まあ、ハンター試験を受ける時にまた別れるんだしな。

原作を守るためにクジラ島からドーレ港に向かう、何故かガレオン船風の癖に計機類を積んでいるあの船に乗らなくてはならない。

別にクラピカとレオリオに会いたい訳では無いが、アイツ等は主人公組のメンバーだからいないと原作が変わるかも知れない。

つか、アイツ等ゴンがいなかったら本試験会場にすら到達出来なかっただろう。

だからムカつくが、ヒソカから守ってやったり、色々教えてやらな

くてはいけない。

とりあえず今は実戦経験を得るのが大事だな。

原作ではゴンは有り余る才能で乗りきっていたが、明らかに経験不足が目立っていた。

まあ、俺は少年誌のセオリーを無視して何でもするからゴンみたいな危ない目には合わないだろうが、それでも実戦経験は偉大だ。

とりあえず今は金が稼げて、実戦経験を積めるブラックリストハンターモドキとして情報を得ながらたまに狩る。

後は原作に縁のある土地を先に見ておこう。

試験会場のあるザバン市やヨークシン、NGL、東ゴルドー共和国、そしてパドキア共和国。

特にキメラアントの女王が流れ着くNGLにだ。

ここにゲートを作れば女王が兵隊を揃える前に殺れる。

王が産まれる前に女王が死ねばキメラアントの問題は早く方が着く。あれを防ぎさえすれば俺に対する直接的な脅威は無くなる。

意外とこの漫画は主人公の死亡フラグは防げるものばかりだからな。

まあ、ハンターライセンスさえ取得出来れば後は楽だ。

天空闘技場には行かないし、グリードアイランドはちょっとやりた
いからヨークシンには行き、キメラアント編は直ぐに方をつけるか
ら終わる。

それが終われば後は有り余る金で遊んで暮らそう。

この世界は以前の世界みたいに隠れて住む必要は無いから、堂々と
自堕落な一生を終える。ジンに会う気も興味も無いからこれ以上話
が進む訳が無いしな。

キルアを救済？　する気も無いからほったらかしにするつもりだし。

ハッキリ言って、どうでも良いしな。

荷物になるのがオチだ。

それに念ぐらい教えとけよ。

弟はもう使えるのだから兄貴にも教えてやっても良いと思うんだけどなあ？

それが教育方針なら別に何も言わないがな。

家庭に首突っ込む気はこれっぽっちも無い。

弟に念の針まで刺して守ろつとするその愛は重くてとても分かりにくい。

あれではキルアが家を嫌うのは明白だ。

他の兄弟と同じように育てていれば家出などせず、立派な後継ぎになってくれただろうにねえ。

12 故郷への凱旋

懐かしき故郷に帰ってきた。

大体の原作の場所を見回り、土地勘などをつけて来た。他にも数人だが賞金首を捕まえて引き渡したり、ヨークシンにて凝を使っての掘り出し物発掘など、結構楽しめた。

残念ながら実戦経験はあまり詰めなかったが、まあ仕方ないだろう。まだ見習いハンターの情報網では大した相手は見つからないし、ヒソカみたいなバトルジャンキーでも無いのだから確実に勝てる相手にのみを狙っているからな。

やはり生来の病的な臆病さのせいで勝てるか分からない相手と戦うなどあり得ない。

勝てそうに無い相手なら逃げるかゲートに引きこもる。

勝てそうな状況が来たらゲートから出て一気に決めに行くがな。

人間、気を抜く時は必ず訪れる。

飯を食う時、糞をする時、女を抱いている時など必ずある筈だ。

相手がゴゴ13でもない限りはな。

もしも本当にいたら逃げられない。一生異空間で暮らすしか無い。

まあ、念のために探したけどいかなかったから多分いない筈だ。というかないでくれ。

久しぶりに帰ってきたクジラ島は全く変わっていなかった。

まあこんな田舎が4年そこらで変わる筈が無いか…。

船が港に入港したので下船した。

「お、ゴンじゃねえか！ 久しぶりだなあ！」

顔見知りな漁師が話しかけて来た。

ちなみにコイツと知り合ったのは刑務所並みに安い賃金のバイトをしていた時だ。

一生懸命レジ打ちやウェイターをやっていた俺を気に入ったのか、何時も店に来て酒を飲んでいた上客だった。

「久しぶりオジサン。変わって無いね。」

本当は「話しかけんなオツサン。」と言いたいが、こんな狭い島ではイメージはとても重要なので仕方なく相手をしてやる。

「おう！ 当たり前よ！」

…にしても大きくなっただなゴン！ 今何歳だ？」

「10歳だよ。」

「そうかそうか！ お前が旅に出てもう4年にもなるんだな。」

あの時は驚いたぜ？ たった6つのガキが一人旅をするなんてな！ そりゃそうだな。」

普通、6歳どころか11歳でも一人旅なんて許さないとと思うがな。

何で原作では簡単に見送っただらう？

もしかしてこの世界では10歳を越えると大人扱いなのか？

だとしたらとんでもない低年齢化だな。正に世も末だ。

漁師と別れ、ミトさんの家に向かう。

ちなみにミトさんには一月程前に「そろそろ帰る」と手紙を出して

おいたからちゃんと伝わっている筈だ。

別にサプライをする意味は無いからな。

ゲートを使い、ミトさん家の近くまで一気に来る。

普通に歩くと2日ぐらいかかるからな。いちいち歩いてられない。

家に近付き、改めてその家を見る。
相変わらず変な家だよなあ。何で木を切り落とさずに家を建てたんだろう？

こちら辺の家はみんなそうなのだろうか？
と見回しても見える半径に家は無い。
ご近所付き合いなんて皆無だろうな。

そう思いながら玄関を開けて「ただいまー。」と入る。
するといきなり抱きつかれた。

「お帰りなさい！ ゴン！」
ミトさんからの熱烈な歓迎を受けたようだ。

「ただいま、ミトさん。」と空気を読んで抱き返しとく。正に漫画
みたいな光景だな。

しばらく歓迎の儀式のようなものを受け、ようやく家で一休み出来
た。

「それにしてもゴン。大きくなったわねえ。
毎年手紙と一緒に写真も送ってきてくれたから大きくなった事
は分かっていたけど、やっぱり実際見ると改めて成長したのが分か
るわね。」

ミトさんが何が面白いのかニコニコしながら俺を見てくる。
その送っていた写真は俺が金で雇ったエキストラとの写真だとも知
らずに。

「まあ、そうだろうね。
何せ最後に会ったのは6歳の時だったからな。4年も経ったんだか
ら成長していないと俺が困る。」
そう、4年だ。

原作と違い、クジラ島を離れて自由奔放に育ったせいかな、現在の身
長は多分原作のキルアより少し高い。

やっぱり良い物食っていたからな。

この島で暮らしていたなら一生喰う機会が無いだろう物達を。

「そうね。もう4年にもなるのね。」とミトさんは遠い目をする。
面倒くさい回想タイムにでも入ったのか？

普通なら旅先で何があったのかなどを話すのだろうが、「疲れている。」と言って早々に自室に引きこもった。

今から偽情報を整理しなくてはならないからな。
多分明日から聞かれるだろうから、今まで手紙で働いていると嘘をついた職業を纏めて、それっぽい話を作らなければならぬ。

これからここに永住するなら嘘はつかない方が良く、生憎来年にはハンター試験を受けるためにオサラバする。

その後はほとんど帰らない予定だから嘘についても問題無い。

ちなみにミトさんは俺にも原作同様「嘘についてはいけない。」と教えてくれたが、俺は「嘘は人間関係を円滑にしてくれるもの」と反論した。

だって何でもかんでも正直に言う世の中なんて生き辛くて仕方ない。
もしそうならば必ず各地で戦争が起きてヤバい世の中になるに違いない。

だから必要ならば嘘は使うべき。と5歳の時に言ったら家から追い出された。

ミトさんからして見れば、ただロクに世の中も知らない子供が屁理屈をこねているだけと思えば、少し罰を与えれば謝って来るだろうと思っただろう。

しかし俺は本気で言っていたので撤回する気は無く、一月近く野宿やバイト先で寝泊まりするなどして対抗した。

そしてようやくミトさんから折れて「分かったわ、ある程度嘘は必

要ね。」と認めて来た。

ここで俺が折れると今後嘘をつき難くなるから負ける訳にはいかなかった。

それに、別にミトさん家から追い出されても問題無かったしな。

それどころか自由に行動出来るようになるのでむしろ帰りたく無かった。

とにかく、このおかげで嘘をついたからといって騒がれる事は無くなった。

だからといって別に嘘をつきまくった訳では無い。

ただ「嘘は絶対いけないもの。」というミトさんの考えを無くしたかっただけだ。

こうすれば小さい嘘であればいちいち追求はしなくなる。

この戦いが起こる前はいちいち聞かれたり面倒だったからな。

昔は面倒だからミトさん殺そうか。とも思ったが、殺すと後々面倒だし、この年では保護者がいた方が何かと便利だから我慢した。

とにかく今は情報を整理して嘘に真実味を持たせる。

完全に嘘で固めるとバレるが、ある程度真実を含ませれば自然と真実味が生まれる。

それに、この生活もハンター試験迄の辛抱だ。

ハンター試験が終わったら来る意味無いしね。

ジンの残した箱には無意味な物しか無かったし、せめて何か役に立つ物くらい残しておけよ。

ロクに育てもしなかった癖に、罪悪感を感じないのか？

だったら自分の手で始末すれば良かったのに。

それも一種の愛情だしな。

13 母の想い

クジラ島に来て一年経ち、原作の年齢の11歳になった。

この一年は今ままで一番ノンビリとした一年だった。

以前では収入のためにバイトをしたり、修行をしたりなど色々大変な事が多かったが、今では天空闘技場や賞金首を捕まえて貯めた貯金があるから働かなくて良いし、修行についてはこの島で出来る事は限られているから、出来る範囲の修行をやり、出来ない過激なものなどは異空間でやる。

基礎を怠るとツエズ格拉みたいに思わね所でしたっぺ返しをくらいかねないからな。もう念能力はほとんど完結したけど、今でも鍛える。まだ成長期の11歳だしな。

287期のハンター試験申し込みが始まったからミトさんに参加を告げる。

「ねえ、ミトさん。」

「何？ゴン。」

洗濯物を畳んでいたミトさんに話しかける。

「俺、今年のハンター試験受けるわ。」

その一言で時間が止まった。正確にはミトさんだけが。

「……な、何言っているのよゴン！？アナタまだ11歳でしょ！？早すぎるわよ！！？」

正に正論。全くもってその通りだ。

出来るならまだハンター試験を受けたく無いのだが、この年しか試験内容は分からないし、確実にライセンスが欲しいから今年受けるしかない。

「うん、確かにまだ11歳だけど、決めたんだ。結構前から決めていたんだ。11歳になったら受験するって。何故かは分からないが今年なら受かると分かるんだ。だから絶対受験する。」

流星に漫画で内容を知っているから。なんて言えないからな。だから真実に一部嘘を混ぜる。

後は前と同じ、決めたらとことん行く。という設定を使う。

「……………っ！」

俺の目を見ながらミトさんが考えているのはやっぱりジンと一緒になのね。かな？

まあ、やると決めたらやる。というのは前に見せたから説得は無意味と分かるだろう。

というか別に納得して貰う必要は無い。多分保護者の認証なんて絶対必要では無いのだろう。

キルアが受験出来ていたのがその証拠だ。キルアは親の承認を受けるのはほぼ不可能だから、代わりに誰かを保護者の代わりにしたのか、それとも保護者の承認など別にいらぬのか。

「……………。勝手にしなさい。」

しばらく黙り、そう言って部屋を出ていった。

別に出ていくのは良いんだけどさ、洗濯物も一緒に持っていけよ。俺がやんの？

ミトさんサイド

ゴンは昔から変わっていた。

引き取った当初はただの子供だったけど、2歳ぐらいから急に性格が変わった。

まあ、ただ成長して個が確立しただけだと思うけど。

それからゴンは一人で過ごすようになった。そこらへんをだだ走ったり、重い石などを持つなど様々な事をしていた。

初めはただ遊んでいるだけだと思っていたが、たまにキズだらけになって帰ってきたことから考えるに、修行をしていたのだろう。

何故そんなにキズだらけになるような修行が必要なのかと聞いた事があった。

その時ゴンはまだ3歳だったのに、各個たる目で私を見て「必要だから」と答えた。

何のために必要なのかも聞いたが、ゴンは答えてくれなかった。

でもそのジンによく似た決意した目を見ると、止める事は出来なかった。

性格はまるで違うが、やはりゴンはジンの息子なのだと思っても認めさせられたのだった。

5歳になるゴンは突然「アルバイトをしたい。」と言って来た。

5歳で働き口なんかあるの？と聞いたら港街の飯場で雇って貰えたと言った。

仕事内容は簡単なウェイターやレジ打ちだから問題無いとゴンは答えたが、ゴンはまだ5歳なのだ。

確かに他国では5歳からでも働く子供もいるらしいが、そういった子供は働くしかない環境にいるから働くのだ。普通に暮らしている子供は働いたりしない。

しかしまたもやゴンはジンのような「自分の意見は曲げない。」とでも言うような眼差しで見えてきた。

その目をしている時は何を言っても無駄だと分かっているので、社会を知るための勉強という名目で許可した。

ちなみにバイト代は年齢を考慮して時給200ジェニーのようだ。確かに子供の内に大金を持つのはあまり良くないしね。

てつきり一月程度で辞めると思ったが、ゴンは辞めず。1年間も働き続けた。

私も何度か足を運んだ事があるけど、まだ年のせいで低い身長に悪戦苦闘していたけど、頑張っているその姿からお店はそこそこ繁盛していた。

そしてゴンは6歳になると突然今度は「一人旅をする。」と宣言してきた。

今までとは違い、流石に6歳で一人旅はさせられない。と思いつつ反対したが、ゴンの決意は変わらず、それどころか既に島から出る手筈が整えており、このまま勝手に行ってしまうだろう。そう理解し、仕方なく許可した。

その後は半年〜年一回ととても少なかったが、無事の知らせとして現在勤めている仕事場で取った写真や現地のポストカード等と一緒に手紙を送って来てくれた。

手紙の内容や帰宅後に聞いた話によると、大体は住み込みで働きながら各地をバックパッカーのように旅していたようだ。

「とても良い経験になった。」と、帰宅後にゴンは10歳が言うようなセリフでは無い事を笑顔で話した。

約束通り4年でゴンは帰って来てくれたので、これでゴンも落ち着

いてくれるだろう。と思っていた矢先に今朝、ゴンがハンター試験を受験する事を告げられた。

ハンター試験は死ぬ危険が高い事で有名な試験だ。

まだ11歳では早すぎる。と止めたが、やはりゴンは既に受験する事を決めているようだ。

ゴンは昔から行動派ではあるものの、堅実だからハンター試験のようナリスクが高い事はしなれないと思っていたけど、やっぱりジンの子だからか、ハンターを目指した。

私としてはゴンにはハンターみたいな危険な職業には就かず、堅実で安全な職業に就いて欲しい。

ジンのような自分勝手に生きる人間にはなつて欲しく無かつたんだから…。

でも、ゴンの人生なのだから…どう生きるかは私が決めて良い事では無い。

ゴンは頭の良い子だから、多分ハンターになつても立派にやっつけてくれるでしょうね…。もしかしたら私よりも頭が良いかも知れないしね。

だから、ゴンの生き方を認めてあげましょう。

息子を信じるのは母親として当たり前なのだから…。

14 嵐の船ってマジ地獄

あの後、一応ミトさんにハンター試験応募カードに署名を貰い、無事応募申請が完了した。

その後、ハンター試験会場案内が届いたが、「ハンター試験はザバン市で行います。」など大雑把な場所と試験開始日時しか書いていない。

マジで大雑把な情報しか書いてないし。

これじゃアナビゲーターがいないと本試験会場にたどり着くにはかなりの情報網が無い限り無理だな。

そういえばキルアとか他の奴等はどうやって本試験会場にたどり着いたんだろう？ナビゲーターを見つけたのか？それとも情報を手に入れたのか？

いよいよ出発の日。

原作よりは少ないが、数人が見送りに来てくれた。餞別はくれなかったけど。

ミトさんとも別に原作みたいな感動秘話なんか話さずに、普通に「怪我には気を付けるのよ？」程度の言葉を交わした後、手を振り別れを告げた。

勿論原作みたいに船尾でデカイ声を上げて「立派なハンターになる。」「的な宣言はせずに普通に乘って出航した。

にしてもこの船、見た目はガレオン船の癖にブリッジを見る限りエンジン船なんだよな。

でも煙突が無いからどうやって排気してるんだ？もしかして原子炉

でも積んでる？だとしたらとんでもない客船だな…。

しばらく経つと原作通りに嵐がやってきた。

旅には船ではなくもっぱら飛行船で移動していたから俺は嵐にあんまり強くない。それに周りはゲロだらけで精神衛生的にも良くないのでゲートに逃げ込み嵐をやり過ごす。

数時間後、嵐が止んだらしいのでゲートから出てゲロだらけの客室を抜けて甲板に上がる。

やっぱり潮風は気持ち良い。飛行船は楽で良いけどたまには船も良いな。嵐が無ければ。

「どーした小僧？今頃船酔いか？」

酒瓶片手に船長が話しかけてきた。

「別に、ただやっと嵐を抜けて一時的に安定したからゲロ臭い客室を抜けて新鮮な空気を吸いたかっただけさ。」

「一時的に…とはどういう事だ？」

俺の答えが気になったのか質問してくる船長。

「さっき気象情報を調べたら後2時間半〜3時間後辺りでさっきの倍近い嵐とぶつかるって分かったから。」

これは本当、さっきパソコンで付近の海域の気象情報を調べたら警報が発令されていた。ちなみに絶対に近付かないでくださいって出していたよ。それに敢えて突っ込んでいくんだから正気とは思えない。

「じゃあ何でまだこの船にいるんだ？このままではヤバいって分かっているの？」

船長の疑問は最もだ。もしこれがハンター試験じゃ無かったら速攻ゲートに逃げる。

「見るからに経験豊富な船長が敢えて危ない海域に突っ込んで行く事から、多分これもハンター試験の一部何だと思ったから。恐らく

ここで船を降りると今期のハンター試験は失格と見なされるだろう。じゃなきゃただ単に天気も読めない程未熟な船長という事なら自分の不幸を呪うさ。」

俺の答えに船長はいきなり大笑いを始めた。腹を抱えながら大爆笑している。

「はー、はー、あー久しぶりに大笑いさせて貰ったぜ！確かにその通り、こんな天気も読めないような船長の船に乗ったら不幸以外の何物でも無いな！」

小僧の読み通り、俺は試験官として雇われた経験豊富な船長さ。知つての通りハンター資格を取りたい奴等はごまんという。そんな奴らをいちいち試験するような時間も人的余裕も試験官には無い。だから俺みたいな雇われ試験官がお前達をふるいにかけるって事だ。「俺の読みが当たった事か、それとも皮肉が面白かったのかまだ少し笑い気味に船長が有難いご高説を言っている。全部知っているからほとんど聞き流しているけどね。」

「それで？俺は合格何でしょうか？試験官殿？」

やっと笑いが収まったのか船長は普通の顔になった。

「ああ、お前なら合格だ！久々に笑わせて貰ったしな。」

それでお前さん名前は？」

「ゴンだ。」

「そうかゴン、ではお前は何でハンターになりたいんだ？」

やっぱりその質問聞くんだ。

「ハンター、ていうかライセンスが欲しいんだよね。」

別にハンターしなくても自由に生きれば良いしな。

「ほう、何故ライセンスが必要なんだ？」

「俺こんな見た目じゃん？まあ、年相応なんだけどさ、こんな年じやロクな仕事も無くてさ。働くにはある程度箔が必要になるんだけどさ、こんな年だからこれといった功績も無いからさ、ロクに稼げもしない訳。」

だからハンターライセンスを持っていけばプロハンターという箔がつくから有利になるんだよ。

それにライセンスを持っていけばいちいち面倒な出入国書類やビザを取る必要も無くなるし、公共施設もほとんど無料になるという素晴らしいお徳付き。

だからどうしてもライセンスが欲しいからこの試験を受けたつてこと。」

本当にただ資格が欲しいだけなんだよな。理由が就職に便利というある意味現実路線。非現実的世界に生きるハンターとは対極だな。

「成る程な、その年にしては珍しい程に現実的な考えだが、まあそれも良いか。

よし、分かった。これでお前は正式に合格だ。

お前結構面白いから審査会場最寄りの港まで連れてつたやるよ。」

「ありがとよ。」

原作よりも早いけど合格宣言を貰った。

その後、船長から「船の動かし方を教えてやろうか？」と聞かれたけど「嵐まで風に当たっている。」と断った。別に船の動かし方はいらぬいな。

移動は飛行船を使った方が楽で良いし、最悪ゲートを使って移動すれば良いんだから。

船長のこれから地獄に行くけどお前らどうする？宣言でうずくまっていた客達は一齐に救命ボートに乗って逃げていった。

というかこの近くに島は無人数ぐらいしか無いからアイツ等大丈夫なのか？それとも失格しても生き残る試練を与えるのか？だったらどんだけ鬼畜だよ…。

「結局客で残ったのはこの3人か。名を聞こう。」

また言うのかよ…。まあ、原作組への自己紹介と割り切るか。

「オレはレオリオという者だ。」

「俺はゴン。」

「私の名はクラピカ。」

自己紹介が終わる。

ちなみに俺の服装は原作みたいな短パンではなく、ジーパンで上はジャケットという一般的な服装にクラピカみたいなバツクを持っているというスタイルだ。

ちなみにバツクにはパソコンなどの他に折り畳み式の釣竿も入っている。

釣竿って結構汎用性高いしな。

「お前ら何故ハンターになりたいんだ？」

流石にこれをまた言うのは面倒なので言わない。船長も俺では無く、二人を見ているしな。

「？おい、えらそーに聞くもんじゃねーぜ、試験官でもあるまいし。」

「いえ、めっちゃ試験官です。」

「良いから答える。」

船長の命令にレオリオは若干キレ気味に「何だと？」と答える。

「話した方が良いと思うけど？」

という俺のささやかな忠告にも

「ヤダね。オレはイヤな事は決闘してでもやらねエ。」

と答える。

船長に睨み付けられたので黙って引き下がる。

その後は船長の答ええないのならお前らも船を降りな宣言を受けたので二人は渋々答える。

クラピカは敵討ちとレオリオは金が全てを話した。ちなみに俺もレオリオの意見には全面的に賛成だ。

金さえあれば大抵の物なら手に入る。ある程度の友情や愛だつて買える。まあ、深い関係になるには内面が必要だが。

そして決闘が始まる。

面倒くさいよね、決闘なんて。他人と意見が異なるなんてよくあるというのに。

そんなの気にしてたら生きていけねえよ。

嵐の甲板の上で格好つけているのか二人は佇む。ていうかお前ら船員達の邪魔になっているし。喧嘩したかったら何でわざわざ甲板に出るの？理解不能。

船員達が嵐を乗り切るために奮闘している横で「今すぐ訂正すれば許してやるぞレオリオ。」「てめえの方が先だクラピカ。オレから譲る気は全くねえ。」と言いつつ邪魔な奴ら。お前ら空気読めよ。「行くぞ！！」とクラピカがわざわざ宣言して鎖で繋がれた二本の棒を構えながら走る。

「来やがれ！」とレオリオは折りたたみナイフを構える。

その時、バキッ！というデカイ音がして帆を支える部分が折れて船員に当たり吹っ飛ばす。更に運悪く波のせいで船が傾き、船員が吹っ飛んだ方向に船が傾く。

「カツォ！」と吹っ飛ばされた仲間を呼ぶ船員達。

このままでは激流渦巻く海に落ちてしまふと思つたレオリオとクラピカは手すりに捕まりながら限界まで手を伸ばすが、残念ながら届かない。

哀れ船員はこのまま海に沈んでしまふかと思われたが、ヒュンツという鋭い音が鳴り、カツォの足首に糸が巻き付き、勢い良く船に引っ張られる。

そして船員は無事船に着陸して仲間の船員達が手当てのために近付

き、無事を確認した後、「ボウズ！！礼を言う！！」と船員は釣竿で引つ張ってくれて仲間を助けてくれたゴンに礼を言った。

俺は「良いって事。」と軽く手を振り返す。

流石に原作みたいな無茶は俺には出来ない。ていうか例えクラピカとレオリオが10年来の親友だったとしても俺はしない。

だってもし二人の内どちらかが手を滑らせたら終わるもん。もしも海が穏やかだったなら考えるが、こんな荒れた海に飛び込むかも知れないリスクは犯せない。

だからただカツツオを釣竿で吊り上げたのだ。まあ、タイミングを図っていたから簡単に出来た。流石に突発的だったなら無理だったろうが。

さてと、レオリオとクラピカの険悪なムードを治すために一言。

「なあんだ、考えている事は一緒じゃん。」

と今でも手すりに捕まっている二人に言う。

そして二人は互いの状況を見合って笑い合った。

軽く笑い合った後にクラピカが

「非礼をわびよう。すまなかつたレオリオさん。」

と言う。

そしたらレオリオも

「何だよ水くせえな、レオリオで良いよクラピカ。オレの方もさっきの言葉は全面的に撤回する。」

と返す。

コイツらマジ単純。

「くっくくくくはははは！お前ら気に入ったぜ！今日のオレ様はス

ゴク気分が良い！！

お前ら3人はオレ様が責任もって審査会場最寄りの港まで連れてってやらあ！！」

と楽しそうに船長は操舵室に戻っていった。

都合が良いように嵐が弱まっており、危険海域を通過したようだ。

これがマンガのご都合主義か…。

さっきまでの嵐が嘘みたいに晴れてきた。確かにこんなに世界から庇護されているなら、ゴンが無茶をやっても何だかんだで助かっている訳だ。

スゲエな主人公補正。

15 情報の大切さ

試験会場最寄りのドーレ港に無事到着して、レオリオとクラピカは下船した。

俺は一応礼儀として「世話になったな船長。」と礼を言っとく。試験官でもあるからゴマすっつとして損は無い。

「うむ、達者でな。」

それとお前はカツオを助けてくれたらから最後のアドバイスをくれてやるう。」

船長が山を指指して「あの山の一本杉を目指せ。それが試験会場にたどり着く近道だ。」

とわざわざ教えてくれた。知ってるけどね。

「分かった。最後までありがとう。」

と言って俺も下船する。嵐のトラウマから二度とこの船には乗りたくないと言っ。

クラピカとレオリオはザバン市行きのバス乗り場にいた。コイツらをここで見捨てればまず間違いない今年ハンター試験は受けられないだろうが、それでは原作が大いに狂うので助けてやる。

「お二人さん。バスを待っていてても無意味だよ。」

俺の言葉に二人は振り返り「何で無意味なんだよ？」とレオリオが聞いてきた。

「ハンター試験の試験会場にそんな簡単に行ける訳無いだろ？」

さっきの船も試験だったように、これも試験。ルーキーは大概これで脱落する仕組みなの。」

俺の言葉に納得したのかクラピカは頷く。

「成る程、確かにそんな簡単に試験会場がある街に行ける筈は無い

な。」

一方、レオリオは胡散臭げに俺を見下ろし「本当かよ？」と言う。

「だったらこのままバスに乗れば？その前に周りの音をよく聞いた方が良いけど。」

と言つて後ろでザバン市行きバスは目的地に到達していない。と噂している奴らを見る。

それでレオリオも納得したのか「成る程な。確かにバスではザバン市にはいけないらしいな。」

「じゃあどうするんだゴン？」

馴れ馴れしく聞いてくるレオリオ。ていうかお前と何時名前を呼び合う関係になつたんだ？船でもロクに話もしなかつたのに。

「電車で行く。流石に公共交通機関にまでは手は及んでいない筈だ。特急とかは危なそうだから鈍行やタクシーで確実に行く。」

俺ではキリコを見分ける何て不可能だし、いちいち山を登るのは面倒だから電車で行く。

本当なら飛行船や特急など直行便を使いたいが細工されかねないからな。

「それで？お二人さんはどうする？」

俺と一緒に行くか？と聞く。

「では私もゴンと一緒にいこう。」とクラピカ。

「しょうがねえな。俺も一緒に行ってやるよ。」とレオリオ。なんかムカつくけどまあ良いか。

その後、各駅停車の電車やタクシーを使って深夜によやく到着した。やっぱり鈍行では時間がかかるな。

ホテルで一泊した後、試験会場に向かう事にした。

ちなみにクラピカとレオリオは節約のために同室、俺はご免なので個室を取った

翌朝、そこそこの都市のザバン市を三人で歩く。

「さてと、じゃあ試験会場を探すか。」

レオリオは張り切ったように言う。

「そうだな、来るだけで一日かかったが、まだ試験会場を見つけなくては無意味だからな。」

クラピカも張り切っている。コイツら事前に情報を集めなかったのか？

今から試験会場を探していたら時間的に無理なのだが…。

「お前らマジか？今から試験会場を探していたらタイムオーバーになるに決まっているだろ？」

俺の呆れたような言葉が気に入らなかつたのかレオリオがキレ気味に「探さなきゃ分からねえだろうが！？それとも何か？！オレ達はここまで来て失格ってことか！？」

往来のど真ん中でデカイ声を上げるなよ。通行人がこっち見ているじゃねえか。

「声が大きいレオリオ！静かにしろ！」

しかし私もレオリオの意見には賛成だ。確かに試験日時は今日だが、まだ時間はある。だから不可能では無い筈だ。」

注意にはなっていない大きい声で言うクラピカ。コイツ頭は良いけど肝心な事は抜けているからな。

「ハンター試験は試験が始まる前に試験会場を突き止めるか、ハンター試験公認のナビゲーターに認めて貰うかしないとたどり着くだけでも不可能なんだよ。」

と常識を教えてやる。

レオリオはクラピカを「マジ？」という感じに見る。クラピカは知

らなかつたらしく悔しそうに黙っているだけ。

「まあ、でも今回は大丈夫だ。試験会場は俺が知っている。事前に調べておいたからな。」

その一言で二人は明るくなる。

「なあんだ心配させんなよ！てつきりもうダメなのかと心配しちまつたじゃねえか！」

とレオリオが安心したかのように俺の背中を叩きながら言う。纏をしているから別に痛く無いけど。

ちなみにこれからは日常でも纏をする。危ないかも知れないし、ライセンスが取れば子供の背格好でも不便しないしな。

「ありがとうゴン。君には助けられてばかりだな。」

クラピカは普通に礼を言う。自分が如何に危ない状況だったのかわかり、少し緊張気味だがな。

その後、事前に行った事のある試験会場に向かった。

自分だけならゲートで簡単に行けるのだが、コイツらが一緒にいるから俺も歩かざるを得ない。まあ、大した距離でも無いから良いけど。

「ここだ。」

そう言つて俺は定食屋を見る。

しかし二人は隣のビルを見る。まあ、普通そつちを見るよな。

「ここに世界各地の……。」

「ハンター志望者の猛者が集まる訳だな。」

緊張しながら言う二人。

しかしそこに「そつちじゃなくてこつちだ。」と俺が突っ込みながら定食屋を指指す。

少し沈黙が流れた後に「どう見てもただの定食屋だぜ……。」とレオ

リオの声が虚しく聞こえる。

「確かに定食屋だが、ここが試験会場だ。まあ、ついて来いよ。」
と喋ってドアを開ける。

「いらっしえーい!!」店主が野菜炒めだか何かを炒めている。ど
う見ても定食屋だな。

「ご注文はー?」

「ステーキ定食。」

店主がぴくつと反応して「焼き方は?」と聞いたので「弱火でじっ
くり。」と答えた。

「あいよー。」と答えたきり店主は顔を背け、娘がバイトが「お客
さん、奥の部屋どうぞー。」と案内する。

部屋に入ると何時焼いたのか、席の鉄板には良い焼き具合のステ
キが乗っている。何時からスタンバっていたんだ?

そして誰かがスイッチを入れたのか、エレベーターが稼働して地下
に降りていく。この店は元からこうなのか?それとも試験のために
こんなエレベーターを作ったのか?疑問だ。

「それじゃ、食おうぜ。」

と俺は席に座り食べ始める。

二人も席に座る。

「にしても本当にここが試験会場だったんだな?」

レオリオが肉を食いながら俺に聞く。

「そりゃね。ちゃんと調べたからね。」

それよりも何も調べて来なかったお前らを俺は信じられないよ。」
と食いながら二人を見る。

二人は「はははは...。」と軽く苦笑いをするだけ。

ステーキも粗方食い終わり、食休みをしているとチン、とB100
という凄まじい階数表示が点いた。

ウィインと扉が開き、外に出ると薄暗い地下道に人がギツシリといた。何でもつと縦に広がって間隔に余裕を持つとはしないんだ？ここを越えてはいけません。という線でもあるのか？

「一体何人いるんだ？」

レオリオの疑問に「君達で405人目だよ。」と答えが帰ってきた。声を追うと、パイプみたいなのに腰かけている中年のオヤジがいた。新人潰しのトンパか？

「よつ。おれはトンパ。よろしく。」

手を差し出して来たが俺は回避してクラピカにさせた。もしかしたら毒でも仕込まれていたらヤバいな。

「新顔だね君達。」

「分かるのか？」クラピカの質問に「まーね！なにしろオレ10歳からもう35回もテストを受けてるから。」

まあ、試験のベテランってわけだよ。わからないことは何でも教えてあげるよ！！」

如何にも良い人風に言うトンパ。という45歳でまだ試験を受けるって考えは凄いな。

レオリオが「いばれることじゃねーよな？」と聞いてくる。

「いや、そうでも無いよ？目的はちゃんと果たしているんだらうから。」

新人潰しという使命をな。

分からないレオリオは「そうか？」と疑問気だ。

その後はクラピカが他の受験者の情報を聞き出している。情報の大切さを嫌って程に知ったばかりだからな。

「ぎゃああ~~~~っ！！！」

悲鳴が地下道に鳴り響いた。

「アーラー不思議、腕が消えちゃった。」

「タネもいかけもございません。」

ヒソカが笑顔で語る。奇術に種が無い訳無いがな。

腕が無くなった奴は自分の腕が無くなった事で叫んでいる。

「気を付けようね？人にぶつかつたらかやまらなくちゃ。」

そんなことは気にせずヒソカはのたうちまわっている奴に注意する。言っている事は道德的だがやっている事は非道德的だ。

「他にもヤバい奴はいっぱいいるからな。オレがいろいろ教えてやるから安心しな！」

キメポーズのように宣言するトンパ。出来れば今の内に始末しておきたいが、一応原作に深く関わっているので今は放置する。

「おっとそつだ。」

と言ってポツケから市販されているジュースを取り出し俺等に渡す。「お近づきのしるしだ飲みなよ。お互いの健闘を祈ってカンパイだ。」

「
そう言つてトンパが飲もうとした缶を俺は取り上げ、「ありがとよ」と言つて飲む。」

「な、何をするんだ！？」

とトンパが驚いていたので

「いやあ済まないな。突然アンタが持つていたジュースが飲みたくなったんだ。代わりに俺のをやるよ。まだ開けてすらいない。」

と下剤入りのジュースをトンパに渡してトンパが持つていたジュースを飲む。やはりこちらは普通のジュースのようだ。

しかしトンパは自分が持つているジュースを飲もうとしない。

「どうしたんだ？せつかくの乾杯では無いか？」

そう聞いてもトンパは飲まず「いやあ、いいよ…。オレ喉乾いていないし。」と必死に断る。

その様子を勿論見ていたレオリオとクラピカはジュースを飲まずに床に捨てる。

その様子を見たトンパは「はははは…。」
と笑うしか無かった。あまりに不自然だったからな。
キルアみたいに薬が効かない体質ならそのまま飲んで疑いを晴らす
事も出来たが、普通の人間には無理だ。

16 再会

あの後トンパはいづらい雰囲気になったのでさっさと退散していった。

流石に原作と違って「中身が古くなっていた。」なんて言い訳も出ないしな。自分では飲まなかった事で何らかを仕掛けていた事は明白だ。

ジリリリリリリリリ！！！！というとんでもない不快な音が鳴り響いた。

音源を探して見上げると、変なキーホルダー？を持った執事服を来たヒゲがいた。

「ただ今をもって受け付け時間を終了いたします。
では、これよりハンター試験を開始いたします。」
と宣言した後、パイプから飛び降りた。

「こちらへどうぞ。」と正に執事のように手招きする。

「さて、一応確認いたしますが、ハンター試験は大変厳しいものであり、運が悪かったり実力が乏しかったりするとケガをしたり死んだりします。

先程のように受験生同士の争いで再起不能になる場合も多々ございます。

それでも構わない。という方のみついて来てください。」

それって契約書で言う「死んでも当社は一切の責任は負いかねます。

」と同じか？まあ、この状況で「じゃあ俺止める。」なんて言えないと思うのだが…。

返答が無かったのでヒゲは

「承知いたしました。」

第一次試験404名。全員参加ですね。」

と確認するように断言する。

それを聞いてレオリオは

「当たり前の話だが誰一人かえらねーな。ちょっとだけ期待したんだがな。」

と残念そうに言う。これで帰るような奴はわざわざ本試験会場まで来ないと思うのだが。

「おかしいな。」

クラピカが違和感を感じたのか言う。

「ザ、ザと周りがどんどん早足になり、とうとう走り出した。」

「おいおい何だ？やけにみんな急いでねーか？」

レオリオは不思議そうに言う。

「やはり進むペースが段々早くなっている。」

クラピカも疑問が確信になった。

「前の方が走り出したな。」

分かってはいるが、一応俺も言っとく。

そして全員が走り出した。ペースは普通のマラソンよりは早いな。

多分オリンピッククラスのペースだ。

まあ、その普通ならあり得ないペースでも全員が普通に付いて来ているのはスゲエな。

「申し遅れましたが、私一次試験担当官のサトツと申します。」

これより皆様を二次試験会場へ案内いたします。」

と歩きとは思えないスピードですすみながらサトツは言う。

「二次……？ってことは一次は？」

ハゲがヒゲに聞く。

「もう始まっているのでございます。」

二次試験会場まで私について来ること、これが一次試験でございます。

場所や到着時刻はお答えできません。ただ私について来ていただきます。」

「なるほどな…。」

「さしずめ持久力試験つてどこか。」

望むところだぜ、どこまででもついて行ってやる。」

レオリオは自信ありげに言う。普通のフルマラソンぐらいなら走れるから自信があるのだろう。

まさか100km以上走るなんて考えていないのだろう。

「多分心理テストも兼ねているな、何時まで走れば良いか分からないからかなりキツいな。」

俺の言葉にレオリオは「心配性だなゴンは。」と何から出るのかは分からないが、自信満々のレオリオ。

ある意味こいつが羨ましい。

ガーーーーッという音を鳴らしながら、走っている俺等を颯爽と追いついて抜くキルア。

おお成長したなあ。当たり前だけど。

「おいガキ！汚ねーぞ！そりゃ反則じゃねーかオイ！！」

エキサイトするレオリオ。根は真面目なんだよなコイツ。

「何で？」

不思議そうに聞くキルア。

「何でつておま…。こりゃ持久力のテストなんだぞ！？」

あくまでズルいと言い張るレオリオ。

「真面目かオマエ。第一試験官は「走ってついて来い。」なんて言っていないだろ？」

俺が冷静に言い返すとクラピカも「テストは原則として持ち込み自由なのだ。」と言う。

レオリオは尚も言い返したそうだが、俺等の意見に納得したのか黙

る。

キルアがようやくやく俺に気付いたのかこっちを見てきて

「あれ、ゴン？」

と聞いてくる。

「おう。久しぶりキルア。」

と挨拶し返す。

「おお、やっぱり！久しぶりだな。何年振りだ？」

「3年振りになるな。」

「確か最後にあつたのは8歳の時だからそんなに経つのか。」

と懐かしそうに言うキルア。

「何だ？お前ら知り合いか？」

レオリオが聞いてきたので

「ああ、久しぶりに再開したんだよ。」

と答える。

レオリオは「へー。」と言うだけ。

「それにしても。」

とキルアはクラピカとレオリオを見る。

「珍しいな、ゴンが仲間を持つなんて。」

キルアが不思議そうに俺に聞く。

まあ、確かに天空闘技場の時はキルア以外とは誰とも会話すら無かつたもんな。

「まあ、色々あつてな……。」

と濁らす。ただ単に説明するのが面倒なだけであつたが。

「ふーん……。」

キルアは別に聞かない。そこまで気になつた訳でも無いしな。

およそ5時間が経過し、60kmぐらいを走った。このために持久力を鍛えていたから何とも無い。我ながら化物になったな。と思う11歳であった。

レオリオはもう大分遅れ気味だ。

本当なら置いていきたいが、コイツに失格にされると面倒なので一応

「レオリオ、大丈夫か？」

と聞くと何が大丈夫なのかサムズアップする。

しかし

「カバン持とうか？」

と聞くと

「頼む。」

とすぐ差し出して来た。やはり限界が近いらしい。

カバンを受け取り列に戻る。後は自分で出来るだろう。

「意外だな。ゴンはてっきり見捨てると思っていたのに。」

とキルアは不思議そうに聞いてくる。まあ、コイツに与えたゴンの印象は自分本位の他人の事など気遣わないタイプだからな。

「恩は売つという損は無いし、一応ここまで一緒に来た仲間だからな。」

その言葉にキルアが驚いたような表情を見せる。多分俺の事を自分と同じタイプの人間だと思っていたからだろう。

まあ、最悪レオリオが失格になったらカバンは俺の物になるからその時は有効的に使わせて貰おう。アイツ医者志望だから薬とか色々持っただろう。

そう考えていたら後ろから

「絶対ハンターになつたるんじゃないー！！」

くそつたらア~~~~！！！！」

とデカイ声が響いた。どうやら立ち直ったらしい。
5時間以上走っているレオリオも十分超人の範囲なのだがな。どう
やって鍛えたんだろう？

更にしばらく走り、100kmぐらいになった所で第2の関門が現
れた。

先が見えない程に長く、老人には普通に登るのさえキツイ程に急な
階段が続いていた。

にしてもこの施設は何のために作られたんだろう？

核シェルター？にしては巨大過ぎるし、こんな長い階段はいらない。
階段の風化具合から見て作られて1、2年では無さそうだから今回
のために特別に作られた訳では無い。だったら何のために定食屋の
真下にこんなとてつもない巨大な通路を建造したんだろう？

逃げるためにはこの長ーい階段はいらないだろうし、こん
な100kmにも渡って避難経路を築く必要も無い。
意味分かんない。

そんなことを考えていたらいつの間にか先頭にいた。

「もう先頭か。」

俺のつぶやきに

「うん、だつてペース遅いんだもん。」

こんなんじゃない逆に疲れちゃうよなー？」

ととんでもない事を言うキルア。このペースが遅いって、お前はど
んな鍛え方をして来たんだよ。

「結構ハンター試験も楽勝かもな。つまんねーの。」
と本当につまらなそうなキルア。

「そうか？どんな試験だつて難しいのよりは簡単な方が楽で良いよ。」
「ハンター試験なんて面倒なのばっかだからな。頭がイカれているとしか思えない。」

「え〜、それじゃ面白く無いじゃん。ゴンってマジでオレと同年とは思えない性格だよなあ。」

「当たり前だ、貴様の何倍生きていると思っっているんだ。」

「でも俺の考え方は16の頃には確立していたから俺がおかしいのか？」

「まあ、良いや。」

「所でキルアは何でこの試験受けたんだ？別にハンター志望でも無いだろ？」

「ああ、別にハンターになりたかった訳じゃ無いよ。」

「ハンター試験が物凄い難関だつて言われているから面白そうだと思っただけ。でも拍子抜けな感じ。」

「この試験を受けている奴らの大半は人生をかけているというのに、何という冒瀆的な発言。」

「ちなみに俺も人生かかっています。今回の試験に不合格だと来年受かるか分からないから絶対今年受かるしかないのだ。」

「ゴンは何で受けてんの？もしかしてハンター志望？」

「うーん、微妙だな。別にハンターを志望している訳では無いけど、ライセンスはどうしても欲しいからね。」

「本当の希望はニートだが、ニートをするためには金がかかるから稼ぐにはハンターが手っ取り早い。」

「何でそんなにライセンスが欲しいの？確かに特典はいっぱいあるけど、ゴンぐらいの強さがあればそんなに必要無いだろ？」

「キルアは俺を少なくとも自分よりは強い奴と分かっているので聞いてきた。」

「まあ、確かに特典も捨て難いけど、一番欲しいのは信用さ。」

「信用？」

「そう、俺がいくら強かろうが、まだ所詮11のガキ。こんなガキでは信用度はゼロだから試してさえ貰えない。」

でもライセンスを取り、プロに認められればプロハンターとしての信用を得られる。後は腕前を見せて更に信用を勝ち取れる。だからどうしてもライセンスが必要なのさ。」

本当にそうなんだよね。マフィアの用心棒にしても、警備員にしてもこんな成りでは話さえ聞いてくれない。

だから単独でたまたま見つけられた賞金首を捕まえるぐらいしか出来なかった。

大体の高給で経験を得られそうな仕事はプロハンターじゃないと雇って貰えない。

だから何回も自分よりも遥か格下の癖に、ライセンスを持っているからと雇われていく奴らに笑われたりもした。

あの悔しさは無いわ。

だから何としてでも合格する。

そのためには確実に合格するために原作をなるべく準拠して原作通りに合格する。俺はゴンなんだ。大抵のトラブルは問題無い筈だ。

「ふーん、やっぱりゴンって変わっているよな。」

とキルアが笑いながら改めて変人認定をしてくれた。

「そんなに変わっているか？ある意味一番大切なモノだと思うけど

「信用」って。」

そう言うとキルアは「確かにな…。」とつぶやいた。その顔は真剣そのものだった。

何か暗い雰囲気になっていると前方に光が見えて来た。

「出口か…。」

その俺の言葉にキルアも「ああ、明るいな…。」とだけ返してきた。
何でこんな雰囲気？

17 荷物の受け取り

出口にたどり着き、ようやく外気に触れた。

しかし目の前に広がる風景は湿原のせいかな風は又メツとしてあまり気持良いとは言えない。

他の受験者も続々と到着して来たのか、目の前の湿原に釘付けになる。そりゃそうだろう。

何せトンネルを抜けられれば終わると思っていたのに、見た感じまだ続くと解れば絶望したくなる。

しかし試験官は無視して。

「又メーレ湿原、通称“詐欺師の埒”（ねぐら）。

二次試験会場へはここを通って行かねばなりません。この湿原にかいない珍奇な動物達、その多くが人間をも欺いて食糧にしようとする狡猾で貪欲な生き物です。

十分注意してついて来て下さい。騙されると死にますよ？」

というとんでもない警告をかましてくれた。

そして出口のシャッターが閉じて後少しで出口に到達出来た受験生の希望を絶った。

「この湿原の生き物はありとあらゆる方法で獲物を捕食しようとしてます。標的を騙して食い物にする生物達の生態系…。詐欺師の埒と呼ばれるゆえんです。

騙される事の無いよう注意深く、しっかりと私の後をついて来て下さい。」

補足情報ありがとう。つまりお前について行けないと死ぬって事が酷いな。

しかしレオリオはまたもや何でそんなに自信があるのか「おかしなこと言っぜ、騙されるのが分かってて騙される訳ねーだろ。」とつぶやいた。

そしてその直後、

「ウソだ！！そいつはウソをついている！！」

という声が響いた。

出口の脇から傷だらけで何かを引きずっている男が出てきて

「そいつはニセ者だ！！試験官じゃない、オレが本当の試験官だ！

！！」

とサトツを指指しながら叫ぶ。

その叫びに周りの受験生達も混乱気味になる。

「これを見る！！」

と引きずっていた物を見せる。

それは顔はサトツに似ているが体はサルの死体のような物だった。

「こいつはヌメーレ湿原に生息する人面猿だ！！

人面猿は新鮮な人肉を好む。しかし手足は非常に力が弱い。そこで自ら人に扮し、言葉巧みに人間を湿原に連れ込み他の生き物と連携して獲物を生け捕りにするんだ！！

そいつはハンター試験に集まった受験生を一網打尽にする気だぞ！

！！」

とサトツを見ながら言う。

中々の演説だな。でも矛盾が多いぜ。

先ず何時サトツと変わったかだ。この湿原に足を踏み入れた時は俺達も一緒にいたから変わる機会は無かったし、初めから変わっていたのなら説明出来るが、その場合はあの猿が100km以上の道と階段を走破したという事になるのだが、あの猿の細い手足では無理だし、そもそもそんな能力があるのなら騙さずに実力で人間を捕食すれば良い。

通常のコンディションなら簡単に分かるが、受験生達は長い長いマ

ラソンと階段登りを終えた後だから冷静な思考はまず不可能。だからそこを突いたのならナイスな考えだ。
上手くいけば受験生の半数を騙せたかも知れない。

しかし物事はそんなに上手くないかない。

突如トランプが飛来して来て弾効している男の顔に三枚突き刺さり、男は絶命した。

更にトランプはサトツにも飛来していて、サトツには四枚も飛来したが、サトツは危なげも無く見事に全部受け止めた。

「くつく。なるほど、なるほど。」
と44番のヒソカはトランプを操りながら笑う。

そして今まで死んでいたと思われた引きずられていた猿が突然跳び跳ねながら逃走を図ったが、ヒソカが再びトランプを投げ、見事猿に命中させた。

「これで決定。そっちが本物だね。」

とヒソカはサトツを見ながら言う。

「試験官というのは審査委員会から依頼されたハンターが無償で任務につくもの。」

我々が目指すハンターの端くれともあろう者があの程度の攻撃を防げないわが無いからね。」

ヒソカの説明にサトツもトランプを捨てながら

「ほめ言葉として受け取っておきましょう。」

しかし、次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験官への反逆とみなして即失格とします。よろしいですね。」

ヒソカを見ながらサトツは宣告する。

それにヒソカは「はいはい。」と適当に返事を返す。

バサ、バサという音が上から聞こえて来て、多くの鳥が猿の死体に

群がり始めた。

ガツ、ガツと死体を次々啄み、みるみる内に死体の肉は無くなっていく。まあ、死体処理が楽だからエコとも言えるな。

「あれが敗者の姿です。」

私をニセ者扱いして受験生を混乱させ、何人が連れ去ろうとしたんでしょうな。こうした命がけの騙し合いが日夜行われている訳です。何人かは騙されかけて私を疑ったんじゃないやありませんか？」

そのサトツの言葉にレオリオとハゲが反応している。

レオリオはまだしも、忍者のお前が騙されるなよ。

「それではまいりましょうか。二次試験会場へ。」

その言葉でまたマラソンが始まった。

こっからが面倒くさいんだよなあ。主にお荷物達（レオリオ、クラピカ）のせいで。キルアみたいに自分でクリアしてくれば楽なんだけど、アイツ等面倒くさいんだよなあ。

走り始めて霧が段々出てきた。

確かこの後に受験生達が畏にかかりまくって大量に死ぬんだよなあ。

「ゴン、もっと前に行こう。」

とキルアが警告して来た。

あの荷物達もお前のように体力があればなあ、俺もヒソカと対面せず済むのに。

「そうだな。」

ヒソカの雰囲気明らかに変わった。どうやらここらでかなり殺る気らしいな。」

その俺の言葉にキルアが関心したような顔をして

「やっぱりゴンには分かったんだな。にしてもこれが分かるって事はゴンってもしかして俺やヒソカと同類？」

と聞いてきたので

「さあね。少なくとも俺は快樂殺人者じゃ無いよ。」
とヒソカと同類は否定した。流石にあんなキチガイと一緒にされては迷惑だ。

その意味が分かったのかキルアは顔をしかめて
「俺だつてあんなジャンキーじゃねーよ。」
とヒソカと同類はやはり否定。

どこかにヒソカをリスケットする奴は存在するのだろうか？
いたとしたらそいつは正気を失っているがな。

その事をキルアにも話したらキルアも

「そいつ人間じゃねーよ。」

と言い、少しの間和んでいた。

しかしそんな時間は長く続かず、後ろの方からレオリオの

「つてえー！ー！ー！！！」

という声が響いた。

本当は助けたくは無いが、原作通り確実にライセンスを取るために
我慢して

「キルア、ちよつとこれ頼む。」

とレオリオの荷物を渡した。

キルアは「？」という顔をしながらも受け取った。

「なんか荷物がヤバいらしいんで取りに行くわ。」と言う。

荷物とは何かを理解したのか

「こんな霧じゃあ一度はぐれたら二度と合流出来ないぜ？」

とキルアは止める。

その言葉は大変ありがたいが、ここはやるしか無いんだわ。

「大丈夫、大丈夫。先に二次試験会場行つてくれ。」

と言いつつレオリオの方向に走る。

後ろから「ゴンっ！！」とキルアが呼ぶ声が聞こえる。しかし無視
だ。

というかキルアには二次試験会場にいつて貰わなくては困る。

原作でゴンはヒソカに連れていかれたレオリオの香水の匂いを追ったが、俺にはそんな芸当は不可能だ。

だからレオリオの荷物に発信器を仕込んでキルアに渡した。キルアがちゃんと荷物を持っていつてくれたなら大丈夫だ。

それに最悪ゲートを使えば二次試験会場に直行すれば良い。

『現実シエルター』は場所だけではなく、一度あった人間の位置にゲートを開ける。

だからキルアが荷物を捨てていきやがったら俺だけゲートに入ってキルアの位置に直行する。

少し離れた位置に開けばバレないだろう。

さて、では大変不本意だが、ヒソカと出会うか。

おお、おお、やってるね。

ゲートで移動して少し遠目で見ているけど、今は受験生達がヒソカを囲んで処刑しようとしている様子だ。

あ、皆死んだ。弱え。ていうか例えアイツ等が念使いであつてもヒソカなら圧倒しそう。あいつの負けた場面を見たこと無いからな。

そして三人だけが生き残った。

レオリオ、クラピカ、格闘家のチェリー。

三人はヒソカが近付いて来たらバラバラの方角に一齐に逃げた。

確かにあれなら微かに生き残れる可能性がある。でもあれでは二次試験会場には行けそうに無いから結局は迷って死ぬと思うけど。

そう思っていたらレオリオが帰ってきた。

なんかカツコイイセリフを言ってるけど、それって強い奴が言わないとカツコ良く無いよ？

しかしレオリオはこん棒を振り上げながらヒソカに接近する。しか

しあえなくかわされヒソカが止めを刺すのか、それとも気絶させるだけなのか？分からないが、一応原作を遵守して釣竿を出し、思いっきり振り上げてヒソカ目掛けて降り下ろした。

攻撃ではなく、行動を止めさせるのが目的なので周は使わず、普通にオモリやウキをヒソカの顔面にクリティカルヒットさせた。

ヒットした瞬間、ドコッ！！というデカイ音があったが、ヒソカは何でも無いようにこっちを見てきた。

原作と違って多少傷がデカくて深そうだけど。

「やるね、ボウヤ。」

釣竿？面白い武器だね。ちょっと見せてよ。」

気軽にヒソカが話しかけて来たが、レオリオはチャンスと思ったのか

「てめえの相手はオレだ！！」

とわざわざ宣言しながら棒で攻撃を仕掛けた。

しかしあえなくヒソカからアッパーを食らいダウンした。マジでレオリオ使えねえ。

「どうして何もしないんだい？君は彼を助けに来たんじゃないのかい？」

ただアッパーを食らう様子を見ていただけの俺に疑問を抱いたのだろう。

「別に殺す気は無さそうだったからね。アンタが本気だったら今頃レオリオの頭は砕けていただろうし。」

ちなみに今の俺は纏をしているが、まだ念を覚えたての頃の弱い纏を張っている。

もしも強い纏を張っているとここで殺り合う可能性がある。だから今は「青い果実」を装い、見逃して貰う。

俺の願いが叶ったのか、ヒソカは「ふーん。」と言いながら俺を見るだけ。多分観察しているんだろう。

今掴むべきか、もう少し様子を見るべきかを。

しばらくヒソカは俺を見て

「うん、君も合格。良いハンターになりなよ。」

と合格判定を貰った。表には出さないさが、心の中ではホツとする。ピピピとヒソカのポツケから電子音が鳴る。

ヒソカは携帯のような物を出し、少し会話をした後

「お互い持つべきは仲間だね。」

と笑顔で言い放つ。

そして「一人で戻れるかい？」と聞いてきたので「ああ。」と返す。

「いいコだ。」と言い残し、ヒソカは霧の中に消えた。

「ふうー。上手くいったか。」

と思わず地面に座った。

もしヒソカと戦う事になったら『理不尽な支配』を発動して速攻ヒソカを殺すしか無かった。

しかしそうすれば原作は大きく変わり、何か不測な事態が起きてしまいかねないのでやりたく無かった。

そしてそれが果たせたので座り込んだ。

「ゴンツ!!!」

とクラピカが駆け寄って来た。もしもレオリオを助けに来たんだったら遅すぎだよ。

俺が来なかつたらレオリオはとっくに鳥のイサになっていただろう。

「大丈夫か?!ゴン!!!」

俺が座り込んでいるからケガでもしたのかと心配しているらしい。

まさかホツとして座り込んだだけだ。など言えないから普通に立ち上がって「大丈夫だ。」と言った。

「本当に大丈夫か？」

と未だにクラピカは心配しているが、それよりも大事な事があるので発信器の電波を受信する受信器を出した。

レーダー画面を見ると移動しているのもまだ走っていると分かった。

「さてと、二次試験会場に行くぞ。」

とクラピカに言う。

「しかし試験官を完全に見失ったから場所が分からんか？」

「問題無い、発信器を仕込んだレオリオの荷物をキルアに持たせたから位置は分かる。」

と言ってクラピカにもレーダー画面を見せた。

「なる程、これなら追跡可能だな。」

とクラピカは試験が続行出来るからか嬉しそうだ。

テメエのためにわざわざ発信器を仕掛けたんだからなあ。このお荷物が。

レーダーに従って二次試験会場に向かう俺とクラピカ。

「ゴン。」

クラピカが真剣な顔をして言って来た。何だ？

「ありがとう。君には感謝のしつぱなしだな。」

それに、こんな事を言うのは失礼だが、私は君は戻って来ないだろうと思っていた。確かに私やレオリオを本試験会場に連れて来てくれたりしたが、流石に今回は助けに来てはくれないだろうと諦めていたが、君は助けに来てくれ、更に私にまだ試験を受けるチャンスをくれた。

ゴンには本当に感謝している。ありがとう。」

全部自分のためにやった事だけど、勝手に感謝してくれるなら受け取っておこう。

「まあ、まだ短い付き合いでしかないが、ここまで一緒にやってき

たからな。」

と肯定しとく。

ここで「別に、全部自分のためだからな。」とか本音を言ってもツンデレとしか受け取って貰えない空気だから敢えて乗っておく。

そのせいかクラピカも「そうか…。」と笑っている。
とても和やかな雰囲気だ。

なあに、嘘はバレなきや嘘では無い。

嘘を信じ込めばみんな幸せになれるぞ。

18 二次試験（前書き）

この小説はなんだかんだ言っ
て原作準拠がメインです。
たまにズレますが。

「どうやら間に合ったようだな。」

とクラピカが安心したように言う。テメエは開始時間が分からないから制限時間を気にしないが、俺は制限時間に間に合うかギリギリだったからかなり焦った。

もう少しでコイツを置いていってゲートで跳ぼうか迷ったぐらいだ。

その後はレオリオの看病はクラピカに任せ、俺はキルアの元に行った。何か変態からの視線を感じたけどガン無視だ。

「ようキルア。」

ガルル、グルルとウザい音が鳴り響くドアを見ていたキルアに話しかける。

「おお、ゴン！よく間に合ったな？」

「まあな、お前がちゃんとレオリオのカバンを持っていてくれたからな。」

カバンを受け取りながら言う。

キルアは「？」という顔をしていたので、発信器を外して見せてやった。そしたらキルアも納得したようである。

「なる程、発信器か……。だからわざわざオレにカバンを持たせたのか。」

「まあな、じゃなきゃわざわざ戻ったりしないし。」

キルアは「やっぱりゴンだな……。」と苦笑された。

レオリオにカバンを渡した後、

「にしても、ウゼエな。」

とガオオオ！やガグゲゴ！など擬音が鳴り響く体育館みたいな施設

を見る。

「ああ、変なうなり声はするけど全然出てくる気配は無いし。まあ、正午まで待つしかないんだろっな。」

時計が12時になり、ピー……と小さく鳴ると扉が開いた。

施設の中には人間とは思えないデカイ男と随分ファンキーな格好をした女がいた。

てつきり中には何かとんでもない化け物でもいるのか?と想像していたらデカイ音は腹の虫の音かよ。と受験生達は呆然としている。

「どお?おなかは大分空いてきた?」

「聞いてのとおり、もーペコペコだよ。」
メンチとブハラが確認しあう。

「そんな訳で二次試験は料理よ!!」

美食ハンターのあたし達二人を満足させる食事を用意してちょうだい。
「

料理!?!」と受験生達は驚く。マトモな料理経験者なんてほとんどいないだろう。

「先ずはオレの指定する料理を作ってもらい。」

「そこで合格した者だけがあたしの指定する料理を作れるってわけよ。」

つまりあたし達二人が“おいしい”と言えば晴れて二次試験合格!!試験はあたし達が満腹になった時点で終了よ。」

とかなり過酷な条件を突きつけて来やがった。美食ハンターが簡単に美味しいなど言うのかよ?

レオリオなんて「くそオ、料理なんて作ったことねーぜ。」と悩む、周りも似たような反応だが。

「オレのメニューは、豚の丸焼き！！
オレの大好物。」

いきなり料理が分からないモノを出されて今までの緊張感が一気に無くなり、受験生が若干シラケ気味。

「森林公園に生息する豚なら種類は自由。

それじゃ…二次試験スタート！！！」

ブハラの手元の元、一気に受験生達が森の中に入って行く。

俺達も豚を探していると、突然目の前には鼻が不自然にデカイ巨大な豚が目の前に現れた。俺達を見つけた途端に雄叫びを鳴らしながら突進してくる豚。

『理不尽な拘束』で拘束しても良いけど、別に使う必要も無いのでジャンプして突進をかわし、額を殴る。

そしてその後は血抜きや内蔵処理をした後に油で焼こうかと思っていたら、レオリオやクラピカは何もせずに焼く準備を始めていた。え？何も処理しないの？それって美味しいのか？と疑問を感じたが、遅れると不味いので俺も何もせずに焼き、焼き上がったのをそのままブハラに献上した。

美味しいのか心配だったが、ブハラは俺のを食べて「美味しい。」と言っていたし、明らかにまだ生焼けの豚を食べても「これも最高。」と言うだけ。もしかして何かの能力で胃腸を強化、あるいは操作しているのか？

じゃなきゃあの量は食えない。ブハラの後ろに積み上げられていく骨は既にブハラよりも高く積み上げられている。

ゲップをした後、

「あ〜〜食った食った。もうお腹いっぱい。」
と言った。

その瞬間ゴオオン！！という中華楽器のデカイ鐘をメンチが鳴らし「終ーーーー了ーーーー！！」と宣言する。

しかし受験生が気になったのは明らかにブララの体積以上に積み上げられた骨の山だ。クラピカは啞然としているし。

「あんだねー。結局食べた豚全部おいしかったって言うの？審査になんないじゃないねよ。」

とメンチが抗議する。

確かに明らかにほとんどの豚は処理されていなかった。むしろちゃんと処理していて時間切れになり、悔しそうにしている後ろの奴らは悲惨だ。

見た目はこんがり焼けていても美味そうだ。むしろ俺が食いたい。

しかしブララは

「まーいいじゃん。それなりに人数は絞れたし、細かい味を審査するテストじゃないしさー。」

と返すだけ。

「甘いわねーアンタ。美食ハンターたる者、自分の味覚には正直に生きなきゃダメよ。」

ま、仕方ないわね、豚の丸焼き料理審査！！70名が通過！！」とメンチが宣言した。

さあここからが面倒だ。

「あたしはブララと違ってカラ党よ！！審査もキビシクいくわよー。」

「お前の審査はハバネロよりも辛いんだよ。ブララの審査はブドウ糖果糖の原液みたいにクソ甘かった癖に、お前はハバネロって落差ありすぎ。」

「二次試験後半、あたしのメニューはスシよ!!」
とメンチが宣言した後の受験生の顔は「?」一色だ。
何せこの世界では日本はほとんど名前すら知られていない小国だ。
知っている奴は日本出身者か、秘境好きの奴ら。
または俺みたいなの日本からの転生者だ。

案の定周りがざわつき出してきた。

「ふん。大分困っているわね。ま、知らないのもムリ無いわ。小さな島国の民族料理だからね。

ヒントをあげるわ!!中を見てごらんなかさーい!!ここで料理を作るのよ!!」

メンチが施設内に案内してキッチンスタジオみたいな所を見せ付けた。

「最低限必要な道具と材料は揃えてあるし、スシに不可欠なゴハンはこちらで用意してあげたわ。

そして最大のヒント!!スシはスシでもニギリズシしか認めないわよ!!」

それじゃスタートよ!!あたしが満腹になった時点で試験は終了!!その間に何コでも作ってきてもいいわよ!!」

そして試験は開始した。

しかしどんな料理が分からないため、大半はまだ動けてすらない。

「ゴン作り方分かるか?」
とキルアが聞いて来た。

確かにスシが何かは知っているが、作ったことは無いし、回転寿司みたいにただシャリを握ってネタを乗せるだけなら出来るが、ハンゾーはそれで失格だったからまず合格は無理だろう。

「いや、検討もつかない。」
と言っとく。

「そつだよなあ。」
とキルアが困ったように寿司包丁を持つ。
ていうか素人にこんな本格的な包丁を渡されてもどう使えば良いか
分からないから無意味だろ？ヒントのつもりなのだろうが、逆に受
験生達は混乱している。

しかしその均衡は突然崩れた。

「魚ア！？お前ここは森中だぜ！？」と「声がデカイ！！！」と
いう音が鳴り響いた瞬間、全員が食材は何か分かったらしく、一斉
にキッチンを出て森に向かう。

しかし俺はただ見ているだけ。

だって無意味だもん。どんなモノを作ろうが合格しないんだつたら
魚を取る意味無いからとりあえず自分の昼飯を作る事にした。

残念ながらこのキッチンにはガスコンロが無いから焼く事は出来な
い。まあ、炙り寿司を作る事は無いだろうしな。

「ちよつと、アンタは行かないの？」

俺以外は全員漁に出かけたのに、全く動かない俺が気になったのだ
ろう。

「だって魚が正解とは限らないし、ただその場を混乱させるために
言ったかも知れない。」

だから俺は俺なりに作るよ。」

と適当に言う。

ハンゾーが明らかに反応した事から魚が食材と確定しているが、そ
れをあえて無視する。

その答えにメンチは「ふーん…そつ。」と言うだけ。別にそこまで
気にはならなかったんだろう。

その後、俺は皆とは違う方向の森に行き、円で周囲1kmを調べ、

監視がない事を確認してからメシが食べそうな開けた場所を見つけ。テーブルとイスをコピーする。

そしてテーブルにはチャーハンやラーメンをコピーしてランチタイムにする。

周りは森だが、ここだけはちよつとした中華屋だ。気に入った店のメニューは全部コピーしているから食うに困る事は無い。

難点なのは出すことは出来るが、消す事は出来ない所以でゴミは基本ポイ捨てだ。

まあ、一応埋めて帰るから何時か自然に戻るだろう。

そして昼休憩は終わり、食器や食卓を粉々にした後埋めて会場に戻ると、皆スシ？作りに悪戦苦闘していた。

みんな魚と米を使った何かを一生懸命作っている。まあ、見たことさえ無い料理を作ればあんな感じになるか。

「どうだ！！これがスシだろ！！」

というハンゾーの自信満々な声が聞こえた。ああ、あのシーンか。

しかしメンチは食べた後にやり直しを宣告した。その決定に不服なのかハンゾーは

「メシを一口サイズの長方形に握ってその上にワサビと魚の切り身に乗せるだけのお手軽料理だろーが！！

こんなもん誰が作ったって味に大差ねーべ！？」

とわざわざ細かい作り方を暴露しながら抗議した。

なんでそんな細かく言うんだよ。ただメンチの言うままに何度も作り直していれば一人だけ合格という奇跡を得られたかも知れないのに。

ちなみに俺はジャポンに行った事があるので寿司は知っているし見たことあるのでコピーで出せば合格出来ただろう。

しかしここで合格して一人だけで次の試験になったら何が試験になるか分からないからやらない。ただメンチとハンゾーのキレ合いを見ている。

その後はメンチの明らかに試験とは関係無い不合格判定を貰いすごく受験生達が下がっていく。

そして遂にメンチはアガリを飲み。

「悪い、お腹一杯になっちった。」
と試験終了を告げた。

その後、メンチは審査委員会に合格者ゼロを告げるために電話した。
「だからー仕方ないでしょ、そうなっちゃったんだからさー！イ
ヤよー！結果は結果ー！やり直さないわよー！」

などなど審査委員会との電話でわざわざ大声で叫ぶメンチ。
ブラハラが諫言するがメンチの意見は変わらず、逆にハンゾーがバラ
した事を糾弾する。

そして改めて

「二次試験後半の料理審査、合格者は0ー！よ。」
と宣言した。

受験生達はまさか本当に終わりなのか？とザワつき出す。

ドゴオオオンー！ー！というデカイ音が鳴り響いた。見ればトードー
がキッチンを破壊していた。

「納得いかねエな。とてもハイそうですかと帰る気にはならねエな。
オレが目指しているのはコックでもグルメでもねエー！ハンターだ
ー！しかもブラックリストハンター志望だぜー！

美食ハンターごときに合否を決められたくねーなー！」

ブラックリストハンター志望にしては聞いた事が無いな。

昔は俺もブラックリストハンターみたいなのをやっていたから、アマチュアブラックリストハンターは情報を手に入れるために結構知っているけど、アイツの名前を聞いた事が無い。

もしかしてまだアマチュアですら無いとか？

トードーの猛抗議にメンチは「それは残念だったわね。」で終わらせる。

勿論トードーはまた怒り「何イ!？」と睨む。

「今年のテストでは試験官運が無かったってことよ。また来年がんばればー?」

そのメンチの一言にトードーはブチ切れてメンチに殴りかかったが、ブラハラにすくい上げられるように平手打ちを食らい会場のガラスをぶち破って外に吹っ飛ばされる。

ありゃあ普通なら首の骨が折れて死んでるぜ。何せ頭から着地して受身を全く取っていない。

その後はメンチが美食ハンターのありがたい心得を一通り言った後、上から突然飛行船がやって来てスピーカー越しに会話する。

「どうやって聞いていたんだ? 集音マイクか能力? それともただの身体能力か?」

ネテロが何故かわざわざ飛行船から飛び降りて来てメンチの審査規定のズレを指摘する。それにメンチも罪悪感があったのか素直に認め、試験管と試験無効を要求する。

しかしネテロは新たな試験を命令。

そしてそのために現在飛行船に乗っている。しかしこの世界の飛行船は船内が広いな。

でも何故か受験生の部屋は用意されていなく、仕方なく全員廊下で座るか立っている。

そしてようやく目的地に到達した。

降りた先にはグラウンドキャニオンよりも深い裂け目があった。

「安心して、下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど。」

そののどが安心なんだ？普通何十kmも河を下ったら死ぬぞ？

「それじゃお先に。」

そう残してメンチは裂け目に飛び込んだ。まるでプールの飛び込みみたいにあっさりと。

受験生達が騒ぐ、まあ見た目はただの投身自殺にしか見えないからな。

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を取りにいったのじゃよ。」

「そうネテロが安心させるために言う。全然安心しないけど。何せ次は自分達がやるんだからな。」

ネテロは尚もクモワシの生態について講釈してくれているけど、受験生のほとんどは聞いていない。今はそんなことはどうでも良い。

大切な事は

「よつと。この卵でゆで卵を作るのよ。」

とクモワシの卵を持ちながら笑顔で言うメンチを半数の受験生達には悪魔の笑みに見えただろう。現にトードーはドン引きだ。

しかしそうは思わない連中もいる。

「あー良かった。こういう簡単なのを待っていたんだよね。」

キルアが笑顔で言う。これ簡単か？

「走るのやら民族料理よりよっぽど早くてわかりやすいぜ。」

レオリオが自信満々に言い放つ。確かにわかりやすいがこの場合、失敗すれば待つのは確実に死だ。

「よっしゃ行くぜ!!!」

レオリオの言葉が契機になり、次々受験生達が飛び込んで行く。しかしもう半数は飛び込まない。

出来るなら俺もしたくないが、しなきゃ不合格になるので仕方なく飛び込んだ。

あの何とも言えない気持ち良いのか悪いのか不安な浮遊感。経験者なら分かるだろう。

それを感じながら落下し、何か太い糸が見えてきたのでそれを掴み、落下を防ぐ。そして卵を奪い後は岸壁をよじ登るだけだ。

しかしロッククライミングの経験は無いので凝で強化した指を岩に指しながら慎重に登る。

その様子を見ていたレオリオから「スゲエなお前。」と驚かれたが、楽々と岩肌を登るお前の方がスゲエよ。お前医者志望の癖にロッククライミングの経験でもあるのか？

岸壁を登りきり、用意してあったデカイ鍋？の中に卵を入れる。そして出来上がったので試食会だ。

「こつちが市販の卵でこつちがクモワシの卵。さあ、比べてみて。」とメンチから市販の卵を受け取り、最早どれが自分の卵か分からないので適当にすくい、殻を剥いて食べた。

「う…美味いっつ!!」や「濃厚でいて舌の上でとろける様な深い味は市販の卵とは遥かに段違いだ!!」などクモワシ絶賛コールが鳴り響く。

でもここまで苦勞してまでこの卵を食べたいか？と俺は思うのだが。それよりは何時でも安全に手に入って安い市販の方が良いんだけど。

まあ、俺はコピー出来るからこのクモワシの卵も無限に出せるけどね。

こうして二次試験は終了した。

合格者42名という異常さで。

ていうか42人も飛び降りたのか。マジで人間とは思えない化け物集団だな。

二次試験が終わり、俺達は協会の飛行船に乗り、三次試験会場へと向かう。

しかし一次試験や二次試験で生き残っている奴らは何で回収されるんだろう？ダイブ出来ずにリタイヤした奴らはただあの山に置いていかれたし…。

別の飛行船が来るのかな？来年の試験にはいたし。

飛行船が飛び、空が完全に暗くなった頃、ネテロ会長から始業式の校長先生の話みたい नाही ありがたいお話があるらしい。

「残った42名の諸君にあらためて挨拶しとこうかの。」

ワシが今回のハンター試験審査委員会代表責任者のネテロである。本来ならば最終試験で登場する予定であったが、いったんこうして現場に来てみると。」

ネテロが周りを見る。

名も知らぬモブ達が変な空気を出す。無意味な事を…。

「何とも言えぬ緊張感が伝わってきていいもんじゃ、せっかくだからこのまま同行させてもらう事にする。」

ネテロが笑顔で言う。この爺さんがある意味一番異常で一番常識的だからな。

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。こちらから連絡するまで各自自由に時間をお使いください。」

「マーマン？だったかと言う。それにしても受験生には個室、あるいは相部屋などは用意されていないのかよ。こんなにデカイ飛行船の癖に。」

「ゴン！！飛行船の中、探検しようぜ！！」

キルアが年相応なセリフを言う。こういう所が微妙にガキなんだよなコイツ。

「ああ、良いぜ。」

と返す。別に探検などはしたくないが、どこか使える個室やシャワーを探す。無かったらゲートに入って『現実シエルター』内でやるけど。

「うわ、すげー！！」

とキルアは飛行船から見える夜景を見ながら言う。本当、お前って時々年相応の反応するよな。

ちなみに俺はただ黙って見ているだけ、別に夜景なんて基本飛行船で移動しているから見飽きた。

しかし俺の反応が気に入らなかつたのかキルアが俺を見て

「ゴンって本当に俺と同じ年とは思えないよなあ。」

と言われる。まあ、心は最早植物の域に近いからな。

「別にただ夜景は何度も見ているから今更そんなに反応しないだけさ。」

当たり前障りの無い返事をしかえす。

話す事も無いし、一応原作っぽい話でもするか。

「なあキルア。」

「うん？何？」

「キルアの家ってゾルディック家？」

俺の質問に驚いたのか若干目を見開くキルア。

「知ってたのか？」
「まあ、前にあつた時に少し気になったから調べてみたのさ。まだ10歳にもなっていないガキを天空闘技場に放り込んだのはどういう家庭なねかな?」
「思ってたな。」
「キルアは「あー成る程。」
「と言う。」

「まあその通り、俺はゾルディック家の人間さ。
何かオレって兄弟の中でもスゲー期待されてるらしくてさー。でもオレやなんだよね、人にレールしかれる人生ってやつ?」
別に良いけどな。楽で。
それがあんまりにも気に入らなかつたら仕方ないけどさ。ていうか素質を認めているんなら念を教えとけよ。
身体能力は凄まじいけどさ、念能力者が相手の場合ではとんでもない実力差が無いと殺されるのがオチだぜ?

「「自分の将来は自分で決める」って言ったら親兄弟キレまくりでさー」。
母親なんてオレがいかに人殺しとしての素質があるかとか涙ながらに力説するんだぜ?」
「だろうな。お前の母親にはまだ会った事は無いが、マンガやアニメを見ている限りとんでもないヒステリーを起こしそうだ。」
「結局ケンカになって母親と兄貴の脇腹刺して家おん出てやった!今頃きつと血眼さ!!!」
笑顔で語るキルア。でもお前もう兄貴に見つかっているけどな。
「ハンターの資格取つたらまずうちの家族取つ捕まえるんだ。きつと良い値で売れると思うんだよね。」
何か悦に入りながら語るキルア。確かに良い値で売れるだろうが、それはつまりお前の親父と爺ちゃん、兄貴などを相手にするという

事だけど。

まず無理だろうな。ネテロでも厳しいかも知れない。

オマケに

「その時はゴンも手伝ってくれよ。」

と親殺しの片棒を担がせようとしやがる。確かに勝てる可能性は無くはないが、一発で決める必要があるし、最悪ククルーマウンテンを水爆で蒸発させるとかしか無い。

そんな風な会話をしているとネテロが来た。

あの爺気配がまるで無いけど、無理矢理強化した気配察知のおかげで何処にいるか分かる。

カツッ！と突然気配をぶつけられたからキルアはその方向を見て、俺は反対の方を見る。

「何だい爺さん。」

案の定既に移動し終えたネテロがただ歩いて来た。

「ほっほっほ。中々やるのう。」

と俺を見ながら言う。普通に纏をしているから念能力者と分かっている筈だ。

仲間外れにされたからかちよつと睨むつけながら「素早いね。年の割には。」

というキルア。

「今のが？ちよこつと歩いただけじゃよ。」

と何故かネテロもそれに乗る。ガキをからかうなよ。

おかげキルアが若干キレ気味だ。

「何か用？じいさん最終試験まで別にやること無いんだろ？」

「そう邪険にしなさんな。退屈なんで遊び相手を探してたんじゃ。」

「どうかなお二人さん。ハンター試験の感想は？」

「まあ、強いて言うならちよつと面倒だな。」

お荷物のせいで。

「オレは拍子抜けしたね。もっと手応えのある難関かと思っていたらから。」

次の課題はもつと楽しませてくれるんだろ？」

キルアの質問に

「さあ、どうかのー？」

と適当に答えるネテロ。自分で振つといてそれかよ。

「行こーぜ。」

とキルアが何故か俺の肩を組み、去ろうとする。俺達そんなに仲良かったか？

「まあ、待ちなさい。」

と某ゴム人間みたいに腕を伸ばして引き留めるネテロ。マジでお前人間か？

「おぬしらワシとゲームをせんかね？」

キルアは「はあ？」という感じで止まる。

「もしそのゲームでワシに勝てたらハンター資格をやるう。」

自信満々に言い放つネテロ。確かにお前からボールを奪えばハンター試験は受けずに済むが、本当にくれる保証も無いのでヤル気は無い。

広い場所に連れて行かれ、上着を脱いで何か若者みたいなファッションになったネテロはどこから出したのかボールを持っている。

「この船が次の目的地に着くまでの間にこの球を奪えば勝ちじゃ。」

そつちはどんな攻撃も自由！ワシの方は手を出さん。」

随分俺等に優位なゲームに思えるが、まだまだハンデが足りない。

出来るなら更に両手両足を縛り、念の使用不可にして欲しい。それ

なら確実に取れそうだし。

しかしキルアはナメられていると受け取ったのか

「ただ取るだけで良いんだね？じゃオレから行くよ。」

と無表情で言う。

「御自由に。」

とネテロはまた煽る。そのせいでキルアの目は鋭さを増す。

キルアが動き出し、肢曲を使いネテロを攪乱しに行った。

しかしあえなくネテロに避けられ、その後の攻防も全て避けられる。

それにム力ついたのかキルアはネテロの右足を破壊しにいったが、ネテロは凝で防御してるので全くノーダメージ。あれ反則だろ。

「いつてえ~~~~!!！」

とキルアは足を押さえながらピョンピョン跳ねる。そりゃあ凝でガードした足を纏を覆わずに思いつき蹴ったんだ。

むしろよく骨折しなかったなと関心すらする。

「鉄みたいだぜあのジーサンの足！」

とキルアが戻ってきた。キルアはタッチするように手を上げたが

「いや、俺はやらない。」

と断る。

その答えが不満なのか

「え〜、何でだよ？確かにあのじいさん普通じゃないけど、ゴンならボールを取れるかも知れないじゃん？」

とキルアは俺の参戦を勧める。

「いや、俺はただ見てる事にするよ。キルアはまた頑張つて来いよ。」

と追い返す。

キルアは「ちえ。」とふて腐れたようにまたネテロの方に行く。

どうやら俺を戦力として期待していたらしい。確かに『理不尽な拘束』でもただの物体であるボールなら容易く操作出来るが、簡単にやらせてくれるとは思えないし。まあ、一発勝負にかければもしかすると勝てるかも。

でも勝つても

「ワシそんなこといつたかのう？」

とか言われたら証人がいないこの状況ではこちらの意見は通用しない。

何せあつちはハンター協会会長でこっちはただの受験生。信用度が桁違いだ。

二時間程経った頃、キルアはまだ頑張っていた。

汗だくになり、必死にボールに追いつくがごとくかわされ無意味だ。段々飽きてきたから部屋でも探すかな？と思っていたら

「やーめた。ギブー！！」

オレの負け。」

とキルアが諦めた。原作では午前2時ぐらまで粘っていたが、まだ午後11時ぐらいだ。

やはり一人でずっとやっていたから直ぐに諦めがついたか。

「行こーぜゴン。」

と俺に近付いてきた。汗だからあんまり近寄って欲しく無い。

「お前はシャワーでも浴びてもう寝た方が良いだろう。明日は試験があるからな。」

シャワーがあるか分からないがな。

「えー、まだ早くない？」

キルアは文句を言うが俺は扉を指差して早く行け。と合図する。

それに観念したのかキルアは大人しく出ていった。目がスゲー怖か

ったけど。

ありゃあ下手に話しかけると殺されかねない。何て迷惑な存在だ。

キルアが去り、俺も行くことしたら

「お主はやっていかんのか？」

とボールをドリブルするネテロに止められた。

「勝てない戦いは避ける主義なんで。まあ勝てる自信がついたらお願いしますわ。出来れば俺は念有りで、アナタは念無しで。」

「そりゃハンデつけすぎじゃ。」

とネテロに笑われながら立ち去ろうとしてふと止まる。

「そういえば部屋は空いていないんですか？出来れば廊下で雑魚寝は勘弁して欲しいので。」

一応聞いとく。

「ふーむ、確かに部屋はいくつかあるが、お主だけを特別扱いはできんしのう。」

確かにその通りだな。俺だけが部屋を与えられるのはアンフェア。

「しかし、もしワシからボールを取れたら個室をあてがってやらんでもない。」

ネテロは面白そうに提案してくる。

「それってさっきと同じ条件ですか？」

「うむ、ワシから攻撃せんし、そっちはどんな攻撃も自由。」

その代わりに今度は両手足を使うがのう。」

やっぱり両手足は使うのか。まあ、流石に左手と右足だけで念能力者とやりあうのは難しいからな。

「それって勿論そちらは念による攻撃も無しでしょうね？」

もしも念での攻撃を食らえば終わりだ。

「勿論念での攻撃もしない、身体強化はするが、攻撃には使用しない。」

ふーん、なら良いか。ダミー用の能力は知られても支障無いし。

「じゃあやろうか。」

そう返事をした瞬間、流による高速オーラ移動を用いて瞬間移動のように速く動いてボールを取りに行く。

「おうっと、あぶないあぶない。」

別に危なげもなく避けやがった。明らかにさっきの数十倍早い。

「あら、簡単に避けられちゃいましたね。結構自信あったんすけど。」

本当はただの様子見だが。

「その年にしては中々の流じゃな。誰に師事したんじゃ？」

余裕綽々で聞くネテロ。それでもスキは一切無いのがムカつく。

「残念ながら全て我流です。良い師匠と巡り会えなかったモノで。」

心源流の道場にいったとしても中々念を教えてくれないだろうから自分でやるしか無いのだ。

「ふむ、成る…」

その言葉を言い終える前にまた突っ込む。今回は多少フェイントを織り混ぜて複雑に取りに行く。

しかしネテロは巧みにボールを操作して取らせてはくれない。

しかし今回はボールが目当てでは無い。

ボールを追う振りをして手を伸ばし、ネテロがボールを遠ざけた瞬間にネテロの腕を掴み『理不尽な拘束』を発動させてネテロを強制的に絶の状態にする。

ネテロは驚いたのかほんの一瞬だが動きが鈍る。そのスキを見て更に「動くな」と命令する。

それでネテロの動きが完全に止まったのでネテロの腕を掴みながら宙に浮いていたボールを取った。

ネテロの腕を離して『理不尽な拘束』を解除する。

そしてネテロの絶は解け、動けるようになった。

「俺の勝ちですね。」

ボールをドリブルしながら言う。

「うむ、確かにお主の勝ちじゃ。」

にしても操作系能力者じゃったとはな。」

悔しそうに言うネテロ。不意をついた偶然性の高い勝利だったからな。

「おそらくお主の能力は対象に触れる事で強制的に絶にして命令を下す能力じゃな。」

本当は別に口答で言う必要も無いんだけどな。触っている間なら念じるだけで操作出来る。

「さあ、どうでしょうね。」

では個室の手配をお願いしますね。」

と笑顔でネテロに言う。

ネテロも「仕方ない、ワシも年じゃのう。」などブツブツ言っていたが、電話で部屋の手配をちゃんとしていた。

その後、試験官用の豪華な個室に入り、さつきを思い出す。

やはり実力差がある場合はこの能力は難しいな。

一発で決められれば良いが、決め損ねたら諸刃の剣になる。

まあ、この能力は『理不尽な支配』を誤魔化すために作った能力だしな。

『理不尽な拘束』だけが俺の能力と勘違いすれば簡単にかかるだろうし、最悪誰かの能力をコピーすれば良い。

出来るならネテロの百式観音をコピーしたいが、それにはカメラアクトルートに行くしか無いが、そればリスクが高過ぎてリターンに合わない。

まあ、別にそこまで欲しい訳では無いしな。

もしネテロとマジで戦う事になってもコピーで堅を作りまくれば百
式観音も防御は可能の筈だ。
メルエムに防げたんだ、俺に防げない訳は無い。

20 ちょっと原作修正

当初の予定通り翌朝午前8時に第三次試験会場に到着した。

飛行船から降りてみれば何も無い円形の建物の屋上が広がっている。

「ここはトリックタワーと呼ばれる塔のつぺんです。ここが第三次試験のスタート地点になります。

さて、試験内容ですが、試験官からの伝言です。「生きて下まで降りてくること、制限時間は72時間」以上です。」

それだけ言ってマーマンは飛行船に戻り、飛行船はそのまま離陸した。

『それではスタート!!』

頑張つて下さいね。』

その拡声器の音を残して飛行船は飛び去った。説明少な。

受験生達はどうやって下まで行くのか考えている。

階段もなにも無いから塔の内部には入れないし、梯子も何も無いから塔の側面をたどって降りる事も出来ない。

「側面は窓一つ無いただの壁か。」

「ここから降りるのは自殺行為だな。」など悩んでいると。

「普通の人間ならな。」

とイカツいガテン系の男が自信満々に笑う。そして何を思ったか塔の端に来て足を塔の側面の僅かな隙間に差し込み、それをとっかかりにして降り始めた。

「このくらいのとっかかりがあれば一流のロッククライマーなら難なくクリア出来るぜ。」

その言葉通りにスイスイ降りて行く。

「うわすげ〜。」

キルアが驚いたように言う。

確かに一流なんだな。こんな小さい溝に体重を預けられるなんて普通は不可能だ。もしこれが普通の試験だったならアイツが一番で合格出来ただろう。

しかし、

「ん？何か来る？」

キルアが見ている方を見るとゲ、ゲ、という音を鳴らしながら何か
が来る。

そしてそれがロツククライマーに近付き「うわああああ！！！！」
という断末魔が聞こえた。

ロツククライマーに近付いたのは全長3メートル近くはあるうか
という怪鳥だ。オマケにデカイ顔を持ち、その顔は若干人間みたい。
という何とも気持ち悪い生き物だった。

ロツククライマーは塔から引き外され、四肢を引きちぎられながら
食われていった。

「外壁を伝うのは無理みてーだな。」

キルアは先程のショッキングな映像を見ても動揺することなく言う。

「ああ、確かにあの化け物がいる限り無理だろうな。」

そして隠し扉を探し始めた。

まあ、最悪あの怪鳥を操作すれば一気に下まで行けなくはないが、
それでは能力を全員に見せ付けるといふ愚行を起こさなくてはなら
ないのでパスだが。

円で周囲を調べていると確かに幾つか隠し扉がある事が分かる。し
かし俺が探しているのは原作の多数決の道だ。少なくとも俺が合格
するまでは原作をなるべく守る必要がある。

だから一人で進むやり易そうな道を無視して5つ集まった扉を探す。
「あ」

キルアが何か見つけたのか見てみると、受験生が隠し扉に入っている所だった。

「へー、こういう仕掛けになっているのか。」

キルアがさつき開いた隠し扉に近付き、触って確かめるが、扉は微動だにしない。

「どうやら使えるのは一回きりらしいな。」

俺の言葉に「ちえ。」と悔しそうに言うキルア。まあ、その気になればロックを壊して入れなくも無いだろうけどな。

またしばらく探すと、原作通りの密集した隠し扉を発見した。

「どうする？ゴン。」

キルアが指示をあおいでくる。何か完全に俺がリーダーだな。まあ、楽で良いけど。

「扉は5つあるし、とりあえずレオリオとクラピカも呼ぶか。もしかしたら下は同じルートになっているのかも知れないし。」

まあ、確実にそうなのだが。

「大丈夫なのか？あの二人で。」

キルアは若干不安そう。まあ、コイツから見れば二人は弱い存在だからな。

「知らない奴らよりはやり易いだろう。」

その意見に「まあ、それもそうか。」とキルアも賛成した。

さあてお荷物達を呼ぼう。

まだ隠し扉を見つけれられていない二人に声をかける。

「レオリオ、クラピカ隠し扉を見つけたぞ。」

ちなみにキルアは周囲の警戒をしている。聞かれないために。

「5つの隠し扉を見つけたんだが、恐らく畏か、もしくは同じル―

トをたどって下に行くのだろうから一緒に行こうぜ。」
と誘う。

「なる程、確かに5つも密集しているのは不自然だ。その場合は罠か同じルートの可能性が高いな。」
クラピカが賛成する。

「確かに一緒に行った方がやり易いな。短いとは言えそれなりの付き合いだしな。」

レオリオが俺とクラピカを見て言う。

「しかし、そうなると一つ扉が余るな。もしも5人で行くルートなら全員揃わないと進めない可能性がある。」

クラピカがナイスな推理をする。お前マジで頭は良いよな。

「最後の一人は俺が連れてくる。だからお前達は扉の前で待っていてくれ。」

そういつて二人から離れた。二人は「誰だ？」と疑問を持っているが、言われたので仕方なくキルアの誘導に従って扉まで行く。

俺はもう一人に話しかけた。

「やあトンパさん」

「う、お前か…。」

やはり最初の出会いのせいか警戒されているな。

「そんな警戒しないでよ。実は隠し扉を見つけさせ、一個余っているんだわ。一緒に行かない？」

笑顔で誘う。

「…何で俺を誘ったんだ？」

トンパが警戒を解かず聞いてきた。

「別に、ただトンパさん以外とは話した事が無いから。それに、大体アンタの狙いは分かるし。」

笑顔を解いて無表情で言う。

トンパは少しビビリながら「へ、へえ、俺の狙いねえ。」と流す。

「アンタ意外と有名人なんだぜ？新人潰しのトンパさんよお。」
その言葉にトンパも演技を止めて素に戻る。

「へ、やっぱり知ってやがったのか。」

それで？何でそれを知ってながら俺を誘うんだ？知っての通り俺は新人を潰すのを生き甲斐にしてるんだぜ？」

トンパが最もな事を言う。

「さっきも言ったけど、知っている人間はアンタぐらいしかいないし。それに、新人潰しに捧げたと言ってもそのキャリアはバカには出来ない。こんなもんかな？」

コイツのキャリアなど宛にはしていないが、一応頭良いし、原作を守るためにはコイツを誘うしかない。

「ふーん。じゃあもし俺がお前らの邪魔をしたとしたらどうするんだ？」

トンパは嘲笑いながら言う。何かコイツ調子乗って無い？

「そんなときゃあ、まあ、何故か事故が起きるかもな。もしルールで殺してはいけない。というルールがあった時は、何故かアンタの右腕が左腕のどつちかが無くなったりするかもね。」

目は笑わず、口元だけを笑わせる笑い方をしながらトンパに宣告する。トンパはビビって後ずさる。

「じゃあ、行こうか？」

聞いているのではなく、命令する。

トンパもそれは十分に分かったのか黙って付いてくる。

「よお、遅かったな？」キルアが聞いてくる。

「ああ、ちよっと話し合っていてな。」

トンパを見て言う。トンパはビクッ！としたが。

「おいおいゴン、最後の一人ってコイツかよ？コイツで大丈夫なのか？」

レオリオは胡散臭そうな目でトンパを見る。

「大丈夫、大丈夫。それにトンパはただの人数合わせのためだからな。」

その言葉にレオリオも「まあ、そうだな。」と、とりあえず納得する。目は警戒したままだが。

「それじゃ、行こうか。先ずはトンパさん行ってよ。」
笑顔で宣告する。

「え、何で俺が一番？」

「だって、皆一緒に行ったらもしかして来てくれないかも知れないじゃん？だから先に行ってよ。」

笑顔で命令する。

それが効いたのかトンパは黙って自分に一番近い扉に入っていた。

「よし、じゃあ俺等も行るか。」

キルアの合図で各々のタイミングで扉に入っていく、最後に俺が扉に入った。

中には全員揃っていた。何故かレオリオだけは着地に失敗していたようだったが。

「やはり同じルートなのだな。」

クラピカが壁にあるメッセージを読んでいる。その手前には腕時計が5つ置いてある。

『ようこそ多数決の道へ。ここは全てを多数決で決める難コースだ。互いの協力が絶対必要条件となり、たった一人のわがままは決して通らない。』

それでは諸君らの健闘を祈る。』

その放送が終わった後に全員が腕時計をつける。

そしたら扉が開いた。

「成る程、5人揃ってタイマーをはめるとドアがあく仕組みか。」
クラピカが分かりきったことをわざわざ言ってくれた。

そして最初の設問が現れた。

このドアを開けるか否か。

開けないに多数決がいったらその時点で終わりなのか？

「もうここから多数決か。こんなもん答えは決まってるのにな。」
レオリオは当たり前のように言う。原作ではトンパがワザと×を押すのだが、さっきの脅しが効いたのか、全会一致で だった。

その後の設問の右に進むか、左に進むかは4対1で右になった。レオリオは不服そうだったが、クラピカの行動学の抗議と自分一人だけという事で折れた。

右に曲がり進んで行くと周囲の壁と繋がっていない独立した四角いリングのようなものが見えた。ああ第2関門か。

対岸にはフードのような布をすっぽり被った人間が立っていた。

「テスト生が来たぜ。手錠を外してくれ。」

『了解。』という会話の後にそいつの手錠が外れて「やれやれ、ようやく解放されたぜ。」とフードを脱いだそこには傷だらけのスキンヘッドの白人がいた。

「我々は審査委員会に雇われた「試験官」である！！ここでお前達は我々5人と戦わなければならない！！

勝負は1対1で行い、各自一度だけしか戦えない！！順番は自由に決めて結構！！お前達は多数決。すなわち3勝以上すればここを通過する事が出来る。ルールは極めて単純明快、戦い方は自由！！引き分けはなし！！片方が負けを認めた場合において残された片方を

勝利者とする！！

それではこの勝負を受けるか否か！！採決されよ！！
受けるなら、受けぬなら×を押されよ！！」

「何イ〜〜、また採決かよ！？」

いちいち時間のムダだぜ。どうせ合格するためにはこの勝負受けなきゃならねーんだ。全員 を押すに決まってるだろ？

誰かが足並み乱さなきゃだがな。」

レオリオはトンパを見る。この三次試験ではトンパはまだ何もしていないが、やはり信用度は無いらしい。

「ヘイヘイ、わかってますよ。」
と言ってトンパは を押す。

そして採決結果が電光掲示板に出た。結果は満場一致。

「どうだ満場一致だぜ！！」レオリオはわざわざ言う。別に4対1でも良いんだけどな。

「よかろう。」

こちらの一番手はオレだ！！さあ、そちらも選ばれよ！！」

スキンヘッドが叫ぶ。そして同時にトンパが前に出て

「オレが行こう！戦い方が自由つてことは裏を返せば何でもアリ！何を仕掛けてくるかわからんつてことだ。オレが毒味役として相手の出方をうかがおう。」

それにお前さん達は今一つオレを信用しきれていないだろ？そんなオレに2勝2敗の場面で登場するような大将役なんざ任せられるかな？決まりだな？」

空気的には決まったが、俺はそれを許さない。

「待て、やっぱりお前はダメだ。キルア頼むわ。」

キルアに戦ってくれと頼む。

「俺？…まあ、別に良いけど。」

いきなりの指名に戸惑うが承諾するキルア。

「いや！何で俺じゃねえんだよ?! さっき言った通り、オレが毒味役になるから！」

自分の計画が狂わされたためか焦り出す。

「ざけんな。どうせお前直ぐにギブアップする気だろ？」

テメエが毒味役なんて殊勝な事をするわけねえだろ？新人潰しのトンパさんよお。」

俺の言葉にレオリオが反応する。

「何？新人潰しだと!？」

「そうだよ。コイツが30年以上も試験を受けていて未だに合格しないのはハナから合格する気なんて無えからだよ。」

コイツ結構有名人なんだぜ？ハンター試験においてはな。」

その言葉にトンパは「あーあ、バラされちゃった。」と言う。

「テメエ、マジで新人潰しなのかよ!!」

レオリオはトンパの胸ぐらを掴みながら聞く。

「そうさ、そこのガキが言うように、俺はハナからハンターになんかなる気は無いのさ。オレがハンター試験に求めているのはほどよい刺激。」

オレにしてみればここら辺が潮時なんだ。第三次試験からは人数が少なくなる反面、危険は大きくなる。

もうムリはしねエ…。つまり、オレはもういつでも負けたって構わないんだよ。」

トンパは自分の生き方を言い放つ。まあ、確かに悪くは無いな。自分の安全を確保しながら他人の夢や野心が破れる瞬間の顔は何とも言えないからな。

「つーことでキルア頼むわ。なるべく早くな。時間が勿体無いし。」

「おう、分かった。なるべく早く終わらせるよ。」

キルアは笑顔で言う。

「戦う者のみ渡られよ!!」
スキンヘッドの言葉と同時にリングまでの細い通路が出てきた。下は何も見えない程高いがキルアは平然と渡る。

「おいゴン、キルアで大丈夫なのか？何か相手はスゲエ強そうなんだけど。」

レオリオは不安そうに聞いてくる。まあ、見た目はただのガキだからな。

「大丈夫、多分あのオッサンは元軍人か何かでそこそこ強いだろうね。」

俺の言葉に更に不安になったのか「じゃあ尚更ヤバくねエか!？」
と言ってきた。

「まあ、黙って見ようよ。」

その俺の言葉にレオリオもただ見ることしか出来ないので黙った。

「さて、勝負の方法を決めようか。オレはデスマッチを提案する!!
一方が負けを認めるかまたは死ぬまで戦う!!」

もの凄い緊張感が漂うがキルアは至って平然として

「うん、それで良いよ。」

と気軽に言う。

「その覚悟見事!それでは、勝負!!」

とスキンヘッドが突っ込んで行ったが、勝負は決まった。

スキンヘッドは突っ込もうとした体制のまま止まった。

いつの間にかキルアはスキンヘッドの後ろにいて、その手にはまだ動いている心臓を持っていた。

ジワ、とスキンヘッドの心臓があった場所から血がニジンでくる。

「か…。返…。」

スキンヘッドが手を伸ばして返せと言いかけるとキルアはニヤツと笑い握り潰した。

それを見たスキンヘッドは倒れ、多少ピクピク動いた後に動かなく

なつた。

「さて、これでオレの勝ちだよな？」

キルアが試練官達に聞くと「ええ、アナタの勝ちよ。」と返して来た。

それを聞いたキルアは「あっそ。」とだけ言つて通路から戻ってくる。

「あいつ…。一体何者なんだ？」

レオリオは緊張気味に言う。クラピカも同様のようだ。

「キルアは暗殺一家のエリートなんだよ。何かかなりの才能があるらしいよ。」

俺が軽く解説したら「マジかよ!？」とレオリオはビックリする。

まあ、普通殺し屋なんか会わないしな。

その間にキルアが戻つて来た。

「キルア、ナイスタイム。」

と試合の短さを褒めながら手を出す。

「へへーん。だろ？」

と嬉しそうに言いながら俺にハイタッチするキルアは年相応にか見えな。

その様子にレオリオやクラピカは戸惑う、あまりにも落差が激しすぎるからな。さっき迄は冷酷な殺し屋、今では友達とじゃれあう子供にしか見えな。

21 かなり早く終わったな

スキンヘッドの死体を片付け、第2試合が行われる。

次の相手は見た目はヒョロヒョロとしたガリ勉かオタク系の男だ。

「さて、次は誰が行く？」

キルアが全員を見る。お前の後だからか皆若干行きづらそう。

「次はレオリオが行ってきてくれ。」

俺のお願いに

「オレか!？」

と反応する。まあ、殺し合いを見た後はヤダよな。

「ああ、アイツはどう見ても肉体派じゃねーから大丈夫だ。

それともレオリオは肉体派との試合の方が良いか？」

と聞くと

「い、いや、俺も肉体派じゃねーからアイツとやるよ！」

と慌ててレオリオはリングに向かった。レオリオは常人よりは強い

がその程度しかない。

この世界は常人よりも強い奴なんてザラにいるからな。

連続爆弾魔のセドカンと対峙するレオリオ。

「さて、ごらんのようにぼくは体力にあまり自信がない。単純な殴り合いやとんだり走ったりは苦手なだけだな。」

セドカンはレオリオに話しかける。

「安心しろ。俺も得意じゃねー。だからと言って考えるのもあんまり得意じゃねーが。」

レオリオは言う。確かにお前単純だもんな。

「やっぱり？」

そんな二人のために簡単なゲームを考えてみたよ。」

と言ってセドカンは二本のロウソクを取り出した。

「同時にロウソクに火をともし、先に火が消えた方が負け。どう？」

セドカンがレオリオに聞く。そんなに単純か？普通のロウソクでやりあっても決着に軽く数時間はかかる長期勝負だぜ？
ていうかもしも「嫌だ。」とか言われたら回避出来るのか？

しかしレオリオは

「成る程、確かに単純だな。分かった、その勝負受け入れよう。」
了承した。やっぱアイツ単純。

「OK、それじゃ」

と言ってセドカンは今まで丈を誤魔化すように持っていた持ち方を変えてロウソクの長さが分かるように持った。

現れたロウソクは長いのと短いロウソクで、短い方は長いロウソクの半分程度しか無い。

それを見てレオリオは啞然とした。

「どっちのロウソクが良いか決めてくれ。長いロウソクなら、短い方なら×を押すこと。多数決で決めてもらおう。」

セドカンはそう言って少し笑った。

「不自由な2択か…。」

俺の言葉にクラピカも「そうだな…。」と返す。

クラピカはどちらに罠が仕掛けられているのか迷っているようだが、大体ああいうのを持ちかける奴は自分の勝利を確信している。だから少し冷静に考えればタネは分かる。

「ゆっくり決めてもらって良いよ。多数決とはいつでもここでは相談も自由だし。」

ボク達の方はたっぷり時間があるからね。」

セドカンはロウソクを目の前に置いて余裕綽々と座り込む。まあ、お前達は俺らを一時間足止めさせるだけで刑期が一年ずつ短くなる

からな。

でもお前の刑期は149年の筈だから72時間分の72年刑期が短くなってもお前が出られるのは50年以上先だぜ？意味あんのか？

「相談は自由と言ったが、お前に対して質問も良いのか？」

俺の質問に

「別に構わないけど。」

セドカンは肯定する。これでやり易くなった。

「じゃあ聞くけどさ、この勝負はその二本のロウソクを使うんだよなあ？」

「ああ、そうだけど？」

セドカンが不思議そうに言う。何を当たり前な。という顔だな。

「ということはこの勝負はお互い2択という事だよな？勿論お前も。」

「この一言にセドカンは気付いたようだ。明らかに慌て出した。」

「大体こういう勝負の場合では目の前のロウソクは二本共闘で、対戦相手には油を染み込ませたロウソクを渡し、自分は隠してある普通のロウソクを使う。」

それならまず負ける事は無い。だからまさかお前はそんな事をしないよなあ？と聞いたかったんだが、そうでは無いのなら良かったよ。」

俺の言葉にセドカンはかなり動揺している。何せタネを全て言われたんだから。

更に

「そうそう無いとは思っけど念のためにロウソクから離れていてくれ。公平制を保つために。」

まさかダメなんて言わないよなあ？」

俺の追求にロウソクを見ながら何か考えていたが、何も思い付かな

かったのかセドカンは後ろに下がった。
残念、もしも床に置かずに自分で持っていたらシャッフルして俺達を攪乱出来たのに、床に置いていたから今更交換は出来ない。
そしてさっきのお前の態度を見る限り、両方共仕掛けが施されている。大方相手に罠を渡した後に自分は普通のロウソクとすり替えるつもりだったんだろうが、この状況では不可能。
全員がお前のイカサマが無いか注目しているんだからな。

「レオリオ、長い方にしとけ。そうすれば自動的に勝てる。」
念のためにセドカンに更なる揺さぶりをかける。どちらも罠なら長い方が有利に決まっている。

そしてセドカンは見事にハマってくれたのか、「ううっ」と反応してくれた。

そこまでやればレオリオもバカでは無いので「成る程。」と分かったようだ。

一方ハマられた事が分かったのかセドカンは「ヤバい！」という顔をした。

その後、満場一致で を押し、レオリオが長いロウソクを手に入れた。

そしてルール通りお互い同時に点火して直ぐにお互いのロウソクは勢い良く燃え出した。

レオリオのロウソクも火が強いせいでみるみる内にロウソクは短くなっていくが、セドカンののは既に小さくなっていて持つことさえ困難だ。

そして一分後には持てなくなって「熱っ！！」と言って床に落とすてしまい、火が消えてしまった。

一方レオリオのロウソクはまだギリギリ持っていたので火は消えて

いない。

これによってレオリオの勝利が決まり、2勝目を上げたのだった。

「よし、これで2勝だぜ！！後はクラピカかゴンが勝てば終わりだ
！！」

レオリオは嬉しそうに言う。確かに後一勝だからな。楽に思える。
でもこれから面倒くさいんだよな。

クラピカ対マジタニ戦は飛ばす。

別にこれと言って口出ししないし。

マジタニが幻影旅団を語ってクモの刺青を見せるそしてクラピカぶちギレ、マジタニをノックアウトする。まあ、こんな感じだ。

ていうか何でアイツが試験官に選ばれたんだろう？数合わせ？それとも抽選？

まあ良いか。

「所でさ、そいつ死んだのか確かめさせて欲しいんだけど。さっきのじゃあ死んだのが微妙だったから確かめさせてくれ、何せもしソイツが死んで無かったらまだ勝負は終わって無いからな。」

あっちが生死を確かめる前にこちらから確認させて欲しいと頼む。

「だったら私が確かめるわ。」
レルートが近付くが、

「ストップ！！もしお前だけに確かめさせてソイツにそのまま気絶している。何て指示されたら面倒だから俺も一緒に確認する。」
そう言っただけ俺も通路を渡る。

俺の言葉が正論だからかレルートも止められないし、試験官も止めない。

そしてお互いに倒れているマジタニに近付き、俺がマジタニを仰向けにした後に脈を確かめる。

脈が触れた事から生きている事が確認出来る。気は失っているらしいが。

「どうやら気絶しているだけのようね？」

レルートが笑いながら言う。

そしてお互い通路を渡って戻る。

「それでクラピカ、一応聞くけど、トドメ刺す気はある？」

そう聞くと

「いや、悪いが私はもう何もする気は無い。

あの時既に戦意を失っていた相手を私は殴ってしまった。これ以上敗者にムチ打つような真似はゴメンだ。」

その言葉にレオリオは激昂して

「ざけんなよ！！じゃあどうする気だ！！」
と叫ぶ。

レオリオの質問に

「彼に任せる。彼が目覚めれば自ずと答えは出るはず。さっきも言ったが、私から何かする気はない！」

はつきりと断言した。レオリオはその言葉にまたぶちギレそう。

「だったらさクラピカ。悪いんだけど負けを宣言してくれ。

多分アイツはあのまま気絶したフリを続けるつもりだろう、さっきレオリオの大声で起きたと思うけど未だに目覚めた様子が無い。どうやら状況を察知して時間を稼ぐ事にしたらしい。

だからこの勝負はさっさと終わりにして俺が決めるよ。」

別に負けても一敗するだけだから問題無い。

俺の提案にクラピカも

「確かに：それなら早く終わるな。私も彼はこのまま目覚めないと
思うし、まだここはスタート地点からほとんど進んでいないから時
間は惜しい。」

そして立ち上がり通路を進んでリングに渡る。

「私の負けだ。」

とだけ言っただけでまた通路を渡って帰って来た。

お前のせいで面倒な事になっているのに何故そんなに格好付ける？

まだ寝たフリをしているマジタニに向かって

「おい、オツサン。邪魔、いい加減起きろ。もし起きないなら突き
落とすよ？」

そう言いながら通路を渡る。俺が渡りきりそうになったらマジタニ
は飛び起きて走りながら戻っていった。

「よし、では今度こそ俺の番だ。」

向こう側を見る。

「じゃあ次は私「いや、俺が行く。」

レルートが行こうとしたらジョネスが自分が行くと言い出した。

「何を言っているの？次は私の番でしょう？」

既に決まっていた順番なのかモメ出した。

「アイツ等の話を聞いている限り、次の奴は戦う気すら無い。だから
その前にあのガキを俺が殺す。」

何か文句あるか？」

ジョネスはレルートを睨み付けながら言う。

レルートは非力で頭で勝負するタイプだから正攻法ではジョネスに

勝てる筈は無い。

「っ分かったわよ。」

そう言つて下がった。

そしてジョネスが前に出て試験官に「オレが出る。」と言つと試験官も特に問題は無いのか、素直にジョネスの拘束を解いた。

そして拘束を外したジョネスはフードを取つて顔を見せた。

その顔を見たレオリオは

「ゴン、オレ達の負けで良い。アイツとは戦うな！！」

俺にギブアップを求めて来た。

確かにアイツは経歴は凄いけど、所詮は素人の異常者。捕まってる時点でアウトだ。ていうかか何でザバン市から出なかつたんだろ
う？

ザバン市で犯行を重ねれば何時か捕まるのは明白、ただ肉が掴みた
かったのだったら移動してれば良かったのに。この世界は全体的に
治安が良くないから逃げればまず捕まらない。

でも一応レオリオを安心させるために、ていうか黙らせるために

「大丈夫、大丈夫。」

と手を振つとく。

レオリオは尚何かを言いたげだったが、

「ゴンの言つた通り、アイツなら大丈夫だよ。」

とキルアが止める。

そしてジョネスもリングに上がった。

「それで？勝負方法は？」

俺の質問にジョネスは薄ら笑いを浮かべながら

「勝負？勘違いするな。」

これから行われるのは一方的な惨殺さ。試験も恩赦もオレには興味が無い。肉をつかみたい…。それだけだ。

お前はただ泣き叫んでいれば良い。」

自信満々だな。念能力も持っていないのに。

まあ、念無しであの指の力は驚嘆に値するけどね。石壁を掴んで粉にしていたし。

「じゃあ死んだ方が負けで良いね？」

「ああ、良いだろう。お前が…」

バンツ！！！！

という音が鳴り響き、そこには頭が半分吹っ飛んだジヨネスがいた。そしてジヨネスはそのまま倒れ込んだ。

「武器使っちゃダメなんて決めなかったから使ったんだよ。何か文句ある？」

銃を持ちながら試験官達に聞く。

「…いや、特に問題無い。君達の勝ちだ。

どうぞお通りを。」

セドカンが言い、試験官達も壁に下がる。と言っても三人しかいないが。

「あっそ。んじゃあ行くこうぜ？」

戻って皆に言う。

キルアは「ナイスタイム。」とさつき俺がやったように手を出す。

それに「だろ？」と軽く言っただツチする。

レオリオは「お前ってエゲツねえな。」と呆れ気味。怖がらないのがスゲエな。

「だって早く終わらせたかったし、別に禁止されて無かったからな。それのおかげで早く突破出来たじゃん。まだ60時間以上あるし。」と返す。

「それもそうか。」

と明るく返すレオリオ。スゲエな。

トンパなんてあからさまに俺を怖がっているぜ？これが普通だろう。クラブピカも丸腰の相手に武器を使った事に不満があるらしいが、別に恐怖感を感じない。キルアはまだしもコイツらも十分異常だな。

その後は様々な罠をくぐり抜けてようやく最後の扉にたどり着いた。ちなみにトンパはあれ以降、俺やキルアが怖くなったのが、素直になつたから別にレオリオとの争いも無い。

そのおかげで残り時間は50時間もあるしな。

『それでは選んで下さい。道は二つ…。』

5人で行けるが長く困難な道…。

3人しか行けないが短く簡単な道…。

ちなみに長く困難な道はどんなに早くても攻略に45時間かかりません。短く簡単な道はおよそ3分でゴールに着きます。

長く困難な道なら。短く簡単な道ならxを押して下さい。

xの場合、壁に設置された手錠に二人がつながれた時点で扉が開きます。この二人は時間切れまでここを動けません…。』

女神なんだが悪魔なんだか分からない銅像がルールを説明してくれた。

「それで、どうするんだ？まだ50時間残っているから長い道にいつでも多分いける。」

とレオリオは全員で行ける長い道を推した。

「そうだな。確かに3分で行けるのは魅力的だが、別に間に合うのならでも良いだろう。」

クラブピカも追従する。

「まあ別にどっちでも良いし。どっかを選ぼうがオレがゴールを迎

えるのは変わらないし。」

キルアはどっちでも良いと言い。

「そうだな。時間があるんだから全員で行けた方が良いだろう。」
トンパは全員を強調する。まあ、もしも×になったら真っ先に落とされるのは自分だ。オマケにただ落とされるだけではなく、殺される可能性が高い。俺に。

そして全員が俺を見る。

いつの間にか最終決定権は俺が握るようになった。まあ、大体円でトラップがどこにあるのかや、どっちに進んだ方が良いのかを調べていたから自然にこうなった。

「まあ、俺もどっちでも良いんだけど。」

もつと良い方法もあるぜ？例えば…。全員でいけて3分でゴール出来る方法とか。」

その言葉にレオリオが「何、そんな夢のような方法があるのか!？」と聞いてくる。

「ああ、それも成功確率も低く無い。」

それで?どうする?」

と聞く。勿論満場一致で俺の案に乗る事になった。

「それで、どうやるんだ?ゴン。」

キルアが聞いてくる。

「ああ、じゃあまず全員で を押してくれ。」

「?ていうことは全員で行くルートを選ぶってことか?」
キルアがまだ分からなそうに聞いてくる。

「ああ、というかそれをしないと始まらないから頼む。」

俺の頼みにとりあえず全員 のボタンを押した。

『5対0で を認証しました。』

その音声が流れた後に の扉が開いた。

「それで、これからどうすれば全員で簡単な道に行けるんだ？もう簡単な道はひらかねーぞ？」

レオリオは不思議そうに聞く。

「ああ、それはな。」

そう言っただけで周りに飾られている武器に近付き、頑丈そうなデカイ斧を持った。

トンパがビクツとしたが、それはスルーしての通路に入った。

そして直ぐに止まり、斧に周をしてみいっきり壁をえぐった。

いきなり音が鳴り響いて全員が「何だ！」と見に来たら×の通路に穴が空いていた。

「これで全員で簡単に早いルートに行ける。」

斧を捨てて皆に言う。

全員が啞然とする。流石にこんな事は考え付かなかったらしい。

「何とも凄い発想の転換だな。」

クラピカが関心したように言う。

「道が無きゃ作れば良いだけだ。」

そう言っただけで俺は×のルートに入る。

その後はとんでもない急な滑り台のコースだった。途中で急に曲がったりなど危うくコースアウトするかと思っただけだ。

そしてようやくゴールに着き、立ち上がると扉が開き、出て見るとまだあんまり人がいない。

『405番 ゴン。三次試験通過第四号!!』

所要時間23時間15分!!』

原作と違ってかなり早いな。

今この場にいるのはヒソカ、ギタラクル（イルミ）、ハンゾーそして俺か。

さて、後は待つだけだが、後2日は待たなきゃいけないんだよなあ。
面倒くさい。

早く来すぎたか？

22 卑怯って言われてもねえ

2日程キルア達と喋ったり寝てたりしていたら

「タイムアップー！！」

第三次試験通過人数25名！！」

というウルサイ放送が流れた。

今までダラダラと座り込んでいた受験生達は立ち上がり、ようやく開いた出口に向かう。

そして出口から出ると3日ぶりの太陽光を浴びた。やっぱり太陽光は気持ち良いね。

待っている途中でゲートをくぐってシエルターに逃げ込んでも良かったんだけど、もしも他人に見られたら面倒くさいし、それに勝手に会場から出て失格処分になっても嫌だしね。

しばらく太陽のありがたさに触れていると、パイナップルのモノマネでもしてんのか？という髪型のオッサンが出てきた。

「諸君、タワー脱出おめでと。残る試験は4次試験と最終試験のみ。4次試験はゼビル島にて行われる。

では早速だが。」

パイナップルがわざわざ指を鳴らしてカゴを押している男を呼んだ。別に呼ばなくても来ると思うが？というか既に見えてるし。

「これからクジを引いてもらう。」

パイナップルの言葉に受験生達が「クジ…？これで一体何を決めるんだ？」と聞く。

パイナップルはニヤニヤしながら

「狩る者と狩られる者。」

この中には24枚のナンバーカード、すなわち今残っている諸君らの受験番号が入っている。

今から一枚ずつ引いてもらう。

それではタワーを脱出した順番にクジを引いてもらう。

パイナップルの言葉にヒソカが前に出てクジを引く。そして次はギタラクル、ハンゾーと続き俺の番になる。

原作みたいにヒソカなんてやだから慎重にクジを引いた。そして少し離れた位置で見た番号は残念ながら44。

引く順番が違っても俺のターゲットは原作と変わらない。ということとは全員原作通りの番号らしい。

そして皆次々クジを引いていく。その間に俺はナンバープレートを隠す。しかし皆はまだナンバープレートを狩る対象とは分からないから出している。一応記憶しとく。

「全員引き終わったね。」

今諸君がそれぞれ何番のカードを引いたのかは全てこの機械に記憶されている。したがってもうそのカードは各自自由に処分してもらって結構。それぞれのカードに示された番号の受験生がそれぞれのターゲットだ。

狙うのはターゲットのナンバープレート。自分のターゲットとなる受験生のナンバープレートは3点。自分自身のナンバープレートも3点。それ以外のナンバープレートは1点。最終試験に進むために必要な点数は6点。

ゼビル島での滞在期間中に6点分のナンバープレートを集めること以上だ。」

パイナップルの話が終わり、周りを見るともうほとんどが自分のナンバープレートを隠していた。もう遅いけどね。

にしてもキルアとヒソカは全く隠す気が無い。ヒソカはまだしもお

前はそんなに余裕か？とキルアに言いたくなかった。言わないけど。

何故か古臭い蒸気船に乗せられて現在ゼビル島に向かっている。

『御乗船の皆様、第3次試験お疲れ様でした！！』

当船はこれより二時間程の予定でゼビル島へ向かいます。ここに残った24名の方々には来年の試験会場無条件招待券が与えられます。例え今年受からなくても気を落とさずに来年また挑戦して下さいねっ。』

案内役が明るくアナウンスするが、船上は疑心暗鬼の渦が巻いていた。誰が自分を狙っているか分からない状態だからな。

『それではこれからの二時間は自由時間になります。みなさん船の旅をお楽しみ下さいね！』

最後まで笑顔を崩さなかったのはプロだったな。この空気の中で。

意外とデカイ船の中で皆思い思いの場所で休憩する。警戒のためか大体皆一人でいるけど。

俺も一人で座っていると「よ。」とキルアが近付いて来た。お前は良いよな。ターゲットがザコだから。

そんな気も知らずにキルアは俺の横に座る。俺等ってこんなにくつつく程仲良かったっけ？と思うが、空気を読んどいて黙る。

「ゴン、もしかして俺じゃねえよな？」

あれ？原作と違うセリフだな。

「残念ながら…。キルアなら手っ取り早かったのにな。」
残念そうにキルアを見る。

「確かにゴンが相手だとかかなりキツイだろうからな。」
キルアは自分じゃ無かったとホッとしていた。最後に戦ったのはかなり昔だが、未だにゴンに追い付いていない。と思っっているのもし自分がゴンのターゲットなら自分から差し出して6点分狩った方がまだ良いからだ。

「そういうキルアは何番？もしかして俺？」
無いとは思うが一応聞いとく。

「いや、俺のターゲットはゴンじゃない、コイツ。」
と199番のカードを見せる。

「ああ、あの3兄弟の奴ね。」
別に言っても支障無いから言っとく。

「ゴン、もしかして全員の番号を覚えてるのか？」
キルアがビツクリしたのが聞いてくる。

「まあ、大体な。2日間塔の中でヒマだったから暇つぶしで覚えた。」
「
本当はさっき覚えたんだがな。」

「ふーん、やつぱりスゲエなゴン。」
それで？ゴンは何番なんだ？」

キルアが思い出さたくない事を思い出させてくれた。俺は黙って自分が引いたターゲットをキルアに見せた。

それを見たキルアは「…げ、マジで？」と聞いてきた。

「ああ、残念ながら俺のターゲットはヒソカだ…。」
本当に残念だよ…。殺して良いなら問題無いが、今はまだ殺してはいけないキャラだから下手に勝つてはいけない。
だからと言って俺に原作みたいな勝負を仕掛ける勇氣は無い。

「それで、どうするんだ？ヒソカを狙うのか？」

「まさか、適当に3人狩るよ。流石に相手がヒソカでは無理だ。」
「やっぱゴンでもヒソカは無理かあ。」
キルアは納得したように言う。お前の中では俺はどんだけ強いんだよ。

そしてゼビル島に到着。

『それでは第3次試験の通過時間の早い人から順に下船していただきます！

一人が上陸してから二分後に次の人がスタートする方式をとります
！！

滞在期限はちょうど1週間！！その間に6点分のプレートを集めて、
またこの場所に戻ってきて下さい！

それでは、一番の方、スタート！！』

そのアナウンスに従ってヒソカが一番先に森に入る。木々が密集しているためか直ぐにその姿が消える。

そして四番目が来て俺も森に入る。そして少し入ったら絶をして気配を消して隠れる。

そしてスタート地点を見張るターゲットを尾行するために。

しばらくしてターゲットである吹き矢使いのゲレタがスタートしたら尾行する。

アイツのターゲットは俺だから先ずはアイツを潰す必要がある。

ゲレタは俺を探しているらしい。島を歩き回っている。

そろそろ良いか。と思い、辺りに誰もいないのを確認して一気にゲレタに接近して絶を解いて腕にオーラを集中してゲレタの首をはね

る。

「があ……。」

と僅かに気付いたらしいが、大した声を出す暇無く終わった。そしてゲレタの荷物を漁り、ナンバープレートを得た。

ジャンプ系に関わらず、少年マンガはわざわざ姿を現して戦うケースが多いが、あんなの全く無意味だ。

敵に見つかっていない。というアドバンテージをわざわざ捨てるなんて信じられない。

勝てば正義なのだ。それは歴史が証明している。何十年後にはあれは間違いだった。などと言われるケースもあるが、そんなの無意味だ。

もう過去の事なのだから。

そしてその次はバーボンとポンズを狙う事にした。

バーボンは別にどうでも良いが、ポンズはレオリオのターゲットの筈だから先にプレートを奪っておく。

そうしないとレオリオが合格するにはあの洞窟イベントが必要になる。

流石に俺は5分以上息を止めていられる自信は無い。

だからバーボンを尾行しているか、バーボンを探しているポンズを狙う。

バーボンのプレートは別にいらないけど、まあ、一点分にはなるから貰っとくか。

100m程広げた円を使って簡単に位置を知れた。

本当ならゲートを使いたいが、試験中は試験官に尾行されているから見られると面倒なのでわざわざ円を使った。流石にまだバーボンを見つけられてはいないらしい。まあ、まだ1日目だしな。

どうやら一休みしているらしくリラックスした状態になったのを見計らってまたもや絶で近寄り、そして今度はサイレンサーを装着したハンドガンで頭を撃ち抜いた。

パスツ。という小さい音が鳴り、ポンズの脳みそが飛び散った。確かコイツは原作でもこんな死に方だったな。と思出す。

そして荷物を漁ってプレートを得トする。

バーボンも同じく円で位置を確認して殺した。

バーボンに触れようとしたら蛇が飛び出して来てビビったが、『理不尽な拘束』で全部始末して悠々と探してプレートを得トした。これで合格に必要なプレートは揃ったが、ポンズのプレートはレオリオにくれてやる必要があるからもう一点分探す必要がある。

まあ、もうターゲットは決まっているが。

2日経ち、現在絶でキルアを尾行中。

俺の狙いはハンゾーのターゲットである197のプレートだ。

ハンゾーは不運にも自分のターゲットと一番違いのプレートを手に入れる。それで3人狩ることにしたらしいが。

そして俺の狙いはハンゾー同様、キルアが自分のターゲットでは無いプレートを投げた後に197番のプレートを手に入れれば良い。

まあ、つまりハンゾーの反対に行けば良いだけだ。

しばらく尾行されていたがキルアはシビレを切らしたのかイモリに話しかけている。まあ、はつきり言っただけだしな。

キルアが「出てこいよ。」と問いかけるがイモリは無視している。まさか自分の位置がバレていないとも思っているのか？

そして遂にはキルアの方から近付いて来るとイモリは汗をダラダラ流して焦っている様子が手にとるように分かる。

しかしそんなイモリに救いの手が差し伸ばされた。

「兄ちゃん!!」

という大声が響いた。尾行中に大声出すなよ。

待ち焦がれていたイモリは歓喜をもって歓迎する。しかし兄達は子供相手に何もしていなかったイモリを殴る。

「バカかお前!？」

あんなガキまでオレ達がいなきゃ怖くて戦えねーのか!!」

アモリが弟を叱る。いや、ある意味正解だぜ? 何せ相手が相手だからな。

兄達が来たという事で自信が出たのかイモリはキルアに近付き

「なあボウズ、プレートをくれねーか? 大人しくよこせば何もしない。」

と自信満々に言う。

しかしキルアの返答は「バカ。」であった。

それにムカついたのかイモリは本気でキルアの鳩尾に蹴りを入れる。吹っ飛んだキルアを見てイモリは何かを言っているが、何事も無かったかのようにキルアは立ち上がり、パクったプレートを見て自分のターゲットと一番違いと分かった。

そしてアモリ3兄弟はキルアの様子から何かを感じ取ったのか、本

気を出すべくお得意のフォーメーションを出そうとする。しかしキルアはフォーメーションを完成させる前に動く。まあ、当たり前だが。わざわざ待つ意味が分からないし。ていうか実戦でフォーメーションを作る暇なんか無いだろうから無意味であるが。

キルアにアツサリとホールドアップされるアモリ。

それでウモリの方も観念して素直にプレートを渡す。見事目的のプレートを手に入れられたキルアはいらぬプレートを投げようとする。

俺の狙いは197番のプレートだから真っ先に追う必要がある。キルアの右手には197番のプレートが握られているからな。

ギューーン！と飛んでいくプレートを追いかけて、ようやく追い付き、手に入れた。

そのプレートは狙った通り197番。

ちなみにハンゾーはやっぱり俺とは逆の198番を追って行った。アイツのターゲットは俺の方なのに。

とにかくこれで点数分を手に入れたから後はユックリとする。本当ならゲートに引きこもっていたいが、やはり監視があるので念のため普通に休む。

食料もいちいち取りに行く必要があるな。

コピー能力なんて一番見られたらヤバいからな。

何なんだこのガキは？
それが俺の心境だった。

俺は405番ゴンの審査をするために命令されて監視していたが、この少年はイカれてやがる。

先ず試験が始まった当初はまあ、たまに念が使える受験生とは思わなかった。

纏もそんなに強く無いし、今期にいる念能力者の中では一番弱いだろう。しかし念が使えるのだから残り二人と出会わなければ合格出来るだろう。

初めはその程度の印象でしか無かった。

四番目という好成绩でスタートした後は完璧な絶をして他の受験生を待ち構えていた。

まあ、王道な戦法だな。早い順位を生かして獲物の動向を探るのは当然だ。

初めはそう思っていた。

狙いを定めたのか405番は尾行を始めた。完璧な絶のため狙われている384番は全く気付きもしなかった。

成る程、纏はお粗末だが絶にはかなりの自信があるらしいな。そう思っていたら405番が接近し始めた。

もう仕掛けるのか？と思ひ注意深く見ていると突然405番は走り出し、絶を解いた。

まさか殺る気か？そう思っていたら予想通り、何のためらいも無く384番の首を飛ばした。

まさか11歳の子供がいきなり殺すとは思わず、少し驚いた。

そして405番は384番の荷物を漁り、プレートを得た。
しかしそのプレートは405番のターゲットでは無いから一点に
かならない。

しかし405番は残念がる様子もなく、また歩き出した。

その様子から3人狩るつもりなんだと分かった。まあ、アイツのタ
ーゲットは44番だからな。アレは俺でも無理だろう。

その選択は正しいな。

そして次に405番はその纏には不釣り合いな程大きな円をして操
作を始めた。

その円に入らないように仕方なくかなり離れた位置からの監視をす
る。念のために150m程離れての監視は結構キツイ。

そしてターゲットが決まったのか405番はまた絶をした。

次は誰かと探したら246番の女だった。

また殺るのか？と憂鬱になっていると案の定また246番に接近し
出した。

どうやらさっきのように殺すらしい。出来るのなら止めたいが、試
験中なので見ている事しか出来ない。

何せ405番は何らルール違反をしていないのだから。

しかし今度はかなり接近するらしいな。既に246番の背後に回っ
ているというのに攻撃しない？流石に女は躊躇したのか？

そう思っていたら405番は何かを取り出した。それはサイレンサ
ーが付いた拳銃。

まさか！そう思った瞬間にパスツという小さな音が鳴り、246番
の頭が弾けた。

脳みそが飛び出して悲惨な現場となった。

しかし405番は全く気にせず、荷物を漁ってプレートをゲットしたらまた円を使って搜索を始めた。

このようにあの405番はガキとは思えない程残酷な事をしているというのに、平然としている。まるで何とも思っていないように。こんなイカれたガキを1週間も監視していなきゃならないなんて何て地獄だ。もう絶対試験官なんて引き受けねエ。あのガキを見ているだけで神経がまいりそうだ。

こんなんだつたらあのハゲを監視する方がマシだ。クジで勝つてこのガキを選んだのに…。

23 さよなら原作

試験開始から6日経ち、そろそろレオリオとクラピカがスタート地点に戻っている頃だろうから俺も移動する。

スタート地点付近に着いたので円で二人を探す。原作みたいに木の上から探すのは俺には無理だからな。

しばらく探していると二人を発見した。どうやら散会してポンスを探しに行く気らしい。ポンスなら脳みそが無い状態で結構近くに転がっているけどね。

「よう、レオリオ、クラピカ。」

偶然出会ったかのように出てきて話しかける。

「瞬武器を構えたが、俺の姿を見て安心したのか武器を下ろす二人。そんなに信頼関係あったっけ？」

「何だゴンか。ビックリさせんなよ。」

レオリオはビビっていたのか一安心したようにホッとする。

「ゴンはもうプレートを集め終えたのか？」

クラピカが聞いてくる。やはり多少は警戒しているな。

「ああ、もう6点分集め終えた。」

実際は7点分を持っているけどな。

「くそオ、じゃオレだけかよ。」

レオリオは焦る。まあ、このままでは不合格確定だからな。

「何？レオリオはまだなの？」

「ああ、…そうだゴン。お前246番のポンスって女を見なかった

か？」

「見たよ。」

俺の答えにレオリオは反応して

「何、見た？何処でだゴン！」

他の奴らに見つからないように小声で喋っていたのに、それを無視して大声で反応するレオリオ。

「声が大きい。」

アイツならもう狩ったよ。ほら。」

と246番のプレートを見せる。

そのプレートにクラピカが反応した。

「ということはゴン。お前はターゲット以外を狩って6点分を集めたのか？」

「ああ、俺のターゲットはヒソカだったからな。」

流石にアイツは無理だから無難に3人狩ったんだよ。」

俺のターゲットを聞いた二人は苦笑いをして「確かにそりゃあ無理だ。」と答えた。

「にしても俺のターゲットをゴンが持っているなんて、何て不運なんだ。」

レオリオは残念がる。俺から奪うとは考えないのか？

「レオリオのターゲットってこの246番なのか？」

俺の質問に泣きそうな顔をして

「ああ、そうだよ…。でもゴンが持っているから俺はここで不合格らしいな…。」

と絶望したかのように答える。

しかしそんなレオリオに救いの手を差し伸ばしてやろう。

「んじゃあやるよ。」

と246番のプレートをレオリオに差し出す。

レオリオは差し出されたプレートを見て

「え、でもそれじゃあゴンの点数が足りなくなるじゃねえか？」
と聞く。

「ああ大丈夫だ。実は俺プレートは5枚持っていて、1枚余っていたんだ。

だから別にそれをあげても合格出来るし。」

その言葉にレオリオは納得したのか

「ありがとよゴン。この恩は忘れないぜ。」

と良い笑顔をしながら受け取った。

こうしてレオリオも6点分貯まり、後は時間が来るまで3人でダベっていた。

ポーーーーーッ!!!というデカイ汽笛の音が鳴り響き

『ただ今をもちまして第4次試験は終了となります。受験生のみなさん、すみやかにスタート地点へお戻り下さい。

これより一時間を帰還猶予時間とさせていただきます。それまでに戻られない方は全て不合格とみなしますので御注意下さい。

なお、スタート地点へ到着した後のプレートの移動は無効です。確認され次第失格となりますので御注意下さい。』

というデカイアナウンスが鳴り響いた。

そして、俺達3人はスタート地点に出てきて遠くに見える飛行船を待つ。

その間に次々他の受験生もやって来た。

やはり原作通り合格者は9人か。

「よお、久しぶりゴン。」

キルアが話しかけて来た。まあ、1週間振りなら久しぶりか？

「おお、お互い無事合格らしいな。」

「まあな、プレートは2日目で集まったから後はほとんど隠れてただけだしな。」

「確かにそうだな。俺もプレートは初日に揃ったから後はひたすら隠れているだけ。」

オマケに監視がついていたから気分悪かったけどな。」

「ああ、アレ？確かにウザかったよなあ。」

という何でもない話で盛り上がっていると飛行船がようやく来た。

飛行船に乗り、しばらくキルアとダベっていたら

『えー、これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までおこし下さい。』

受験番号44番の方、44番の方おこし下さい。』
というアナウンスが響いた。

「面談？もしかして最終試験は面接ってことか？」

とキルアは嫌そうに言う。

「いやあ、ここまで来て面接が最終試験は無いだろつ。多分最終試験のために何かを聞くんだろ？」

本当に面接だったらスゲエな。だったら俺合格無理か？ハンターになる気なんて無いし。

『405番の方、応接室におこし下さい。』
とうとう俺の番が来た。

先に行ったキルアから聞くと、やはり聞かれた事は原作と同じらしい。だったら俺も原作と同じ事を言えば良いか。

応接室に入ると、久しぶりに見た和室にネテロがいた。

「まあ、座りなされ。」

そう言われたので目の前の座布団に座った。

「先ず、何故ハンターになりたいのかね？」

ネテロの質問に

「別にハンターになりたいのではなく、ライセンスが欲しいんですよ。色々便利だし。」

別に細かい事を言う必要は無いから適当に答える。

「なるほど、ではお主以外の8人の中で一番注目しているのは？」

「44番ですね…。まあ、どうしても目につきますからね。」

「ふむ…。では最後の質問じゃ。8人の中で今、一番戦いたく無いのは？」

「99、403、404の3人かな。」

原作通りに答える。本当は44と301だけどね。

「うむ、ご苦労じゃった。下がって良いぞ。」

その言葉に部屋を出ていった。

今までの流れから言うと、多分原作通りのトーナメントを組まれると思うが、もしヒソカやイルミと戦う事になったらどうしよう？

まあ、適当に負けていればキルアのおかげで合格出来るだろうがな。

4次試験から3日も経ち、ようやく最終試験会場に到着した。

着いた所は豪華なホテルで、外装はどこかイスラムチックだな。

会長から試験会場に案内され、現在はトーナメント発表が行われるらしい。

「最終試験は1対1のトーナメント形式で行う。その組み合わせは、こうじゃ。」
ネテロが対戦表を隠していた布を取る。

そこには原作通りの対戦表があった。

良かった。これで合格は確実だ。

「さて、最終試験のクリア条件だが、いたって明確。たった一勝である!!」

つまりこのトーナメントは勝った者が次々抜けていき、敗けた者が上に登っていくシステム!

この表の頂点は不合格を意味する訳だ。もうお分かりかな?」

ネテロの質問にハンゾーが答える。

「要するに不合格はたった1人つてことか。」

「さよう。」

しかも誰にでも2回以上の勝つチャンスが与えられている。何か質問は?」

「組み合わせが公平では無い理由は?」

ポドロが聞く。

自分があんまり良い位置にいないからか?

「うむ、当然の疑問じゃな。この取り組みは今まで行われた試験の成績を基に決められている。」

簡単に言えば成績の良い者にチャンスが多く与えられていると言うこと。」

原作ではキルアがゴンよりも低い評価に不満を持ち、更なる詳しい説明を求めたが、ここでは別にキルアは俺に勝てるとは思っていないので抗議しない。

「戦い方も単純明快。武器OK、反則無し、相手に「まいった」と言わせれば勝ち!」

ただし、相手を死にいたらしめてしまった者は即失格！その時点で残りの者が合格。試験は終了じゃ。

よいな？」

そのルールかなり厳しいよな。

殺して良いのなら容易いが、殺すと失格になるのでは殺せないし、ここまで残って「まいった」なんて言わせるのはかなり難しい。

まあ、俺は操作すれば簡単だけど。

「それでは最終試験を開始する！！

第1試合、ハンゾー対ゴン！！」

呼ばれたので前が出る。

「私、立会人を勤めさせていただきますマスターです。よろしく。」

メインブラックみたいな格好をしたオッサンが挨拶する。

「よお久しぶり。4次試験の間、ずっとオレを尾けてたろ。」

と律義に挨拶するハンゾー。お前マジで忍者には思えねえよ。

「お気づきでしたか。」

「当然よ。」

4次試験では受験生1人1人に試験官が尾いていたんだろ？まあ、

他の連中も気付いてたとは思うがな。」

わざわざ説明してくれるハンゾー！

レオリオはビツクリした顔をしていて、それを見たクラピカは「あえて言うこともないと思ってたんだが。」と言う。

ちなみに俺を監視していた試験官は遠巻きにいる。何か睨まれてんだけど。何かしたか？

「礼を言っておくぜ！！オレのランクが上なのはアンタの審査が正確だったからだ！」

と笑顔で言うハンゾー！

マスタは「…はあ。」と返すだけ。ウザいもんな。

「それはそうと聞きたいことがあるぜ！」

わざわざキメポーズみたいに指を指して言う。

マスタはコイツマジ面倒くせえ。と言うように「何か？」と聞く。

「勝つ条件は「まいった」と言わせるしか無いんだな？」

気絶してもカウントは取らないし、TKOも無し。」

「はい…。それだけです！」

ハンゾーの質問にマスタが答える。

ハンゾーはゴンを見て考えている。

こいつはちつと厄介かもな。でもコイツなら勝てないと分かればギブアップするだろう。そう軽く考えていた。

「それでは、始め！！」

そのコールと同時に流を使って素早く動き、ハンゾーの腕を掴む。

そのあまりの速さにハンゾーは驚き、動きが鈍ったが、直ぐに反応して拘束を解こうとしたが、「動くな。」と『理不尽な拘束』を發動させたため、ハンゾーは一切動けなくなった。

確かに身体能力ではハンゾーに遥か及ばないが、念も使えない奴が相手なら楽勝だ。

「なあ、ハンゾー。お前なら分かってくれるよな？お前はこれからどうするべきかを…。」

ハンゾーの目を見ながら言う。本当ならこのまま強制的に言わせる事も可能だが、そこまで強制力は無いと周りに思わせるためにあえて言わせる。

しかしハンゾーは「へ、嫌だね。」と拒否する。

そこで俺は悲しそうな顔をして言った。

「どうすれば分かってくれるだろうか…。指を一本ずつ折っていけ

ば分かってくれるか？それとも引きちぎった方が良いか？それとも片目ずつえぐった方が良いか？どうする？両目を失い、両手の指と足の指を全て失ったら分かってくれるか？

それでも言わないのなら俺はギブアップして次にかけるが、そうなたらお前はもう日常生活すらままならなくなる。

さあ、どうする？」

ハンゾーの目を覗き込みながら聞く。

さっきまではまだ覇気があった目だが、俺が本気でやる気なのだと分かったためか、今では恐怖一色に染まっている。

何せわざわざ死なないように腕や足を引きちぎるのではなく、指を引きちぎると宣言したからな。

指なら止血しながらの切断なら出血死は免れる。まあ、その代わりに今後は忍者どころか日常生活を送ることすら非常に困難になるのは目に見えている。

この雰囲気のせいか、周りはドン引きだ。唯一ヒソカは楽しそうに笑っているが。

しかし何も言わないハンゾーを見て俺はハンゾーを触りながら右手の小指を掴んだ。

その瞬間、誰が言ったか分からないが、「マジでやる気だ。」と聞こえた。

その言葉が聞こえたのか、ハンゾーは震える口を開き「…ま、まいった…。オレの負けだ…。」と言った。

俺はマスタを見る。

マスタは俺が何を求めているのか理解したのか手を上げて。

「そこまで、勝者、ゴン！！」

と宣言した。

勝利は確定したのでハンゾーから手を離し、『理不尽な拘束』を解く。

その瞬間にハンゾーは崩れ落ち、膝で立ちながらハアー、ハアーと荒く呼吸する。

そんなに恐かったか？

まあ、言わなきゃマジで小指を引きちぎっていたけど。

そして俺は他の受験生の位置に下がる。周りは俺に話しかけ難くしていたが、キルアは

「ゴン、合格おめでとう。」

と言われた。まあ、コイツには普通な光景か？

「おう、サンキュ。お前も頑張れよ。」

と返した。

これから起こるイベントに興味無いので

「スンマセーン、もう合格したんでちょっと散歩してきて良いですか？」

とネテロに聞く。

「ふむ、確かにもうお前は合格したのだから別にここにいらなくても良いな。」

と許しを得たので扉を開けて1人廊下に出た。

この後起こるキルアの洗脳？は別に関わる気無し。

ていうかこれでライセンスゲットは確定なんだから原作に関わる意味が無い。だからスルーして今は合格の喜びを噛み締める。

どうせ合格後の講習は明日だ。
今日は部屋で寝てるか。

その様子を見て

「ふーん、アイツが不合格とはな…。もしかして誰か殺した？よく見るとあのボドロとか言うオッサンもいないし。」
と言う。

俺のこの言葉に遂にクラピカは口を開き

「…キルアは反則による失格となった。ゴンの言う通り、ボドロを殺してしまったんだ…。」
残念そうに言うクラピカ。何かボドロの死よりキルアの不合格を悲しんでいるような。酷えな。

「あ…。やっぱり殺っちゃったんだ。まあ、アイツの事だからボドロのオッサンが負けを認めないのをムカついて殺しちゃったのかな？」

結構ありそうだな。アイツなら殺るだろうし。

「違う！キルアはそんなことはしてねえ！無理矢理やらされたんだ！」

レオリオがわざわざデカイ声で行ってくる。他の奴らも「うるせえなあ。」という感じにこつちを見る。

「レオリオ、まずは落ち着け。」

「それで？キルアは誰かに操られてボドロを殺したという事か？」
一応真剣そうに聞く。不真面目に「あつそ。」とか言いたいけど、言ったらまた面倒だろうしな。

その後は原作のサトツに聞かされたようにクラピカが順序よく教えてくれた。途中でレオリオが何か言って来たりなど面倒もあったが、概ねの説明は終わった。

説明が終わってこれから抗議すべきかを話し合っていた途中でネテロ達が来たので黙る。

「諸君、長い試験ご苦労じゃった。さて、これから最後の講習を行い、それが終われば解散となる。」
ネテロが簡単なスケジュールを言っている途中でクラピカが手を上げた。

「何じゃね？」
ネテロが聞く。

クラピカは立ち上がり

「説明の途中に失礼、実はキルアの不合格は不当では無いかと思いましたがので私は異議を唱えます。」
クラピカが宣言する。そして「俺も同感だ。」とレオリオも追従する。

二人は俺も見てくる。どうやら俺にも賛同して欲しいらしい。

「俺はまだ保留だ。実際に現場を見た訳じゃ無いからな。とりあえず今は様子見だ。」

その俺の意見を分かったのか二人はネテロを見る。

「キルアの様子は自称ギタラクルとの対戦中とその後において明らかに不自然だった。対戦の際に何らかの暗示をかけられてあの様な行為にいたったものと考えられる。

通常ならいかに強力な催眠術でも殺人を強いる事は不可能だ。しかしキルアにとって殺しは日常の事で倫理的抑制が働かなくても不思議は無い。」

確かに悪くは無い意見だ。通常の催眠術では限界があるが、操作系能力を用いれば十分可能だ。

まあ、分かっているまいだろうが。

今度はレオリオが立ち上がり意見を言う。

「問題なのはオレとボドロの対戦中に事が起きた点だ。状況を見れ

ばキルアがオレの合格を助けたようにも見える。

ならば不合格になるのはキルアではなくてオレの方だろ？」

よく自分を不合格にしる何て言えるな。

お前は今年合格しないと多分もう無理だぞ？何せ今回の試験でも何度も何度も俺が助けなかつたら一次試験で落ちていただろうし。

そしてクラピカが結論を言う。

「いずれにせよキルアは当時自らの意思で行動出来ない状況にあった。

よって彼の失格は妥当では無い。」

「全て推測にすぎんのオ。証拠は何も無い。明らかな殺人を指示するような言動があつた訳でも無い。それ以前にまず催眠をかけた根拠が乏しい。」

ネテロの反論にクラピカも「確かに……。」と息を吐く。

まあ、俺なら別に言わなくても命令出来るが。

「レオリオとポドロの対戦直後に事が起きたという点については問題は無いと思つておる。

両氏の総合的な能力はあの時点ではほぼ互角。経験の差でポドロを上位に置いたがの。

格闘能力のみを取ればむしろレオリオが有利とワシは見ておつた。

あえてキルアが手助けするような場面では無かつたじゃろ？」

その言葉にレオリオも「ちっ。」と諦める。

さて、ここらで止めないと不毛な言い争いが起きるからお開きにするか。

「どうにもならないようだな。会長さんの言う通り、全ては憶測に過ぎないようだ。」

残念だがキルアの不合格は覆らないらしい。」
その俺の言葉に二人も諦めたのか着席する。

「それでは講習を再開します。

皆さんにお渡ししたこのカードがハンターライセンスです。意外と地味だと思いでしょ。その通りです。カード自体は偽造防止のためにあらゆる最高技術が施されている以外は他のものと変わりありません。

ただし効力は絶大！！

まずこのカードで民間人が入国禁止の国の約90%と立ち入り禁止地域の75%まで入る事が可能になります。

公的施設の95%はダダで使用できます。銀行からの融資も一流企業並みに受けられます。売れば人生7回くらい遊んで過ごせますし、持っているだけで一生、何不自由無く暮らせる筈です。

それだけに紛失・盗難には気をつけて下さい。再発行はいたしません。」

改めて確認すると凄まじい効力だな。

このカード一枚で今までどんなに頑張っても正規には入れなかった国や地域に入れるし、国营ホテルなどならタダで泊まれる。

売れば人生7回くらい遊んで暮らせるとかスゲエけど、それって誰基準なんだ？

一般人レベルでは、ってことか？

その後は教習所の運転の仕方のような誰も守らないだろう。という規約を聞かされ、ようやく終わった。

さてと、これからは原作は利用出来るものは遵守するが、後は無視で良いや。

最悪キメラアントさえ片付ければ良いんだから。

次は原作通りにキルアの実家に行く。と言っても別にキルアを助けに行く訳では無い。

ゾルディック家に依頼をしに行くのだ。

依頼内容は幻影旅団殲滅。

別に関わる気は無いけど、今後出会ったら面倒だし、何よりもヒソカに「青い果実」判定を貰ったから早く始末しないと不味い。

自分で始末するのが確実だが、流石にあんな大人数を相手にするのはリスクが高すぎる。だからゾルディック家のゼノさんやシルバさんに依頼する。

金さえ渡せばちゃんと始末してくれる筈だから幻影旅団が相手でも大丈夫だろう。

そのために6〜8歳まで天空闘技場で金を稼いでいたんだ。多分足りる筈だ。

流石にゾルディック家相手にコピーした金で支払う勇氣は無いからな。

さて、レオリオとクラピカには「じゃ、お互い元気で。」と言ってさっさとオサラバした。

「キルアを助けに行かないのか？」とか聞かれたけど、「家庭の事情に友達と言えど他人が踏み込んで良いものではない。」と断った。アイツらと、特にクラピカにこの依頼の事を知られたら面倒になるからな。

もしもアイツが復讐のみを考えているのなら手伝ってやって旅団を殲滅するのも良いが、アイツガムシロより甘いから無理だ。

だって復讐よりも友情を大事にするなんて人間としては素晴らしいが、復讐者としては最低だ。
あんな奴と手を組んだら命がいくつあっても足りない。

飛行船に乗りククルーマウンテンがあるパドキア共和国を目指す。途中、無いとは思うが、イルミにレオリオとクラピカがキルアの居場所を聞いてこの飛行船に乗っているんじゃないかねえかと警戒したが、どうやら杞憂だったらしい。

まあ、あの二人は原作のゴンがいたからこそキルアと深い関係になれたんだ。この世界では俺だからキルアとは知り合い以上友達未満程度だ。

だから俺が積極的に動かない限りそこまでキルアに介入しようとはしない。それに「友達だろうが家庭の事情に口出しするべきではない。」という俺の言葉も効いたのか、二人はあの後普通に別れてお互い目標を目指す事にした。恐らくもう会う事は無いだろう。

何せレオリオは夢である医者になるために最低でも4年は大学に通う事になるし、クラピカは復讐と同胞の目を探すために雇われハンターになる。

この通り全く接点はない。

これで原作とはオサラバだ。

グリードアイランドには行きたいからヨークシンには行くが、それは蜘蛛イベントが終わった後だ。

それに蜘蛛は皆殺しにするからイベント自体も起きないだろう。万が一にも殲滅に失敗しても俺との接点はないからバレないだろうし、流石に蜘蛛もかなりのダメージを負う筈だからその時は自分で殲滅

する。

まあ、別にグリードアイランドはゲームクリアが目的じゃ無いし。ただゲームアイテムをコピーして現実世界に持ち帰れば良いだけだ。ゲットしたらリーブが正規のルートで脱出すれば良い。

でもゲンスルーを狩れば大抵のアイテムはゲット出来るだろうし、クリアも可能かも知れないな。

まあ、どっちでも良いか。

もう原作なんて考える必要は無い。と言っても別に積極的に崩壊させる気も無いがな。

俺に関わりが無いのなら基本放置だ。

でも意外だったな…。

クラピカから聞いた話ではキルアは原作同様イルミに「ゴンと友達になりたい。」と言っただけらしい。

何で？

俺はゴンと違って輝いていねえぞ？むしろお前よりも黒いぞ？

まあ、それは分かっているのかキルアも「ゴンと友達になっても普通の生活は無理かも知れないけど、それでもアイツと一緒にいると面白い。」

と言っただけらしい。

俺はそこまでお前の好感度を稼いだか？

確かに試験中は結構一緒にいたし、良く話も合ったけど所詮そこまですでにだぜ？

何か恐いんだけど…。

もしかしてこの先何か想定外の出来事が起きたりしないよな？

25 利用出来るモノは利用しよう

飛行船で移動する事3日。

ようやくパドキア共和国に到着。それから先はククルーマウンテンがあるデンドラ地区まで鉄道で移動。

デンドラ地区にいたら事前に予約しておいた山景巡りの定期バスに乗った。

『皆様、本日は号泣観光バスをご利用いただきまして誠にありがとうございます。』

早速ですがデンドラ地区が生んだ暗殺一族の紹介をしていきましょう。』

ガイドの説明が聞こえてきた。知らないけどパツクに入っているから仕方がない。

バスの中には原作同様、普通の観光客に明らかに堅気では無い二人組がいた。アイツら念能力も無い癖にゾルディック家に挑戦するなんてある意味すげえな。

『え、皆様左手をご覧下さいませ。あちらが悪名高いゾルディック家の棲むククルーマウンテンです。』

樹海に囲まれた標高3722mの死火山のどこかに彼らの屋敷があると言われていますが、誰も見た者はいません。

ゾルディック家は10人家族。曾祖父、祖父、祖母、父、母の下に5人の兄弟がいて全員殺し屋です。ではこれからもう少しだけ山に近付いてみることにしましょう。』

ガイドの説明が鳴り響く。そういえばキルアの婆さんは見たこと無いな。生きてんのか？

バスが到着した所は目の前にバカデカイ門があった。これが試しの扉か。

「え、ここが正門です、別名黄泉への扉と呼ばれております。入ったら最後、生きて戻れないとの理由です。中に入るには守衛室横の小さな扉を使いますが。」
まあ、普通そつちが本当の扉だと思うよな。

「ここから先はゾルディック家の私有地となっておりますので見学出来ません。」

ここから先の樹海はもちろん、ククルーマウンテンも全てゾルディック家の敷地という事です。」

とんでもない庭だよな…。

現実に見てみるとまだククルーマウンテンは遙か遠くに見えるだけ。ていうかそんなに広くする必要はあったのか？
それとも先祖代々の土地だからか？

「は、誰も見たことの無い幻の暗殺一家、そんなのどうせハッターだろ？」

ガイドの説明にデカイ男がバカにしたかのように言う。

「奴等の顔写真にさえ1億近い懸賞金がかかっているって話だ。」
横の何か麵棒みたいな武器？を持っている男も答える。

二人は歩き出し、守衛室に向かう。そして何故か守衛室のドアを破壊して守衛の胸ぐらを掴んで引きずり出す。

「わわわ…。」と怯えた風に見せるゼブロ。

「門を開けな。」

ゼブロを吊り上げている大男が命令する。その自信はどこから生まれてくるのだろうか？

「こ、困りますよ。あたしがダンナ様にしかられるんですから。」
「心配すんな。どうせあんたの御主人はオレ達に始末されるんだから。」

もう1人の男も自信満々に言う。お前らに殺される程度なら誰も依頼しに来ないと思うのだが。

ゼブロからカギを奪い、大男はゼブロを投げ飛ばす。

「痛っ」と着地するゼブロ。とりあえず好感度を少しでも上げるために「大丈夫ですか？」と近寄る。

「ああ、大丈夫だよ。」

あーあ、またミケがエサ以外の肉を食べちゃっよ。」

とゼブロがミケの方の心配をする。アイツのエサって何？人肉？

少し経ち、門が突然少し開いて中から頭蓋骨の上部が無くなった骸骨が2体とデカイ腕が出てきた。その腕が骸骨を外に投げ捨てて扉に引っ込んでいった。

それを見ていた観光客は悲鳴を上げてパニックになっている。まあ、そうだろうな。いきなり骸骨ととんでもなくデカイ腕を見せられたら普通はパニックる。

しかしゼブロはそんな様子を無視して

「時間外の食事はダンナ様に堅く止められているのになー！。

ミケー！ー！！肥っても知らないよー！ー！！」

と暢気な事を言う。

オマケにガイドも見慣れているからか

「え、皆様御覧いただけでしょうか。一步中に入ればあの通り無惨な姿をさらすことに…「いいからそんなこと！！！！早くバスを出してくれー！！！！」」

と説明しようとしたら客にクレームをつけられた。

乗客は直ぐにバスに次々乗り込み、俺以外は全員乗り込んだ所で「おい、君！何してんだ早く乗って！！」と乗車を急かす。しかし俺は「あー、行って良いですよ。俺はここに残るんで。」と乗車を拒否。

俺の言葉に乗客達は目を見開くが、それよりも早く逃げたかったのか、直ぐに全員乗り込んでバスは出発した。

「良いのかい？ここにはバスは1日一本しか来ないんですけど。」
ゼプロは心配したように言う。この人マジ良い人。

「ええ、良いんですよ。俺もゾルディック家に用事があるんです。」

「まさか、君もアイツ等と同じ用なのかい？」

「いえいえ、俺はキルアに会いに来たんです。」

「応そう言っとくか。友達アピールをすれば好感度は上がるだろうし。」

「キルア坊っちゃんに？」

ゼプロは分からないように首をしかめる。

「ええ、実は俺、キルアの友達です。だから会いに来たんです。」

とりあえずこのまま外で話すのではなく、守衛室に入ろうと誘ってくれた。やはり友達発言は効いたらしい。

「キルア坊っちゃんの友達なのかい。嬉しいねえ、わざわざ訪ねてくれるなんて。」

あたしや20年勤めているけど君が初めてだよ。友人としてここに来てくれたのはね。」

本当に嬉しそうに言うゼプロ。まあ、あの家族では友達なんてないだろうしな。何でキルアだけあんな性格なんだろう？

「雇われの身でこんなこと言うとバチが当たりそうだけど、本当に

寂しい家だよ。だーれも訪ねてきやしない。あんな連中はひっきりなしに来るんだけどね。」
とゴミバケツに入れられている骸骨を指差しながら言う。扱い酷くない？

「まあ稀代の殺し屋一族だから仕方ないけど。因果な商売だよねえ……。
いや本当に嬉しいよ。ありがとう！」
と頭を下げて礼を言うゼブロ。いやあ友達発言をただけでここまで好意的になつてくれるとはねえ。

「しかし君を庭内に入れる訳にはいかんです。さっき君も見たでしょ？でかい生き物の腕を。」

あれはミケと言ってゾルディック家の番犬なんですがね。家族以外の命令は絶対聞かないしなつかない。

10年前に主から出された命令を忠実に守っている。侵入者は全員噛み殺せ”。

あ、忠実じゃ無いやな食い殺しているから。

とにかく、ミケがいるから君を中には入れられないね。坊っちゃん
の大事な友達を骸骨にするわけにやいかないからね。」
笑いながら言うゼブロ。

「大丈夫ですよ。俺は試しの門の事を知っていますから。」
とミケに襲われない正しい入り方を知っていると言う。

「え、本当かい？」
ゼブロは驚いた様子で聞いてくる。

「ええ、あの力ギかかかっていないデカイ扉を開けて入れればミケには襲われないのでしょうか？」
と言うとゼブロは

「ほう、本当に知っているんだね。でも君に開けられるのかい？」

そう聞いてきたので俺は守衛室を出て門の前に来て両手を扉に当てる。そして肉体の力だけでは無理だろうから念を使い、思いっきり押した。

するとギョゴオオオというでかい音が鳴り、3の扉まで開いた。キルアと同レベルかよ…。あいつ念無しでよくここまで開けられるな。

そして手を離し下がる。すると自動的に扉は閉まった。

「これは驚いた。まさかキルア坊っちゃんと同じ3の扉まで開くとはね。」

ゼブロが「今日は驚かされっぱなしだねえ。」と言いながらまた驚いていた。

「扉は開けられるんですが、肝心の屋敷は何処にあるのか分からないので困っているんですよ。」

俺の言葉にゼブロは「う〜〜ん。」と悩んでいる。多分執事室に連絡を取ろうか迷っているのだろう。

「じゃ、ちょっと待って下さいね。」

そう言っつてゼブロは守衛室に入り電話をかけた。

「あ、もしもし。こちらゼブロです。」

はい！実はですね…え〜今ここにキルア坊っちゃんの友達という方が見えているんですが…。

はい…はい！はい！すみませんはい！はい！ええ、ええ。

分かります、すみません、はい！はい！失礼します。」

謝りまくりながら電話を切るゼブロ。

「いや〜。やっぱりしかられちゃったか。」

困ったようにこちらを見るゼブロ。

「屋敷に電話していただいたのですか？」
俺の質問に

「いや、ゾルディック家の執事にですがね。
屋敷への連絡は全て執事を通すんですよ。家族までは滅多に繋がらないんです。」

困ったように答えるゼブロ。つまり仕事の依頼でも執事を通すのか？エライ面倒だな。

「じゃあもう一度かけて貰えますか？今度は俺が出ますんで。」

「ええ、良いですけど。嫌な思いさせちゃいますよ？」

とゼブロはまた受話器を取り、内線番号を押す。

『はいゾルディック家執事室。』

とりあえず最初はキルアの友達のフリをするか、ゼブロがいるし。

「もしもし、俺キルアの友達のゴンといいます。キルアはご在宅でしょうか？」

『キルア様に友達などおりません。』

と言われて切られた。

受話器を置き

「何ともまあ、取りつく島も無い感じに切られましたね。」

と苦笑いをしながらゼブロに言う。

「ですから嫌な思いをさせますと言っただけですよ。」

とゼブロも困ったように言う。

「うーん…。だったらもう一度かけて貰えますか？今度は別の言い方にしますから。」

そう言ってゼブロにもう一度かけてくれと頼む。リダイヤルを押せば良いのだが一応聞いとく。

「ええ、良いですけど…。」

と戸惑いながらも受話器を取り番号を押してくれた。

2コールして

『はい、ゾルディック家執事室です。』

「コンニチハさっきのゴンなんです。今度は仕事の依頼のためにお電話させていただきました。」

今度は本題に入る。

『仕事の依頼ですか？』

流石に仕事の依頼と聞いたら切らないな。

「はい、依頼したいので是非ともゼノさんとシルバさんにお会いしたいのですが。」

『残念ながらゼノ様とシルバ様は現在お忙しく会える状態ではありません。』

キルアのシゴキのためにか？どんだけ親バカだよ。

「では御用が終わるまで待たせてもらいます。ああ、ご心配なく、ハンターライセンスを使ってこの国に来ているので何時までも滞在出来ますので、ではゼノさんとシルバさんにそうお伝え下さい。」
そう言ってこっちから電話を切った。

「ええっと……。ゴン君はキルア坊っちゃんに会いに来たのではなかったんですか？」

ゼプロの質問に「ええ、そうですが何か？」と答えたかったがここは

「いえ、第1の目的はキルアに会うためですよ？仕事の依頼は第2目的です。」

仕事の依頼ならもしかして本邸に行けるかも知れないですから。キルアにはその時に偶然会います。」
と誤魔化す。

「成る程、確かにその手なら可能性は極めて低いですが、無いよりはマシでしょうね。」

とゼブロが乗ってくれた。

「という事でしばらく俺を泊めて貰えませんか？あの様子ではしばらく時間がかかるでしょうし。」
と頼み込む。

別にゲートの中で過ごせば良いのだが、この家の敷地内で待っている。という意味合いを持たせるために守衛小屋に泊めてもらう必要がある。そのためにキルアの友達だと名乗ったのだから。

「ええ、良いですよ。この敷地内に私達守衛の小屋がありますからそこで泊まっていつて下さい。」

キルアの友達プラス、仕事の依頼のために。という理由がついたためか快諾してくれた。マジでこの人良い人。

その後、試しの門を開けてゾルディック家の敷地内に入って直ぐにミケと遭遇。

コイツマジで犬なんすか…？

見た目怪獣だぜ？

原作でミケの目を見たゴンは恐いって言うていたけど、俺には何が恐いのか分からない。

だって犬の目って基本黒だからあんまり違いが分かんないんだけど。

「コイツがミケです。でも大丈夫です。試しの門から入って来た人間は襲いません。」

とゼブロが言う。

確かに襲っては来ないけど、いるだけで何か威圧されるんですが…。

ゼブロの案内で使用人の家に到着。

結構デカイ家だけどここに住んでいるのはゼブロとシークアントの二人だけ。無駄じゃね？

「交代の時間だよー。」

とゼブロが言う。そうすると扉が開き中から男が出てきた。

「おっと、客人とは珍しい。ゼブロに気に入られるとは大したガキだな。」

まあ、ゆっくりしていきな。この家じゃそうもいかねえだろうがな。

「シークアントが守衛室に向かう。」

交代なら電話で呼べば良いのでは？ていうか電線なんか無いからどうやって電気を得ているんだ？自家発電？

ゼブロが片方200kgのドアを軽々開け、玄関に入るとスリッパを勧められた。

「スリッパどうぞ。片方20kgありますが。」

とありがたく教えてくれた。何も知らなかったら履いて歩く瞬間コケるよな。

「どうも。」

と言って念を使って身体強化をして履き、普通にあるく。

ていうか何でここは日本式なんだろう？この世界は普通靴は脱がないのこ。

リビングに入りお茶を淹れて貰った。

「どうぞ。この湯飲みも20kgあるので気を付けて。」

と渡された。基本この家にいる時は念は解けないな。

その後はキルアと初めてあった天空闘技場の時の話やハンター試験の時の話などの話をゼブロにした後は夕食を食い、寝た。

布団まで重かったらどうしようかと思っただが、流石に布団は普通かと安心した。

多分キルアのお仕置き？は20日ぐらいかかるからな。それまでは

ゼノやシルバは仕事をしない可能性があるからな。

それまでは久しぶりに基礎鍛錬や肉体強化をやるか。

何とか肉体の力だけであの試しの門を開けられるようになりたいし。広い敷地を有効活用させて貰うとするか。

26 まさかの契約（前書き）

主人公にとって初めての予想外の展開に直面します。

26 まさかの契約

ゼノとシルバの返事を待つて2週間が経過した。その間は念の基礎鍛錬と試しの門を自力で開けるための鍛錬に費やした。その結果、何とか念無しでも1の扉を開ける事に成功した。ちなみに念を込めれば5まで開くようにもなった。

これedyouやく基礎能力は原作ゴンにも追い付けて来た。さあて、次は2の門だ。

と思つていたら使用人の小屋にゴトーがやって来た。

「ゼノ様とシルバ様がお会いしても良いとの事ですのでついて来て下さい。」

と言われた。

原作よりも若干早いけど、まあ良いか。と思いついて行く。

しばらく山道を歩き、罨を避けるためか途中で横道を通るなどをして執事室に到着した。

やはり本邸ではなく執事室で話すのか。まあ別に良いけど。

ゴトーが扉を開けて「どうぞ。」と言ってくる。やはり依頼人だからか扱いは客人か。

中に入りまたゴトーの案内で歩き、大広間へ着いた。

そこには椅子に座っているゼノとシルバがいた。

執事はいなく、ゴトーも案内が終わったらシルバとゼノに礼をして部屋から出ていった。流石に依頼の時は執事は立ち合わないのか。

「それで、お主がワシ等に依頼をしたいと言つとるらしいな。」
ゼノが座りながら俺を見ている。

「ええ、お二人に是非とも俺の依頼を聞いていただきたいのです。何しろかなり難しい内容なので。」

旅団殲滅なんて普通の殺し屋には不可能だからな。

「ほお、かなり難しい内容なのか？」

ゼノが聞いてくる。どうやら喋るのはゼノがするらしい。シルバは俺を見ているだけ。

「ええ、依頼内容は幻影旅団殲滅。つまり旅団員13名を皆殺しにしていたきたいのです。」

俺の依頼内容に二人は何かを考えているようだ。まあ、相手が相手だからな。1人でも厄介なのに13人とはな。

「…成る程、確かに難しい依頼じゃな。」

「はい、報酬は500億ジエニー。前金として200億、依頼完了後に300億を支払います。更に現時点での全団員の能力もお教えします。」

いかがでしょう。引き受けていただけますか？」

これで引き受けてくれなかったらマジでヤバイ。俺自身で殺るか旅団と合わない事を祈るしかない。

「破格の報酬額じゃが…。旅団の殲滅には割りに合わんな。」

やはり、まあ予想の範疇だ。

「では更に100億プラスして600億ジエニーではいかがでしょうか？」

こちら辺で頷いて貰わないとヤバいな。予算的に。

「ふーむ。それでも難しいのう。」

やはりまだ足りないか？

「では幾らなら引き受けて下さいますか？そちらの要望をお聞かせ下さい。」

「ふむ、ではさっきの600億と全団員の能力プラス、キルを連れていってくれんか？」

………
はあ？

え、何この展開？何で俺が新たに荷物を背負わなきゃならないの？

「…いや、何でここにキルアが出て来るんですか？」

俺の質問に今度はシルバが話した。

「キルには経験が足りない。だからお前について行けば何らかでも経験を得られるだろう。」

ああ、原作通り可愛い子には旅をさせよ。か？ふざけんなよ。

「何で俺が念も覚えていないガキのお守りをしなくちゃいけねえんだよ。足手まといになるのがオチだ。」

最早面倒だから敬語は使わず言いたいように言う。

「確かにキルはまだ念すら覚えて無い。だからお前がキルに念を教えて欲しい。」

シルバが真剣な顔をして言う。

「何で俺？自分達で教えれば良いだろ？大事な大事な家族なんだろ？」

ためえは歪んではいるけど立派な親バカの癖に。

「お前はキルの友達なんだろ？」

そこを突きますか…。

「あれは使用人の小屋に泊めて貰うためについた嘘で、キルアは俺を友達だと思っているらしいが、残念ながら俺はアイツのことを何とも思っちゃいねえよ。」

本音を言ってやったのにシルバは少し笑い

「それが、良いんだ。キルは何れは俺の跡を継ぐ。だからある程度外の世界を経験して強くなり、戻ってくる筈だ。」

だからキルの事を何とも思っていないお前みたいな奴にキルを鍛えて欲しいんだ。」

何その教育方針。俺は教育係かよ。

「それに、その条件でなければお前の依頼は受けない。

幻影旅団殲滅なんて依頼を受けるんだ、それぐらいして貰わないと割りに合わない。」

シルバが俺の痛い所を突いて来やがった。確かに依頼は是が非でも受けて欲しい。

でもその代わりようやく終わった原作ルートがまた再びやって来る。ゼノの方を見たがシルバに賛成しているのかただ見て来るばかり。

「……………一つ聞く、キルアを鍛えるやり方は俺が自由に決めて良いんだな？」

「ああ、お前のシゴキでキルアが死んだとしても故意では無いのから問題無い。」

つまりわざと不可能な課題を突き付けて殺せば俺も殺されるらしいな。

「本当に俺で良いのか？自分で言うのも何だが俺の戦闘スタイルは奇襲や騙し討ちで勝つか、勝てなきゃ逃げるタイプだ。

そんなスタイルをキルアも習得したら不味いのでは？」

俺の最後の警告にゼノが笑い

「それこそ望む所じゃ、お主のスタイルは正に暗殺者向き。

むしろキルにはお主のようになって欲しい。」

確かに俺は確実に勝てるという確信が無い限り逃げるタイプだから暗殺者に向いている。

「なら仕方ない。では代わりに報酬の支払い方法は依頼完了後に金額支払う方式に変更だ。

それと殺したら全員念のために首を落とした写真を俺の携帯に送ってくれ、奴等が死んだ。という確証が欲しいんでね。

後、アンタ等の他にもイルミも一緒に頼むよ。イルミは確か団長と親交があったから邪魔されるといけないからアンタ等と一緒にこの仕事を依頼しとく。」

「…ああ、問題無いじゃろ。」

とゼノが答えた事により、依頼は契約された。

そして全団員が8月30日にヨークシンに集合する事や、各団員の能力、特徴、知る限りの性格、性別などを書いた紙を渡した。

「ああ、それと、団員N.O.4のヒソカという奴は実は団員ではなく、団長と戦うためだけに旅団に入った奴だから、団員では無いが殺してくれ。

アイツを放置すると面倒になるからな。頼んだぞ。」とヒソカ殺害を念押しした。

こうして幻影旅団殲滅という依頼の代わりにキルアという新たな荷物を抱える事になった。

キルアは1週間後には開放するからこのまま執事室で待っているように。という事になった。

マジでどうしよう。でもここでキルアを引き取らないと依頼は受けてくれなかっただろうからこうするしか無かったのだ。

多分無いと思うが、もし原作の修正力で旅団と鉢合わせでもしたらかなり面倒だし、一気に殲滅させるのはまず不可能だからゾルディック家に依頼したのだ。

キルアの子守なら最悪ウイングやビスケに任せれば勝手に成長する。

それにキルアの性格なら俺のやり方にいちいち口出しするなどの面倒は起こさないだろう。

だから断腸の思いでキルアを引き取った。また原作をある程度守る日々が来るな…。

俺だけなら大抵はゲートに逃げれば良いけど、制約のせいでキルアはゲートを潜れない。だからキルアが死ぬ危険性が非常に高い。

面倒がある程度俺もキルアを鍛える必要がある。もし見捨てたらあの家族が黙っているとは思えない。

とんだ爆弾を抱える事になったな。

それに今まで面倒な移動はゲートでやってきたけど、これからはらくは普通に歩いたりする必要がある。面倒くせえ。

とりあえず最初はキルアに念能力を覚えさせるために天空闘技場に行くべきか。ウイングに任せればあの才能で何とかなる筈だ。

でも天空闘技場に行くとヒソカがいる可能性が高いな。

俺がキルアに念を教えれば良いかも知れないが、どうやって教えたら良いか分からない。おれ自身独学でここまで来たんだ。誰かを教えるなんて出来ないし面倒だから極力やりたくない。

だから教えるのが得意なウイングに任せたい。

ゴンの代わりにズシと切磋琢磨して欲しい。何ならそのままズシと頑張つて欲しい。

幸いあのクソオヤジに言われたのは「念を教えて欲しい。」だけで時間拘束はしていない。だから念をある程度覚えさせさえすれば良いんだ。

別にその後キルアが家に帰んなくても俺に責任は無い。

27 金が無いつて不安だよね（前書き）

ここからは概ね原作に沿います。

27 金が無いって不安だよな

1週間で執事室で過ごし、一応はVIP待遇を受けたのだが、気分はどん底だ。

何しろようやく荷物を下ろせたかと思えばまた新たな荷物を背負わされたのだ。気分が良い訳無い。

執事室にて優雅に朝食を食べていると「ゴーン!!」という二度と聞きたく無かった声を聞いた。せめて朝食が終わってから来いよ。

朝食をまだ食べていたかったが、給仕をしている執事達から「早く行けよ。」的な視線を貰ったので仕方なく席を立ちキルアを出迎える。

「ゴン!!」

と俺を見て嬉しそうに言うキルア。

「よお、久しぶりキルア。」

と軽く返す。

「久しぶり!!」

にしてもまさかゴンが来てくれるなんてなあ。親父からゴンが待っているなんて聞かされた時は耳を疑ったぜ?」

俺も信じられないよ。予定では既に俺はこの国にいない筈だったからな。

「お前の親父と爺さんに一杯食わされてな。」

キルアを押し付けといて更に600億も取られたしな。子供を押し付けるなら金返せよ。と言ったら「タダじゃ殺れん。」とか返されたしな。

「はあ？」

とキルアは分からないというように疑問を浮かべている。

お前は600億で売られたんだよ。スゲー価値だな。俺だったら600円でも欲しくねえよ。

「まあ、良いや。早速だけど出発しよーぜ。とにかくどこでも良いから。ここにいるとお袋がうるせーからさ。
じゃーなー!!

あ、そーだゴトー。良いか？お袋に何を言われてもついてくんなよ
!!」

キルアの念押しにゴトーは頭を下げて

「承知しました。いつてらっしやいませ。」と言っ。

キルアと一緒に行くことしたら

「ゴン様。何卒、キルア様をよろしくお願い致します。」

と頭を下げてきた。

俺はそれに黙ってうなずいて返す。

本音はだったらお前が教育しろよ。と言いたい。テメエら執事は全員念能力者なんだから可能だろ？

観光バスが来る時間にはまだ早いので仕方なく山を徒歩で下山して
ようやく街についた。

「それで。お前は親父に何て言われて解放されたんだ？」
と聞くと

「ああ、何かゴンに付いて行って強さを学べって言われた。後は絶対仲間を裏切るな。って誓わされたな。」

概ね現在通りか。

「それで？何でゴンはわざわざ俺ん家に来たの？まさか俺を向かいに来るタメじゃねえだろうし。」
流石多少の付き合いがあるからか俺の性格をある程度分かっているな。

「ああ、わざわざお前の家に来たのは仕事を依頼するためだ。内容は教えないけど、その依頼条件として600億を支払うこととお前を連れていく事になったんだよ。」

いくら金持ちの家でも600億は大金らしくキルアは目を広げて「600億！！？…そりゃ随分難しい仕事を依頼したんだろうな。それで俺を連れていく事になったって事は…。」

「そういう事、つまり俺は嫌々お前を同行させる事になったって事だ。分かったか？」

俺が何故自分を連れていく事にしたのかが良く理解出来たのかキルアは苦笑いして

「成る程、それなら納得だ。ゴンがわざわざ俺を連れていく理由がようやく分かったよ。」
と言っ。

酷え言われようだな。まあ、確かに俺らしいが。

「はつきり言ってお前は弱い。」

いきなりの俺の宣告にキルアは「ム！」と若干青筋を立てる。

「純粋な身体能力で勝負すれば大抵の人間には負けないだろうが、お前にはあるモノが決定的に足りない。」

念能力を持たないと身体能力なんて無意味になるからな。

「何だよ？その足りないモノって？」

キルアが不機嫌そうに言う。まあ、こんな言い方されたら誰だってム力つくがな。

「例えばだ。お前、兄貴と対峙すると何か嫌々感じがしないか？
思い当たる節があるのかキルアは少し考えた後に「ああ、ある。」
と答えた。」

そして俺は練をして害意を持ってキルアに念を飛ばした。
すると直ぐに反応してキルアは急いで後ろに飛び去った。

「感じたか？それがお前に足りないモノだ。」

キルアはしばらく俺を警戒しているかのように見ていたが、練を解
いて普通の纏に戻ったので害意を感じないからか戻ってきた。

「…あれって何かの技なのか？」

今まで兄貴にしか感じなかったあの感じを俺にも感じたんだ。なら
ば何らかの技と思うのは不思議は無い。

「ああ、そうだ。俺はあれに対抗出来るようにお前を鍛えてくれ。
とお前の親父に頼まれたんだ。」

「あれに対抗出来る方法があるのか！？」
勢い良く聞いてくるキルア。

今まで成す術無かった感覚に対抗出来るというのが魅力的なのだろ
う。

「まあな。それよりもキルア。お前金は持っているか？」

いきなりの話題転換に顔をしかめ

「何だよ。いきなり。まあ、実はあんまり持ってない。」

「そうか、ついでに言つと俺もあんまり持ってない。お前の親父と
爺さんにたんまり取られたからな。」

憎々しそうにキルアを見る。

キルアはどう反応して良いのか分からないので愛想笑いを浮かべる。
「そこでだ、お前が欲しがっているこの力と金を手に入れられる手

っ取り早い所がある。」

俺の提案にキルアは

「マジ？そんな良い所があるの？」

と笑顔で聞いてくる。こういう所はガキだよな。

「ああ、俺達が出会った場所。天空闘技場だ。」

俺のセリフにキルアが首を傾げる。

「え、天空闘技場？…確かに金も稼げてる程度の修行になるけど、あそこであの感じはしたことが無えけど？」

「とにかく行くぞ。後は行ってから説明してやる。」

そう言っつて飛行船のキップを買いに行く。キルアは納得してはいないが、ゴンについて行くしか無いので言われた通り自腹で天空闘技場行きのキップを買い、飛行船に乗った。

飛行船が天空闘技場の最寄りの空港に到着し、現在あのバカみたいな行列に並んでいる。

「相変わらずこの行列はウゼエな。」

俺のイラつきを無視してキルアが聞いてくる。

「そんな事より、いい加減教えてくれよゴン。」

と急かす。別に教えても良いんだが、俺は教育する気は無いので。

「まだだ、とりあえず今は登録をするぞ。運が良ければ今日にも答えが分かるぞ。」

と意味深なセリフを言う。

聞いても無駄だと察したのかキルアはブー垂れた顔をして登録用紙を記入する。

「格闘技歴10年って書いておけよ。早く上に行きたいから。」
と受付に聞こえない声で言う。

キルアもそれは賛成なのか「ああそうだな。」と直ぐに納得して記入する。

そして俺も登録をして係員の案内で会場に入る。

中は以前見た光景と全く変わっていない。まるでタイムスリップしたかのようだ。

「なつかしいな〜。ちっとも変わってねーや。」

「ああ、確かに。異常な程変わっていないな。」

キルアと軽くお喋りしながら椅子に座る。

「そうそう、お前前に200階まで行って登録せずに帰ったよな？俺の質問に「ああ、別に200階に興味無かったからな。」と軽く答える。お前がそのまま200階に行っていれば多分洗礼を浴びて覚えたか死んだのだろうがな。それなら俺も楽だったのに。」

「だったら多分お前は150階以上に進めって言われるだろうが、50階に進め。」

そうしないとズシに会えないからな。

「ええ〜。何で？楽で良いじゃん？」

当然の疑問としてキルアが聞いてくる。

「良いから50階にしとけ。ある程度時間が欲しいからな。」と返す。

「時間？」

とキルアが聞いてくるが丁度良く俺の番号が呼ばれたので行く。

「良いか？50階だぞ？もしも無視しやがったらお前、分かるよなあ？」

笑顔でキルアを見る。目は笑わないが。

キルアもハンター試験でその笑顔を見せる時はマジだと分かっているから「わ、分かったよ。」と素直に聞く。

対戦相手の首筋に手刀を当てて一発でダウンさせて終了させた。さつきまでは俺の事を罵倒していた声援は消えた。

「おや、キミは以前200階クラスの選手だったんだね。今の動きも素晴らしかった。」

200階まで行きなさい。」

いきなり金が入らない200階を進められるのはな。

「いえ、150階でお願いします。肩慣らしをしたいので。」

そう言つて200階から150階に下げて貰つた。150階からなら1000万以上を貰えるからな。

キルアの方も終わつたらしい。

やはり180階に行けつて言われていたが、ちゃんと「あ、オレ50階でいいよ。ゆっくり行きたいから。」と50階にして貰つた。

そして「こつちにももう一人いたー！！」という観客の声が聞こえたので見てみると、胴着姿のボウズ頭のガキが大男を殴り飛ばしていた。

「50階への入階を許可します。」

と審判に言われて「押忍！！」と返事を返していた。

どう見てもズシだ。どうやらウイングもいるようだな。

これで念の修行を頼める人が出来た。

その後、俺は150階なんだがウイングとの顔合わせのために50階で降りた。

そこで俺、キルア、ズシの三人が何となく集まり。

「押忍！」

と先ずはズシが挨拶してきた。この世界でこんな挨拶があるとはな…。

「自分、ズシと言います！お2人は？」

「オレキルア。」

「俺はゴン。よろしく。」
と軽く挨拶する。

確かにまだ弱いが纏を張っているな。まあ、まだ纏だけのようだが。

三人で歩きながら報酬を受け取りに行く。

「さっきの試合拝見しました。いやーすごいっすね！」

ズシは感動したかのように言う。

「何言ってるんだよ。お前だってこの階まで一気に来たんだろ？」

キルアが笑顔で言う。確かにこのぐらいの年で一気に50階ってスゲエよな。

「ゴンさんなんて一気に150階なんて凄すぎです！尊敬します！」
とキラキラした目で見てきた。本当にいるんだな、曇りの無い目をした奴って。

「ちなみにお二人の流派は何すか？自分は心源流拳法っす！！」

とわざわざビシッと構えて言う。礼儀正しいけど、それはウザいだけだ。

「別に、無いよな…。」

とキルアが俺を見てくる。それには同意なので頷く。

「ええ！！」

誰の指導もなくあの強さなんすか…。ちよっぴり自分ショックっす。やっぱり自分まだまだっす！」

と自分で自分を鼓舞させる。

キルアはそれを「何だかなー」と呆れたように見る。

「ズシ！よくやった。」

という声と拍手をしている音が後ろから聞こえた。

後ろを見ると寝癖が酷い髪型とシャツをズボンから中途半端に出し

ている男がいた。初期のウイングの格好ってヒデエよな。

「師範代！」

とズシが返事をする。

「ちゃんと教えを守っていたね。」

ウイングが笑顔で言う。

「押忍！ 光栄す。師範代、またシャツが。」

とズシに注意をされて

「あッ、ゴメン。ゴメン。」

と謝りながらシャツをズボンに入れる。何で毎回出てるんだろ？ ワザと？

「そちらは？」

とウイングが俺達の事を聞いてきたので

「あ、キルアさんとゴンさんす。」と紹介する。

「はじめまして、ウイングです。」

と挨拶してきたので何故かキルアは「オス！」と挨拶する。俺は「

どうも。」で終わったが。

「まさかズシ以外に子供が来ているなんて思わなかったよ。

君達はなんでここに？」

とウイングに聞かれたのでキルアは俺に話すか？と目で聞いてきたので首を横に振る。

「えーと……。まあ、強くなるためなんだけど。オレ達全然金無くて小遣い稼ぎも兼ねてんだけど。」

キルアの説明に「俺達ここの経験者なんです。」と補足する。

「そうか……。ここまで来るくらいだからそれなりの腕なんだろうけど、くれぐれも相手と自分、相互の体を気遣うようにね。」
と言う。若干俺を見て言っているのは気のせいだろうか？

「いらつしゃいませ。キルア様、ゴン様、ズシ様ですね。チケットをお願いします。」

三人分のチケットを受付に渡す。

「はい！こちらが先程のファイトマネーです。」

と封筒三枚を出してきた。中身を見るとやっぱり152ジエニー。

「152ジエニー…。缶ジュース一本分すね。」

ズシが微妙。という顔をしている。

「1階は買つても負けてもジュース一本分のギアラ。だけど次の階からは負けたらゼロ！」

50階なら勝てば5万は貰えるかな。」

キルアの説明に「結構貰えるっすね。」と喜ぶ。子供だねえ。

「100階なら100万くらいかな？」

その言葉にズシは目を見開く。

「150階を越えるとギアラも1000万を楽に越す。」

「いつ！」

と絶句するズシ。堅気で生活していたら先ず見る事は無い数値だからな。

「そついやキルア、お前200階までは行ったじゃん？その金は何も無いのか？」

分かってているが一応聞いとく。

「4年前だぜ？残っている訳ないじゃん。全部お菓子代に消えたっつーの。」

という衝撃の言葉を残した。

「確か190階クラスで勝つと2億は貰える筈だけど、それがお菓子代にか？」

と聞くと「ああ、当たり前じゃん。」と返された。お前どんな菓子食ってたんだ？

「そういえばゴンさんはどれぐらいまで行ったすか？」

ズシから聞かれて、正直に答えるべきか？と悩んだが、別に嘘つく必要は無いので

「俺は200階クラスで負けて止めた。」

嘘は言っていない。ワザと負けて登録を抹消されたんだ。

あれ？でもさっきの審判は以前200階まで行っているって言ったな。つまり一階から再挑戦すれば良いだけなのか？まあ良いや。

「ゴンさんも200階まで行ったすか！？お二人共凄いです！」
と言われた。

「それじゃ、俺は自室に行くから。二人とも頑張れよ。」

あ、キルアは次の試合が終わったら俺の部屋に來いよ。」

そう言っただ俺はエレベーターに乗って自室に向かった。

部屋はまあ、普通のシングルルームだ。

懐かしいつちや懐かしいな。でもテレビが無いから暇を潰せねえ。

仕方ないからテレビを出してベランダにアンテナを建てて受信した。これで一応見れる。

この部屋を出るときは置いておけば良い。アパートとかで冷蔵庫やテレビを置いていくのと一緒にだ。

後はキルアが来るのを待つだけ。

ウイングやズシが泊まっている宿はそこらへんに聞き込みすれば直ぐに分かる。何せここでガキ連れなんてかなり目立つからな。

28 荷物をお願いします

しばらくしてキルアが俺の部屋に来た。

「よお、結構かったな。」

キルアに言う。

「…ああ、ちよつと手こずっちまった。」

と悔しそうに言う。

「ふーん…。もしかして相手はズシだったか？」

俺の質問にキルアは

「何で分かったんだ？」

と不思議そうに聞く。

しかしそれを無視して

「ズシは強かったか？」

と質問した。

はぐらかされたので多少ムツとしたが、気を取り直してキルアは答える。

「いや全然。素質はあるよ。あいつ強くなる。」

でも今はまだオレから見ればスキだらけだしパンチモノロイ。殴りたい放題だったよ。

…なのに倒せなかった。」

悔しそうに言うキルア。

「それに、アイツが構えを変えた途端、兄貴やゴンと同じようなイヤな感じかしたんだ。」

何か…。分かんないけどヤバい感じ。やっぱりあれは技なんだな。キルアは断定系を使った。まあ、流石に三人も同じような感じがしたら断定出来るわな。

「思ったより早く遭遇できたな。」
と俺が言うと

「何と？」

「念とさ。」

そう答えて俺は身支度を始める。

それを見たキルアは

「あれ、どっか出かけんのか？」

と聞いてきたので

「お前も一緒だ。ついてこい。」

と言って部屋を出た。それを聞いてキルアはどこに行くのか分からないがとりあえず急いで付いていった。

天空闘技場近くの安ホテルにズシとウイングが泊まっていないか聞き込みをしてようやく見つけた。

従業員に金を掴ませて部屋を教えてもらい、ドアをノックする。

「はい、どなたですか？」

と返って来たので

「先程お会いしたゴンです。お話したいことがあります。」

と丁寧に戻す。これから頼み事をするんだから下手に出なくてはな。少してウイングがドアを開けてくれた。

「どうしたんですか？」

とウイングが聞いてくる。まあ、どの宿に泊まっているかを教えていないのに来たから警戒しているな。

「まずは突然の訪問に答えてくれてありがとうございます。」

ちなみにこの部屋を突き止めたのは周囲に聞き込みをしたからです。この界限で子連れは珍しいから簡単に見つかりましたよ。」

自分の疑問に答えてくれたからその疑問は消えたが、また新たな疑

問が浮上しているな。何をしにきたのか。

「すみません、入ってもよろしいでしょうか？少し込み入った話をしたいので。念について。」

俺は隣にいたキルアを見て言う。それでウイングは理解したのか素直に入れてくれた。

キルアと一緒に入ると中にはズシもいた。ズシにも「よ、さっきぶり。」と挨拶する。ズシは「はい、さっきぶりすね。」と普通に返してきた。

「それで？お話とは何でしょうか？」

とウイングが聞いてきたので単刀直入に言った。

「キルアに念を教えて欲しいんです。」

その答えは予想出来ていただろうが、いきなり言われるとは思わなかったのかウイングは驚いた。

「なあゴン。さっきも聞いたけどネンって何だよ？」

キルアが聞いてきた。

「念とはな、簡単に言つとお前の兄貴や俺、ズシが出したあのイヤな感じの事だ。」

それを聞いてキルアは「やっぱりあれは技なんだな。」と改めて納得した。

「どうしてキルア君に念を教えるんですか？」

ウイングが真剣な顔をして聞いてきた。

「実はコイツの親から念を教えてやって欲しいって頼まれたんですが、俺は念を我流で覚えたので指導方法が分からないですよね。

だから経験豊富そうな念の使い手を探してここに来たんです。そしてアナタに出会ったので是非とも指導をお願いしたいのです。」

それを聞いたウイングは腕を組み、少し思案した後

「何故私に指導を乞うのですか？」

ウイングが聞いてきた。まあ、まだロクに話した事さえない奴に大事な修行を頼みに来たんだからな。

「それはズシが自分の流派は心源流拳法だ。と言い、そしてそのズシが貴方を師範代だと言う事は貴方は心源流の師範代だと言うことになる。」

つまり貴方はちゃんとした指導者だという事が分かったので貴方にお願ひさせていただきました。

どうか、どうかキルアの念の指導をお願い致します。」
と頭を下げる。

ウイングやキルアはいきなりゴンが頭を下げてきた事に驚いていた。ウイングはこの年頃の子供にしては礼儀正しくお願ひし、頭も下げてまでお願ひしてきた事に驚き、キルアはあのゴンが人に頭を下げるという光景に目を疑った。同時に、自分のためにそこまでしてくれるなんて。とキルアは嬉しくなった。

「ウイングさん、お願ひします。」
と慣れない敬語を使ってキルアも頭を下げてお願ひする。

しばらく二人の子供が大人に頭を下げるという光景が続く

「…ふう。分かりました。キルア君の念の指導を引き受けます。」
と根負けしたようにウイングが言う。

それを聞いてゴンとキルアは頭を上げて「ありがとうございます！」
と言う。

ようやく引き受けたか。

まあ、ウイングの性格なら子供から頭を下げられて懇願すれば折れると思っていたから計算通りだ。まさかキルアも敬語で頭を下げる

とは思わなかったが、それのおかげで決定打になったな。

「いやー良かった。これでキルアは洗礼を受けずに済むな。」
「洗礼？」

とキルアが聞いてきたので
「200階クラスは全員が念の使い手なんだ。だから念を知らない新人は必ず手痛い洗礼を受ける。」

これに生き残った者は念能力者になれるけどな。」
「まだ念について何も説明していないのでキルアはひたすら「??」の状態だ。」

「詳しいですね。ゴン君。」
とウイングが言うてくる。

「まあ、俺も昔は200階クラスにいましたからね。4敗して失格になりましたけど。」

ウイングは「ほあゝ。」と納得するがキルアは

「そういえばゴンって200階クラスにいったんだ？俺がいた時は200階クラスはギャラが出ないから150〜190階クラスをウロウロしてたけど。」

「ああ、お前が天空闘技場を出た後に修行として200階クラスに上がったんだよ。」

「ふーん。ゴンが八歳の頃だけど4敗したのか…。つーことは200階つてスゲエのか？」

ウイングとズシは「八歳!？」とビックリしていた。

「結構焦ったんだぜ？このまま順当に行けばお前は1週間後には200階クラスに行っていただろうから、もしもウイングさんが引き受けてくれなかったら確実に洗礼を受けていたからな。」

まあ、もし断られたら無理矢理起こすつもりだったけど。」
「無理矢理起こすって何をだ？」

とキルアが聞いてきたので

「すいませんウイングさん。キルアに念についての説明をお願い出来ますか？」

と頼んで丸投げした。

ウイングが花瓶に周をした花を投げて突き刺すなどして念とは何かをキルアに教えている。更に壁を破壊するという凄いのを見せてキルアに念の恐ろしさを教えている。でもその壁、ホテルの壁だから弁償ものだな。かなりかかりそう。

ある程度説明が終わって精孔を開ける方法に移った。

ウイングが無理矢理起こすかゆっくり起こすかを教えるとキルアは手っ取り早く無理矢理起こす方法が良いと言っ。確かに楽だけで失敗したら最低1週間は全身疲労で動けなくなるぜ。

ウイングはズシのようにゆっくり起こす方法を勧める。原作と違って別に時間制限は無いしな。

「よく分かんないな。無理矢理であれより早く目覚める方が良いに決まってるじゃん。」

と尚もキルアは食い下がる。流石に半年もかかるのは嫌らしい。俺は頑張ったというのに。

「キルア、無理矢理起こす方法を取るなら俺が起こしてやるうか？」と腕に凝でオーラを込める。

オーラは見えないがかなりの量を込めたから何かヤバイ。とは分かったらしく勢いよく反対側に下がった。

それを見て凝を解く。

「あのなあキルア、無理矢理起こす方法を取るなら何もウイングさんに頼みに来ねえんだよ。」

この方法だと成功しなければ全身疲労に陥ってしばらく動けない看

護生活を送る事になる。だから危険性の無いようにウイングさんに頼みに来たんだ。」

と説明するとキルアも一応理解したらしいが

「でも半年もかかるんだぜ？」

と反論してくる。

「それはズシは。だろ？」

安心しろ。ム力つくがお前は才能の塊だ。多分オーラの感じを掴み取るのに1週間もかからねえだろう。纏もそれぐらいで習得するだろうし。」

その言葉にキルアは

「マジ！？1週間で出来るの！？」

と驚きながら聞いてきた。

俺はウイングを見て

「ですよねえ？」と聞く。

ウイングもキルアの才能は分かるのか「その可能性が高いですね。」と答える。ズシは「自分は半年だったのに…。」といじけてる。

「だから安心な方法でやれ、大丈夫、もし200階にいく迄に間に合わなかったら俺が無理矢理起こして習得させてやるよ。」と笑顔でキルアに言う。キルアは青ざめているが。

ウイングから見られるが、念で「大丈夫、奮起させているだけで本当にはしませんよ。」と書く。それを見てウイングは安心したかのように視線を戻す。

「そうそう、ちなみに俺も纏を習得するまで半年かかったけど、お前は1週間でやれるよな？」

と笑顔で聞く。

キルアは「ゴンで半年って、俺が1週間で出来る確率あんのかよ！？」と喚くが無視だ。

さて、これで大丈夫だ。コイツの才能なら多分3日かそこらで感覚を掴むだろう。

原作とは違って俺が念の使い手だからウイングが積極的に動いてくれるとは限らないからこちらから積極的に動いた。

キルアは今は60階クラスだ。原作でも200階クラスにたどり着くには最低でも3日以上はかかっていたから念を覚えるために調整しても1週間で200階クラスに行けるだろう。

ちなみに悪いニュースだ。

やっぱりここにヒソカがいた。調べてみると200階クラスの闘士として登録されている。

原作と違って俺はそこまで注目されていなかったけど、一応「青い果実」判定は貰っているし、キルアが代わりにお気に入りになっているからキルアと戦いたがるかも…。

でもキルアの性格上受ける訳無いし、凝で調べたらやっぱりイルミの針が刺さっているから危険を感じるか条件が合致したら思考を多少なりとも操れる筈だ。

あれ抜くか？

29 才能の差

あの後話し合いの結果、キルアは100階クラスに到達するまではウイング達の宿に泊めて貰ってそのまま纏を会得するために瞑想や禅をしている事に決まった。

試合がある日は(というか毎日)天空闘技場に行って試合をして終わったら帰るかウイングやズシと一緒に俺の部屋に来て瞑想してる。おかげで家主の俺が何故かキルア達がいる時は部屋を出ていなくてはならない。

確かに効率を上げるために俺が試合中の時やいない時は部屋を使っても良いとは言ったが、毎日いて良いとは言っていない。しかしキルアには早く覚えて欲しいので仕方なく許可した。

おかげでキルアが100階に上がるまでの3日間を俺はほとんど外で過ごす羽目になった。200階クラスの部屋なら広いから俺もいることが出来るが、100階クラスの部屋はシングルだから狭い。キルアが瞑想している横でテレビを見てるとウイングさんから「邪魔です。」とか言われたしな。だからわざわざホテルの部屋を取ってそこで過ごしていた。

3日経ち、キルアが100階クラスに上がった事で個室を獲得し、そっちで修行をする事になったからようやく部屋を取り戻せた。ホテル代なんてたかが知れてるけど、やっぱり必要の無い金を使うのは気に入らない。

ちなみに俺も毎日では無いが試合をしている。

600億の穴埋めとして地道?に稼ぐ必要がある。だから150〜190階をウロウロしている。

一応気を使つて負ける時はちゃんと負けてる。ただ試合同時にギブアップしたり会場に来ない方が楽だが、あまりにヤル気が無いと登録をまた抹消されかねない。だからわざわざ観客が喜ぶように接戦にしてたまに勝ちたまに負ける。一々面倒だが簡単に金が手に入るんだ。演技ぐらいする。それに前みたいに仲介人を挟んで勝つ時は自分に負ける時は相手に多額の金を賭けて払戻金でまた儲ける。これで倍以上にも儲けられる。ある意味八百長か？

やっぱりコイツ異常。

キルアが150階に到達した頃には纏を習得していた。

その異常な速さにはウイングも驚きのあまりか言葉を失うし、ズシは自分が半年かけたのを僅か1週間に満たない時間で見事習得されたのでガツクリしている。

ちなみに俺もガツクリだ。俺も精孔を開くだけなら一月程度で覚えられたが、それを纏に持つていくのに半年かかった。聞いた話ではコイツは一発で会得したらしい。

「へへーん。どうだゴン。俺の方が早く覚えられたな。」

と笑顔でVサインするコイツの指を引きちぎりなくなったのは仕方ないだろう？

ム力ついたから「キルアの纏を試してやる。」という名目でまだ弱々しい纏しか出来ないキルアに物凄い殺気を込めたオーラを当ててやった。

常人なら死ぬだろう量を当ててやったら流石に死にはしなかったが物凄いビビったのか部屋から逃げ出した。ちなみにズシは気絶してウイングからは殴られた。

11才の子供のお茶目な行動に殴るなよ。

30 残酷な宣言

キルアが遂に200階に到着した。
ちなみに俺と当たる事は無かった。もし当たっていたらキルアを負かして儲けるつもりだった。

アイツは負け無しでここまで来たから自然に俺の方が倍率は高い。
まあ、俺はこのクラスに来て以来負けたり勝ったりを繰り返しているだけだからな。

纏を完全に会得したキルアは現在練の習得をしている。

と言ってもあのふざけた才能のおかげかもうほとんど習得している。
ズシや俺が何週間も使って覚えた練ったオーラを纏で留めるタイミングなども僅か1日足らずで覚えやがった。

あれ？確かゴンってキルアと同じぐらい天性の才能があった筈なのに、何でこんなに差が開くんだ？

もしかして精神が俺だから？

俺って才能をマイナスにでもする能力があるのか？それともただの足手まとい？

まあ、良いや。今更考えても仕方ない。練を覚えたのは4才の時だ。年のせいなんだ。きつとそうさ。というかそうであってくれ…。

ちなみにキルアの才能をまざまざと見せられたズシと俺はあの後世の中の不条理さを愚痴りあった。ズシも俺もある程度才能はあるんだが、キルアみたいな反則野郎はムカついてくるものだ。

エレベーターに乗り200階を目指す。

本当はこのままエレベーターを降りてヒソカと再開なんてしたくなかったが、アイツの性格上、無視するとあっちから会いに来る可能性があったからこっちから会う事にした。

まあ、でもこの世界では俺がヒソカと会話したのは一次試験の時以来だからあんまり俺に興味は無いだろう。代わりにキルアに興味が行くだろうから。

エレベーターが200階に着き、登録のためにカウンターに向かうとしたらやはり強烈な殺気が乗ったオーラが飛んで来た。

キルアは一瞬ビビって下がりかけたが纏をしてオーラから身を守った。

「随分なお出迎えだな。」

俺の言葉に肯定なのかキルアは「ああ。」と良いながら汗を拭い。

「そこにいる奴、出てこいよ。」

と言う。やっぱり纏が出来るからか原作よりも冷静だな。

ヒヨコ。と天空闘技場スタッフが出てきた。

「キルア様ですね。あちらに受付がございますので今日中に200階クラス参戦の登録を行なって下さい。今夜の0時を過ぎますと登録不可能になりますのでご注意下さい。」

ちなみに200階クラスには現在173名の選手が待機しております。また、このフロアからあらゆる武器の使用が認められますのでお持ちならどうぞ。」

長々と説明をしてくれた。

「この殺気はアイツか？」

キルアが俺に聞いてきた。

「いや、多分違う。この殺気、というかオーラは多分…。」

俺らの会話を無視してスタッフが補足情報を伝えてくる。

「また、このクラスから原則としてファイトマネーはなくなります。」

名誉のみの戦いとなりますので納得された上でご参加下さい。」「このルールがあるから200階クラスに上がるメリットが少ないんだよなあ。無ければ200階クラスに上がっても良いんだけど。」

スタッフの説明が終わるとアイツが出てきた。まるでホラー映画みたいだ。

「ヒソカ!!?」

キルアが叫ぶ。まあ、いるなんて知らなかったからな。

「お前、俺達を先回りしやがったか?」

俺の質問に「くつくつく。」と一笑いした後には答えた。

「その通り、電腦ネットで飛行機のチケットを手配しただろう?あれはちよつとした操作で誰が何処へ何時行くのかが簡単に検索できるんだ。後は私用船で先回りして空港で待ち後を尾けた。まあ、ここに来るのは予想外だったけど。」

原作と違って俺はヒソカに借りは無いからここに来る理由が分からないしな。

「試験の時にキミは使えたけどキミは使えなかったからそれを忠告するために待っていたけど…。その必要は無かったようだね。」

キミが教えたのかい?」

ヒソカは俺を見ながら聞く。

「いや、俺じゃなく別の奴にだ。俺は教えるのが苦手だね。」

「ふーん。にしても意外だったね。君達がまだ一緒にいるなんて。」ヒソカから見れば俺がなんでキルアと一緒にいる事が理解出来ないんだろう。俺だって理解したくねえよ。」

「ちよつと事情があつてコイツを鍛える事になった。」

お前としては手間が省けてありがたいだろ?」

そう聞くとヒソカはまた一笑いして

「確かにそうだね。キミが育ててくれるなら熟れるのが早くなりそうだし、もつとおいしく育ちそうだ。」

満面の笑みでキルアを見るヒソカ。

キルアは「どういう事だ!？」と俺に詰め寄る。何せ自分を狙っている宣言をされたからな。

「つまり俺よりもお前の方がこの先成長したらおいしくなりそうだからお前をターゲットに決めたらしいぞ?」

そう伝えるとキルアはガツクリとして虚ろな目をする。ヒソカのターゲットにされるなんて悪夢以外の何物でもない。御愁傷様。

「うーん、僕としては先に君を食べても良いんだけど…。君もまだまだ青い果実だからなあ。」

どうやら俺もまだターゲットに入っているらしい。

「ちなみに俺はここでお前と戦うつもりは無いぞ?ここに来たのはキルアに念を習得させるためと金稼ぎだ。

だからお前がどうしても戦いたいと言ってきたら即刻逃げる。代わりにキルアを置いていくけど。」

「オレを置いていくのかよ!?!」

キルアは俺のいきなりの見捨てる発言にまた反応する。何かツッコミキャラになつたな。

「くつくつくつ。安心してよ。ここで君を摘む気は無い。」

ここに来たのはそっちの彼の成長具合を見るためともう一つの果実を摘むためさ。そっちはもう熟成しているだろうからね。」

何かイツチャツてる目をしながら何処かを見ている。カストロの事か?

確かにアイツがもしも自分の念の性質を知っていて強化系の能力を選んでいたならかなり強くなっていただろう。そうすればもしかしたらヒソカを殺れたかも知れないな。

「それじゃ、彼の事ヨロシクね。」
そう言つてヒソカは去つていった。出来るならこれで二度と会う事
がありませんように。まあ、9月になれば死ぬだろうけど。
ちゃんと依頼して請け負つたんだ。殺つてくれるだろう。
今はとりあえずキルアの登録をしに行くか。
まだガツクリしているキルアに「おい、いい加減登録しに行くぞ。」
と無理矢理立たせて歩かせる。ヒソカからの明確な宣言を聞いたせ
いで暗い。

しかしそんな暗さも長続きしない。というかさせてくれない。
わざわざ待つていたのか受付カウンターの近くには原作通り新人ハ
ンターの3人がいた。

こちら、というよりキルアを見ている。

「…彼ら、使えるみたいだね…。」
車椅子に乗っているリールベルトが言う。それに「そうだね。」と
片腕のサダソが答える。ギドはただ見ているだけ。

3人を無視して「おい行くぞ。」とキルアに言う。

キルアも気にしたようもなく「ああ。」と3人を素通りして受付カ
ウンターに行き、現在説明を聞きながら登録をしている。

しかしキルアが説明を聞いている間も3人はキルアを見続けている。

「何か用？」

と俺が聞くと

「いいや、オレ達も申し込みをしたいから並んでいるだけさ。

そういう君こそ何でここにいるの？見たところ君は違つんだらう？」
とサダソは返す。

「まあ、ね。俺はコイツの保護者みたいなモノか？年は同じだけど。」

「ゴンが俺の保護者かよ。」

キルアがそれに突っ込むので「何か違ったか？」と聞くと「…いや間違ってるねえな。」と返す。

今の師匠を見つけたのは俺のおかげだからな。

「それで、登録は済んだのか？」

キルアに聞くと「ああ。」と返す。

「参戦申し込みは？」と聞くと「いや、まだしない。」とキルアは言う。

まあ、ウイングから「まだ2ヶ月は戦わないで下さい。」って言われているからな。キルアはゴンと違って無謀な事は極力しない性格だ。少なくとも4大行を覚えるまでは戦わないつもりだろう。

キルアが登録しないと分かったからか3人は帰っていった。まだ期間に余裕があるからなのか別にプレッシャーも与えて来なかったな。まあキルアにプレッシャー何か無意味だし。

3 1 選択ミス(前書き)

この話はほとんど原作と同じです。

31 選択ミス

キルアはウイングの予想を遙かに超えるスピードで成長し、僅か1ヶ月で基本の纏、絶、練を会得した。

何なんこのバグキャラ。あり得ないんだけど。

俺が1年ぐらいかけたのにこいつは10分の1以下の期間で会得するなんてマジ不公平。神に祝福どころか抱擁すらしてもらっているんじゃない？

今日はヒソカ対カストロの戦いが行われる。バカ高いチケットはキルアに買わせて今は観客席で試合を待っている。

ちなみにキルアは原作のようにカストロの強さを確かめるために控え室に行ったが、カストロが消えたなど喧しく伝えてくる。

「どういふことか分かるか？ゴン。」などうるさいから「試合を見れば分かる。」とだけ答えた。

俺の中途半端な答えが気に食わなかったらしいがこつ言ったら俺は何も言わないので我慢して試合を待っている。

しばらく経ち

『さぁーいよいよです!!』

ヒソカ選手vsカストロ選手の大決戦!!』

アナウンスが始まりヒソカとカストロは中央に集まる。

「感謝するよヒソカ。お前の洗礼が無ければ私はここまで強くはなれなかっただろう。」

カストロが自信満々に言う。確かに念を覚える前からかなり強かったらしいからな。

「……くくくく。誰が強くなったって？」

ようやく熟した果実を刈り取れるからか機嫌が良さそうなヒソカ。
「言っておくがお前に敗れた後の9戦。一度として全力で戦ったことは無い。」

全て、お前を倒すための準備運動に過ぎない！」
カストロがカツコイイこと言っているけど、お前能力選択ミスってる癖によく自信があるよな。

ていうかカストロは誰から念を習ったんだ？それとも偶々ヒソカの洗礼で精孔が開いて纏を会得して後は独学？

でもあいつ絶とか名前を知っているから誰からか念の知識については聞いていた筈。そいつがちゃんと水見式をさせてれば選択ミスも無かったのに…。

虎咬拳を極めてればもしかしたらヒソカに勝ててたかもしれないのに。

「始め!!！」

審判の声と同時に「行くぞ!!！」と宣言してヒソカに突っ込むカストロ。

カストロの右手の手刀を軽く避けたヒソカだったが、何故かヒソカはカストロの避けた筈の右手に殴られる。という不可思議な現象が起きた。観客は勿論キルアも驚いている。

「クリーンヒットオ!!！」

審判がカストロの攻撃に加点する。

『まずはカストロ選手の先制打が炸裂————!!！』
というアナウンスに観客が歓声を上げる。

ヒソカも何故殴られたか分からない様子だ。

「本気で来いヒソカ。」

2年前の私とは違う。次は容赦しないぞ。」

とわざわざ宣告するカストロ。

アホか？今ので決めるとは言わないが、何かしらの大ダメージをヒ

ソカに負わせる事が出来た筈。何せ完全に油断してたからな。
一発目で虎咬拳を使って首を落とすなり足を切り落とすなどすれば良かったのに。

言っちゃ悪いが弱者であるお前が圧倒的強者であるヒソカに加減などしてはならない。一撃目で決めないと勝率はガクンツと落ちる。

『先手を取ったのはカストロ選手!!』

素早い手刀の攻撃を避けられずヒソカ選手ポイントを奪われました。

『アナウンスが更に観客を煽る。』

「今のは何なんだゴン!? 錯覚か?!?!?」

キルアが聞いてくる。

「いや…。錯覚じゃねえよ。確かにカストロが消えて現れた。」

ダブルつてきちんと言現化系能力者がやればかなりの威力を発揮するだろうな。

キルアは俺の説明が分からないのか「?」とするだけ。

スウ…。とヒソカが立ち上がり

「本気を出すかどうかはボクが決める。」

とあくまで宣言する。

カストロは「そうか。」とだけ呟き、「では早目に決断する事だ!!」とまたヒソカに攻撃を仕掛ける。

今度は左手で攻撃を仕掛けるがやはりヒソカは軽く避ける。しかしまたもや避けた筈の攻撃が時間差でやって来てヒソカを殴る。そして更に攻撃が続きヒソカがダウンする。

「クリーンヒット!! & a m p ; ダウン!!」

とまた審判はカストロに加点する。

『なんとなんと開けてビツクリ、カストロ選手の一方向的な攻めが続きます!!』

ポイントはこれで4 - 0!!
しかし、今…見たものは…。私の気のせいでしょうか!?!」
今のはハツキリとカストロが消えたように見えたからな。観客も動揺している。

「や…やれるか?」

審判がヒソカに試合続行か?と尋ねる。するとヒソカは不気味に笑いホコリをはらいながら立ち上がる。

「気のせいかな?」

キミが消えたように見えたが…。」

ヒソカの質問に『そーです!!消えたんです!!そう見えたんです!!』とアナウンスも追従する。

「いや…。それは表現が正しくないな。目の前にいてボクにケリをくれたはずのキミが一瞬にして背後にいた…。」

…が一番近い表現だと思うのだが。まだ何か違う気がする。

違和感…そうだな。何か基本的な見落としをしている感じかな。」

ヒソカの推理にカストロは

「無断だね。ただ逃げているお前ではナゾを解けまい。

何にせよもう待たない。次は腕をいたたくぞ。まだもったいぶるならそれを良かろう。」

その程度の使い手だったと思うまでだ。」

とカストロは虎咬拳の構えを見せた。

観客達が虎咬拳の構えに興奮する。

「行くぞ!!」とカストロがヒソカに接近するとヒソカは何故か左腕を前に掲げる。

「あげるよ。」とヒソカは自信満々に言う。「ふん、余裕か、それとも畏のつもりか!?!」

どちらにしても腕は貰った!!」

とカストロはヒソカの左腕を切りに向かったが、またもや突然消えてヒソカの後ろに現れ「こっちのな。」と言って右腕を切断した。宙に舞う右腕。観客は悲鳴を上げる。

「全てが自分の思い通りになると思ったら大間違いだ。」カストロがヒソカの耳元で囁く。

しかしヒソカはまだ余裕そうに「これも計算の内だね。」と言う。

「ほざけ！」とカストロはムカついたのか少し大声でヒソかを殴り飛ばす。

ヒソカは下がり、落ちてくる自分の右腕をキャッチする。

「くつくつく、なるほど。キミの能力の正体は…。キミのダブルだろ？」

右腕をお手玉のように投げてはキャッチしながらカストロに聞く。

「…流石だな。その通り。」とカストロは答える。

そしてその瞬間、カストロは二人に増えた。

「やっぱり、あれは錯覚じゃなかったんだ！カストロが攻撃を仕掛けた一瞬、あいつの体が2つに重なってみえたのは…。」

キルアが言う。よく分かったな。

『これはどういうことでしょうか！？なんとカストロ選手が二人に分裂！？』

消えたと思っただら今度は増えた！！？まさか双子だったとか！

「――！？」

アナウンスがボケをかましてくれた。

「ドツペルゲンガーとかいうやつかい？」

ヒソカが自分の右腕を左手で掴みながらかけない左腕をかく。リアル孫の手か？

「まさしく。」とカストロも肯定する。

「消えたはずのキミだが気配は変わらずボクのそばにあり…。むしろ消えるその直前…増えたような感じがしたから…。」

「キミは消える前に増えているんだよね。」

「そこに気がつくとは大したものだ。」

私は念によつて分身を作り出す事に成功した。先刻はまず分身が攻撃をしかけ、私は死角に潜む。お前が反応する瞬間に分身を消し、本体の私が攻撃する。

もちろん分身はただの幻影ではなく、消える前まではそこに実在するもう一人の私だ。それは分身の蹴激を受けて実感しただろう？

つまりお前は二人の私を相手にしなくてはならない。これが念によつて完成した真の虎咬拳。

名付けて虎咬真拳！！」

とりあえずネーミングセンスは無いらしいな。

「次は左腕をいただく。まだくだらぬ余裕を見せていたいかな？」
カストロが虎咬拳の構えを言う。

それにヒソカは右腕をサッカーボールのように人差し指で回転させながら

「うーんそうだなー。」

回転をやめて掴み

「ちよつとやる気出てきたかな…？」

右腕の皮膚に噛みつき、引きちぎった。

自分の腕を食っている様子を見た観客がざわつく。

ヒソカは一枚のハンカチを取り出し、右腕に巻いた。

「ボクの予知能力をお見せしようか。」

『おやおや！？ヒソカ選手がスカーフで右腕を覆い隠したぞ！！』

そしてそのハンカチを上投げる。しかしハンカチから出てきたのはトランプだった。

「おーっと、何と右腕が消えてトランプが宙に舞う！！何をする気だー！？」

トランプが床に散らばる。何故かみんな表面になって。

「この中から一つ好きな数を選んで頭に思い浮かべて。」
「言いカストロを見る。」「…」カストロは無言で答える。

「良いかな？」

思い浮かべたらその数に4を足してさらに倍にする。そこから6を引き…2で割った最初に思った数を引くと…いくらになったかな？」

観客達も計算している。無断なのに。

「ボクにはその答えがあらかじめわかってた。」

と言ってヒソカは右腕の切断面に腕を突っ込みトランプを引き抜く。

「答えは…1だろ？」とスピードのエースを見せる。

当たった事で観客はまたざわつく。絶対1になる計算法なんだから当たり前だろ？

まあどうでも良いけど、バンジーゲームはコピーさせて貰ったし。

「い…異常…です！！」

まさに悪魔の手法です！！自分の傷口にネタを仕込んでいましたー
ー！！！！

ポイントにもならない！！試合にも一切関係なし！！にもかかわらずです！！ヒソカの異常性ここに極まれりー！！」

アナウンスが叫んでいる間にヒソカはスピードのエースを「記念にあげる。」とカストロに投げた。一緒にバンジーゲームもカストロに投げて。

しかしカストロはトランプを弾き

「下衆め…。二度とふざけたマネが出来ぬよう左腕も削ぎ落としてくれる！！」

分身の方のカストロ口がヒソカに走った。

『おつとカストロ選手の片方が猛然と突進——!!』

するとヒソカはまた腕を差し出した。今度は残っている左腕だ。

「さつきから言ってるだろ？あげるって。」

カストロはヒソカが何を考えているのか分からないが「望み通りにしてやる!!」と言って左腕も切断した。

『あつっつああ——っつ。』

なんと、ヒソカ選手残った左腕をも自ら献上——!!

何を考えているんだこの人は——!!?』

アナウンスが鳴り響いた後にヒソカを見ると、信じられない出来事が起きていた。

「な……に」

カストロも驚愕している。おかげで分身が消えてしまった。

「やはり分身で攻撃してきたか……。もし本体で攻撃してきたらカウンターくれてやろうと思ったのに……。」

こっちで。」

とヒソカが何故か繋がっている右腕を見せた。

はいドツキリテクスチャー頂き。

『!?!?あれ!?!?!?』

切られたはずの右腕が!?!?元に戻ってる——————————————————————!!』

「くくくく。これも手品です。さて、どんな仕掛けでしょう?」

右腕を上げて見せるヒソカ。でも指が全く動いて無いけどね。

ヒソカがカストロに一步近付くとカストロは一步下がる。まあ、ワケわかんない怖いだろうな。

「くつくつくどうした?こわいのかな?」

タネが分からないから驚く……奇術の基本だ。

キミの分身をつくる力は素晴らしい。だがもうネタがわかった。そ

ここらどんな攻撃が来るかも大方予想がつく。それに対処する方法もね。

非常に残念だ。キミは才能溢れた使い手になる……。そう思ったからこそ生かしておいたのに。

予知しよう。キミは踊り狂って死ぬ。」

後はどうでも良いや。ヒソカの試合を見るのだってバンジーガムとドッキリテクスチャーをコピーしたかっただけだからだし。

原作通りカストロが串刺しにされて死亡。ヒソカの勝利で終了だ。

「んじゃ、またなキルア。」

と言って帰る。キルアが何かわめいているけどスルーだ。

確か今日も試合があったから俺は控え室に向かう。キルアは戦闘準備期間があるけど残念ながら俺は試合相手を選べないので指示通り戦うしか無いのだ。

32 才能って残酷だよ

ヒソカの試合が終わって1週間後、キルアは早くも練の応用である凝を会得した。

ヒソカ戦を録画したビデオでちゃんとヒソカがバンジーガムを何本出したかを当てたからな。俺とズシはまた撃ちひしがれる。俺らの長年の努力を僅か1週間で凌駕されるなんて…。

「ま、まーまー。そんな落ち込むなよ。」

とキルアがorz状態になっている俺とズシを気遣う。

「だって信じられるか？俺達は何ヶ月もかけた事がお前は1週間で会得しやがった。お前の才能はどんだけだよ。」

俺の嫉妬混じりの視線にキルアは若干たじろぐが、自分がゴンよりも才能があると分かったからか気分は良さそう。

このガキ。マジで殺したくなってきた。

「ゴン君、確かにキルア君の才能は驚嘆に値しますが、何も才能だけが全てではありません。」

君はキルア君より遥かに昔に念を知っているではありませんか。その分経験は君が遥かに上なのだから間違いなく君の方が強いですよ。」

「ウイングが慰めてくれる。アンタマジで良い人だよ。ズシも気力を取り戻しているけど、キルアは「やっぱまだゴンの方が強いか。」と少しふて腐れている。」

もしもこの時点で負けてたら希望が潰える。まあ、俺はやり方によつては世界最強にもなれるからな。間違えると簡単に死にそうだけど…。

「いよいよ今日から「発」の修行に入ります。これをマスターすれば念の基礎は全て修めた事になります。

後は基本に磨きをかけ創意工夫をもって独自の念を構築していくだけです。それでは始めましょう。」

ウイングの発の説明が始まった。

別に俺がここにいる意味は無いのだが、今日は試合が無いし。

ちなみにヒソカはカストロ戦が終わった後に俺に会いに来た。

手は既に縫合したのか両方とも健在だ。無ければ世の中のためになるのに。

「やあ、実はボクはもうここに用が無くなったから去ろうと思うんだ。だからその前にキミに会いたくなってね。」

とドアを開けたら言われた。まさかヒソカとは思わなかったから警戒してなかった。

「…で？何か用？」

俺の「だったら早く失せろよ」という心の叫びを受け入れてはくれなかったらしい。

「うん、キミともいつか戦いたいし、それに…彼のことをヨロシクね。」

不気味に笑うヒソカ。キルア、お前完全に狙われたらしいぜ。

「くれぐれも壊さないでね。ボクの獲物だから。」

笑いながら睨み付けて言い放つヒソカ。そして言い終わると「じゃ、またね。」と帰っていった。

どうやら俺の性格を考えてキルアを途中で壊さないように釘を刺しておいたらしい。お前が心配するだけ無断だな。お前は団長と戦うために必ずヨークシンに来る。その時がお前らの寿命さ。

ヒソカの事を思い出していたらウイングが水見式をやっていた。にしても水が増えるとかスゲエよな。どうい物理現象なんだ？

まあ、特質系の現象の方がスゲエか。俺なんかコップが消えたし。

「むー!!」

とズシが水見式をやる。そしてやはり葉っぱが微かに動いているから操作系らしい。

「葉っぱが動いているっすー!!」

「「葉が動く」のは操作系の証です。」

ウイングが補足する。良いよな、ああいう師匠がいて、俺はずっと一人だから非効率的だった。

「よっしゃ、次はオレだ。」

とキルアが水見式をやる。しかし表面上の変化が見られない。

「何も変わんねーぞ。」

キルアが心配そうに言うがウイングは「そうですね。」としか返さない。

「もしかしてオレって才能ねー?」

「いえいえ、水をなめてみて下さい。」

ウイングの忠告通り水をなめる。俺もなめてみたけどほんのり甘い。念の質さえ甘いってお前だけ甘い物好きだよ。

「……………!?少し甘い…かな?」

とキルアも気付く。

「「水の味が変わる。」のは変化系の証です。さあこれで二人のオーラがどの系統に属するか分かりましたね。」

「そう言えばゴンは何系なんだ?」

キルアが突然聞いてきた。やっぱり聞くか。

「俺はズシと同じ操作系だ。」

と答えた。まあ、主に使う能力は操作系が多いからな。

「へーそうなんだ。」とキルアは軽く納得していた。

1ヶ月後、キルアの発の変化を見るためにまた集まった。ちなみにキルアはその間によく試合をした。あの新人ハンターの三人がそろそろ登録期限が近いからか急かすようになったから「面倒だから受ける。」とキルアに言った。そしてキルアも別にウイングに止められている訳では無かったのでしようがないから三人の挑戦を受けた。

第1戦はサダソだったが、俺の忠告通り最初から凝をしていたから簡単に攻撃を読み、ボコボコにしてノックアウトした。

2戦目はギドが相手だった。初戦の様子から警戒して初っぱなから竜巻独楽をして攻撃を防ぎながらショットガンブルースをしてキルアに攻撃したが全部叩き落とされ、義足をへし折って戦闘不能にさせて勝った。

3戦目のリールベルトは原作通り勝った。

「楽勝。」とかキルアに言われていた3人は哀れだ。新人を狙うつていうのは悪く無いんだけど、それは念を知らなかったらの話だ。念を知っていて来ている場合はかなり強いかなり弱いかのどちらかだ。後者以外の場合は勝ち目が薄い。

アイツらも俺みたいにあえて200階に上がらずに稼げば良かったのに。ここなら一生分の金だった簡単に手に入るのに。

「さあ、それでは修行の成果を見せてもらいましょうか。」
ウイングの言葉にキルアがグラスの前で練をした葉っぱは意味が無いから抜かされてるけど。

「いいぜ。」

キルアが自信満々に採点を願う。

グラスの水をなめるとマジで八チミツみたに甘い。これにはウイングも驚いている。

「全く……たいしたものです。」

キルア君、君は今日で卒業です。」

卒業という言葉にキルアは驚いている。まあ、普通最低でも1年はやるからな。それが僅か半年足らず。

「そうそう、言い忘れていましたがゴン君。裏ハンター試験合格おめでとうございます。」

今更かよ……。

「裏ハンター試験？」

とキルアがウイングに聞く。

「念法の会得はハンターになるための最低条件。何故ならプロのハンターには相応の強さを求められるから。」

邪な密猟者や略奪を生業とする犯罪者を捕らえることはハンターの基本活動。犯罪抑止力として強さがどうしても必要となる。

しかし悪用されれば恐ろしい破壊力となるこの能力、公に試験として条件化するのは危険。それゆえ表の試験に合格した者だけを試す。

まあ、君は初めから条件を満たしていたみたいですが。」

「……まあね。」

念能力が無かつたら受ける訳無えーだろ。

「キルア君。是非もう一度試験を受けて下さい。君なら次は必ず受かります。」

今の君には十分資格がありますよ。私が保証します。」

ウイングの言葉に「……ま、気が向いたらね。」

と若干照れながらキルアは言う。

「ちなみに他にも合格者はいますか？」

俺の質問に

「ええ、ハンゾーとクラピカは別の師範代の下で既に念を会得しました。イルミとヒソカは初めから条件を満たしていますし、レオリオは医大試験受験後に修行を開始するようです。ポツクルは練の習得にかなりてこずってるようですね。」
「キルアよりも先に会得したってハンゾーとクラピカはどんな才能を持ってんだよ。それともウイングの教え方が遅いだけか？」

さてと、とりあえず当初の目標だったキルアの4大行会得は終わったし、俺の懐も大分暖まったからそろそろ実家に帰るか。
予定ではゾルディック家への依頼が終わったら軽く顔を見せてすぐに旅立とうと思っていただけ、キルアを鍛えるためと別にいらないけど親父が残したあの箱を貰うか。
無くても良いけどキルアに次にグリードアイランドを狙うための理由にはなるし。

でもヨークシンに早目についても危なえな。
出来るなら幻影旅団が死んだ後に向かいたいけど、距離的に何日か前に行く必要があるし、サザンピースのオークション会場に入るには1000万ジェニーのカタログを買わなければいけないから9月前には必ず行かなくてはならない。
後はまだ始まって無いけどいずれは始まるバツテラのグリードアイランドプレイヤー募集に応募する。旅団みたいに奪うかとも思ったが、別にゲームが欲しい訳では無いので普通に応募しよう。

例え恋人が死のうがクリアしたら契約通り500億全額払わせてやる。

33 疲れる帰郷

天空闘技場からクジラ島に行く最寄りの港へ飛行船で移動している。ちなみにミトさんには帰る事は既に手紙で伝えてある。

「なあ、ゴン。次は何処に行くんだ？」

とキルアが聞いてくる。そっぴや何処に行くのか言わなかったな。

「俺の実家だ。」

そう言うとキルアは驚いたのか

「マジ！？ていうかゴンにも実家があつたんだー！」

と随分失礼な事を言われた。俺はどんなイメージだよ？

「あるに決まってるんだろ？お前に実家があるように俺にも実家があったって不思議は無い。」

そう言うと「ああ、確かに…。」とキルアは苦笑いする。

「そうそう、先に言っておくが実家に帰ったら俺はキャラがかなり変わる。」

「キャラ？」

「ああ、俺の実家は小さな島だから悪いイメージが出来るんですけど島中に広まるし中々払拭出来ない。だから島では俺は良い子なイメージを作っている。」

そう言うとキルアが

「良い子なゴン…??？」

と混乱しやがった。俺だってやりたくは無いが仕方ない。一応まだ使える故郷だ。

「そうだ、だから口調や態度がかなり変わるが気にするな。

それと大事な事だが、島に着いたら俺の良い子のイメージが崩れるような事は一切言つなよ？もし言ったら両手足を切り落としてコンクリ詰めにした上で海に沈めてやる。」

キルアの目を見ながら宣言する。

俺が宣言したら本気な事を知っているキルアは引きつった顔をして「わ、分かっているよ…。」と約束した。

その後、空港に着いたら今度は港に行き、なるべく揺れないようなデカイ船に乗ってクジラ島を目指す。漁港のイメージが強いクジラ島だが、意外にもデカイ客船が寄港する事もある。中継地点になるからな。

クジラ島に到着し、下船すると知り合いの漁師達から話しかけられる。

「よお、ゴン！久しぶりだな！」

「うん。おじさん。」

と普段ならあり得ない返答を笑顔でする。それを後ろで見ているキルアは信じられないモノを見る目をしているが。

他にも知り合いに会ったので簡単な会話をして別れた。

家に向かっていく途中で

「マジでキャラが全然違うな。」

とキルアが言ってきたので

「だから言っただろ？一度このキャラを確立したから今更変えるのは面倒くさいんだ。」

まあ、たまーにしか帰らないからそんなに面倒では無いがな。」

当初はただ顔を見せてすぐに島を出るつもりだったが、コイツがいるからなあ。流石に原作みたいな弱い状態でグリードアイランドに突入するのは難しいし…。

面倒だがそれまでに俺が多少鍛える必要があるな。

しばらく歩き、ようやく家に着いた。
帰宅するのは伝えておいたから原作のようにバタバタする事は無かった。ちなみにキルアの事はハンター試験中に出来た友達と書いておいたので別に驚かなかった。

その後は飯を食いながら家族団欒をしていた。

「…試験、どうだった？」

ミトさんが聞いて来たので

「やっぱり大変だったよ。会場にたどり着いたのが405人で合格したのが7人だったからね。

大変だったよなあ、キルア？」

突然のフリに驚くが、事前に言われていたように

「あ、ああそうだったな。」

と返す。

「そう言えば、キルア君は合格出来たの？」

ミトさんの質問に

「い…いや、俺は落ちちゃったんだ。」

と焦りながら返す。何せ最終試験で殺人をしたせいで反則負けになった何て言えないからな。

飯を食い終わり、キルアはベットメイキングのために俺の部屋に向かい、俺は片付けの手伝い。

「ねえミトさん。」

「ん？なあに？ゴン。」

と皿を洗いながら聞き返すミトさん。

「帰ってきて早々なんだけどさ。実は俺達明日にはこの島を発つんだ。」

その言葉に皿洗いを止めて俺に振り向く。よく皿は割らなかったな。「ど、どうして！？まだ来たばかりじゃない？」

「うん、本当なら今は他の用があっただけどき、合格して結構経つのにまだ顔を見せていないのは不味いかと思ったから後回しにして急いで来たんだ。」

だから明日には発たないとヤバいから明日には島を出るよ。」

「……またしばらくは戻らないの？」

とミトさんが聞いてきたから「うん。」と答えた。

俺の言葉にミトさんは黙り、しばらく止まっていた後に動き出し、隣の部屋に行った。

そして箱を持って帰ってきた。

「本当は渡す気は無かったんだけど、でもこれはゴンが持っているべきだから。」

と鉄の箱を俺に渡した。

「ジンから……。あなたのお父さんから預かっていたものよ。」

あなたがハンターになったら渡してくれって。」

「親父が？」

「ええ、ゴンには話して無かったけど、あなたの父親、ジン・フリクスはハンターなの。」

それに……。もう死んだって教えたけど……。あれは嘘なの、ジンは本当は生きてるわ。」

ミトさんが深刻そうに言う。別に知っていたから良いけどね。

「……そう。生きてるんだ……。」

と空気を読んで言つとく。

その後は「ジンについて何か聞きたい？」と言われたが、「いや、いいよ。」と断った。マジで興味無いしね。

箱を持って自室に向かい、キルアに箱の事を言った。

「ふーん、ゴンのオヤジの箱ねえ。」

箱をいじっていたキルアが疑問を持った。

「これ、どーやって開けるんだ？」

と言ってきたので箱を受け取り「こうやるんだよ。」と箱を持ちながら練をした。

そしたら光を放ちながら箱が崩れて中からまた箱が出てきた。

鉄片を拾ったキルアが

「ただの鉄つきれだ。全然接着した後も無い。

それに何だ？このデザイン。」

と神字が入った鉄を見せて聞いてきた。

「それは神字と言って念を込めると定められた命令に従うように出来ているんだ。」

そう言っつて箱を見ると今度は差し込み口があつたのでハンターライセンスを差し込んだ。カチツという音が鳴り、鍵が開いた事が分かる。

「指輪とテープとROMカードか…。」
指輪を見ると

「指輪にも神字が刻まれているな。これは迂闊にはめられない。」
そう言っつて指輪を箱に戻す。キルアも「ああそうだな。」と同意する。

「とりあえずテープを聴いてみねーか？」

キルアが言っつたので別に聞きたくないが一応ラジカセを用意する。
そしてカセットをセットして再生を押す。

「ダビングしないのか？」とキルアが聞いてきたので「別にいらん。」と返事した。

『……よお、ゴン。やっぱりお前もハンターになっちまったか。』

それで一つ聞きたい事がある。お前オレに会いたいか？会う気があるならこのまま聞いてくれ…。もしその気がないなら停止ボタンを押せばいい。』

そう言われたので速攻停止ボタンを押す。

しかしキルアは以外だったのか

「え、聞かねえのか!？」

と驚かれた。

「ああ、別に今更親父の事なんてどうでも良い。親父が生きているって事は俺を捨てた事には変わらねえからな。」

その言葉を聞いてキルアも引き下がった。まあ、キルアに選択肢は無いしな。

しんみりとした空気になつていたら突然力チツとラジカセが勝手に動き出した。

キュルキュルと音を鳴らしながら巻き戻しをする。これがオプシヨソン装備なら便利で良いんだけどな。

「止めたテープが勝手に動き出した!？」

とキルアはビツクリし、凝で見てもいたらデッキがオーラを纏つていた。

「念!!念でテープを巻き戻してる!!」

キルアが大声で言う。あんま大声出すなよ。ミトさんが何かと思つて来たら面倒だろ？

巻き戻しが終わったのかデッキは一旦停止し、録音ボタンが勝手に押された。

「まあ、こんな事だろうと思った。」

俺は気にせずベットに入り寝る体勢になる。

「え!?寝んの?」

とキルアが突っ込んできたので

「ああ、別に止める意味無いし。」

それと明日にはこの島を発つからな。」

そう言つて本格的に眠る事にした。

キルアの「明日あ!？」という声とジーという録音の音が部屋に鳴り響いていたのだった。

34 辻褃合わせ

翌日、予定通りクジラ島を出た。
ミトさんには「しばらく帰っては来れないけど手紙を出すよ。」と
約束して別れを告げた。

そして今は空港のある最寄りの港まで船で移動中だ。

「なあゴン、何でもう出発なんだ？」

キルアが聞いてきたので。

「もう顔を出してまた旅に出る事は伝えたし、あの島にいると好き
勝手に動けないから息が詰まる。

だから出発した。」

そう伝えると「ふーん、俺はもうしばらく居たかったんだけどな。」
と文句を言う。それは無視して

「それに、この中身が気になるしな。」

と箱に入っていたROMカードを見せる。

「あー、確かに。でもどうして家で見なかったんだ？」

「実家にはジョイステが無いからだ。だから今から確認するぞ。」
と言ってブリッジを後にしてキルアと共に別の場所に向かった。

この船は豪華客船だからかゲームやパソコンルームがあった。そこ
は暇つぶしのための部屋だからか様々なハードがあり、古いジョイ
ステも勿論あった。

「さて、何のゲームのデータがあるか。」

とジョイステにROMカードを差し込んで起動させた。

起動した後、カードの中身を見ると一つのマークだけが表示された。
「入ってるゲームは一つだけだな。」

俺の言葉にキルアも反応する。

「ああ、にしてもスゲー容量だな。一つのゲームで30ブロック全部使いきってる。」

確かに珍しいな。普通なら1〜2ブロックだからな。

アイコンをマークに合わせるとグリードアイランドと出た。

「グリードアイランドね…。」

と明らかに知っているニュアンスで言ったからかキルアが聞いてきた。

「知ってるのか？」

「ああ、伝説のゲームさ。」

1987年に正規ルートで発売されたが、販売個数100個というふざけた数しか売らなかった。」

「100個!? っげー少ねーな!?!」

「ああ、そして何よりもふざけてるのはその販売価格。現金一括払いの58億ジエニー。」

「58億!?!?」

とキルアは驚愕する。販売個数が100個ぐらいなら別にそこまで驚かないが、価格が58億など最早ゲームの値段じゃない。

「そのため手に入れるのはほぼ不可能だ。俺も欲しかったから探したけど見つからなかった。」

「…だろうな。ていうかお前58億も持ってんのかよ!?!?」

「そりゃね。お前が天空闘技場で念を覚えている間、ずっと稼いでいたからな。」

俺がずっと200階に上がらなかったのを覚えているから「あー、あれでか。」と納得した。

「でも今買うとしたら58億では足りないだろうな。多分倍以上は必要だろうし。」

「だろうな、そんなゲームならプレミアがついているだろうし、個人から譲ってもらうならあり得るな。」

キルアも同意する。

しかしここで

「いや待てよ、もしかしてタダでプレイ出来るかも。」

俺の呟きに

「マジで！？どうやって!？」

とキルアが聞いてくる。

とりあえずジョイステの電源を切ってROMカードを引き抜き、今度はパソコンルームに向かう。

そしてパソコンを起動させてアドレスを入力するとハンター専用のサイト『狩人の酒場』が出てきた。

「ハンター専用サイト？」

覗き込んでいたキルアが聞いてきた。

「文字通りハンターにしか利用出来ないサイトだ。何せライセンスとライセンスナンバーの入力をしないと入れないからな。」

俺はライセンスナンバーを打ち込み、ライセンスをカードリーダーに差し込む。

そして入ったらバーテンの男にカーソルを合わせてクリックする。

「うわ、スゲエ量だな。」

いきなり表示された様々な項にキルアがビツクリする。

俺は無視してゲームの項を開いてグリードアイランドをクリックした。

『グリードアイランドが2000万いたただけ。』と表示された。

「たかだかゲームに2000万か…。」

「まあ流石にタダじゃ教えてくれねーか。」

とムカつくが支払う。

『OK、それじゃよく聞きな。グリードアイランドは念能力者が作ったゲームだ。』

その説明にキルアは驚く。そして色々と情報を教えてくれたけど別に知っているからスルーする。

粗方説明が終わった後にまたクリックしてみるとグリードアイランドがヨークシンシティのオークションで競売に出される事が分かった。価格は最低89億ジェニー。

「……はちじゅう、きゅうおく……。
やっぱ上がってんよ30億もー！！」

キルアが絶望したかのように嘆く。周りが見てくるので

「うるさい、静かにしろ。それにこの額は予想の範囲内だ。」
と静かにさせる。

「確かに予想の範囲内だけだよ。89億だぜ？無理だよ。」

キルアは静かにはしたが絶望は変わらない。

「俺が知りたいのはこの次だ。」
とまたクリックする。

そこには大富豪のバツテラ氏がグリードアイランドをプレイするプレイヤーを募集している情報だった。

「プレイヤーの募集……？契約達成の暁には500億ジェニー！！？」

とまた叫ぶ。流石に二度目はムカついたので殴って静かにさせる。

「静かにしろと言っただろ？」

バツテラがグリードアイランドを集めてクリアさせようとしている事は分かっていたからな。以前の募集では乗らなかつたけど、今回は乗る事にするか。」

募集の要項をよく読んだ後に参加する旨をメールする。

「9月10日ヨークシンシティのサザンピースにて選考会。

オークションが終わってすぐだな。という事はサザンピースに入るためにカタログを買う必要があるな。あれも1200万もするからな。」

次々の出費のため息をつく。

「またとんでもない値段のカタログだな……。」
キルアも呆れている。

「それで、キルアはどうする？お前もこのゲームやる？」
俺の質問に

「当然、そんな珍しいゲームなんて滅多にお目にかかれ無えだろうからな。」

当たり前だと言わんばかりに言う。

「という事は一つ問題があるな。」

「何だ？問題って？」

自分の事なのに何でそんな自信満々なんだよ。

「お前の事だ。グリードアイランドにはプロハンターでさえほとんど帰って来れない。という事はこのゲームはかなり難易度が高い。

何せゲームオーバーになつてもコンティニュー出来ないからな。

つまりたかだか4大行を覚えただけのお前では簡単にゲームオーバーになりかねえっつゝ事だ。」

俺の言葉に若干青筋を立てるキルア。いきなりの役立たず宣告だからな。

「じゃあどうすんだよ？」

キルアが聞いてきたので誠に遺憾だが

「鍛えるしかねーな。ていうかかお前まだ発さえ出来てねーだろ？」

俺の質問にキルアは頷く。

「せめて能力ぐらゐは手に入れねえと話にならねえ。

まだ期日まで2ヶ月以上あるから今の内に絶対え覚えろ。覚えなきやお前はお留守番だ。」

俺の宣告に「うげえ！」と嫌がるキルア。そんなに嫌か？

まあでもムカつくがコイツ才能がスゲーから2ヶ月もあれば能力はおるか応用も覚えそうだな。

念のために能力を会得したら応用技や基礎体力も上げとくか。

35 どうでも良い出会い

ヨークシンに着いた俺達は先ずホテルを取り長期滞在に備える。勿論部屋は別々でキルアは全額自腹だが俺はライセンスを使うので無料だ。やっぱりライセンスススゲエ。

キルアの部屋で先ずは発の開発だ。

「キルアは変化系だったからヒソカみたいにオーラを何かに変化させる能力が向いている。」

何か変化させたいイメージはあるか？」

俺の質問に

「ああ、少し前から試してみたい物があつたんだ。」

と言ってキルアはスタンガンを出した。

「スタンガン？……つまりオーラを電気に変化させるという事か？」

「ああ、出来るよな？」

キルアが不安そうに聞いてくる。

「勿論、オーラを電気に変化させる事は可能だ。」

通常なら拷問に近い強力な電気を何年にも渡って浴びる修行をしないと電気に変化させる事は出来ないが、お前なら即可能だろう。育った環境が環境だからな。」

俺の言葉に自信満々にキルアは答える。

「ああ、何せ強力な電気なら生まれた時から浴びていたからな。」

それを自慢のように言うべきなのだろうか……。発狂する自信なら俺にもあるがな。

その後キルアは俺の前でスタンガンを自分の腕に押し当てて電気を流す。という自傷行為を見せてくれた。

あれって改造してあるから通常の倍以上の電流が流れるってキルア

が言ってたな。それを自分の腕に押し当てて信じられない。しばらく放電した後、電力の切れたスタンガンを捨てて、キルアは通電するように両手の人差し指を近づける。すると微かにだがバチツと電流が見えた。まさか一発で成功させるとはな。

「ゴン！今出来たよなっ」

と嬉しそうな目をして俺を見てくるキルア。何か原作よりも子供っぽい反応だな。

「ああ、微かにだが電流に変化出来ていたな。」

俺の言葉にキルアは満面の笑みになる。

「だがまだあの程度では不十分過ぎるな。電圧も精々静電気程度だし。」

今度はふて腐れた顔になって

「まだ始めたて何だから仕方ねえだろ？」

と使ったスタンガンを充電スタンドに立てて充電してあるスタンガンを取り出した。まさかもう2発目をする気か？

「はあっ」

と気合い入れてまたスタンガンを腕に押し当てた。マジでどんな体してんだよ。

充電が終わったのかスタンガンを床に置いて今度は手を開いて両手を近づける。するとさっきと比較にならない量の電流が流れる。

「う、うぐ！ううううっ」

しかしまだ制御が出来ていないのか電流は暴れている。そして少しすると電流が消えた。

しかし2回目、これとは……。こいつ才能ありすぎ。

「はあ、はあ。電圧が上がってきたな。」

少し息をつきながら嬉しそうに言うキルア。そりゃあ自分が成長している事が分かれば嬉しいだろう。

その後は俺はキルアの部屋を出た。別に俺いる意味無いし。ヨークシンシティに出て色々見て回る事にした。カタログを買うにはまだ早いからな。

やって来たのは原作でお馴染みの値札競売市。

見事に人気のトレカや人形など流行物からガラクタみたいな物まで一杯ある。

凝をしながら品物を見ていると何品かオーラを纏った商品があった。残念ながらベンズナイフは無いが。

他に先客がいないから適当に2〜300ジェニーって書いて時間を待つ。

そろそろ制限時間になってきた頃にまた値札を見に行ったら値段が4倍に書き換えられていた。名前はゼパイルと書いてあるので人だろう。

別にこの人と会っても会わなくても問題無いがムカつくから更に倍額を書いた。

競売結果は4品中2品とられた。まあ、原作と違って俺一人だからこんなもんか。

手に入れたのは点と線だけの何が良いか分からない絵と荒い木彫りの人形。絵はまだしもこの人形に価値があるとは思えんな。

とりあえず鑑定して貰えば分かるだろう。と質屋に行こうとしたら

「ボウズ、ちよつと良いか？」

と話しかけられた。振り向けばゼパイルがいた。何で？

「お前ゴンだよな？」

と聞かれたので

「さあ？何でそう思ったの？」

とイエスともノーとも取れる返事をした。

「そりゃあ俺が目をつけた物を2個も取られたからな。どんな奴かと待っていたらまさかガキだったとはな。」

待ち伏せしてやがったか。敵意が無かったから反応出来なかった。

「ふーん、で？何の用？」

「ああ、お前さ、その競り落とした奴を売りに行くんだろ？」

「だったら何？」

「物は相談何だけどさ、この壺とその人形を交換してくれねえか？その人形はタダ以下のガラクタだがこの壺は最低でも10万はするぞ？」

もしかしてこの人形ってお前の贋作か？

「何でわざわざそのガラクタと10万もする壺を交換したがるの？」
俺の質問にゼパイルは恥ずかしそうにして

「ん〜。実はな…その人形は俺が作った物だ。」

やっぱりこの人形は贋作か、通りで作りが荒いと思った。

「…この人形はアンタの作品なのか？」

「いや、俺の創作じゃねえ。贋作だよ。所謂パチモンさ。

極貧時代にな、その日の飯代にもことかいてちよくちよく作ってたんだ。目利きを初めて金がそこそこ入るようになってからはスツパリ手を引いたがな…。」

市に出るとたまにそんな昔の恥が売りに出されててな。何を売いても買戻す事にしてるんだ。」

「ふーん、成る程ね…。」

この人形って本物なら幾らぐらいすんの？」

「本物でも精々2、3万そこそこだよ。それはまだ駆け出しの頃に作った奴だからな。贋作やりたての若造にそんな高い仕事は回ってこねーさ。」

やっぱりか…。」

「んー。でもまだ信用は出来ないからこれから売りに行くのに着いてきてよ。」

俺が持つてるこの絵とその壺を売りに行く。そして壺の鑑定額が10万以上なら売れた金と引き替えにこの人形を交換するよ。」

「おう、分かった。」

とゼパイルも納得。むしろ人形を鑑定に出して恥をかかなくてやっただから万々歳だろう。

近くの質屋に入り鑑定して貰ったら結果は絵は20万、壺は15万だった。

絵を競り落とした額は1万だったから19万の儲けか。

勿論問題無いので換金して35万ジェニーを得た。スゲエ簡単に結構な額を得たな。

質屋を出て

「んじゃ、約束通り15万ジェニーとこの人形の交換な。」

と人形を渡した。

「おう、サンキュー。」

とゼパイルも納得しているようだ。

その後はお互い軽く話して別れた。別に原作みたいに親しくなる必要は無いし。

ホテルに帰ってみるとキルアがまだスタンガンで頑張っていた。よく体が保つな。

「どのぐらい進んだ？」

俺の質問に

「ん〜。何とか電圧は上がって来たけどまだ制御がイマイチだな。」

と順調だと報告してきた。たかだか半日でもうこんなに進んでんのかよ。

その後は自分の部屋に戻ってルームサービスを取って寝た。
ゲームプレイまで後2ヶ月か…。

このままキルアを鍛えればビノールトを圧倒させるだけの実力がつくかも。

化け物かアイツは…。

36 一足早い開放

あれから5日が経ち、キルアは発を完成させた。

僅か5日で電撃を操作出来るとかも同じ人間とは思えない。出来るなら俺にもその才能があつたらなあ…。

まあ、あつたとしても特にやり方は変わらないだろうが。

「これで俺もゲームをプレイ出来るんだよな？」

キルアが自信満々に言う。言っちゃ悪いがただか電撃を出せる程度で威張るなよ。それならスタンガンでも持った方が早えーし。

「残念ながら発を会得するのはあくまで最低条件だ。ハッキリ言ってまだお前は戦力にさえもなれていない。

このままじゃプレイして直ぐにゲームオーバーになるのがオチだ。」
俺の言葉にキルアはピクついている。頑張ってもかけられた言葉がこれじゃね。

276

「何で戦力にもならないんだ？確かにお前程強くは無いだろつが、そこそこ強いぜ？オレ。」

そりゃ圧倒的に強い念能力者と戦った事が無いからだろ？

俺は旅団と会わないからこのままだと経験が足りな過ぎるな。あの頭に刺さった針を抜けばマシになるのかな？

「そうか、じゃあ実戦テストだ。来いキルア。」

と言って構える俺、正々堂々なんて俺らしく無いがな。

「え？」

とキルアはいきなりの展開に戸惑うばかり。しかし俺は気にせず練習をしてキルアを威嚇する。

その自分よりも圧倒的に多いオーラを見たのかキルアは後ろへ下がろうとする。

しかし俺は一気に近付き凝でオーラを込めた拳で殴ろうとしたらキルアは素早い動きで避け、頬の皮を切る程度で済んだ。

「見ただろ？それがお前の本質だ。お前は常に勝てない相手には逃げようとする。だからと言ってそれが悪いとは言わない、命が最優先だからな。」

しかしそれはお前自身の意思では無い。」
俺の言葉にキルアは何を言っているのか分からない。という顔をした。

「お前はさっき俺が近付いた時、僅かに構えようとしたが突如それを中止して逃げた。その時お前の脳裏に何か命令が無かったか？例えば「後ろに下がれ。」とか。」

その言葉を聞いてキルアは目を見開いた。

「…確かに、ゴンが接近した瞬間は電撃をくれてやるうかとしたけど、何故か体は逃げた…。」

呆然としながら自分の体を見て指が意思通り動くか確認するキルア。「最初はお前のその逃げ癖はただたんに環境による要因だと思った。何しろお前の家族はお前の事を溺愛しているからな。お前に「勝てそうにないなら逃げろ。」という洗脳を施したとしても不思議は無い。」

しかし今の反応は洗脳では無かった。何しろ正気の状態で避けたんだからな。だとしたら何か？

答えは決まっている。」

そして俺はキルアを見る。これだけヒントを与えたんだ。分かるだろ。ていうか解んなきゃ有無を言わさず頭に指を突っ込んで針を抜く。

「…念による…操作？」

「正解。恐らくイルミの念だろう。多分アイツは操作系。針を使って対象を操る筈だ。」

それを聞いてキルアは針が刺さってないか探し出す。探して見つかるような場所にあつたらとつくとくに抜いてるに決まってるんだろ。

「簡単に見つかる方法を教えてやる。」

そう言つてまた練をする。さっきよりもオーラを出す。

それに反応してキルアは逃げ出そうしたが

「動くな、これが簡単な探知方法だ。」

今お前な頭の中には何か命令が流れているだろう。その命令を発している場所を特定して針を抜け。一番命令が五月蠅い場所を探すんだ。」

俺の言葉に一応逃げ出すのは止めたが体中が震えている。

「それが出来ないならお前との旅はここで終了だ。二度とお前と会う事も無いだろう。結局お前は変われなかったという事だからな。」

その言葉にキルアは何とか逃げ出すのを耐えている。

はつきり言つて失敗してこれを口実にコイツと別れたい。だから心の中では「とつとと逃出せ。」と言つ。

俺はキルアにどんどん近付く。俺が近付く度にキルアは逃げようとする体を動かさないようにする。

そして遂にはキルアの眼前にまで来た。キルアの震えは目に見えて酷くなり、今では泣き出している。

そこまで俺と別れるのはイヤか？まあ、コイツ俺以外に友達いないしな。

更にトドメを刺すために腕をゆっくり近付ける。

腕にはオーラを集中させて今では硬に近い。害意を乗せてあるから常人なら心臓マヒを起こしてもおかしくないな。

ゆっくりと近づく腕をキルアは目を恐怖に染めて見る。

「腕がお前に触れてもお前とはお別れだ。」

との宣告に更に涙を流してキルアは逃げ出すのを耐える。

腕が段々と近付き、これでコイツ供お別れかな？と期待したらキルアが頭に指を突っ込みやがった。

残念…。抜きやがった。

キルアが突っ込んだ指を抜いて俺に見せる。キルアの手の中には確かに針があった。

それを見てキルアから離れて腕を引いてオーラを纏に戻す。

「どうだ？気分は。」

キルアに聞くとサツパリとした顔で

「ああ…。」

なんかスゲーースツキリした。完全に目が覚めた…いや、解放されたって感じかな。」

涙をぬぐうキルア。エラく満足気だ。俺は対照的に不満だが。

「…よし、これでお前を縛る物は無くなった。これからは自分の意思で逃げ出せ。」

その言葉に「ああ！」と嬉しそうに頷くキルア。でも逃げる事を嬉しそうに言うべきなのか？

「さてと、ではいよいよ始めるか。」

俺の言葉に「何をだ？」と聞いてくるキルア。

「決まってるだろ。お前の修行だ。」

「え！あれで終わりじゃないのか！？」

「何を言ってる。あれは最低条件をクリアしただけで別にお前の身体能力や念能力が強くなった訳じゃない。

さっきも言ったが、お前は弱い。特に念による戦闘法については素人だ。だからこれから2ヶ月間みっちり鍛えて最低限を会得させる。」

キルアは少し怯んだが、自分をわざわざ鍛えてくれるとあのゴンが言ってくれたんだからと内心少し嬉しい。

「おう！！」

と気合いを入れる。

先ずはヨークシンシティ郊外の岩山地帯に行き、予め用意していたシャベルとトロツコ、懐中電灯、ロープなどをキルアに渡した。

シャベルを受け取ったキルアは

「なあ、ゴン。これから修行をやるんだよな？」

と聞いてきたので「勿論。」とだけ答えた。

「なら何でこんなのを用意してるんだ？これから工事でもやるのか？」

「ある意味それに近いな。」

と言って俺が岩山まで歩く。

そして岩山の前に立ち

「この方角に真っ直ぐ行くとヨークシンシティに着く。大体距離は2〜30km程度かな？」

その言葉にキルアは「真っ直ぐ？……まさか。」と気付いた。

「そう、岩山は越えず、真っ直ぐヨークシンシティに行く。つまりこの岩山を掘りながら進め。」

俺の言葉に絶望したかのような顔をするキルア。

「更に」そう言って人差し指を立てる。

それに「？」とするキルア。

「凝を試してみる。」

そう言われたのでキルアが凝をして俺の人差し指を見ると数字の1が念で作られていた。

「数字の1……？」

とキルアが聞いてきたので

「そう正解、これから2ヶ月間。俺が人差し指を立てたら速攻凝をしる。反応が遅かったら罰則として腕立て200回だ。」

その言葉に更に絶望するキルア。

「ちなみにこれをやる理由は凝の動きを早くするためだ。

いいか、戦闘の際は必ず凝をしる。ていうか逆に凝をしないと相手の念が見えないから絶対勝てない。だからこの修行で凝を瞬間的に出来るようにしろ。」

そう言うとキルアも納得する。

「それじゃ、始める。」

キルアがシャベルを持って岩山に突き立てる。しかし弾かれた。まあ、ここの岩はゲーム内と違って硬いからな。

「ゴン~~~~岩が硬すぎてシャベルが通らないぜ？無理矢理やれば通せるだろうが、それじゃシャベルがイカれるだろうし。」

キルアが聞いてきたので

「ならシャベルを強化すれば良い。」

アドバイスしたがキルアは分からない。

「お前、シャベルで掘る時のオーラはどうしてる？」

「オーラ？どーもこーも普通だけど？」

「つまりシャベルも体の一部と考えるんだよ。」

その言葉に「ああ！！」と分かつたらしく、シャベルにもオーラを纏わせる周をした。

そしてその状態で岩山にシャベルを突き刺すと簡単に掘れた。

「スゲー！まるで岩がプリンみたいだ！！」

と嬉しそうに言うキルア。

「それが纏の応用技、周だ。」

俺の言葉に「へえ〜。」と納得する。

「でも応用技は基本とはケタ違いに体力と気力を消費する。調子に乗ると直ぐにバテるぞ。」

俺の言葉に気を引き締めて岩山掘削を再開した。

この後見てるのはヒマだからホテルに待機させていた念人と位置を交換させた。

念人はコピーが出来ないから強さは微妙だが、念能力は俺と同じだからキルアよりは遥かに強い。

それにその後の寝てる時のあの特訓を見張らせる事も出来る。

複雑な思考や行動、念能力も使えるから最早人間に近い。

それにアイツは睡眠や食事を取る必要が無いから一晩中見張って時々ナイフを投げてロープを切る事も出来る。

監視や修行の組み手などは今後アイツに任せよう。

俺は俺で鍛錬をする必要があるんだけどな。ツエズゲラみたいにはなりたくないし。

37 コイツが主人公の方が良いんじゃないか？

原作では70kmぐらい離れた地点から掘らせていたけど、原作と違ってキルアは一人で掘るので、残り時間を考えて約30km地点までを掘らせた。

流石のキルアでも30kmもの岩山地帯（確か原作でも70km全部が岩山じゃ無かったな。）を掘るには期限ギリギリになるだろう。と思っていた。

コイツマジで化け物。

念人からの連絡で1週間でキルアがヨークシンシティに着いたと連絡があった。

念人との位置交換をして実際に見てみたら本当にヨークシンシティの入口にいた。

「よっしゃー！！ヨークシンシティ到着ー！！！」

とキルアは歓喜の声を上げていた。

俺は同じぐらいの距離を進むのに一月以上かかったのに…。

やるせない気分陥ったがこれが主人公補正と諦めてキルアに声をかける。

「よし、んじゃあまた岩山地帯に戻るぞ。」

と宣言したらキルアは「またあ！！？」と驚いた。まあ、苦労して抜け出た所にまた向かうんだからな。

再び岩山地帯に戻り

「本来なら次は敵を観察し、分析して攻略する戦闘考察力を高める修行をしたいんだが、ここにはそんな都合の良い敵はいないからそ

れはゲーム内でやるとして、これからやるのは防御のための修行だ。

「そう言っただけは右腕に硬をした。」

凝を習慣つけていたキルアはそのオーラを見て驚く。

「スゲエオーラだな……。」

「これは纏、絶、練、発、凝を全て複合した応用技。「硬」だ。」

全身のオーラを全部一部に集めて攻撃する。だから通常攻撃を遥かに凌駕する。

今からこの硬を込めた攻撃をするからお前は受け止める。そして決して避けるな。」

その言葉にキルアの顔色が変わる。

「お前の思う通り、この硬での攻撃は纏での防御を軽く超える。つまり普通の防御でガードしてもかなりのダメージを負う。」

その場合、どうやって硬を防ぐ？」

俺の質問に少し考えて

「……全身を硬にする。矛盾してるけどそんな感じだろ？」

「その通り、纏と練の応用技「堅」を使う。全身を通常よりも遥かに多いオーラで防御する。」

硬での防御よりは落ちるがこれが最もスキが無い実践的な防御法だ。訓練次第では硬をも防げるだろう。」

「練をやってみる。」

俺の指示通りに練をするキルア。その状態で俺の硬で固めたパンチを防げ。」

そして俺はゆっくりとキルアに拳を近付ける。

キルアは（遅い？）と思ったが、長年の経験からか体の力は抜かず、堅をしなから構えた。

そして俺の拳が当たった瞬間、ドン！！というデカイ音が鳴り、原作のゴン程では無いが吹っ飛んだ。

「これが硬のみの力だ。この威力に拳本来のスピードと破壊力を上乘せすれば更に威力は数倍、数十倍に跳ね上がる。」
キルアはあまりの威力に驚いて少し呆然としたが、直ぐに立ち上がった。

「最初は今みたいにゆっくり打つが、いつ打つかは言わない。だから堅をずっと維持している。」

そして俺は硬をして構え、キルアは堅をして防御態勢を取った。

俺がしばらく攻撃しないでいるとキルアの堅は乱れてきて、遂には堅が解けて倒れ込んだ。

「ハアツ、ハアツ。」と息切れするキルア。

「約3分か……。まあ、それぐらいだろうな。」

それなりの実力者と戦うなら最低30分は堅を維持出来ないと勝負にすらならない。ちなみに最終目標タイムは3時間だ。」

その言葉を聞いてキルアは絶望する。30分すら絶望的なのに6倍の3時間なんて……。

「それと……。」

とキルアにシャベルを渡した。キルアは「まさか。」と呟いた。

「その通り、これまで通り周の修行も平行して行う。」

先ずは周で岩山を掘り、筋力や持久力、オーラ総量や操作技術を高めた後に堅の維持や防御力強化をする。」

いきなりのハードスケジュールにキルアは冷や汗をかく。

しかし今更「やりたくない。」など言えないし、力関係は完全に決まっているためせつせとやるしかないと理解する。

キルアが岩山の掘削を始めたのでまた念人と位置交換をした。
流石に堅の時間を増やすのはかなり時間がかかる筈だ。これならあ
と一月の制限時間一杯でようやく終わるだろう。

後の修行はビスケに丸投げすれば良い。

でももしビスケが師事を拒否したらどうしよう？

そうなったら俺が鍛える羽目になるだろうし、一坪の海岸線を得る
ためのイベントをするのも難しい。何せ最低でも15人も必要なイ
ベントだからな。

プレイヤーじゃなくて良いなら念人を使えば簡単だが、プレイヤー
でないと無意味らしい。

そんなときや無理矢理にでもドッジボール戦にするか？

まあ、最悪一坪の海岸線が無くてもゲンスルーのカードを全部奪え
ば良いか。

別にコンプリートする必要は無いし。

でももし俺のコピーでもカードが現実世界で使えないならクリアす
るしかない。

38 行き過ぎ？

8月中旬に入り、そろそろカタログを買う事にしたのでサザンピースに向かった。

「いらつしやいませ！」

受付が応対してくれるが、若干変な目で見てくる。まあ、カギが来たんだからそりゃそうか。

「カタログを買いに来ました。」

「かしこまりました。お支払い方法はいかがなさいますか？」

「銀行振込でお願いします。」

胡散臭げに見てくるが一応応対してくれた。

そして少しすると受付が箱を持ってきた。

箱を開けると中には分厚い本が入っていた。

「こちらがカタログになります。」

こちらに今年の競売品が全て掲載されております。このカタログにはカードが付いておりまして、これが入場券の代わりとなります。

この一枚で5名様までなら9月6日～10日までの開催中何度でもご入場いただけます。ただし競売に参加できるのは個人・団体ともに1名義のみとさせていただきます。」

長々とした説明を終えてようやくカタログをゲットした。

早速グリードアイランドを探してみたら見つけた。

にしてもこのゲームの表紙はスゲエな。血痕みたいなのとタイトルが書いてあるだけで明らかに何かヤバそう。

しかし説明書に最低一週間はゲームに集中する必要があるとか書い

であるけど、一週間でクリア出来るのか？

それともこれはただ単にゲームを止めれるまでの時間か？リープを手に入れるのは難しいだろうが、正規のルートから出るにはそんなに時間はかからないと思うが？

キルアに堅の修行を課して2週間が経過したある日、予想外の連絡が来た。

「キルアが堅の持続時間を30分まで延ばしたが、この後どうしたら良い？」

と念人から連絡が来たので念人と位置交換をして直接確かめてみたら、本当に堅での持続時間が延びているし、防御力も上がっている。何か原作よりも早くね？確か原作では一月くらいかかっていたような…。

もしかしてあの針を抜いたせいか？それとも念人が組み手の相手をしてやっていたからか？

まあ、良いや。

それにしても次はどうしよう？

このまま教えているとビスケに習う必要があまり無くなってしま…。でもこの世界ではキルアをあまり戦わせる気は無い。

だって下手に死なせるとあの家族がうるさそうだし、俺が一人でやった方が楽に終わる。

だからある程度経験を積ませるためにはビスケに頼むのが一番。

まだ戦闘分析とかは教えてないからビスケにはそっち方面や系統別の修行をやらせよう。

「よし、大分硬による攻撃も耐えられるようになったな、堅の持続時間も延びたし。」

「一応褒めとく。ほとんど修行は見てないけど。」

しかしそれを知らないキルアは嬉しそうな顔をしている。俺はほとんど褒めないからな。それは念人も同じ。

「さて、じゃあそろそろ防御だけではなく、実戦的な修行に移るか。」

その言葉にキルアは顔を引き締めた。

「堅をしろ。」

そう言われてキルアは素直に堅をする。

「この状況を分かりやすく言つと攻撃力も防御力も半々。つまり攻
防力50と言われる状態だ。」

ちなみに硬は100か0の状態。硬をしている場所の攻防力は非
常に高いがそれ以外は通常以下だ。纏の状態なら全身の攻防力は1
0程度だ。

つまりもし互いに堅の状態ならいくら戦つても大したダメージは与
えられない。

その場合どうするべきだ？」

「凝を使う。」

原作ゴンみたいに間違えれば可愛げあるのに見事正解を言いやがっ
た。

「正解。」

全身の攻防力50から例えば右手の攻防力70、他の部分の攻防力
を30にする。

このように凝を使い状況に応じて攻撃力、防御力を加減する。これ
が攻防の基礎だ。」

実演しながら分かりやすく説明してやった。

「よし、ではお前もやってみる。」

と促したのでキルアも再び堅の状態になった。

「では俺の指示通りにやれ。」

右手70、全体30。

おおよそで良い。まだ始めたばかりだからな。

左足80、全体20。」

など30分続ける。

30分後にはキルアはハア、ハア言ってる。

「これを30分間、1日3回今までのメニューに加える。」

その言葉にキルアは反応した。

「今までのメニューに……。つまり今までの修行全部プラスこれもやるのか？」

と縋るように聞いてきたので

「勿論、何か異論が？」

と聞いてやったら「い、いや、別に……。」と黙る。下手に口答えしたらキツくなるからな。

「それと、組み手の修行にも入る。」

その言葉にキルアは更にガツクリする。コースが追加されたからな。

「本来なら実力が拮抗した者同士するのが好ましいが、そんな都合の良い相手はいないので仕方がないので俺が組み手の相手となる。」

堅を張って流を見せる。

「現在は全体の攻防50。これが戦闘における基本型。」

これに攻撃の瞬間に右拳で殴るなら右拳の攻防力を70、全体30に変える。

攻防力の変化、これを「流」と呼ぶ。

つまりお前はこれから流を限りなく早くやるのが目標だ。上達すれ

ば全力の早さで攻撃出来るようになる。」
ビスケ程では無いだろうが、キルアには見えない早さで流をして見せる。

それをキルアは真剣に見ている。

「よし、まずはやってみる。最初はゆっくりで良いから丁寧にスムーズにだ。」

キルアは指示通り先ずは堅をやり、そしてゆっくりと流をやる。

右拳にオーラを移動させる気らしいが、やはり最初なだけあって非常に遅い。流が完成するまで12秒も有した。

「よし、今はそれで良い。しかし何れは自分の本気のスピードと同等に早くしろ。」

では次は組み手だ。

交互にどこどこを攻撃しても良い。防御側は相手の攻撃力を見極めて流をすること。」

そして俺達はユツクリと戦い始めた。俺は全力でも流をやるけど、それをやるとワザと殺した事になるから制裁を食らう可能性が高い。だからキルアに合わせてユツクリとだ。

にしても相手がいるって良いね。俺はずっと一人か実戦で鍛えていたからこんな風にユツクリなんて出来なかった。こんな早さで戦えば死ぬのがオチだ。

30分程やり

「よし、終了。勿論これもメニューに加えて毎日行う。」

それじゃ今日は終了。」

と終了宣言をする。

キルアは「やっと終わった〜。」と喜び、普段通り岩をロープで

結んで手に持ち寝る。

俺は念人と位置交換をして念人にメニューの追加を指示した。

これではオークションが終わるのを待つばかり。

その前に幻影旅団殲滅の知らせを心待ちにしているがな。

何しろアイツ等がこの世にいるならそれだけ危険性が上昇する。まだ金は払っていないが、ちゃんとキルアを契約通り鍛えているんだ。契約不履行ならキルアは放り出す。

39 依頼達成(前書き)

戦闘描写が無くてすみません。

39 依頼達成

待ちに待った瞬間がようやく訪れた。

8月30日深夜。

一本の電話が来た。

『依頼通り幻影旅団の殲滅が完了したぞ。』
とゼノからの電話が来た。

「では約束通り全旅団の首を落とした画像を送ってくれ。

画像を確認し次第報酬を振り込む。」

『分かった。ところでキルの成長具合はどうじゃ?』

ゼノが聞いてきた。やはり孫が心配なのか?

「一言で言うと化け物か? だな。少し教えれば簡単に習得するし常人なら一年かかるような事もアイツは一月で覚えやがる。

才能の塊なんて表現では足りない程の才能だな。」

俺の心からの感想に

『そうか、そうか。元気そうじゃな。』

と嬉しそうな声を上げるゼノ。ここだけ聞くならただの孫の成長を喜ぶ祖父なんだがな。

『じゃあ今から画像を送るからの。』

とゼノが切った直後に画像ファイルが送信されて来た。

ちゃんと13人分、団長やヒソカなどの首も切断されているので大丈夫だろう。流石にゾルディック家を騙すのは無理だろうしな。

約束通り600億ジエニーを指定口座に振り込んだ。

「ついでに死体は焼いといってくれ、もし死体を操作されたら面倒だからな。」

ともメールしといた。

まあ、これは依頼じゃなくてお願いだからやらなくても良いけど、

やっつけていてくれるのならありがたい。

でも少しすると再びメールが来て

「キルを頼むぞ。」

との文章と燃えている死体の画像も送られてきた。

まあ、依頼金プラスキルアを預かっているからしてくれただか。

これで甦るのはほぼ不可能だろう。

流石に肉体が燃えてしまつては操作も出来ないだろうし、特質系での修復も困難な筈だ。

原作ではとんでもなく重要な立ち位置にいた幻影旅団がただのモブみたいに壊滅したというのは何とも滑稽だな。

ヒソカも死んだ事からこれで不安もほとんど無くなった。後はグリードアイランドを楽しむ事にしよう。

後日のマフィアンコミュニティ主催のオークションは無事成功に終わった。

特にトラブルも無く。

ちなみにキルアに来年のハンター試験の申し込みもさせた。やっぱりあった方が何かと楽だからな。

何故か原作ではわざわざドーレ港のキリコ達の元に行ったが、キルアは最終試験まで残ったんだから無条件で本試験会場に招待される筈だ。

ちなみにやはり試験の申し込みをしたら本試験会場への招待状が後

日届いた。

もしかして原作のキルアはこれに気付かずに行ってしまったのか？

だとしたら何たる無駄…。

新聞の一面はほとんどがバッテラのグリードアイランド買い占めに対する記事で一杯だな。まあ、2000億以上の金を使ってゲームを買っているんだからな。

さて、明日はいよいよ選考会だ。この日をどれだけ心待ちにしていたか…。

だってキルアがもう流をマスターしたんだもんな。まだ俺に比べれば遅いけど全力での攻撃にもちゃんと流が出来ているから基礎はマスター出来ている。

このままじゃ系統別修行まで突入するか？という時にようやく選考会が来たんだ。これで後はビスケを説得してキルアを任せれば良い。

今は明日の選考のために

「キルア、明日の選考会で多分「練を見せろ。」と言われるだろうが、本当に練を見せたりするなよ？」

注意を入れとくか。この世界ではバッテラに会わずに選考会に行くからこれの本当の意味を知らない筈だ。

「…何で？練で実力を測るために言ってるんじゃないのか？」

やはりキルアは知らないようだ。

「「練を見せろ」とはハンター用語で「鍛錬の成果を見せろ」という意味だ。」

馬鹿正直に基本中の基本の練を見せられたって仕方ないだろう？」

俺の言葉に

「あゝ成る程。確かにそれじゃ失格になるのがオチだな…。」

苦笑いをするキルア。もしも俺が教えてなければ失格になって半年

ぐらいお留守番だっただろうからな。

「まあ、お前なら心配いらないだろう。お前の発を見せてやれば大抵は合格だ。」

何せオーラを電気に変化させる何て普通あり得ないからな。」

そんなことが出来る奴はイカれてる奴か余程特殊な環境で育った奴以外はあり得ない。普通の奴は覚えるだけで神経がイカれり。

原作でツエズゲラがビビってたしな。

翌日、バッテラの最後のグリードアイランドを競り落とした後に予定通り選考会が開始された。

ちなみに事前にサザンピースに入場して待っていたの。まあ他にも一杯いたけどね。一応全員念能力みたいだけど大した奴はあんまりいないな。

会場を見回して見るとやはり子供の俺やキルア、ビスケは浮いている。周りからジロジロ見られるが無視だ。

『皆さん、お待たせいたしました。それではこれよりグリードアイランドプレイヤー選考会を始めたいと思います。』

今回バッテラ氏が落札した6本のゲームがプレイ対象となります。

既に皆さんはふるいにかけられた方々…。サザンピースのオークション入場料の1200万ジェニーという金額をもとめない強者ぞろい。

このゲームに参加するには念能力が不可欠!!!という情報もすでに御承知のはず…!』

そこで審査の方法は各々の念を見させていただき、我々が独断で合否を決定するという方法をとらせていただきます!審査を担当いたしますのはプロハンター、ツエズゲラ氏です!!!』

タモリみたいな格好をした司会者がクソ長い説明を終えた後に受験者達がざわめき出す。シングルスターのツエズゲラが出てくるんだからな。そりゃあざわつくか。

「では早速…審査に入る。1人ずつステージの上で練を見せてもらう。

ステージはシャッターとカーテンで仕切り、他の者には様子がわからないよう配慮する。

32名！！合格者が出た時点で審査は終了とする。」

ツエズゲラの宣告直後にシャッターが降りてカーテンも閉まる。

そして司会者が

「では、審査を受ける方はこちらからどうぞ。」

という言葉と同時に並び出す。最初に並んだのは哀れな爆死する筋肉野郎だ。

そして少し経つと3グループに別れた。

列を作り審査を待つグループとその周りを取り囲み機を伺うグループ、動かないグループ。

勿論俺は最後の動かないグループ。別に早く行く意味無いしね。

しかしそれが分かっていないキルアは隣で焦っている。何で焦るんだろ？

「焦るなキルア。別に今行く必要は無い。」

という俺の忠告に

「何でだよ？中に入った奴らは誰一人出てこないんだぞ？もしかして入った奴ら全員合格したのかも…。」

だったら32人が合格する前に俺達も…」

「んなわきゃねえだろ。大体この選考会で32人も合格者は出ねえよ。出ても精々20人程度だろ。」

あのな、よく考える？10年以上クリア者が出てないゲームだぞ？
だったら保険としてより有望な挑戦者が現れた時に備えて「空席」
を残すと考えるのが常識。

だったらそのより有望な奴を見つげるために全員審査する筈だ。だ
からわざわざ今行く必要は無えんだよ。」

俺の答えにキルアが「…確かに、その通りだな。」と納得している
と後ろから

「きちんとこの選考会のカラクリを理解してんだなボウズ。」

と話しかけられた。後ろを見ると不精ヒゲを生やした金髪のオツサ
ンがいた。確かプーハットだったな。憐れにも首を爆断されて死
んだ。

「ボウズの言う通りさ。」

今並んでる連中とその周りを取り囲んでる連中はダメさ。オレから
見ても明らかに不合格と分かる。

見込みがあるのは開始と同時に迷わず席を立った数人とカラクリを
理解して席に残り集中してるオレ達。」

わざわざ知ったかぶっているコイツがウゼエ。確かにこりやすく死
ぬモブキャラだわ。

プーハットは席を立ち

「オレの名前はプーハット。ま、よろしくな。」

と何故かキメながら行きやがった、

「あーゆうンチクたれんのに限って受からなかったりするんだよ
な。」

というキルアの声が聞こえたのか僅かにプーハットはよろける。

プーハットが行った後に決意を固めたのかキルアが「先に行くぜ。」
と言った。

俺は「まあ頑張れ。」と送り出す。別に受からなくても良いんだけ

どね。でもそうするともしカードがコピー出来なかった場合は困るがな。そうなったらクリアするしかないが、それでは「一坪の海岸線」の入手条件が難しくなる。だからとりあえず受かっていて欲しい。

キルアが行った後に俺も並ぶ。

「どうぞ。」とカーテンの中に入り扉を開ける。そこにはツエズゲラが腕を組みながら立っていた。

「では、練を見せてもらおうか。」

ツエズゲラの言葉に俺は原作通りに硬を行なった。

それにツエズゲラは「ほう。」と言った後に「それで壁を殴ってみる。」と言うのでリクエスト通りに壁を殴ってやった。

ドオン！！というデカイ音が鳴り響き、壁には大穴が空いた。

それを見たツエズゲラは「よろしい、合格だ。」と宣言した。それを聞いて俺は隣の合格者の待合室に入った。

中にはキルアを含めて7名という少なさ。まあそんならだろうな。「ゴン！！」

というキルアのデカイ声が響く。わざわざ叫ぶな。

周りからの視線を無視してキルアの隣に座ると

「さっきの音、お前か？」

と聞いてきたので

「ああ、ツエズゲラに「それ」で壁を殴ってみる。と言われたからな。」

「「それ」ってどー考えても必殺技だろ？どんな技だ！？」

とか聞いてきたが

「秘密……。」

としか答えない。キルアも俺がそう言ったら言わない事を分かっている。「チエ……。」と言って黙るしかない。

しばらく経ち、合格者が決まった後に

「さて、とりあえずおめでとうと言っておこう。君達21名にグリードアイランドをプレイする権利を与える。

ゲームをクリアした場合に限りバッテラ氏から500億ジェニーの報酬が出る。詳細は契約書にあるので目を通しておいてくれ。

午後5時にヨークシンを出発する。それまでに契約書を読み、サインを済ませプレイの準備を終えてターセトル駅の中央口に集合してくれ。」

ツエズゲラの説明が終わったらホテルに戻りサインを済ませてチェックアウトをする。

にしても契約書のゲーム内から持ち帰った物は全てバッテラ氏に所有権がある。ってあるけどどうやってクリア者に「大天使の息吹」と「魔女の若返り薬」を持ってこさせるんだろ？ツエズゲラ以外はわざわざバッテラに何が欲しいのか伺いになんて来ないだろうし…。

まあ、それも無意味か、どうせ恋人を救えなかったんだから。

ちなみにキルアのハンター試験の本試験会場への招待状はビーフカマフロの貸し金庫に預けた。ゲーム内に持って行って無くしたら終わりだしな。

集合時間前に行くと既に貸し切りの電車が待っていた。

係員に契約書を渡して俺達も電車に乗る。内装は普通だ。やはり普通の電車をただ貸し切りにしただけらしい。

しばらく走った後に山奥に着いた。

そしてその後は多少歩き、原作通り古城に到着した。

「外観は古城だが、最新式の防犯システムを設置している。指示以外の場所を下手に歩くと命を落とすぞ。」

とのツエズゲラのありがとう説明を聞いた後にゲームが置いてある部屋に入った。

中にはズラリとテレビとジョイステが並んでる。全部の画面はプレイヤーの顔写真が写っている。しかしこの顔写真は何時撮ったんだろっ？

「さて、始める前に少しだけ補足しておこう。

このゲームはソフトがそれぞれ独立している訳ではない。つまりどのハード機からスタートしても行き着く先はみな同じ…。言うなれば電脳ネット上でのゲームと似ていて一つの仮想空間に世界中から参加出来るものと考えてもらっていい。」

まあ現実世界が舞台だからな。わざわざ一つ一つ違う世界を作るなんてしないだろうし。

「それではメモリーカードを配布する。これを差したらすぐにゲームを開始してもらうのだが…。」

勿論俺はメモリーカードを買った。何せあのジンのメモリーカードは捨てたからな。

「順番を先ず決めてもらいたい。」

ツエズゲラの言葉に「順番？」と誰かが聞く。

「ゲーム内に飛ぶと最初にシステムの説明があるのだが、それを聞けるのは一人ずつなのだ。」

「全員が同時にスタートしても中で待つことになるってことか。」
「プーハットが補足する。」

「その通り、中で誰が先に行くかモメることのないようにここで順番を決める。」

説明自体は数分で終わるものだが、それでも21人もいると最初と最後に1時間くらいの差が出るからな。」

ツエズゲラの説明の後でどうやって順番を決めるかの議論が始まる
うとした時にプーハットが

「全員グーパージャンケンで決めようぜ。人数の少ない方が勝ちな。」

と何故か決めた。他も別に異論は無いようだが。

ジャンケンの結果は原作通り俺が一番。ちなみにこれは完全に運だ。
別に相手の手を読んだ訳では無い。

キルアはやはり17番。ジャンケンはあまり強く無いらしい。

「キミが一番か……。準備が済んだらスタートしたまえ。」

メモリーカードを受け取ってジョイステに差した。

「ゴン！説明聞いたらスタート地点で待ってけよ！」

キルアが念押ししやがったので手を上げて答える。

そしてジョイステの前で手をかざし練をした。その瞬間風景が変わ
って何か見たこと無い模様の壁に囲まれた部屋に着いた。

入口に入り、廊下？を歩くとまた扉があったから入ると

「グリードアイランドへようこそ……。」

と変な帽子？機械？よく分からないが何かを被った女がいた。

原作ならここでジンからのメッセージを聞くんだが、俺はセーブデ
ータが入っていないメモリーカードからやったから無い。

「それではこれよりゲームの説明をいたします。」

ゴン様、ゲームの説明を聞きますか？」

別に知っているから

「いや、いい。」

と答える。

そういえばいつの間にか右手の人差し指に指輪があった。自動入手らしいな。

「ゲームについての説明を聞かなくてよろしいですか？」

「ああ。」

念押しに聞いてきたがまた断る。時間の無駄だしな。

「それではご健闘をおいのりします。そちらの階段からどうぞ。部屋の奥にあった階段を降りて外に出た。

見渡す限り草原が広がっていた。それだけなら素晴らしい風景なのだが、原作ゴンと違って気配察知能力は高めておいたから二つの方角からの視線もよく分かる。

それにしてもこんな遠くからなのにこんなにも丸分かりとは…。マジで大したこと無いな。

さてと、キルアが来るまでまだかなり時間がある。今はただ待つだけか…。

4 1 ゲーム開始(前書き)

ご都合主義設定になっております。

41 ゲーム開始

しばらく他のプレイヤーの行く先を見ながら待っていると、「見られているな。」というキルアの声が聞こえたので立ち上がる。

「ようやくか、遅えよ」

と愚痴を言うと

「しょうがねーだろ？オレジャンケン弱えんだもん。」

と返して来た。確かにコイツは弱い。俺が普通にやっても7割方は俺が勝つ。

「じゃ行くぞ。」

とアントキバの方向、ていうかプーハット達が行った方角に行く。キルアも黙って着いてくる。別にどっちに進むかはどうでも良いらしいからな。

「なあ、やっぱりゴンのバインダーもカラ？」

「ああ、まあそりゃそうだろうな。プレイヤーによっての特典なんか無いだろうし。皆等しくゼロからのスタートってことさ。」

何せあのクソ親父が作ったゲームだからな。

「にしてもゲームの中って実感は全然無いよなあ？」

そりゃ現実だからな。

「確かにそうだな。」

まあここがゲームの世界であれ現実世界であれ、とりあえずは情報を得るために町を見つけないとな。」

どれくらい歩くんだろう？確かこの島は北海道程度の広さの筈だ。

つまり軽く2、30kmくらいは歩く事になるだろうな。

しばらく歩いていると上から何か来る気配がした。ああ、アイツか。

「どした？」

俺が上を見ていたからキルアが聞いてきた。

「何かが上から来る。」

言った直後にキィイイーンという音が聞こえたのでキルアも上を見るとそこには何か光っているモノが高速で接近してくると分かった。

そして物体はバシユツというデカイ音を鳴らして着地した。

中から変な髪型をした男が現れた。

男はキョロキョロと周りを見ると

「ここは……スタート近くの平原か。」

つてことは君達ゲームは初めてかい？ん？」

と聞いてきた。

バインダーを出そうか迷ったが、この後重要なイベントがあるからとりあえず原作を守って何もしない。

「さて、どうかな？」

バインダーを持つてゐるってことはあんたもプレイヤーだね。」

キルアがとぼける。それしか無いからな。

「キシキシ、まあね。」

男は変な笑い方をして何かカードをバインダーから取った。

ステイルだろ？ていうかその笑い方何？この世界では旅団はもういないから代わりに俺がコイツを仕留めようかな？

男はカードをバインダーにセットして俺達を確認して

「ふーん、キルアさんとゴンくんか。」

と言う。

キルアは何故名前を知られたのか分からないので焦っている。それが普通か。俺は別に言うことは無いのでただ黙る。

男は少し悩んだようにした後バインダーからカードを取り出し

「？追跡？使用！！キルアを攻撃！！」

と宣言した。

良かった。原作通りキルアか。もしも俺だったら宣言前にトレーヌを奪ってた。

男が宣言した直後に何か光がキルアに高速で向かう。

「くっ。」

キルアは言った後にその光に捕らわれないように避けたが

「キャハハハアー！！」

バーカ、ゲームのスペルからはどうやったって逃げらんねーよ！
！」

と男は笑う。

その嘲り通りにキルアは光に捕らわれた。

「大丈夫か？」

一応聞いとく。別にステイルを食らったからって問題無いけどな。男が満足気に笑っていると突然周りの雰囲気が変わった。

「オレに…何した？」

とキルアが殺気を向けながら男に聞いた。

キルアの雰囲気にも形勢不利を感じたのか男は急いで別のカードを取り出し

「？再来？使用！！マサドラへ！！」

と宣言して凄いい勢いで光に包まれてドギョーン！！と飛んで行った。

「…チツ。」

とキルアは悔しがる。

「大丈夫か？」

と聞くと

「ああ、特に変わり無い。」

と答える。まあただの搜索系のスペルだからな。

「もう追えないし、とりあえず町を目指すぞ。」

と言って俺は再び歩き出し、キルアも着いてくる。流石にスペルで逃げられたら仕方ない。

まあ俺は後でゲートで追えるけど。

再びしばらく歩き。何気なく周りに落ちてた石を拾ってみた。するとボン！という音と共に石がカード化した。ちなみにカードには

H -
石

道端にある何のへんてつもない石。人に向かって投げればそこそのダメージは与えられる。

というクズカードでしかなかった。

「おー。本当に手に取るとカードになるんだな。」
とキルアが関心する。

「ああ、にしても限度枚数がH - かよ。マジでカスだな。」
所詮ただの石だからな。

しかし俺は石を何個も拾ってカード化してバインダーのフリーポケットに収める。

「何で石なんかをフリーポケットに入れるんだ？ポケットの無駄だら？」

キルアが聞いてきたので

「もしもカードを奪う魔法があつた時のためだ。もしも貴重なカードを手に入れてさっきの奴みたいに何か魔法を食らってカードを奪われる可能性がある。」

その時に相手が好きなカードを奪うという効果なら仕方ないが、ランダムに奪う効果ならこれで貴重なカードを守る。

何せ今はまだ防御出来るカードを持っていないからこうやるしかない。」

フルポケットガード法式を説明する。

「成る程、確かにそういうのが必要だな。

にしてもスゲーなゴン。お前本当にこのゲーム初めてなのか？」

「勿論、ていうかこの程度なら普通にゲームやってら思いつくだろう？」

嘘は言っていない。何せ来たのは本当に初めてだから。知識はあるけど。

しばらく歩いているとようやく町に着いた。

懸賞の街 アントキバへようこそ！と書かれた横断幕を潜りアントキバに入った。

見渡す限りの壁には様々な張り紙が張ってある。

「スゲー数だな…。
たずね犬、見つけてくれた方には「呪われた幸福の女神像」さし上げますか…。」

とキルアが張り紙を読む。どうせそれもクズアイテムだろうがな。辺りを見回すと人だかりを発見した。

「キルア、あれ。」

と人だかりが出来ているデカイ掲示板を指差す。

掲示板の前に行く

「アントキバ月例大会行事表か。」

とキルアが読み上げる。

「9月はジャンケン大会ねえ。ていうかこのゲームってリアルタイム進行なのか？」

と行った後に隣にいたキャラに

「スイマセン、今日って何月何日でしたっけ？」

と聞くと「9月11日だよ。」と返って来た。知ってるけどね。

「成る程、やっぱりリアルタイムなんだな。」

と俺が言うと「だな。」とキルアも返す。

「毎月15日開催か…。9月の優勝商品が「真実の剣」」

キルアが読み上げる。

「他のプレイヤーも狙っているらしいな。」

俺が言う。周りを見るとあの筋肉野郎やプーハットなど合格者が何人もいる。

「確かにな。考えることは皆同じってことだな。」

キルアが返す。

「4日後か…。参加するか？」

キルアに聞くと何故か自信満々の顔で

「当然、ジャンケンなら誰でもチャンスあるからな。」

とキルアが言う。お前ジャンケン弱いこと分かってんのか？

「じゃあま、とりあえずまだ時間はあるから情報収集でも行くか。」と俺が言うとキルアは「おう。」と言いながら腹を鳴かす。

俺は途中でバックに入っていたカロリーメイトを食っていたので別に腹は減っていない。

腹ごしらえと情報収集、懸賞品の一石三鳥を手に入れるためにある飯屋に入った。

そしたらデカイ山盛りパスタがキルアの前に置かれる。俺は無理だから注文していない。

「30分以内に完食すればお代はタダ！！さらに「ガルガイド」プレゼント！！」

それではスタート！」

という猫みたいな店長が宣言した。俺は水を飲んでるだけ。

キルアが食いながら

「ねエオツチャン。月例大会ってどのくらいの人が参加するの？」

と聞く。

「ハハハ、しゃべってるヒマがあったら急いで食べた方が良いアルよ。」

まあ、その月によって違うアル。参加者が10人以下の月もあるアルし、逆に9月は誰でも勝つチャンスがあるから1000人以上集まるアル。ワタシも参加するアル。」

と店長は教えてくれた。

「倍率1000倍以上かー！」

ところで魔法ってどうやって使えんの？」

とキルアが聞くと

「魔法？何だそりゃ？」

店長はRPGならではのセリフを言い放つ。

「どうやらRPG同様、特定の会話以外は出来ないらしいな。」

俺の言葉に「らしいな。」とキルアは言って本格的に食い始めた。

ていうかどうやってそんなに食べるんだ？明らかにお前の胃袋よりも量が多いんだぞ？

「アイヤーやられたアル！！」

見事13分で完食！！

商品持つてくるアル。」

あの馬鹿盛りを僅か13分で完食するとは…。コイツの胃袋はどんな構造をしてるんだ？

「お待たせ、商品の「ガルガイド」アル。」

店長がガルガイドのカードをキルアに渡した。

「1217…F-185……」

「どついう意味だ…？」

と俺達が疑問を言っていると

「オウ、君達カード初めてか、異国の人アルか。」

左の数字はアイテムのカードナンバーで右の方は記号がアイテムの

入手難度のことある。難易度ランクは10段階あつてFは下から3番目アル。

記号の横の数字はそのアイテムのカード化限度枚数のことアル。」
とわざわざ詳しく教えてくれる店長。

「つーことはこのF・185はクズアイテムか…。」
俺の言葉に

「くそー。名前からみて絶対武器だと思つていたのに。」
と悔しがるキルア。確かにこの名前なら何らかの武器が防具の名前に聞こえるな。

「そいじゃごちそーさま。」

と俺達が帰ろうとしたら

「アイヤ待つアル!!!」

と店長が慌てて止める。

「巨大パスタ確かにタダなった。でも他に注文したアイスソーダ有料ね。2杯で680ジェニール。」

「あ、そっか。」

えーと、ハイ、10000ジェニールから。」

とキルアは外の通貨の1万ジェニールを出すが

「……何ソレ?」

と店長は答える。

キルアが固まっていると店長はカードを出して

「この島ではお金、この状態でないと使えないアル。それ、この島ではただの紙クズ。」

と宣言された。

「……マジ?」

とキルアは聞くが。

「680ジェニール!カードで。」

と店長は答える。勿論カードで金は手に入れていないから払えない。すると店長は電話を取り

「もしもしケーサツあるか？」
と警察にかける。

「わーっちよつと待ったー!!」
とキルアは必死に止める。ゲーム世界でまで警察の厄介にはなりたくないからな。

結局キルアはあの店で食った分働いて返す事になった。

俺は水しか飲んでないので働く必要は無い。だからキルアに

「終わる頃迎いに来てやる。」
と宣言して店を出る。キルアから止める声が聞こえるが無視だ。

そして店を出て路地裏に入り誰もいない事を確認してさつき店長が見せてくれた1万ジエニーをコピーしてみた。

結果は成功。見事に1万ジエニーのカードはコピー出来たし、フリーポケットにもハマられた。

どうやら先ずゲーム内ではカードはコピー可能らしい。今はリーブが無いから現実世界でもコピー出来るか確認出来ないが何れすれば良い。

今はとりあえず俺も何か食うか。ゲーム内の飯のレベルが気になるし。気に入ったらコピーしたいしな。

キルアのバイトが終わるまで後2時間はあるし、丁度良いだろう。

42 ボマーとババアとの出会い

2時間経ち、キルアを迎えに行った。

バイトが終わった後にキルアからは

「ゴンも働いてくれればもっと早く終わったのに…。」

と文句を言われたから

「だったら「ガルガイダー」を売れば良かったのに。」

そう言ったら

「あー！ー！そうじゃん、そうすれば皿洗いなんかする必要無かったじゃねえか…。」

と落ち込む。普通それぐらい考えるだろう？

いきなり「キヤアアアア！」や「ウワアアア！」などといった悲鳴が聞こえて来た。あの筋肉野郎が爆死したか。

俺とキルアは急いで悲鳴が聞こえる所に向かうとそこには人混みが出来ていた。

人混みの中を抜けるとそこには無惨にも腹が爆発した死体が転がっていた。

周りからは「異国の者だ。」や「むごいのオ…。」という声が聞こえる。よく異国の者だと分かるな。

「ねエ、何があつたの？」

キルアが隣にいた男に聞いた。

「突然体が爆発したんだ。内からボーンとよ！」

と男が答えると筋肉野郎の死体は消え、地面には跡しか残っていない。

「ゲームオーバーか…。」

俺のつぶやきにキルアが真剣な顔をしている。まあ、自分は得体の知れない攻撃を受けたからな。不安にもなるだろう。

「もしかしてこのゲームには人を殺す魔法があるのか？」
という俺の質問にキルアはただ「…分からない。」とだけ答える。
まあお前に答えを期待した訳じゃ無いからな。

「安心しな。このゲームにそんなスペルは存在しない。

あれは念の作業さ。他のプレイヤーのな……。」

不精ヒゲを生やしたボロボロの服を着た音が答えた。コイツ名前何
だっけ？

「プレイヤー同士で殺し合いをしてるってこと？一体何で!？」

キルアの質問に

「プレイヤー狩りさ。」

このゲームにはカード化限度枚数ってシステムがあるってことは聞
いただろ？存在できるカードには数に限りがある。しかも貴重なカ
ードほど、その数は少なくなる。

つまりプレイヤーが増えれば増えるほど 限りあるカードが自分に
まわってくる確率が下がるってことさ。」

と答えた。

「逆に言えばプレイヤーが減れば減るほどカードの配分が増えるっ
てことか。」

キルアの確認に

「ああ、それであんな残虐なマネをする過激な連中が出てくる。」
と補足。

まあ確かにプレイヤーが少なければ大天使の息吹とかは手に入れや
すくなるな。代わりに一坪の海岸線の条件が厳しくなるけど。

「オレ達は逆…。数で勝負し決して血は流さない。」

男の言葉にキルアは「？」となる。

「オレ達と組まないか？確実にゲームクリアできる方法がある……

!?!」

自信満々そうに男が断言する。でも無理だったし。ていうかもしボマーがいなかったとしてもコイツとあのお仲間じゃあ一坪の海岸線を手するのは不可能だろうから結局無理だろうけどな。

「確実にゲームクリアできる…!?!」

キルアがウサン臭げに聞く。スタート直後に都合良すぎるしな。

「ああ、興味があるならついてきてくれ。この先にオレの仲間もいる。」

と男が言う。

「どうするゴン？何か話がオイシ過ぎるんだけど。」

キルアが聞いてくる。基本的に決定権は俺が握っているからな。

「良いんじゃない？話を聞くぐらいは。」

俺達このゲームについてまだほとんど分かって無いし。それにもし畏だとしても奪われて困るカードは持って無いし。」

ていうか行かないとゲンスルーやビスケに会えないから行く以外の選択肢は端から無い。

俺の言葉に「まあ、そうだな。」とキルアも納得して男の案内で広場に行く。

広場に着いてみると何人か見たことのあるメンツがいた。

「他にも誘われた人がいるんだ。」

キルアが自分達だけでは無かった事に少し驚く。

「これで全部か。あの二人組は？」

不精ヒゲの男が仲間に尋ねると

「アツサリ断られた。話も聞かないそうだ。」

と返す。

「そうか、じゃ始めようか。
今あつちで一人プレイヤーが殺られた。君達と時を同じくして着た人物だ。」

この二人も見ていた。腹がふっ飛んでたよ。「ボマー」だ。」
不精ヒゲが俺達を見ながら言う。

「筋肉質のガツチリした黒髪の子。選考会で一番始めに受かった人だよ。」

とキルアが答えた。

広場にいるプーハットなど選考会にいた奴らが「ヤツか…。」と頷いた。

「まず君達が一番心配していることを解決しておこう。彼の死はスペルによるものではない。」

このゲームのスペルの中には人を殺傷する類いのものは一つもないゆえに君達がかかれたスペルで負傷したりましてや死ぬことなどありうない。」

ゲンスルーが説明している。何せ殺した張本人だからな。説得力がある。

「スペルは全部で40種類！！攻撃型、移動型、防御型など様々だが、君達が受けたスペルは調査型に属するもの…「追跡」か「密着」のいずれか。」

一言で言うとなスペルをかけられたプレイヤーは情報を奪われる。自分が現在どこにいるのか。自分が現在どんなカードを所有しているか。

それが敵につつぬけになる。このゲームでは圧倒的に不利な立場。君達はすでにそのスペルにかかった。重い枷を負ってしまったんだよ…！

このスペルを新参プレイヤーにかけるためにスタート地点を見張ってる連中がいる。そいつらはもしも君達がこの先何か貴重なカードを手に入れたらすぐに現れ強引にカードを奪っていくだろう。

最悪の場合は命を落とす。」
ゲンスルーが長々とありがとう話をしている。その張本人が警告するってのが笑えるな。

「さつき殺された奴みたかか？オレはそう簡単に殺られねエ。」
プーハットは自信満々に宣言する。お前は目の前の奴に簡単に首を爆断されて死んだがな。

「いや……………彼を殺したのはまた別…。」

「プレイヤー狩り」を遂行する最も過激な部類だ。こいつらはライバルを減らすためだけに最初から殺すつもりで行動している。こいつらも恐らく平原を監視している。慎重にターゲットを決め、尾行して他の者に正体を悟られぬ様、殺す。死体の状況やその殺し方からみてオレ達が把握しているだけでも最低4人はこんな奴らが存在する。

君達の知り合いを殺したのもその一人。オレ達が「ボマー」と読んでいる奴の仕業だ。分かっているのはそいつが恐らく放出系か操作系の念能力者だということ。要するに何も分かっていないということだ。

このゲームが世に出てすでに10年以上…。状況はどんどん悪化している。」

悪化の原因の一つの癖にいけしゃあしゃあと云うね。
多分俺もプレイヤー狩りをする事になるだろうがな。

「……………3つ。」

このゲームでアイテムカードをゲットする方法は大きく分けて3つ。
わかるか？」

頭蓋骨の形か髪型なのか頭頂部が異常に発達している男が聞いてきたので原作通りに

「自分で探す。」

と答えた。

「ああ、それが?。」

と男が答える。

「他のプレイヤーと交換する。」

黒人のアベンガネが答える。

「そう、それが?。」

「そして?が他プレイヤーから奪う…?か。」

キルアが答えた。

「その通り、なかなか優秀だな。」

細かく分ければまだあるが、大きくはこの3つ。しかしその3つの内の3番目…。奪う者が急激に増えている。自力で探すこと、交換することをやめた者達の増殖…。

原因は入手難度とカード化限度枚数というシステム!!

アイテムをゲットしてもカード化限度枚数がいっぱいではカード化出来ない。または入手難度が高すぎて自力ではそのアイテムをいつまでも入手できない。そんな閉塞状態がここ数年続き、緊張した糸が切れるかの様に奪う者達が激増し始めた。

暴力で相手から奪う、他プレイヤーを脅し、殴り、バインダーを出させてカードを奪う。いくら痛め付けても屈せず、バインダーを出さない者は殺す…!

殺せば指輪は消滅しカードデータも全て消える。そうすればカードは入手できなくてもカード化できるアイテムが増える寸法…。

相手を殺してしまったらカードは奪えない。当初このルールはプレイヤー同士の殺し合い防止が目的だったはず。しかし状況がどんどん煮詰まり、相手を殺してカード化できるアイテムが一つでも増えればよしと考えるヤバイ連中が台頭してきた。

恐らく今は末期…!!」

そこで不精ヒゲの男が再び前に出て

「オレ達はその状況にピリオドを打つ！！
同志を募りゲームを攻略する！！協力して欲しい。」
との協力要請。

「方法は？」

「ブーハットの尋ねる。」

「カードを得る方法は大きく分けて3つ。？自力探索、？交換、？
奪取。」

どれに入るんだ？聞かなくても察しはつくがな…。」

「？だ。」

と不精ヒゲは答える。

「厳密に言えば？？？全部使うがとくに？が重要ってことだろ。」
アベンガネが補足する。

「何だよ、じゃ結局腕づくで奪うのか！？」

ブーハットの問い詰めに不精ヒゲは

「違う！」

少なくともオレ達は暴力を使わない！！あくまで大別すれば「奪う」
という表現の中に入ってしまっただけだ！！」

何か飽きた…。

この寸劇を楽しむつもりは無い。別にゲンスルーとビスケに会うた
めに来たんだからな。

周りがカードについてや報酬の分前についての話し合いを聞いている
フリをしてスルーしていた。

「君達はどうする？」

唐突に質問された。まあ質問内容は分かるがな。

「うーん…。」

俺はいいや、自力でクリアを目指すわ。」

そう言っただけ立ち上がる。

そしたらキルアも

「リーダーがそう言うんでね、オレもパス！」
と俺と一緒にに広場を去った。

少し歩いた所で

「なあゴン。何で断ったんだ？」

キルアが聞いてきた。

「うん？」

大体こういう難しい状況になった場合にああいうチームが出来るんだけど、大概は途中で仲間割れや初めから仲間のフリをしていた奴のせいで崩壊すのがオチだ。

チームが10人以下で全員が十年來の親友だったなら上手くいくかも知れないが、50人以上で口々に知りもしない奴らが徒党を組んで成功する訳が無い。

多分クリア目前にでもなったら誰かが裏切ってカードや報酬を独占したがるだろう。」

俺の説明に「成る程。」とキルアは納得する。

「それよりも、今は月例大会の方が重要だ。

俺は出る気無いからキルアには是が非でも勝って貰わなくちゃいけない。」

その言葉にキルアは

「マジ!? ゴン出ねえのか!!」

オレのジャンケンの弱さはゴンも知ってるだろ? 無理無理。」
と手を横に振る。

「だからジャンケンで9割方勝てる方法を伝授してやる。」

俺の言葉に「そんな方法あるのか!？」とキルア興奮気味。

「いいか、まずは必ず最初はグーで始める。そうすると相手はグーの状態から振り上げて振り下ろす瞬間には十中八九既に出す手の形

にしている筈だ。

例え相手の手が微妙でもグー以外の手を出そうとする奴は握り方が空き気味になる。だからその時はチョキを出せば負けない。

お前の目なら多分出来る筈だ。」

それを聞いてキルアは

「ああ！成る程、だからゴンは何時も俺に勝ってたのか。」
と納得していたが。

「いや……。残念ながらキルアとのジャンケンの際は純粹に運だ。だつてお前にこんな方法を使わなくても勝てるからな。」

その言葉に落ち込むキルア。何せ本当にジャンケンが弱いと宣言されたんだからな。

「とにかく、これでジャンケン大会にはまず負けないから「真実の剣」はゲット出来るだろ。

まだ大会まで時間があるから金稼ぎとこの街の指定ポケットカードを探すぞ。」

と別に必要無いが原作通りクズアイテムの懸賞を始めた。

何せビスケが監視している筈だからな。迂闊な行動や能力を使えない。

まあ時間潰しぐらいにはなるだろう。最悪キルアだけにやらせて俺は見ているだけで良いし。

43 ババアとの交渉

15日までいろんな懸賞に挑戦したがやはり普通の懸賞で手に入れられるのはクズアイテムばかり。

ガルガイダーが高く売れると分かったからキルアに食費節約として取らせまくっていた。俺は普通の食事をしていただけ。

そしてついに月例大会の日がやってきた。

キルアは俺が教えた方法で圧倒的な戦果を上げ、楽々優勝。

「おめでとう！！優勝商品の「真実の剣」です！」

現在表彰式。

キルアが真実の剣を受け取るとカード化した。それを見たキルアは「！見るよゴン。」

と俺にカードを見せてくる。別に知ってますけど？

「カードナンバー83！！指定ポケットカードだ！」

とキルアははしゃぐ。それも直ぐに奪われるんだけどね…。

表彰式を終えて通りを歩きながら

「問題はこのカードをどうやって守るかだな。」

スペルカードで相手のカードを奪えるらしいけど俺達は防御カードが無い。更にこれを俺達が持っている事は大勢に知られている。正に良いカモだな。」

「ああ、確かに格好の標的だよな。新たに何人が会場からずっと尾けてきてるしな。」

キルアの言う通り、明らかに俺達を意識している奴らが何人かいる。マジで丸分かりだ。

「皆があんな風に分かりやすいと良いんだけどな。」

「ああ、まあこの時のためにちゃんと用意は出来てるけどな。」

そう言つて俺はフリーポケットが一杯なバインダーを出した。

「恐らく攻撃スペルには指定ポケットかフリーポケットのカードをランダムに奪うスペルと好きなのを奪えるスペルがあるだろう。」

後者なら難しいが前者なら防ぐのは簡単。まずはキルア、「真実の剣」を貸してくれ。」

「ああ。」

とキルアもバインダーを出して尾行している奴らに見えないように真実の剣を俺に渡す。

「既にお前も分かっているだろうが、指定ポケットに一枚だけこのカードを入れてれば簡単に奪われるが、俺のクズカードで一杯のフリーポケットに入れておけばランダムで奪うにはかなり難しい。」

それに真実の剣はキルアが持っていると思うから間違えてお前を攻撃する可能性が高い。」

俺の説明に

「確かにそうだな。俺が持っているよりもゴンが持っていたら相手は間違えるだろうし盗られる可能性は低いしな。」

でもランダムじゃなくて好きなのを奪えるスペルだったらどうすんだ?」

キルアの質問に

「そんなときは単純にそいつがスペルを使う前にカードを奪えば良い。まあ最も、これは相手の身体能力がかなり低かった場合しか不可能だけど。」

俺のスペルの防ぎ方に

「おー成る程、それサイコーだな。まあ後ろの奴らの実力はたかが知れてるから有効だろうしな。」

面倒だがこのイベントを通過しないといけないんだよな。そうじゃないと一坪の海岸線イベントを体験出来ないし、ゴレイヌにも会えない。

アイツがいないとメンバーを揃えるのが面倒だし、最悪いなくても何とかなるだろうけどいた方が楽で良い。

そんなことを考えていると

「待て！！その子供2人！！」

と声をかけられた。確かこいつクリアや現実世界に戻るのを諦めてゲーム内で結婚して定職にもついた奴だったよな。

だったら仕事行けや。

「「真実の剣」を置いていってもらおう。おとなしく言うことを聞けば乱暴なマネはしない。」

確かモタリケが緊張しながら宣言するが

「やだよバーカ。」

とキルアがバカにして去る。

それにムカついたので若干青筋立てたモタリケは

「待てい！」

と大声を出した後に既に出していたバインダーからカードを取り出す。

それに俺達も「ブック！」とバインダーを出して警戒する。

「フフフ、ハツタリだろ？お前らがこのゲームに来たばかりなのはわかってるんだ！防御スペルも「真実の剣」以外の指定ポケットカードも持つてるわけないね！

くからえ「窃盗」使用！！キルアを攻撃！！「真実の剣」を奪え！！」

モタリケが自信満々にシーフを発動する。しかしカードが消滅してしまった。

「？、！？」

とモタリケは自分のバインダーを見た。

「なっ、どういうことだ！？」

モタリケが混乱している所にキルアが

「指定ポケットカードだからって指定ポケットに入れてるとは限らないぜ。」

と告げる。

何せシーフは対象の指定ポケットのカードをランダムに一枚奪う。

という効果だからただシーフが消滅しただけに終わった。

勿体無いねえ。せつかくのCランクカードなのに。

モタリケは自分の唯一のレアカードを無駄に使ってしまったのがショックだったのかors状態だ。

「くくく、ご苦労だったな様子を見たかいがあつたぜ！フリーポケットに入れてるなら願ったりかなったりだ。」

またモブが現れた。「お前達がこの数日「真実の剣」の他に15枚のアイテムを手に入れることは調査済み！！」

「誰かの色紙」1枚、「アンティーク時計」1枚、「招かず猫」1枚、「ガルガイダー」12枚。

どれが手に入ってもランクFのスペル呪文カードとひきかえなら(多分)大得よ！！

「ピックポケット」使用！キルアを攻撃！！」

しかしまたもやカードが消滅する。

「オレが手に入れたカードをオレのバインダーに入れてるとは限らないだろう？」

キルアが答える。

しかしモブは諦めず。

「うぬうつ、だが「ピックポケット」はまだあるぜ！！

「ピックポケット」使用！！ゴンを攻撃！！」

その宣言をしたら今度はちゃんと成功してオレからカードを一枚奪った。アレをな。

「くくく攻撃成功！！さてどのカードが手に…。
！？ただの石」

カードを見て驚愕するモブ。手に入れたのがただの石だからな。
「何だこりゃあー！！」
とモブはカードを地面に叩きつける。

「残念、見事なクスが行っちゃったね。」
俺の顔を見てモブは自分が見事にハメられた事が分かっただろう。
おかげで攻撃を止めた。

「打つ手なしか！？ならどいてる…！！」
今度はデブが出てきた。

「お前らの敗因は事前に敵の情報を知ることが出来なかったこと！
だがオレは「念視」によってキルアのバインダーには「真実の剣」
が入っていないのは確認済み！！さらに「盗視」によってゴンのフ
リーポケットに入っていることも確認！！
ならばこのカードで100%奪える！！」
デブが自信満々に言う。

確かにロブは対象の好きなカードを一枚奪えるからそれなら取れる
だろう。攻撃が成功すればな。

「「強奪」使用！！ゴンを…」
攻撃と言う前に素早く移動してロブを普通に奪った。

「へエー、ランクBか。良いカードじゃん。ありがとねオジサン。」
そうやって自分のバインダーにロブを入れる。残念ながら原作みた
いには返さない。

「じゃ。」

そうやって立ち去ろうとしたら

「そんなやり方は格下にしか通用しないぜ！！お前ら以上のプレイ
ヤーなんかここにはゴマンといえる…！！

そのほとんどがゲームから出ることすら出来ずにくすぶってんだ！

！
と見事に負け犬の遠吠えをしてくれた。

「確かに奴の言う通り実力差がかなりないとさっきみたいなスペルカードを詠唱中に横取りするなんてムリだ。」

キルアの言葉に一応

「どうしたって防御スペルが必要だな。」
と返す。

「ああ…。少なくともプロ級の奴に狙われたらひとたまりもないからな。」

その発言後にキルアはようやく気付いたらしい囲まれていることに「わかってるじゃねーか。そのカードを狙っているのがあんな素人だけだと思っただか？逃げててもムダだぜ。」

と何人もが出てきた。コイツらに会うためにあんな茶番に付き合っ
てやったんだからな。

「じゃなかったらアイツらにスペル攻撃される前に首を八ネて近付けないようにしてやった。」

「さて…スペルを使う優先順位を決めようか。」

「ボウヤ、ここからが本当の決勝なんだぜ？」
と勝手に話し合っている。

「わざわざ大会に出るなんてマヌケのやることさ。」

と嘲笑う奴らもいる。わざわざお前達と会うためだけに取ってやっ
たというのに酷い言葉だな。

「こりゃ無理だな。」

キルアに告げると「ああ…。」と諦めた声を出す。

「んじゃ次の目的地は魔法都市マサドラで良いな？」

キルアに聞くと

「異議なし。」

とだけ答えた。

その後、真実の剣は見事に取られ、何故かロブまで取られた。アイツらマジムカつく。

とりあえずトレードショップに行ってクズカードを金と交換して食料や水などを買ってマサドラに向かう事にした。

「いらつしゃい。」

トレードショップに入ると角刈りのNPCが話しかけて来た。

「ガルガイダー4枚と交換して。」

とキルアがガルガイダー4枚をNPCに渡した。

「はいよ120000ジエニーね。」

ランクFのクセに中々高値で売れるんだよな。

「お金は店に貯金すると盗まれる心配がなく便利だぜ。」

NPCがロールを果たすために定形句を言う。

「やだよ、入金した店でしか金おろせないんだろ。」

といちいちキルアも相手をする無視すれば良いのに。

「ウゼーなあいつ。毎回聞いてくんのかよ。」

とキルアが愚痴を溢す。

「これでバインダーにはクズカードしかなくなっちゃったな。」

キルアがバインダーを見ながら言う。何せバインダーのほとんどを金が占拠しているからな。

「まあ、これで当面の金の心配は無くなったし、スペルカードを買うための金も貯まったんだ。食料や地図を買って早いとこマサドラに行こうぜ。」

何せこのままじゃ指定ポケットカードを手に入れてもまた盗られるのがオチだからな。」

「ああ、そうだな。あれはムカついたし。」

キルアが真実の剣を盗られた時のを思い出したのか顔をしかめる。

デパートに入り水や食料を買い込み、次は地図だ。

地図売り場に行き、地図のカードを見る。

「どつちにする？」

キルアが分かりきった質問をしてきた。

「出来るならこっちの65000ジエニーの地図を買いいたいけど、俺達には不可能だからこっちの20000ジエニーの安い方だ。」
「ていうか65万ジエニーって一人で買うのは不可能じゃん。だってフリーポケットは一人45個しか無いんだからどうやっても一人では買えない。最低二人分のフリーポケットが無いと金を維持出来ない。」

地図を買ったので早速「ゲイン。」と地図のカード化を解除した。地図にはスタート地点であるシソの木とアントキバしか載っていない。にしてもスゲエ形の島だよな。ドラゴンにしか見えねえ。

「これだけじゃマサドラがどこにあるか分からねえな。」
俺の言葉に

「トレードショップで聞いてみるか。」

キルアが答える。

「マサドラの場所なら3000ジエニーになります。」
NPCが答える。

「高ーいよ。少しまけろよ。何度も来てんだからさ。」
キルアが抗議するが

「3000ジエニーになります。」

としか答えない。まあこいつは決められた言葉しか言えないからな。キルアは仕方なく言われた通り3000ジエニーを支払った。

「この街から山を越えて北へ80km程まっすぐに行くと湖がある。その湖沿いに北西へ向かえばマサドラに着く筈だ。途中二つ小さな村があるからそこで休むといい。」
NPCのアドバイスを無視してキルアが
「80kmなら急げば1日で着くよな？」
というとんでもない事を言ってきた。確かに着くか着かないかで言えは着くが、そこまで急ぐ必要は無いと思うが？

「そこまで生きてたどりつければな。」
NPCの話は続く。

キルアは「？」という顔をする。
「山は山賊の棲み家があつて旅人は身ぐるみはがされる。運良く山賊に遇わなくても山を越えれば怪物がワンサカ出るからな。」
その言葉にキルアが反応する。

「山賊！！怪物！！」
よーしガゼンRPGっぽくなってきたぜ！
とキルアは興奮する。そんなに山賊に会いたいのか？俺ならゲームでも会いたく無いがな。

さて、それではマサドラまで行くか。とスタートした直後に
「待つてくださいい！」
と声をかけられた。良かった。もしここで声をかけてくれなきゃ俺がキルアを鍛えるハメになつてた。まあそれは今から始まる交渉によるが。

「あ、確かあの時いっしょにいた…。」
とキルアは広場で話を聞いていた事を思い出した。
「はいっ、あの…私も仲間に入れて下さい！」
ビスケの懇願に

「あーごめん、ムリ。」
とキルアは軽く断る。

「ど…どうしてですか!？」

ビスケが尚も食い下がるが

「ジャマだから。」

とキルアは切り捨てる。おかげでビスケの顔に青筋が出てきた。知らないってある意味スゲエよな。

ガンツ！とキルアを殴り付けた。

「っっっっ！何すんだよゴン!？」

キルアが文句を言ってくる。

「お前こそ何してんだよ。」

お前が言った言葉は圧倒的強者が弱者に対して言う事であって、弱者が圧倒的強者に言っただけではない事だ。」

と伝えるとキルアは「はあ？」と言うだけ。まあ見た目はビスケ弱そうだからな。それが目的だろうが。

「これはどうも失礼を致しました。ビスケット・クルーガーさん。」
頭を下げてビスケに言う。

「あら…あなた私を知ってるの？」

猫かぶりを止めてビスケは素で俺に答えた。

「ええ、何せクルーガーさんは有名人ですからね。」

一応名前ではなく名字で言う。この世界ではいきなり名前で言うことが多いうのだから？

「ふーん…。まあ良いだわさ。堅苦しいのは苦手だからビスケって呼んでちょうだい。」

一応は前進か？怪しまれてるけど。

「どういうこと何だゴン？」

とキルアが聞いてくる。

「ああ、この人はプロハンターで、俺達よりもずっと先輩だ。つま

り俺達よりも遙かに強い。」

そう言つとキルアは

「え〜マジ!? ていうか俺達よりも先輩っていくつだよ?」

何とも言いにくい事を聞いてきた。

「確か50歳は越えている筈。」

「50歳!? ババアじゃん!」

キルアがそう言つとビスケに殴り飛ばされた。

「念を覚えて約40年!! あんた達よりもずい分先行ってるから先輩で間違い無いだわね。」

俺を若干睨み付けてくる。マジ恐いんですけど。

「それで、ビスケさんは何故俺達の仲間になろうとしたんですか?」

「ええ、まああんた達の関係をぶち壊してやるうかと思つてね。」

いきなりのセリフにキルアは警戒するがビスケは無視して

「でもバレてるなら無駄だわね。」

と残念そうに言う。

「ではつまり今は別にこれと言つた予定は無いんですか?」

俺の質問に

「ええ、特にこれといつて無いわね。」

これを聞いてようやく交渉を始める事にした。

「ではどうでしょう? ここにいるキルアを鍛えてはくれませんか?」

俺のセリフに

「おい!? 何でだよゴン!」

とキルアが先ず反応したがそれはスルーする。

「…どうして私がそいつを鍛えなきゃいけないのよ。てつきりアンタがそいつの師匠だと思つていただけ?」

「確かに俺も一応教えてていますが、何分俺は我流で念を会得したため、教えるのが不得意でして。」

だから経験豊富で教える事が上手い方がいたらお願いする事になっているんです。

何せコイツは才能は桁外れでして、私の指導者としてのレベルが追いつかないんですよ。」

そう言っているとビスケは興味深そうにキルアを見る。ちよつと興味を持つたか？

「おいゴン！何勝手に話進めてんだよ！！

どんな奴か分かんない人間にモノ教わるほどせっぱつまってないし、大体オレにはもうゴンの他にもウイングさんというちゃんと師匠がいるからいいよ！」

とのキルアの言葉にビスケが反応した。

「ウイングって今言ったけどもしかしてひよっこウイング？

メガネをかけた寝癖のボウヤでしょ？服の着方をいくら注意しても直らないあの。」

とビスケが答えた。

「知ってるのか？」

キルアの質問に

「知ってるも何もあたしの教え子だわよウイングは。」

ビスケが答えた。キルアはあまりの事に固まる。

「あいつが師匠とは驚いたわねエ。月日が経つのは早いこと。あ、てことはあんた達もプロハンターなんだ？」

「いや、俺だけ。」

と俺が答えた。

「ま、ウイングは覚えが悪い分教える方に向いてるかもね。」

「という事で何とかキルアを鍛えてはくれないでしょうか？」

と懇願する。原作と違ってキルアはある程度強いからもしかしてを
考えて今交渉する。

しかしビスケは「う〜ん〜ん…。」と迷っている。

不味いな、このまま断られたら俺が鍛えるハメになるし、キルアにはある程度強くなって貰って放り出すつもりだから早く鍛えるにはビスケをあてがうのが一番早い。

「そういえばビスケは何でこのゲームに参加したんですか？」

こうなったら物で釣るか。

「あたし？ま、もちろん懸賞金のためだけだ。目的は宝石よ。」

「宝石？」

「ここにしかないって石があるらしいんです。指定ポケットNO. 81ブループラネット。」

「成る程…。ではこれでどうでしょう？」

キルアに修行をしてくれるなら俺がゲームクリアをした暁にはブループラネットをビスケに上げるといふのは。」

その言葉にビスケは食いついた。

「…へー確かにそれなら悪く無い条件だわね。」
よしぐらついた。

「まあ、修行をしてやるかどうかはまだ保留で良いですよ。これからマサドラに向かうために多分モンスターと戦ったりするでしょうから。それを見て判断してください。」

これでダメだったらどうしよう？

「分かったわさ。じゃあとりあえず先ずはどの程度が見極めて、それから返事を返すことにする。」

よし！キルアの才能を見ればコイツならOKする筈だ。後はキルアを岩石地帯のモンスター達と戦わせれば良い。いくら基礎や応用を会得しても経験不足だからモンスターには勝てない筈だ。

キルアがまだ文句を言ってるが無視だ。

残念ながらお前に決定権など無い。

44 仕方ない譲歩

さてと、交渉のせいでゲームクリアをしなくしゃならなくなっただけど、それは問題無い。

奇運アレキサンドライトと一坪の海岸線さえ手に入ればゲンスル一組のカードを奪ってクリア出来る。

現在はマサドラを目指して山を越えている。

「確か北に進めば山賊に会うんだよな？」

キルアに聞いた。

「ああ、途中山賊に気をつけろってことだからな。多分会えるだろ。」

「んじゃあ修行の成果を見せて貰おうか。」

「おう、任せとけ。っていうかそれってアイツに見せるってことか？」

キルアは後ろを向く。少し後ろにはビスケがついて来ている。

「何でアイツに俺の修行を頼んだんだよ？」

キルアが抗議してきた。

「さっきも言っただろ？ウイングさんの時と同じで優れた指導者だからだ。」

「一応お前のためにお願ひしてるんだぜ？」

正確にはひいては俺の自由のためだが。

「それは分かるけどさ……。」

とキルアは黙る。ウイングの時も結局は自分のためになったから今回のことも自分のためなんだと理解出来る。

キルアが黙っていたら突然前方に山賊の群れが現れた。ようやくか。

ジリジリ近付いて来て、キルアは戦闘体制に入ろうとしていた。そして山賊達は一斉に接近して来て突然

「助けて下さい！！お願いします！！」

と全員で土下座してきた。

キルアは突然の事に呆然としている。

とりあえず状況を知るために山賊の案内で村にいった。

そしてデカイから多分村長の家に入り状況説明を求めた。

目の前には寝込んでいる子供がいた。

「島の風土病です。微熱から始まって徐々に高熱になっていき、遂には死に至ります。その期間は約1ヶ月。

対処法は薬で熱を抑えるしかありません。しかし薬の効き目は約1週間。それが切れればまた熱が上がるといった具合で。

この薬がととも高く、もう我々の手元には1銭もありません。既に全員が病にかかり満足に山賊業も出来ない始末。」

別に出来なくて良いんだけど。所詮山賊だし。ていうか話の最中にゴホゴホうるせえ。

「このままでは2・3日中に死んでしまいます！！」

「なんとかお金を恵んでいただくことは出来ないでしょうか？」

多分このガキの両親が懇願する。

「これってイベントだよな？」
とキルアが聞いてくる。

「多分な、金を恵めば情報なりアイテムをくれるんだろ。ゲームじやよくある。」

と答えた。

「いくらあれば良いんだ？」

俺の質問に

「村中かき集めたのですがどうしてもあと80000ジエニーほど足りなくて。」

母親が答える。

「ほぼ有り金全部だな。ていうか8万も払ったら残るのは小銭ぐらいか？」

「分かった。80000ジエニーをやるよ。」

と言つと。

「本当ですか!?!」

「うつつありがとうございます。何とお礼を言っていいか。」

と夫婦が感激する。

俺が8万ジエニーを渡すと

「本当にありがとうございます!これでこの子も助かります!」

と父親が金を受け取ったら

「う…。」

と息子が反応した。やっぱり服まで取られるのか。

「!?!?どうした息子よ!」

と父親が反応する。

「寒い…。寒いよ父さん。」

とか細い声で息子は父に言つ。

「しっかりしろ!!親切な旅人の方がお金をくれたぞ!!明日には

薬が手に入る、頑張れ!!」

父親が息子を勇気づけるが

「寒いよ…。寒いよ…。」

と息子は尚も寒がる。

「ああつ何てことだ!!このまま体が冷えてしまったらこの子は今

夜中に死んでしまう!!」

こんな時に子供服があれば!!」

見事な3文芝居を見せつけられた俺とキルアは呆れる。

「あのー、俺の服で良かったら。」

と俺が言つと

「おおつ、本当にいいのですか！？あなた方はまるで天使のようだ！！」
いくら言葉を尽くしてもこの気持は伝えきれません！！」
父親が感激する。

「いや、お礼なんていいんで。」
とキルアが情報かアイテムを貰おうとしたら山賊達はただ黙る。

「なんもなしかい！！」
キルアが憤慨している。何故かあの後キルアの服まで要求されてこれでは何か貰えるのかと思ったが、結果はただお礼を言われただけ。そりゃム力つくわ。

「くそくそなめやがって。」
「あのトレードショップで言われた通りマジで身ぐるみはがされたな。」
上着が無くなりシャツだけになった俺とキルアが愚痴る。

「まあまあ、ゲームとは言え人助けになったから良いんじゃないの？」
「？」

何も被害を受けてないビスケは平然と言う。

「うるせえ！！ていうか何でアンタだけ被害ゼロなんだよ！！」
キルアが理不尽さを訴えるがビスケは「さあ〜？」と言うだけ。

「とりあえず山を降りれば怪物が出るらしいからそいつらをカード化して換金すれば良い。」

その時にキルアの腕前を披露して貰うぞ？」

そうキルアに伝えると

「おう、遂に実戦だな。」

とキルアは喜んでいる。実戦はほとんど無かったからな。

「ちなみに俺は何もしないぞ？これはテストでもあるんだ。」

ビスケにお前の力を見せつけてやれ。」

キルアを奮起する。

「まあ、約束通りアンタの戦い方を見てコーチしてやるか決めてあげるわよ。」

ビスケが言う。

山を抜けるとそこは一面岩石地帯だった。

「岩石地帯か。」

キルアが岩山を越ながら言う。

「怪物はまだしも敵プレイヤーの不意打ちに要注意だな。」

俺の言葉に

「おう、行くぜ！」

とキルアが宣言した直後にこん棒を持った一つ目の巨人の群れが現れた。

巨人がその持っているデカイこん棒を俺達の方に振り下ろして来た。

「うおおおー！？」

とキルアは避ける。俺も避けたが後方で見ていたビスケの所まで下がる。

「さて、アンタが鍛えたあの子の実力を見せて貰うわね。」

とビスケが俺に言う。俺は頷いてキルアを見る。

キルアは巨人の攻撃を避けながら攻撃をかますがほとんど効いていない。

キルアは周囲の状況を確認して今度は巨人の目を思いっきり蹴った。そしたら巨人が「グオオオオオ！」と目を押さえながら叫び、カード化した。

キルアはカードを取り、巨人達の攻撃を避けながらバインダーを出してカードを入れつつまた巨人の目を攻撃する。後はその繰り返し

とキルアは言っていたが横でビスケが弱点のホク口を押しカード化した。

「ブブー。はずれ、ランクEでした。」

もっともっと注意深く観察しながら戦っていればトカゲが特定部位をかばっている微妙な動きに気付けたはず…。」

とビスケは俺を見る。

「まあキルアには念の基礎やある程度の応用は教えていたけど戦闘考察力についてはまだ教えていなかったですから。」

生憎現実世界では手頃な敵がいまませんでしたので。」
と返す。

それにビスケは

「ふーん。まあ確かに基礎能力はなかなかだね。」
と返す。

その後はマリモッチは捕らえず、バブルホースにはやはり翻弄されて逃げられ、リモコンラットは一応教えた通りに凝を使っていたのでカード化出来た。

「どうですか？

見た通りかなり才能はありますが何分修行や実戦不足でもったいない状態なんです。」

俺じゃあアイツの才能を引き出す事は出来ないんで何とか指導して貰えないでしょうか？」

ビスケに懇願する。

「分かったわ。確かにもったいな過ぎるわね。」

そう言ってキルアの元にビスケは移動した。俺もついていく。

「キルア。ビスケが指導をOKしてくれた。」

「マジで!？」

キルアが驚く。思ったより早かったからな。

「それじゃあ約束通りアンタをコーチしてやる。その代わりに。」
とビスケは俺を見る。

「ええ、約束通りNo.81のブループラネットを俺達のクリア時に渡します。」

その代わりに基礎だけではなく応用についても深く教えて下さい。基礎や応用も大まかには既にやっていますので。」
と言う。

「ふーん、まあ良いわ。」

よし、それじゃあ早速……。」

ビスケが修行を開始しようとしたら後ろから微かに殺気を感じた。

「座つて。」

とビスケが指示する。俺は直ぐに座るがキルアは不思議がつている。

「キルアも座れ、俺とビスケの背後に敵がいる。気配は探るなよ？」

緊張が伝わる。」

そう言うときルアも座り込んだ。

「へエ、アンタも気付いてたんだ？」

ビスケが俺に聞いてくる。

「ええ、僅かだけど殺気が漏れてましたからね。子供3人に見えたから油断したんだろう。かなり場数を踏んでるな。」

俺の言葉にキルアが

「？油断してるなら弱いんじゃないの？」

と聞いてきた。

「子供の念能力者は実はかなりの数がいるが、大体の奴らは戦闘に向く能力を持って無いし、実力も低いからベテランなら油断しがちになる。」

でもすぐに油断を捨てて気配を消した事からそれなりに手強い事が分かる。」

キルアは成る程と頷く。

「どうすればいい？」

とキルアが聞いてきた。ビスケじゃなく俺にだけど。

「俺が仕留めて来る。キルアとビスケはそのまま待っていてくれ。俺は別行動を取って敵を誘き寄せて始末したら合流する。」

俺の提案に

「待って、あたしが敵を誘き寄せる。あたしは南、二人は北。気配はそのまま500mくらい普通に歩いてっつて。」

目安はあの高い岩山。あそこに着いたら今度は絶。すばやく戻ってくることに。」

とビスケが言ったら

「オーケー、二重尾行だね。」

とキルアが言う。その瞬間にキルアがビスケの平手打ちを食らった。スゲエな油断してたら俺でも食らう可能性がある。

「そんなに言うならいいわよ！！もうやってらんないわバイバイ！！」

とビスケがいきなり叫ぶ。

「あー！行け行け、せいせいするよ！！じゃーな！！」

とキルアも演技に乗る。ついでにビスケが「バーカー！！」と叫んでビスケは南に向かった。

そして俺達も指示通り北へ向かう。

「すげーなああの女。」

オレ警戒してたんだぜ、何があってもすぐに動けるように。でもほつぺたがジンジンするまで何されたかわかんなかった。」

とキルアが言う。

「確かにあれは俺でも分からなかったかも。ほとんど見えなかったし。」

その後モンスターに3回あったが逃げるか蹴散らして500m程進んだ。

「よし、戻るぞ。」

俺が言つと

「急いだ方が良いな。途中邪魔されたし。」
とキルアが答える。

絶をして急いでビスケの元に向かう。そのさいモンスターは無視だ。

元の場所辺りまで戻った時に岩の隙間から二人が対峙しているのが見えた。

ビノールトがビスケの髪を持ち

「くくくくく。切つてやつたぜお前の髪…。」

オレはな、切つた人間の髪の毛を食うことで！！

本人さえ知り得ない肉体の情報を知ることができる。肉質…病気の有無、遺伝的資質、強さ。

お前の体を全て把握しその上で存分に可愛がつて……………」

ビノールトが髪を食つていちいち自分の能力の説明をしていたら突然目を見開いた。

まあ実年齢が57才とかとんでもなく鍛え抜かれた肉体などが分かつたら驚愕するだろう。オマケに自分に勝ち目が無い事が分かつたんだからな。

ビノールトは愛用のハサミや理容道具を捨てて構える。

「武闘家として手合わせ願いたい。」

と言つ。

「ふ…。ただのクズじゃないようだわね。」

いいだろう。」

とビスケも手袋を外し、構える。

お互いに構えて対峙した。

「シィッ」

とビノールトが右手で攻撃をするが見事にかわされ、その右手を掴まれ、そしてヒネリをかけられながら投げられて背中に強烈な一撃

を貰った。

致死量なんじゃないかとも思えるほどの血を吐きながらビノールトはピクピクしてる。

「運が良い、念での戦いならあんたを殺してた。」
とビスケが告げる。コイツマジ強すぎ。

「さてと、いるんでしょあんた達、いらっしやいー！」
と言われたので岩から出てきた。

「今の勝負どこからハッキリ見えた？」

ビスケに聞かれたので

「俺は全部。」

「オレは敵が宙に浮いて逆さになった辺りから。」
能力で視神経とかを強化してたから何とか見えた。鍛錬が役に立ったよ。

「ふーむなるほどね。」

もしあいつがゲームキャラならあいつをカード化してゲットできてるわけだけど、その時の入手難度はDってとこだね。

恐らくキルアだけで遭っていたらゲームオーバーかもしくは重体だったわね。ここに来てあたしが知ってるだけです。2回あんたは死にかけてる。この運がいつまで続くかしらね？」

ビスケはキルアに言う。

キルアは少し黙った後に「よろしくお願ひします。」と頭を下げた。キルアが頭を下げるってスゲエ事だぜ。

「あたしはウイングみたく甘くないわよ。覚悟はある？」
とキルアは聞かれて真剣な顔をして「大丈夫。」と答えた。

「ん、じゃ早速はじめるか。」

そう言っつてビスケはうずくまって苦しんでるビノールトの方に行く。
「起きなさい、カード全部出して。」

そう命令されたビノールトはバインダーを出した。

ビスケは自分のバインダーにカードを移してバインダーを消す。

「チャンスあげる。」

二週間！！あの子の攻撃をかわすこと。それが出来たら見逃してやる。

もしも決定打を浴びて悶絶したり立ち上がれなくなったらやっぱりあんたを殺す。」

ビノールトに死刑判決を下す。キルアは気にしないからアイツ完全に死んだな。

「攻撃を……受けなきゃいいんだな？」

「ええ。」

「アイツがどうなるうと……攻撃さえ受けなきゃいいわけだ？」
ビノールトが確認のために聞く。

「その通りだね。ただしルールが一つだけ、岸壁に囲まれたこの空間。ここから出ないこと。破れば失格、その場合も殺す。」

「オレは？」

とキルアが聞いた。

「あんたもここから出てはだめ。ここから出たり二週間以内にいつを倒せなければあんたには罰を与える。」

キルアにそう言う。キルアも納得したのか頷く。

「あんたビノールトだね？」

立ち上がって武器を拾っているビノールトに聞く。

「……ああ。」

「賞金首ハンター、ビノールト。しかし奴自身も賞金首！好物は人の肉。特に20才の女の肉がいいんだっけ？」

「22才だ。」

ビノールトが愛用の理容道具を腰に巻いて準備が完了した。

「始め!!」

とビスケが宣言した。

そして

「すみません。では俺はゲームクリアのために行きます。」

とビスケに声をかけた。

「あら、見ていかないの?」

ビスケに聞かれたが

「ええ、必ず勝つと信じていますから。」

そう言つと「そう、じゃ行つて来なさい。」と言われた。

俺はとりあえず原作通りアグレッシブに攻めるように

「キルア、もうお前は昔のお前じゃない。今のお前らしく戦え。」

と言つた。

キルアも最初は何か分からなかつたらしいが理解出来たのか

「おう!分かつた!!」

サンキューゴン!!」

と答えた後にビノールトに攻めに行った。やはり基礎修行をキツチリやっていたから原作みたいにビノールトの早さに負けてはいない。

あれなら一人でも問題なくクリアするだろう。

さて、ようやく自由だ。

とりあえず今は現実世界でもコピーしたカードが使えるか確かめるために先ずはマサドラに向かおう。確かそこから国外に出る方法を教えて貰える筈だ。

45 歓喜（前書き）

非常にご都合主義設定になっております。

45 歡喜

とりあえず現実世界に戻るためにマサドラに向かった。

本当は港に直行しても良いのだが、一度マサドラに行つとけばゲートで行けるようになるから最初に行つとく。

マサドラまで約70km。途中遊牧民みたいなテント村と無人の村を通過してようやく到着。

ちなみにかかった時間は4時間。結構急いだのに原作組よりも遅いんだよな。アイツらスゲーよな。

プカプカ何か風船のような街に入り、一応スペルカードの売り場を確かめるがスペルカードは売り切れだった。やっぱりアイツら「ハメ組」の影響か？

デパートからトレードショップに行き国外に出る方法を聞いた。

「国外へ出る方法なら3000ジェニーになります。」
NPCにコピーした10000ジェニーのカードを渡した。

「西へ50kmくらい行くとこの国唯一の港があるんだが、その所長がとにかく嫌な奴で旅行者が島を出る時には無理難題をふっかけるそうだ。」

まあ、裏金をたっぷり渡せば見逃してくれるそうだから大金を用意して港に行くことだな。

もう一つ、スペルカードでも島の外に出られるが結構レアで入手に苦労するかも知れないから注意しな。」

説明を聞いたら指示通りに西へ50km移動する。

途中郡狼に出会ったが鋭い爪を持っている奴が長だと分かっているので速攻倒して後は逃げた。カード化して取ったとしてもどうせフ

リーポケットは消えるんだからな。

港について所長の所に行つて通行チケットを取りに行つたらなんか「チケットが欲しかったらランクAのカードを持ってこい。」という無理難題を押し付けられた。通行チケットがランクBのクセにランクAを持ってこいなんて無茶苦茶だろ…。

ムカついたので硬でぶん殴つて無理矢理チケットを奪つた。

そしてチケットを持って港に入り、係員にチケットを渡すと奥の部屋に案内され、変な模様が書いてある自動扉を潜るとスタート地点みたいな部屋に入った。

「いらつしやい。」

とスタート地点の女が髪型を変えた以外同じ女がいた。まあ双子だからな。

「島から出るのですね？それでは行き先を決めて下さい。
選択できる港は50以上ありますので希望の場所を選んで下さい。」

別にどこでも良かったので

「ドーレ港で。」

と言つ。

「かしこまりました。この島を出ますとフリーポケットのカードデータは消滅しますがよろしいですか？」

「ああ。」

「それではまたの御来島をお待ちしております。」

そう言つて女が何かスイッチを押して移動し、ドーレ港に着いた。

やっぱりキルアと同じように何にも変化が無いから実感無いな。

「ブック。」

と唱えたがやはりバインダーは出ない。本当に現実世界に帰つて来

た事を確認して今度はコピーしたバインダーを出す。
見事成功してバインダーは出た。

次に本番であるカード化を解除出来るかだ。とりあえず石のカード
を取って

「ゲイン。」

と唱えたらカード化は解除されて石になった。

「良っしゃー！！現実世界でもカードは使える！！」

つい大声で喜んでしまった。俺らしくは無いが、これで指定ポケッ
トカードは勿論スペルカードも使えるからな。スペルはゲーム外に
出たら使う用途がほぼ無くなるけど…。

ゲーム外に出たんだから先ずは山賊に取られた服を買いに行った。
そしてその後は島に直接飛ぶのはヤバイかも知れないからゲートで
古城のグリードアイランドが並んでいる部屋に飛んで正式に入島し
た。

「グリードアイランドへようこそ。」

おお、あなたはもしかやゴン様では？」

分かってるクセに聞いてきたので「ああ。」と答える。

「ゲームの説明を聞きますか？」

「いや、いらない。」

こうして再びスタート地点に立った。

先ずはスペルカードの確保だ。

最低でも防御スペルが無いと指定ポケットカードを手に入れたとし
ても直ぐに奪われるのがオチだ。

でも特に防御スペルはハメ組が独占してるからマサドラで買うのはほぼ不可能。となれば持つてる奴から奪うしか無い。ハメ組の奴等を一人一人急襲しても多分分散して持つてるから効率が悪いし面倒だ。それにハメ組には原作通りにカードを集めて貰うから手出しは出来ない。

そこでスペルカードを持っていてハメ組とは関係なく、俺が直ぐに会える奴ということでキルアにステイルをかけたアイツを狙う事にした。

先ずは『完全なる隠匿』を使って存在を消し、ゲートを使って奴の元に移動。そして奴が人気の無い所に来たら『理不尽な支配』を發動させて強制的に絶の状態にして拘束した。

「な、何なんだ!?!」

いきなり絶になって体が動かなくなったため驚いている。

俺は周囲に誰もいないことを再確認して姿を表した。

「や、久しぶり。元気だった?」

片手を上げて挨拶してやる。

「お、お前は!?!あの時のガキ!?!」

どうやら覚えていたらしい。

「うん久しぶり。でさ、お前俺の連れに失礼なことかましてくれたじゃん?」

だから迷惑料を貰いに来たんだよ。」

笑顔で言う。相手は恐怖の顔色を浮かべるが。

「とりあえずさ、バインダー出して?」

そう俺が言うと

「ブツク!?!え?」

何故自分がバインダーを出したのか分からないという顔をしている。しかしおれは無視してカードを次々自分のバインダーに移す。

なかなか沢山のスペルを持っていたので嬉しい誤算だ。

アカンパニーやマグネティックフォース、リターンなど移動系スペルは勿論、ディフェンシブウォールやキャッスルゲートなど防御スペルやブラックアウトカーテンもあった。

それにサイトビジョンもあるから他の奴等のカードデータも見れる。その代わりに指定ポケットカードはほとんど持って無いな。精々がランクBが数枚か…。

まあ良いや。コイツは期待以上のスペルカードを持っていたから良しとするか。

「ありがとね。結構お前スゲエな。今スペルカードを手に入れるのはかなり難しいのにこんなにも持ってるなんて。」

と一応褒める。しかし男は俺をにらむだけ。何せその超貴重なスペルカードは勿論指定ポケットカードまで奪われたんだ。恨むのは当たり前前だ。

「じゃあさ、最後のお願い何だけど、心臓と脳の活動を停止してくれ。」

そう言った直後に男は倒れた。一応脈や心音も確認したがどれも停止している。瞳孔も開いているから死んだと分かった。

やっぱり部位に特定すれば効果は倍増するな。これなら返り血とかの心配もいらぬから簡単で良い。

その後男は消えた。完全に死んだと安心して次はゲートでマサドラに向かった。

とりあえずブラックアウトカーテンをコピーして使いステイルやフラスコピーを防止して覗き見を防ぐ。後はキャッスルゲートやディフェンシブウォールがあるから大丈夫だろう。

しばらくはマサドラから動かない。少なくともゲンスルーが正体を表すまでは。

だから今はトレードシヨップに行きまくってランクBまでの指定ポケットカード36枚をゲットする。

それ以上は12月以降で良いや。焦って動いて他のプレイヤーとやり合うのも面倒だし。

少なくとも後3ヶ月は大々的には動かない。

46 途中経過

一月が経ち、ようやくトレードショップでランクBのカードを取引出来るようになった。

現在持っているカードは9種15枚だ。

ほとんど必要無いが一応ダブリも買っている。まあトレードで使えるかも知れないからな。

ちなみにあの後ランクAやS、SSのカード入手条件などを知るために『完全なる隠匿』とゲートを使ってツエズゲラに近付き、頭を触って記憶を読んだ。

頭を触る程度だからツエズゲラは不思議そうにしていたが周囲に気配は無いし、念のため円でも探っていたけど反応が無かったからあまり気にしてなかった。

これで大体のカードの入手条件が分かった。まだ数種類のカード入手条件は分からなかったが、それはまた来月や再来月に記憶を読めば分かるだろう。

キルアの進捗状況が知りたかったからマグネティックフォースでビスケの所に飛んだ。

着陸した時にはビスケやキルアから警戒されていたが、俺だと分かると警戒を解いた。

「よお、久しぶり。」
と手を上げて挨拶。

「一月ぶりだね。どうしたの？」
ビスケが聞いてきた。

「キルアの修行がどの程度進んだか気になってね。」

俺の質問に

「全く呆れるぐらい優秀だわさ。あんたが基礎をやつといてくれたから大して教える事は無かったのよ。」

だから戦闘考察力を鍛えるためにこの岩石地帯の全種類モンスター入手をやらてたつた今全種類を集め終えた所だわさ。」

そりゃスゲエな。一月前までは手も足も出なかったモンスター達を全種類集めたんだからな。

「順調なようだなキルア」
俺が褒めると

「おう！今まではどう戦つていいか分からないモンスターが多かつたけど今じゃあほとんど分かるぜ！」
と嬉しそうに返事をする。

「それで？あんたの方はどうなのさ？」

ビスケが俺に聞いてきた。

俺はバインダーを出して

「今の所まだ指定ポケットはほとんど埋まって無い。でも代わりにスペルカードをかなり手に入れたからこれで攻撃される心配は薄い。」

「バインダーを二人に見せながら言う。」

「おー。確かに指定ポケットはまだスカスカだけどスペルカードはスゲエな。」

キルアが関心したように言う。

「そう言えばさっきここまで飛んで来たけど何のカードを使ったんだ？」

キルアの質問に

「あれは磁力。プレイヤー単体で任意の場所に飛べるスペルだ。」
と答えた。

キルアは「へー」とマグネティックフォースのカードを見ながら言

う。

「それにしてもよくここまでスペルカードを集められたわね。スペルカードはハメ組が独占するために動いている筈なのに。」
ビスケが不思議そうに聞く。

「ああ確かに大変だったよ。マサドラのスペルカード売り場に言っても売り切れたと言われたし。」

そう言うと

「じゃあどうやってスペルカードを手に入れたんだ？」

キルアが聞いてきた。

「ああ、貰ったよ。覚えてるか？このゲームに来たばかりやの時に
お前に盗視をかけた奴。」

そう言うとキルアが思い出したのか

「ああアイツ？」

と顔をしかめた。

「そ、アイツと偶然かち合ってたな。だから迷惑料としてスペルを全部貰った。」

そうそう、それとお前にかかった盗視だけでもう心配する必要は無いよ。」

「別に心配してなかったけどさ。何で？」

「アイツはゲームオーバーしたから。」

その一言にキルアは

「…もしかして殺っちゃった？」

と聞いてきた。

「まあな。流石にタダじゃスペルはくれないからな。」

その言葉に「やっぱりゴンだな…。」という微妙な答えを貰った。

ビスケはあまり良くないような顔を見せるが大した反応はしてない。別に今更殺しはいけないなんて考えは持っていないだろうしな。

その後はキルアが系統別修行に移ると聞いて俺はリターンでマサドラに戻った。

後は12月までにランクBを全部集めて2月ぐらい迄にランクAやSを集めよう。多分それぐらいの頃に一坪の海岸線イベントが起きるだろう。

原作みたいにあんまりにも早く集めると警戒されて攻撃されるからな。ゆっくりと確実に集めよう。

47 行動開始

12月29日になった。

確か今日、ゲンスルーがカミングアウトしてハメ組を皆殺しにする筈だ。

大量にカードが宙に浮くから貴重なスペルカードが簡単に手に入るようになる。中でもリーブやプリズンといった特殊アイテム。

リーブがあればいざというときに逃げれるし、プリズンがあればカードを奪われる事は無くなる。コピーをすれば限度枚数など無視出来る。だからゲンスルーみたいに全ページを守るのも容易い。

そのためにはそれなりの枚数のスペルカードを買わないとプリズンは出てこない。だからビスケとキルアにも協力して貰おう。

あいつらをあわせればフリーポケットの数は135個。まあ、キルアは途中でハンター試験を受けに行くから使えないとしても、ビスケのバインダーを合わせれば倍になる。

確か原作でも60枚ぐらい買ったならプリズンが一枚手に入ったし。

ちなみに現在指定ポケットにはランクBのカード全種類36種とランクAのカード8種類の計44種、ダブリを含めると60枚。

ランキングで見ればまだ23位。

やはりランクが上がったからか俺に盗視や透視を使ってくる奴等が出てきた。まあ暗幕で防いでるけど。

ちなみにその後原作通りにあの真実の剣を奪った奴からトレードの申し出があった。一坪の海岸線の顔利きのためにいらなかったがランクB同士のカードでトレードをした。

他の奴ともトレードをしたが、フェイクで化けたカードをつかまさ

れたから現在は聖騎士の首飾りを装備している。ちなみにフェイクをつかませたプレイヤーはカードを奪った後にゲームオーバーさせた。こいつのおかげでランクAのカードもゲット出来た。

さて、それではキルアとビスケに久々に会いに行くか。

「磁力使用、ビスケ。」

スペルの効果で一気にビスケの元に飛んだ。

「よ、久しぶり。」

休憩なのか二人とも何もしていない。

「久しぶりね、また修行の途中経過を聞きに来たの？」

ビスケが聞いてきた。

「まあ、それもあるんだけど。」

キルア、今日が何月何日か分かるか？」

「え？いや、分からない。丁度今ビスケからもうすぐ新年だって聞かされたけど。」

「ああそうだ。このゲームはリアルタイムだから外の世界と同じ時間だ。」

ちなみに今日は12月29日。さて、来年には何があったでしょう？」

とキルアに聞いたら少し考えた後に

「……あ！ハンター試験！！」

と思い出した。

「そう、お前すっかり忘れてただろ？」

そう聞くとキルアは「ははは……。」と苦笑い。

「まあ幸い既に登録はゲーム前に済ましたし、試験会場までの招待券もあるから今すぐ外に帰る必要は無いけど、そのまま忘れてストップカス可能性があったから忠告しに来た。」

…正解だったようだが。」

また睨むとキルアは

「ははは…。」

そうだ！ゴンはどこまで進んだ？」

と話をすり替えた。別にこれ以上追求しても仕方ないので話に乗る。

「今のところ44種だ。」

ランクBのカードは全部ゲットして今はランクAを集めてる。」

バインダーを出して二人に見せる。

「おおー。結構集まって来たな。」

と言っていたキルアが真実の剣を見て

「あれ？でも真実の剣とか月例大会のカードはどうやってゲットしたんだ？だってあれは月一回にしかならないカードだろ？」

と聞いてきた。まあコイツ修行しかしてねえから知らないんだよな。

「ランクBのカードは全部トレードショップで買えるんだよ。」

同じトレードショップで50回以上取引すれば向こうから話を持ちかけて来る。」

「マジ！？じゃあオレ達が注目を浴びながら月例大会に出たのって…。」

「そう、ただ目立つだけの無駄だったって事だ。」

それを聞いてキルアはガックシ。せつかくジャンケン必勝法まで覚えたのに無意味だったと知らされたんだからな。

その後はゲームの裏技やショップの利用法など隠し要素の事を二人にも教えていたら誰かが飛んできた。

「よお、久しぶりだな。」

除念師のアベンガネだ。肩にはタイマーのような機械を装備してい

る。

「あなたは…。」

その肩の機械は…？ 一体何があつたのですか？」

ビスケが猫かぶりをしながら聞く。

「「爆弾魔」にやられた。まず、話を聞いてくれ。」

アベンガネがアジトでの突然のクーデター、ゲンスルーの能力などを話していた。

「 というわけだ。オレ以外のメンバーはアジトで「爆弾魔」の一斉解除を待っている。

おそらくは嘘であろう奴等の条件を信じてな…。」

アベンガネが平然と話す。お前、一時とは言え仲間だった奴等の死刑宣告を簡単に言うね。

「何人かは「一握りの火薬」でやられても全員でかかれば大半は助かると思うが？」

原作のセリフを言う。

「……ムリだな。」

犠牲になるのは最初に飛びかかる何人かまたは何十人かなわけだ。心理的に誰がそんな役を望む？

最も戦闘技術に長けていたジスパが目前であっさりやられた…。その時点で勝敗は決していた…。

いや、奴をむざむざゲーム外へ逃したのも致命的だった。目の前の展開に頭がついていかなかったということもある…が。

それぞれが所持していたカードを全て確認し、整理をし直した後… いわばカードのシャッフル後とでもいうべき状況を狙われた点。手持ちカードと役割の確認をする前の一時のかちどき…その緩みをつかれたのも痛い。」

くそ長いセリフが続く。コイツ話し好きなのか？

少し飛ばして

「そしてできるなら…オレ達の仇を討って欲しい…！
少なくとも決して奴等にゲームクリアなんてさせないでくれ。」

「話し終えたらアベンガネはバインダーを出してカードを取る。
「再来」使用！！ブンゼンへ！！」
アベンガネはブンゼンへ飛んで行った。除念をしにいくんだろう。

「さて、どうする？」
ビスケが聞いてくる。

「どうもしないさ。予定通りやるしかない。
彼等のアジトさえも知らないんだ。今更探しても手遅れになるのが
オチだ。」

俺の答えに
「そうだな。オレ達はスペルカードをそこそこ持つてるけど時間が
足りなすぎる。どっちにしろゲームオーバーになるだけだな。」
キルアが冷静に答える。原作ゴンじゃなくて俺と一緒に行動してた
からか原作よりも冷静だと思う。

「とりあえずマサドラに行くか。」
俺がそう言つと

「何で？」
とキルアが聞いてきた。

「前にも言ったけどハメ組がスペルカードを独占してるからスペル
カードは売り切れだつて言っただろ？
でもこれでハメ組が全滅するつてことはその分スペルカードも大量
に消滅する。だから貴重なスペルカードも比較的簡単に大量に入手
出来る筈だ。」

俺の考えを聞いたキルアは

「成る程！確かにそうだな。頭良いゴン！！」

と賞賛。ゴンに会わない限り別にあんまり他人の命とか気にしなかったからか性格は変わっていない。いやむしろ悪くなってるような…。

現にビスケはあまり良い顔をしてない。

その後爆弾が爆発した頃にマサドラに到着。マサドラに着く前に結構怪物に襲われたが、ほとんどキルアが秒殺。コイツマジ強くなってるやがる。

「お客様運が良いわよ。ずっと品切れだったのだけどついさっき大量に入荷できたの。」

呪文カードを買う時のルールだけど袋はお店の中で開けてね。購入したカードは本に入れて持ち帰る決まりなの。入りきらないカードは店を出たとたんに消えちゃうから数を考えて買ってね。」

話し合った結果3人で買ったスペルカードは90枚。

やはり原作よりも量を買ったからかかなりレアなカードもダブルって手に入れた。何せプリズン2枚にトランスフォーム1枚も手に入れたからな。

店を出て誰がどのカードを持つかの分配を始めた。

「とりあえずこのプリズンは俺が持つてる。俺のカードを奪われたらマズイからな。」

俺の意見に二人とも賛成。俺がゲームクリアを目指してるんだから当たり前だな。

「指定ポケットのダブリはビスケが管理してくれ。」
そう言う「何でアタシ？」と聞いてきた。

「キルアは1月に入ったらハンター試験を受けるために一度外に出なきゃいけない。外に出ればフリーポケットのカードは消滅するし10日以上経てば指定ポケットのカードも消滅する。もしも長期試験をするハメになったらマズイからビスケが持っていてくれ。」その説明を聞いてビスケも納得した。

「ついでに何枚か防御スペルもな。指定ポケットカードを所有するんだから防御スペルも必要だな。」
そう言うと

「ちよつとアタシも使うの!? いやよ、よくわかんないもの!!」
とクレームつけてきた。

「防御スペルは3つぐらいしかないから覚えてくれ。分かんなかったらキルアに聞いて。」
とキルアに丸投げ。

キルアは
「オレ!? オレもまだよく分かってないんだけど!？」
と文句を言うてくるがスルーだ。

他にもコンタクトやアカンパニーを渡して「何か聞きたかったり会いたくなったら使ってくれ。」と言って俺はマグネティックフォーアスで移動する。

これからは本格的に動いて最低でも指定ポケットカード50種以上を目指す。それが出来ないと一坪の海岸線のイベントが起きないからな。

90枚もスペルカードを買ったけどキルアのバインダーは使えないから30枚くらいは消滅した。

まあ防御スペルとかが欲しかったただけだからな。

プリズンはコピーして念のためにカード化限度枚数に達しないように慎重に使って全指定ポケットページをガードした。これでカードを奪われる事は無い。

さてと、多分あんまり変化無いだろうけどもう一回ツエズゲラの記憶を読んどこう。もしかしたら新しくカードの入手方法をゲットしたかも知れないからな。

48 交渉

更に一月経ち、ランクAのカード22種をゲット。これで合計66種を集めた。

ランキングでも急上昇して現在12位。

そろそろ一坪の海岸線を取るためのイベントが発生するだろうから奇運アレキサンドライトを取りに行った。

聖騎士の首飾りを装備したまま病気の山賊の里に行った。

里に行ったら息子はまだ病床にいた。あれから3ヶ月くらい経ってるのにまだ寝込んでるのかよ。さっさと死ねば良いのに。

「俺を信じていただけないでしょうか？」

村人達を集めて一応の説得。

村人達は俺を見つめて

「無償で我々に全てをささげてくれたお方…！信じましょう…！」

そう言った直後に次々と村人がカード化していく。別に全員がカード化しなくても良いのでは？いちいち集めるのも面倒だし。

病気の村人のカードを集めて聖騎士の首飾りで浄化して元気な村人に変える。にしても病気の村人らランクFのクセに元気な村人はランクCなのかよ。たかだか病気が治っただけでエライ違うな。

「おおー治ったぞ…！」

などハイテンションな村人。まあずっと病気の状態だったからな。

俺が帰ったら再び病気になるんだろうけど。

「ありがとうございます…！ぜひお礼きこれを…！」

と村長が宝石箱を渡してくる。開けて中の宝石を手に取りればカード化して奇運アレキサンドライトになった。

とりあえず一度二人の所に飛んだ。多分もうすぐ呼ばれるだろうし。
「よお、修行は順調か？」

「ええ、非常に順調だよ。系統別の修行もほとんど終了したし。」
そりゃスゲエ。俺は2年以上かかったんだけど…。

「ゴンの方はどれぐらい進んだんだ？」
キルアが聞いてきた。

「ああ俺も順調だ。今のところランクAもほぼコンプリートした。
まあ何枚か他のプレイヤーが独占してるカードもあるから無理だけ
ど、他のカードは全部集めて次はランクSにあたる。」
バインダーを見せながら話す。

「おおースゲエな。このままなら後2、3ヶ月でクリアするんじ
やねえか？」

キルアが言う。確かにあと2ヶ月くらいでクリアするよ。ゲンスル
ー達のカードを奪ってな。

その後は奇運アレキサンドライトの入手経路や他のカードの入手条
件などを話していたらピンポンとバインダーがなった。

『他プレイヤーがあなたに対して「交信」を使用しました。』

「うん？一体誰だ？」

キルアが疑問を發した。

『よオ、こちらはカヅスールだ。』

と真実の剣を奪った奴からだ。

「トレードか？」

と俺が聞いたら

『いや、一度会わないか？相談があるんだ。』

「何の？」

知ってるけど。

『もうすぐクリアしそうな奴等がいる。』

3人組でリーダーはゲンスルーって奴だ。知ってるか？』

「ああ。」

『他に何組か声をかけていてマサドラの北東2kmの岩場で集まる。情報をトレードするだけでも価値はあると思つぜ。』

そう言つてコンタクトを切つた。

「ふーん。どうするんだ？ゴン。」

キルアが聞いてきた。

「うーん……。とりあえず行つてみるか。何か有益な情報が得られるかも知れないし。」

そう言つた後に二人を見て

「それと二人も一緒に来てくれ。」

「何で？だつてオレ達ゲームは何もしてないし。」

キルアの意見はごもつとも、でもお前達がいないと人数が足りないんだよ。

「交渉ごとなら1人より3人の方が良いし、それに相手側も組で来るらしいからな。一応俺達同じグループだし。」

適当な理由をつけて二人も同行させてマサドラに飛んだ。

「よく集まってくれた。礼を言う。」

「交信」で話した通りゲンスルー組があと少しでコンプリートしそうな勢いだ、

さつきランキングを確認したら現在96種。早急に対策を立てる必要がある。」

カズスールが開催者として場を仕切る。

「ちよつといい？」

キルアがカズスールに声をかける。

「何だ？」

「ランキングつてどうやって調べんの？」

キルアが聞く。これはあえて教えてなかった。

「それは…」

カズスールが答えようとしたら

「ねエちよつと、そんなことも知らないの!？」

予想通りアスタが絡む。コイツマジウゼエ。

「こんな人達に付き合ってたら夜があけちゃうわよ!!

いいからさっさと本題に入ってよ。」

「まあまあ、そう言うなよ。情報交換も目的の1つではあるんだから。」

カズスールが諫める。

「もしかしたらアスタの知らない情報を彼らが持つてるかもしれないんだぜ。」

誰だか分からないがフォローする長髪。

「はは!あるわけないじゃないのそんなこと。交換店さえ活用し切れてない素人よ?このコ達。」

何でコイツはそこまで自信があるんだろう?

その後はカズスールが説明してくれ、話が進む。

「なければ本題だ。ここにいる全員で共同戦線を張りたい。」

カズスールがこの集会を開いた理由を説明する。しかし待ったがかかる。

「提案には賛成よ。でもメンバーには異論があるわ。」

案の定アスタが俺達を指差しながら言う。

「ちよつと待てよアスタ。あんたが「交信」の時に言った条件は守ったぜ?

カードの所有種50種以上。ここにいる6組はちゃんとクリアしてる。」

カズスールが反論するが

「それプラス互いに有益な関係を作れる人達って言ったはず!

このコ達がアタシ達に有益なものを提供してくれるとはとても思えないわ。」

クソアマが喚く。テメエゲンスルーが始末してくれるから何もしねえが、もし何も無かつたら後から地獄見せてやるのに。

「有益な関係を潰してんのはそつちだろ？」

キルアがアスタに噛みつく。

「あーら口だけは達者ねエ。」

なら証拠を見せて欲しいわね。何かお徳な…」

「ゲンスルーの能力を知ってる。」

それに奴等が持ってないカードのうち一枚も持っている。これで「不満が？」

俺が聞く。このアマにそれなりの代償を支払わせてやる。

「いーえ十分よ。早速教えてよ。あいつらの能力。」

何その態度？俺達がお前に見返り無しで教えるのが当たり前みたいな態度は？

「見返りは？まさかタダで教えて貰おうなんて言わないよな？」

俺の言葉に

「能力の情報とひきかえに1枚ランクAのカードをあげるわ。それなら文句ないでしょ？」

「ふざけてる？ランクAのカードなんて簡単に取れる。」

ランクSのカード3枚だ。でなきゃ教えられないね。」

原作よりも一枚多い。別に情報はいらさないからな。

「チツ、調子乗ってんじゃねーよガキが。」

聞いたでしょ！話にならないわこいつら。アタシ達からランクSのカード全部で15枚もふんだくる気よ！？」

アスタが叫ぶ。

「寝ぼけんなよ。3枚はあんたのグループだけだ。」

「はア！？」

「他の4組にはランクSのカード1枚で教えるよ。」

でもアンタ等には3枚。何故だと思う？」

俺の質問に

「はぁ？アンタがヘソ曲げただけでしょ？」

アスタがバカにしたように言う。

「残念。答えは俺達をナメたからだ。」

アスタは分らないという顔をする。

「この他のグループもいるという状況下でお前は俺達をナメた。

こういう同盟などを組む場合、ナメられたままでは他の奴等にも侮られる。だからお前にはそのナメた分を課さなくてはならない。お前と同じグループの二人には気の毒だがお前と同じグループだという事で我慢して貰う。」

俺がそう言うとおスタは尚も何か言っ来そうだったが

「アスタ、いいよ。3枚くらいくれてやろうぜ。」

「それにそのコ言った通りアスタが悪いよ。」

と仲間に言われてアスタは悔しそうだが引っ込む。

結局ランクSの身重の石、信念の楯、盗賊の剣を貰った。

他の奴等からもランクSのカード1枚か情報を得た。ほとんどが既に知ってる情報だったけどね。

これでランクSのカードは5種集まった。楽で良いね。

「それでは約束通りに。」

ゲンスルーの能力は「命の音」と「一握りの火薬」。どちらも標的を爆破する能力で……」

しばらく説明をして

「 というわけでゲンスルーには絶対に近づかない方がいいよ。俺の説明が終わると

「マジ！？やられたわ……あの時だ！！」

「オレもだ。交渉の時触られた。」

と何人かは焦りながら言う。

「何か方法はないの!? 解除法は!?!」
とアスタが聞いてきた。

「勿論ある。ただし聞くならランクSのカード1枚だ。サービスとして今度は全員同じ条件でもいいよ。」

また取られるのかと悔しそうな顔はするが、自分にかけられた爆弾の方が気になるので取引に応じた。

解除法が聞きたいのか、爆弾を仕掛けられて無いグループも支払い、5枚を得た。これでランクSの合計は10種だ。

「爆弾の解除法はゲンスルーに触りながら『爆弾魔』捕まえた」と言わなくてはならない。

ちなみに爆弾のタイマーが発動するのはゲンスルーが能力の説明をした後だから金輪際ゲンスルーに近づきさえいなければ問題無い筈だ。」

サービスとして補足情報もあげた。何もせずにランクSを10種も貰ったからな。これぐらいのサービスはやる。」

「じゃあいよいよ核心だな。奴等の持っていない3枚のうちどのカードの独占を狙うかだが。」
カズスールが目的に戻す。

「俺達の持つてる75『奇運アレキサンドライト』は多分独占は不可能だ。1組1枚しか取れないアイテムだったし、カード化限度枚数20は多すぎる。」

俺がそう言つと

「No.75を獲ったのか!?!」

「すごいなお前ら」

など驚く一同。ゲーム初期ならそんなに難しくない条件だったけどな。

「どうやって獲るんだあのアイテム？

Sカード3枚でどうだ!？」

など交換も持ちかけて来る。

「ちよつと待て!! もう後にしろよ情報交換は。」

とカズスールが話を元に戻す。

「確かに短時間で「複製」を19枚揃えるのは至難の業だな。」

「いやいやその前に75って他に誰か持ってるんじゃないか？」

「あ、そうか。」

などなど話し合いが続く。

結局、その後誰も所有していないNo.2の一坪の海岸線を取るためにソウフラビに行く事になった。

49 様子見

アカンパニーで飛んでソウフラビに無事到着。

来たことあるけどやっぱりデカイ街だな。

「早速入って聞き込みだが、全員の行動を統一する意味で入手までの流れを確認しておこう。」

カズスールがSSランクのカードの入手手順を書いて全員に説明した。

説明が終了したら散会して聞き込み開始。

「けっこう人が多いなー。」

キルアが回りを見ながら言う。

「ああ、面倒だが片っ端から聞いてくしかねえな。

もしかして何回も訪れないと重要なことを教えてくれない可能性もあるから何週間も何も進展が無いかも知れないから覚悟しとけよ。」

二人に言う。

「おーー!!」

と返して来た。キルアは年齢的に分かるがビスケが何故乗る？

「おーい、情報提供者が見つかったらしいぞ？」

今さっき何週間もかかる覚悟をしたばかりなのにゴレイヌが伝えて来た。

「マジ!?!」

とキルアは驚く。確かにこのデカイ街でいきなり当たりってスゲエと思うからな。

しかしその情報提供者のほとんどは「一坪の海岸線の言葉だけは知ってる。」だけだった。

他にも聞き込みを続けていたら魚屋の女店主が

「あんだ達なら…。話してもいいかも知れないわね。」
と当たりつばいことを言った。

「！！ぜひ聞かせてくれ。」
と聞いた奴等も興奮する。

「海賊が仕切ってるのよこの街は。
この海域のどこかに「海神の棲み家」と呼ばれる海底洞窟があると
言い伝えられているの…。「一坪の海岸線」はそこへの入口…。
様々な財宝が眠っているとされるその海底洞窟の伝説を聞き付け
て数年前、15人の海賊がこの街にやって来た。

レイザーと14人の悪魔…！

街の漁師は全員拷問を受けて殺されたわ。この街で「一坪の海岸線」
の場所の手掛かりを知る者は全て。

もしも海賊を追い払ってくれたらあなた達に教えてもいいわよ。兄
から聞いた「一坪の海岸線」の場所…！」

一旦全員が集まった

「こわいほどトントン拍子に話が進むな。」

カズスールが不気味がる。

「ホントおかしいな。あの女もオレ達が前に聞いた時は全く話し
すらしなかつたんだぜ。」

「レイザーと14人の悪魔か…。」

イベントの発生条件がプレイヤーの人数だったのかも知れないわね。
海賊が15人。あたし達も偶然だけど15人。」

「15人以上のパーティを組まないイベントが発生しないってこ
とか…。」

「しかしゲームキャラはどうやってそれを判断するんだ？」
皆が話し合っている。

「おそらくは15人以上で「同行」を使いここに来る。それがイベ
ント発生条件だろう。」

俺が答えると

「成る程…。なかなか情報すら出てこなかったわけだ。」

「おそらくここまでたどりついたのオレ達が初めてじゃねーか？」
と興奮している。

「えげつねエな…」

しかしゴレイ又は顔をしかめる。コイツも頭良いしな。

「だねえ。全く残酷なイベントだ。」

と俺が答えると

「…ああ。」

とゴレイ又も答えた。

まあカード化限度枚数が3枚しかないカードを分けなきやいけないからな。普通なら必ず揉める。何せ15人以上が必要だからな。

海賊の居場所である酒場に移動した。

中には4人のピエロみたいな帽子をかぶった男がいた。

「なんだ？ テメエら。今日はオレ達の貸し切りだ。帰んな。」

デカイ力士みたいな体をしたポポボが言う。

「相談をしに来たんだ。この街を出ていってくれないか？」

カズスールが平和的に言う。

「……ガハハハハ！！」

と笑い出す海賊？ 達。

「久しぶりに聞いたセリフだな！！」

前にそのセリフを言った奴はその海辺で骨になってるぜ！！」
と笑う。

「今すぐペシャンコにしてやりてえが。」

とポポボがカズスールに近づく。

「全ての決定権は船長にある。」

相談なんて言わずに腕づくでやってみろよ。」

そう言ったボポボは持っていた酒を円状にまき、ライターで火を点けた。酒は燃え上がり円状のリングをつくる。

「オレをこの土俵から外に出せたら船長に合わせてやるぜ？」

ボポボは自信満々に言い放つ。

「炎の俵を越えて内に入ったら勝負開始だ。一度に何人かかってきてもいいぜ。オレの体をこの俵の外へ出せばオレ達のボスに直接会わせてやるよ。」

そうボポボがルールを告げた直後に

「土俵の外へ出せば良いんだな。」

とスキンヘッドが出てきた。

「ゼホ。」とカズスールが言う。そう言えばお前のチームだったな。「力勝負なら強化系のオレに任せとけ。」

アホかお前、なんで律義に自分の系統をバラす？こん大勢の前で。

「ふうう~~~~。」

はあああ!!!!」

とかいちいち声に出してゆっくりと練をするゼホ。コイツマジで雑魚だ。

練を終えたらしいゼホが土俵に入り

「はっ!!!!」

と気合いを入れてボポボに突撃する。しかしボポボは小揺るぎもしない。

「ぐっ、ぐっ。」

とゼホは頑張るが

「お？」

けっこう力あるじゃねーか。」

と言ったボポボはゼホを持ち上げて吊りかける。

「ぐっ、はな……」

ゼホが抵抗するが拘束は弱まらない。

そしてポポボは薄笑いを浮かべながら炎の土俵にゼホを近付け、ゼホの足を炎で炙る。

「ぐっ、やめろ！！放してくれ、負けだ！！オレの負けだアアああ！！」

とゼホは悲鳴をあげる。

原作ならゴンが止めるために動くが、俺はそんな気は無いのでただ見てるだけ。

しばらくゼホの足が焼かれ、靴が燃えて皮膚が焼かれた辺りでポポボが飽きたのかゼホの体を投げて土俵から出す。

「ゼホッ。」

とカツスール達がゼホに駆け寄る。足の火傷はそこまで酷く無いから切断は免れるだろう。

治すには大天使の息吹か外に出て救急車を呼ぶ必要があるがな。

「さあ、どうした！？ビビッちまったんならさっさと出ていきな！！」

ポポボが言う。

他の奴等はさっきのを見たせいか行きたがらない。

「オッサン、俺けっこう強いけどどうする？」

と俺が言う。

「どこからでも来いよボウズ。オレを一步でも動かせたらお前の勝ちにしてやる。」

とポポボは余裕気に言う。

それを待ってた。

「アンタが一步でも動いたら負けで良いんだな？」

とポポボに確認する。

「ああ、出来るならな。」

とポポボが肯定する。

「本当に良いんだよな？」

と周りの奴等にも確認する。

「ああ、ポポボがそう決めただからな。」

他の海賊達も肯定する。

「んじゃあやろうか。」

そう言つて土俵の中に入る。ポポボは宣言通りが動かずに俺を待っている。

「さあ来なガキ。」

とポポボが挑発する。それに乗つたフリをして一気にポポボに突っ込む。

「おお、なかなか強えじゃねえか。」

とポポボは余裕を見せる。まあ普通に突っ込んだだけだからな。

そして能力を使い足の筋力を上げて一気に足払いをポポボにかける。

「うおお！！！」

という声を上げてポポボは見事にコケた。

「動いたぞ。俺の勝ちだよな？」

そう言つて周りの奴等に聞く。

「ああ、それがポポボが決めたルールだからな。」

それを聞いて俺は土俵から出た。

「チツ！！！」

とポポボはムカついてるようだが自分が決めたルールだし、周りもそれを認めているから原作と違って大人しく下がる。やっぱり顔を焼かなかつたからか幾分冷静だな。

「ついて来な、ボスに会わせてやる。」

海賊の案内で酒屋を出た。

しばらく歩き、要塞に到着した。

「灯台を改造した要塞。ここで密航船をチェックしてるんだ。」
海賊の一人が説明しながら門を開ける。

そしてまたしばらく歩き、体育館みたいな広い部屋に入った。中ではバレーコートや跳び箱、バスケットゴールなど様々な競技の道具がある。

そして海賊達はダンベルを持ち上げ、鍛えている細目の男に近づく。

「誰だ？そいつら。」

細目のレイザーが聞く。

「客だ。オレ達を追い出したいそうだけ。」
と説明する。

「ホウ、じゃあ早速本題に入るか。勝負しよう。」

互いに15人ずつ代表を出して戦う。1人1勝。先に8勝した方の勝ちだ。

勝負のやり方はオレ達が決める。それでお前達が勝てばこの島を出ていこう。どうだ？」

レイザーが聞く。大変だねえ。わざわざゲームキャラみたいなセリフを言うのは。

「質問がある。」

ゴレイヌが聞く。

「どうぞ。」

「もしオレ達が負けたらどうなる。」

「特に何も、ここからお帰りいただくだけだ。」

とレイザーが答えたら

「よし！やろう。」

とカズスールは答えた。

「よかろう。勝負のテーマはスポーツ！ここにいるメンバーがそれぞれ得意なスポーツでお前達に勝負を挑む。」

レイザーが言った後に拳にバンテージを結んだ男が現れる。

「オレが一番手だ。オレのテーマはボクシング。」

そう告げた後、男はボクシングのリングに上がった。

「さあ、誰がやるんだ？」

と聞く。

「わかってると思うが闘れるのは1人1試合だ。1人で何勝もすることはできないぜ。」

とレイザーが補足する。

「1つ確認しておくが念は使ってもいいんだろっな？」

カズスールが聞く。

「もちろんさ。オレ達はバリバリ使っぜ。」

とグローブをはめて男は答える。

「よし……オレが行こう！」と男が出る。名前わかんねえから区別しにくいな。

その後は原作通り。

ボクシングではカウンターアッパー食らってKOだし、キルアとビスケにワザと負けるぞって告げたから俺達も負けて後は普通に負けた。

「これで8勝。オレ達の勝ちだな。」

出直して来な、まだしばらくオレ達はこの街で好きにさせてもらっぜ。」

そう言われて俺達は要塞を出た。ちなみにポポボは別に騒がなかった。そこまで俺に恨みは無いだろっなからな。

「一度バトルに負けてしまったパーティでは二度と挑戦できない……か。」

カズスールが改めて言う。

「そのくらいのリスクは当然だろうな。ま、15人のうち1人でも

メンバーが変わればいいんだからそれほどムチャなリスクじゃないな。」

と話し合っていたら

「あ、でもアタシ達はもう抜けるから。」

とアスタが告げる。

「えっ。」

とカズスール達が驚く。

「「爆弾魔」組のコンプリート阻止という当初の目的は達成できたわ。だってあいつらには「15人の仲間を集める」っていう条件はまず不可能だから。

むしろあんた達もしばらくはこのイベントは放つといたら？下手に入手に成功したらそのカードを狙われて危険だわ。その方が奴等には都合がいい。」

とアスタが説明する。確かにそうも言えるがそれは先送りにしかならないが？

「たしかに……そうだな。」

と周りも納得し始める。

そして他の奴等も結局はアスタの意見を賛成して散り散りになる。残ったのは俺達とゴレイヌだけ。

「あんたはどうすんの？」

キルアがゴレイヌに聞いた。

「お前らと同じさ。もっと強い仲間を探す。続ける気だろ？このイベント。でなきゃあの作戦変更は意味無いからな。

あの連中は勘違いをしている。オレ達にとってもこのカードはなるべく早く入手した方がいいんだ。」

「少しでも仲間割れの危険を回避するため……。」

俺が言うと

「その通り。」

ゴレイヌが答える。

キルアも分かっていたらしいがビスケは分からないようだ。

「仲間は最低15人必要。でも「一坪の海岸線」のカード化限度枚数はたった3枚。このイベントははじめから仲間同士の争いの火種をかかえているという事だ。」

と俺が言っているとビスケは「あ…。」と分かったようだ。

「さて、俺達全員が勝つことを前提にしてもあと最低4人の手練れが必要。」

俺が言つと。

「理想はそいつらが11人組のパーティーだな。」
とゴレイヌが答える。

「そんな都合の良いパーティーがいると良いがな。」

そんな大人数で動く奴等がいたらこのイベントはとっくにクリアされてるだろうしな。

とりあえず話し合いとして飯屋に移った。

「勧誘するプレイヤーに心当たりはあるか？」

オレのを入れても「磁力」と「同行」は合わせて7枚しかないから引き入れに失敗は許されないうぜ。」

ゴレイヌが言う。

「あんたの方はどうなんだよ？」

キルアがゴレイヌに尋ねるが

「いたら1人でプレイしてないさ。」

と首を振る。

「うーん…。だったらツエズゲラはどうだ？ 実力は申し分無いと思うが？」

俺が聞いたら

「うむ、まあ…確かに実力的には申し分無いだろうが、出来ることなら仲間にはしたくないな。」

とゴレイヌは否定的。

「何故？」

「奴等も「爆弾魔」組と同程度のカードを集めているはずだ。協力だけはしてもらってカードは渡さないって作戦をとるなら話は別だが。」

とゴレイヌは言う。でもアイツら意外とカード持ってないからそんなに警戒する必要も無いけどね。

「んー…。でも他に知ってる奴はいない。ツエズゲラなら仲間もいるだろうし何より目的が分かっているから交渉もしやすい。」

条件としては先にクリアしたなら報酬の10%の50億を支払う事

を条件とすれば損は無いと思うが？」

ゴレイヌに再度尋ねる。するとゴレイヌも考える。

「……確かに奴以外に心当たりも無い。単独で動いてはいないだろうからメンバーも手っ取り早く集まる。

情報の見返りとして50億は法外だがこの状況下なら可能だろう。

よし、じゃあツエズゲラを勧誘しよう。」

とゴレイヌも賛同してくれた。これで8人集まった。原作ではここにヒソカがいるけどもう死んだから無意味。

能力はコピーしたけどキルアがいる前で使えば100%バレる。だから使えない。その分俺が頑張る必要があるがな。

「ところでツエズゲラと遭った事はあるのか？俺は無いけど。」

ゴレイヌが聞いてきた。

「そういえば俺も無いな。ビスケは？」

キルアがビスケに聞く。

「いいえ、あたしも遭ってないわ。」

お前らは基本的に岩石地帯かその周辺にいたからな。

「大丈夫だ。俺のバインダーには入っている。」

バインダーを出してステイルのカードを差し込みリストを見せる。

「おー！本当だ。いつの間に遭ったんだゴン？」

キルアが聞いてきた。

「さあ、知らないけどいつの間に遭ったらしい。カードを取ってる時かマサドラにいた時か、何時かは分からないがな。」

本当は記憶を読むために遭ったんだけどな。

その後アカンパニーでツエズゲラの所に飛んだ。

「とにかく条件はクリア報酬500億の10%、50億!!
それがのめなきや、「一坪の海岸線」の情報は教えられない。」
ゴレイヌが原作通りの交渉をしている。

「…法外だな。」
ツエズゲラが答える。確かに情報で50億も取るのは普通あり得ないからな。

「状況が状況だからな。それにこのカード、おそらくあんた達が自力で見るのは絶対困難だぜ。内容を聞けば納得してもらえないはずだ。」

ツエズゲラは考えているな。確かに「一坪の密林」みたいに口トリでたまたま当てるなんて確率低すぎるし。

「カードを入手してないというのは本当だろうか？」
ツエズゲラが確認として聞く。

「ああ、現状のオレ達では入手不可能だ。それが出来ていればこんな金額はふっかけてないさ。」
とゴレイヌはお手上げをする。

ツエズゲラは隣にいる仲間を目配せすると仲間は頷いた。
「……よし！条件は呑み。話を聞こう。」

ゴレイヌが説明をした。

「くつくつく、なるほど、だから直接会って話がしたいと言ったわけか。以前痛い目に遭って警戒したんだが来てよかったよ。
オレ達と組んでカード入手を目指そうというわけだな。」

確かにゲンスルー組にレヴィで酷い目にあつたからな。だから万が一のために仲間を森に隠してるのか。

「さすが察しが早いな。悪い話じゃないと思うがね。」
ゴレイヌが言うと

「そっちは全部で4人か？」

とツエズゲラが聞いてきた。自分達のように仲間を隠してる可能性があるからな。

「？ああ、見ての通りだ。」

ゴレイヌは分からなかったようだが。

「こつちはあと2人仲間がいる。それでも8人にしかならないが、残りはどうする気だ？」

ツエズゲラが指を鳴らして仲間を呼ぶ。すると森からツエズゲラと同じ作業服を着たような二人が出てきた。

「残り7人は数合わせだ。現実世界へ帰りたくても帰れないでいるプレイヤーを誘う。戦力としては全く計算できないわけだが」

「カード分配の心配がなくて楽だな。」

ゴレイヌの言葉にツエズゲラが繋げる。

「つまりは8人で8勝しなければならぬわけか…。一戦も負けられないが勝算はあるのか？」

ツエズゲラがゴレイヌに聞いた。

「100%じゃないが見た限りではボス以外の力量はオレ達より下だ。それに万が一8勝できなくてもメンバーを替えて再挑戦できる。」

ゴレイヌが答えた後に

「つてわけで勝算があるかどうかはそつち次第。

あんた達の練を見せてよ。仲間にするかどうかはその後だね。」

とキルアは意趣返しのもりかツエズゲラに告げる。

「おやおや立場が逆になったな。ま、いいだろう。」

そう言った後にツエズゲラは両足を揃えながら屈み、ググ…。という音が鳴るほど力を込め、「は！！！！」とデカイ声を上げてジャンプした。その高さは10m以上という高さ。

「くくくく。全力を出せばもっと高く跳べるぞ。私の垂直跳びベス

トは16m80cm!!」

自信満々に言うツエズゲラ。確かに凄いが直ぐに抜かれるんだよな。

「たぶんジャンプの瞬間、足にオーラを集中させたんだろう。」

俺が言うつと

「じゃあオレもやってみよ!」

と言ってキルアがツエズゲラのように「や!!!」とジャンプした。その高さは20mは軽く越えている。

ツエズゲラは自分のベストがあつさり抜かれた事で啞然。

まあ、たかだか4、5ヶ月でこんなに急成長するなんて考えられないからな。

「ふ…ふふ。なかなかやるな。まあ、オレの全力には少し及ばないが…。」

と強がるツエズゲラ。間違いなく17m以上は跳んでたけど?と思うが敢えて聞かない。プライドが傷つくからな。

「あんた達の力は信用してるよ。ただ今回の勝負はスポーツだから。誰がどのスポーツを担当するかがカギになる。」

とゴレイヌが気使つてか、さっきの事には触れずに言う。

「スポーツの種類は全て把握しているのか?」
気を取り直したツエズゲラが聞く。

ゴレイヌが前回戦った種目などを書いた紙を広げながら

「オレ達が確認した勝負はこの8つだが。勝敗次第では奴等が更に得意なスポーツに変えてくることも考えられる。」

「なるほど…オレはビーチバレーにしておくか。」

ツエズゲラが得意なのかビーチバレーを選択する。

「オレはレスリング希望だ。」

ゴレイヌ

「ボクシングならオレに任せてくれ。相手の念への対応策もある。」

「ボウリングはオレが最適だろう。念を使えばパーフェクトもたやすしい。逆に相手がしてきそうなことも想像がつく。」
と各々自分の得意なスポーツや能力を考えて希望を出す。

「なら俺はリフティングが良いな。能力を使えば勝てる。」
『理不尽な拘束』で自分のボールを保持しつつ相手のボールを操作すれば秒殺だ。

「私は卓球がやりたいです。」

「フリースローはオレがやる。」

など各々担当が決まっていくな、キルアがまだ決まっていな。まあ別に相撲にこだわる必要が無いからな。

「結局オレのパートナーは君か…。まあさっきのジャンプ力ならアタックも問題ないだろうが…。」

ちなみにビーチバレーの経験はあるのか？」

ツエズゲラに聞かれてキルアは
「いやあ、実は無い…。」

アハハ。と苦笑い。

「経験なしでは話にならん、すぐ特訓だ…！」

ツエズゲラの宣言に「ひくく！」と悲鳴を上げるキルア。まああんな家においてビーチバレーをやる機会なんて無かっただろうしな。

「じゃあオレ達は残りのメンバー集めを開始するか。」

とツエズゲラの仲間が話し合っていたら

「オイ！やばいぜ…！！」

ともう一人の仲間がバインダーを見ながら言ってきた。

「どうした？」

「ゲンスルー組が97枚になってる…！！」

という知らせ。アイツ等どうやって手に入れてるんだらう？スペル？それとも実力行使か？

1週間経ち、メンバーとして寄せ集めを7人集めて15人グループを編成した。

「この1週間あらゆるシミュレーションをし、練習を重ねた。ゲンスルー組のことも考えたと絶対負けるわけにはいかないな。」
ツエズゲラが奮起させる。

その後原作通りにツエズゲラの仲間が3勝を上げた。

そしたらレイザーが適当に負けて良いという合図を出した。原作ではポポボがキルアへの恨みでレイザーに逆らうが、この世界ではキルアと戦って無いし、俺にはコカされただけだから不満そうだが逆らうまではしない。

ここで主力メンバーを減らすと本番のドッジボール戦でヤバイからクズを出すことにした。

「よし作戦変更、次お前行け。」

とビクビクしてるメガネに声をかける。

「ええ！何でだよ！？オレ達はやらない約束だろ！？」
と言ってきた。

「だから作戦変更と言っただろ？なんかアイツ等適当に負けるみたいだからお前でも可能性は十分ある。勝てそうに無かったらギブアップしても良い。」

そう言うが寄せ集め組は抗議を止めない。

「どういう事だゴン。」
ツエズゲラも来た。

「何かあつちのボスが部下達に適当に負けさせるらしい。多分ボスが何らかの方法で帳尻合わせをするんだろ？」

だから今は戦力の温存としてコイツを出す。別に問題無いだろう？俺達が8勝すれば良いだけの話だ。」

「その話は確かなのか？」ツエズゲラが聞いてきた。

「ああ、何かボスが合図したら部下達は頷いたし、あっちのデブは明らかに不満そうな顔をした。ワザと負けるのがムカつくんだらう。」

それを聞いてツエズゲラは悩む。

確かにゴンの言う通りもし雑魚に勝ったとしてもボスが何らかの方法で最終的に帳尻を合わせて来たら戦力は多い方が良く。最悪コイツが負けても1敗するだけだから別にそこまで勝敗には関係しないしかし…。

「コイツ等が戦ってくれるとは思えないが？」

と今でも騒いでるクズ達を見る。

「それについては任せてくれ。必ず参加させる。」

とゴンが言うのでとりあえずツエズゲラはゴンに任せる事にした。

「さて、何か反論が？」

俺が聞いたら出るわ出るわ文句の数。確かに約束では俺達が負けたら戦わずにリタイアしても良いと言ったが、俺が約束した訳では無い。

「まあまあ、大丈夫だって、アイツ等適当に負ける筈だから。普通にやったら勝てる。それにマジでヤバかったらリタイアしても良いから。」

それでも反論は止まない。挙げ句の果てに帰ろうとする始末。

そこで俺は一人の肩を掴みながら

「逃げれると思ってる？既にバインダーにはお前達の名前は載ってる。追おうと思えば簡単に追える。」

そしてもし逃げたりしたらどうなるか…分かるよね？」

クズ達を見ながら言う。震え出すクズ達。

「それにちゃんと最後までいてくれれば「離脱」を渡してあげるし、負けそうになったらリタイアしても良いと言ってるんだからさ。」

分かってくれるよね？」

最後の警告として宣告するとクス達も逃げるのを止めて戻って来た。死刑宣告を受けた囚人みたいな顔色だが問題無い。

周りは引いてるが。

本当の囚人である相手側も同情の眼差しでクス達を見る。これならワザと負けてくれるだろう。

これで問題解決だ。

51 呆気ない決着

あの後メガネがリフティングで戦った。囚人の方がワザと負けてくれたおかげで無事勝利。これで4勝0敗。

「よし、次はオレがやろう。」

遂にレイザーが出てきた。

「オレのテーマは8人ずつで戦う…ドッジボールだ!!」

そう宣言した直後にレイザーの周りに7体の念人形が現れた。

「8人…!!メンバーを選んでくれ。こっちはもう決まっているからな。」

「ちよつと待てよ!!勝敗はどう決めるんだ?」

「1人1勝なんだろう!?!」

ゴレイヌとツエズゲラの仲間がレイザーに聞く。

「ああ1人1勝だ。だから勝負に勝った方に8勝入る。簡単だろ?」

レイザーが言う。明らかに自分が勝てば勝利だと言っている。ひでえボスイベントだな。

「そういうことか。」

とツエズゲラも理解する。今までの勝敗が無意味な事に。

「オ、オレはいやだせ!!現実に戻れなくてもいい。」

などクス達が騒ぎ出した。

ポポボが殺されるシーンは無いがやはり力量の違いを理解したのか。仕方ないから俺がもう一度説得に出る。

「さっきも言ったけど…。逃げられると思ってるのか?」

ツエズゲラ達は何もしないだろうが、俺は裏切り者は決して許さねえ。

「
そう宣言するとクス達は黙る。何せ今逃げれてもグリードアイランド内にいる限り逃げ場など無い。」

「とは言うものの、アイツ等に戦力の期待をするのは酷。誰かレイザーみたいな念の人形を出せる奴はいないか？」
俺が聞くと

「ならばオレが3人分になろう。」
とゴレイヌが念獣を2体出した。

「よし、これでクズは1人で良い。」
と俺は残ってるクズ達を見る。クズ達は自分が選ばれないよう祈ってた。

「よし、お前だ。」

と一番チビなスキンヘッドを選ぶ。
スキンヘッドは絶望するように顔を伏せる。他の奴等は「キャッホー！！！」と喜んでいるが。

「ルールを説明する！！ゲームは1アウト7イン（内野七名、外野一名）でスタートする！！内野が0になったチームの負け！！コート内の選手は敵の投げたボールに当たればアウト！！外野に出る！！ただし！！スタート時外野にいた選手を含めた1人！！一度だけ内野に復活することが出来る！！これは「バック」と宣言すればいつでも戻れる！！極端な例としてスタートと同時に「バック」を宣言すれば8人が内野でプレーできるというわけだ！！ただし選手が一人もいない外野にボールが転がった場合は相手側の内野ボールとなるので注意されたし！！」

などなどルール説明が終わった後に試合が始まった。

外野に出たのはあのスキンヘッドだ。ボールが当たる事の無い外野ということ喜んでいたが、

「取れないボールだったら構わないが、取れるボールを取らずに相

手側に渡つたらどうなるかわかるよな？」
という俺の脅しが効いたのか再び絶望した様子で外野に回った。

『スローインと同時に試合開始です！！』

レディーゴー！！』

とNo.0がスローインした。

スローインしたボールを自陣に入れるためにキルアはジャンプしたが、敵側はジャンプせずに自陣に戻り、横一列になってフォーメーションを組んでる。

「先手はくれてやるよ。」

レイザーが自信満々に言い放つ。

「余裕こきやがって。」

とボールを受け取ったゴレイヌは投げようとしたが。

「待てゴレイヌ。俺にボールをくれ。」

と声をかける。

ゴレイヌは投げるのを止めて

「ボール投げてに自信があるのか？」

と聞いてきた。

「ああ、やってみたい作戦があるんだ。頼むよ。」

そう言うとゴレイヌは俺にボールを渡してくれた。

ぶつちやけドッジボールなんてネギま時代にやった以来だが、この世界なら勝算がある。一回しか使えないがな。

「先ずはお前だ！！』

と右端のNo.7を狙う。

練と周で通常の倍のオーラを込めたボールを投げた。その威力は凄まじく早い。

「ギシエー！！』

という声をあげながらボールが当たった瞬間No.7は吹っ飛ぶ。

「おおっやったー！！』

とキルアが歓声を上げる。

「よーし先ずは一匹。」

と俺が宣言した直後にボールは戻ってきて隣のNo.6の背中にも命中。

「ギシャー!!」

突然の奇襲に驚いたのか前に吹き飛んだ。

その後、レイザーを避けるようにボールは飛び、No.5、3、4、2にも当て、ボールは俺の元に戻って来た。

「おやおや、いつの間にお前1人になっちゃったな？」

嘲笑いながらレイザーを見る。

「…やるな。」

とレイザーも少し驚いているようだ。

「スゲエなゴン!!あれがお前の能力なのか!？」

キルアが聞いてきた。

「まあな、詳細は秘密だけど。物体を操作する能力だ。」

そう言つて誤魔化す。基本的に何でも操作出来るけどな。

「審判質問。最後に内野に残つてた奴がボールに当たつた瞬間「バック」を使うのはアリか？」

念のため聞いとく。もしもアリなら面倒になる。

『ナシです。最後の1人がボールに当たつたら一瞬とはいえ内野が0になりますからその時点で負けです。』

ただし最後の1人がボールに当たるのとはほぼ同時に外野の誰かが「バック」を宣言して復活するのはアリです。

「バック」は宣言した者に権利があります。宣言者でない他のプレイヤーに権利を譲ることはできませんので御注意下さい。』

No.0が細かく教えてくれた。

「だよ。見る限りコイツ以外は喋る能力は無さそうだからお前がアウトになればゲーム終了だな。」
レーザーに言い放つ。

「…オレがアウトになればな。」
とあくまで自信ありげに言う。まあレーザーならさっきの威力でも受け止める事は可能だろうしな。

残念ながら原作ゴンのジャジャンケン程の威力は無い。だったら「ツエズゲラ、ちょっと来てくれ。」
とツエズゲラを呼んだ。

「何だ？」
「ああ、流石にレーザーが相手じゃ、さっきのボールも取られるだろう。」

俺がそう言つとツエズゲラも頷く。

「確かに…。お前のボールの威力は凄いがレーザーには取られる可能性がある。もし取られれば一気にお前を潰しにかかるだろう。」
というありがたく無いが予想通りの事を言ってくれた。

「だからレーザーをアウトにするために俺は全力でボールを打ち出す。ツエズゲラにはサポートを頼む。」

「サポート？」

「ああ、先ずはお前はそこに立つてくれ。」

センターラインギリギリを指示した。

ツエズゲラは指示通りに立った。

「それで腰を落としてしっかりボールを持っててくれ。」

そう言われて俺からボールを受け取り俺に指示された通りにボールを持つ。

「ツエズゲラ、お前オーラの高速移動は出来るよな？」

「ああ、オーラの移動速度にはいささか自信はあるが？」

ツエズゲラはまだ分かっていない。

「俺はこれからオーラを全て拳に集中させて全力でボールを殴る。」

それならさつき投げたボールの威力、早さ共に倍以上になる。それならまず取れないし避けれない。

お前にはそのための砲台の役割をしてもらう。」

そう言うところツエズゲラも理解したのか

「成る程、確かにそのためにはお前がボールを撃ち出す瞬間に手をオーラでガードする超高速のオーラの攻防力移動が出来るオレが必要だな。」

と理解した。

キルアではまだ未熟で出来ないし、ビスケも出来るか分からない。

(多分出来るだろうがしてくれるか不明)

それにももしレーザーが避けても操作して追尾出来る。

だから避けられない。まあ『理不尽な支配』や『理不尽な拘束』でレーザーを動けなくすればこんな苦労はいらないが、すれば人間も操作可能とバれてしまう。

それにあえてしなければ「人間は操作不可能なんだろう。」とコイツらは勝手に思い込む筈だ。何せそれをやれば簡単に決着が着くからな。

「じゃあ行くぜ?」

ツエズゲラに目配せするとツエズゲラは頷いて返す。

練をしてオーラを出す。コピーもして更に倍にしてるからとんでもない量だ。そして別に必要無いけど制約つばくするために構えて

「最初はグー!ジャン!!!ケン!!!グー!!!」

と硬で右拳にオーラを集中させて思いつきりボールを殴る。

ツエズゲラは上手くオーラを高速移動させて自分の手を守りながら威力を削がないようにボールを撃ち出す。

ボールは超高速でレーザーに迫る。

レーザーはレシーブの構えを取った。まさか撃ち返す気か?だった

ら避けるけど。

ドゴ！！！！っというデカイ音が鳴り、レイザーに見事命中したが、レイザーは体ごと腕を引き、ボールの威力を見事に殺した。

何で威力を殺す？俺の能力を見たばかりの癖に意味分かんない。

「逃げるよ捕るだけじゃないってことさ。」

それにそいつは今の攻撃でオーラはほぼ使いきったはず。今更操作能力を使用するのは不可能だ。」

確かにそういう見方も出来るな。あれほどのオーラを使ったら普通は立ってる事でさえ精一杯。気絶するのが普通だ。

俺じゃなきゃね。

「残念。もし威力が残ったままだったら流石に操作不可能だったが、威力が完全に無くなりただ浮いてるだけのボールならギリっギリ何とかなるんだよ。」

そう言っただけ俺は操作してボールを手元に移動させて掴んだ。

『クッション制によりレイザー選手アウト！！』

よってこの試合、ツエズゲラチームの勝利です！！』

原作と違ってツエズゲラがリーダーとして登録したからな。

「うおおおお、スゲーぜお前！！」

とツエズゲラの仲間達から祝福を受ける。

脇ではクズ達が生き残った奴に祝福してる。仲間意識が芽生えたよっだ。

「ほとんどっというか全部ゴンが決めたな。」

とキルアが声をかけてきた。

「まあな、もしあれで決まらなかったら俺はもう無理だったけどな。」

と少し笑い合う。まるでジャンプみたいなシーンだな。戦闘シーンは1週間分で終わったけど。何て盛り上がらないマンガだ…。

「負けたよ。約束通りオレ達は街を出ていく。」

レイザーがゲームキャラのセリフを伝えてきた。

「その前に、お前ジンの息子だよな？」

とレイザーが聞いてきた。

「へー、よく分かったね？あんまり似てないと思うんだけど。」

ジンについて全く聞かなかったから気付かないと思ってたのに。

「確かに性格は全く似てないがその顔やさっきのオーラとかを見て何となく分かったんだよ。」

そんなに似てるかな？確かに原作ゴンとは違って丸い目じゃなくて微妙に鋭い目をしてる。性格のせいかわ微妙に原作ゴンと顔が違う。

「お前が来たら手加減するな…て言われてな。まあ、全力を出す機会すら貰えなかったけど。」

「…ふーん。」

と興味無いので軽く流す。

「なあ、ゴン。お前の親父のことって何だ？」

キルアにはほとんど話してないから分からなかったようだ。別に知らせる必要無いしな。

「俺の親父はこのゲームを作った製作者の1人らしいよ。」

そう言うと「へー、そうなんだ。」とキルアは普通のリアクション。

ジンの事はあのメッセージ以外では知らないからな。

その後レイザーから「ジンについて話そうか？」と聞かれたが「興味無い。」と断った。

「灯台もと暗し、入り口はあいつらのすぐ近く…この灯台にあったってわけ。」

「ここがそうよ。」

現在魚屋の女主人に案内されて「一坪の海岸線」イベントのエンディングを見てる。

案内されたのは海岸線全体が見える窓がある場所。

「窓…？確かにここからは海岸線が見えるが…。」

「ここからどうやって「海神の棲み家」に行くんだよ？」

ツエズゲラとゴレイヌが聞く。

女主人が窓から身を乗りだして何かを操作する。

そして一筋の光が出て海をさした。

「この光が指し示す海面の真下…そこに海底洞窟があるわ。でも本当は財宝なんてないのよ。ダメすようなマネをしてごめんなさい。」

「そうなのか？」

「神聖な洞窟だからごく少数の漁師しかその場所を教えてもらえない。そこから1人歩きした勝手な噂だもの。財宝伝説なんて。」

もちろんそう言ってもレイザー達は信じなかった。場所を教えたたら…そうは思いつけどそれでもあいつらは別の場所を教えたと考えるかも知れないわね。」

本来ならここでゴンが質問するが俺はしないので話は続く。

「ようやく、又ここから海を見ることができのね。」

昇る朝日…漁から戻ってくる舟…七色に変わる水面…私にとってはこの景色が何よりの宝…。」

そう言い終わると景色毎カード化するというスゲー事が起きた。

「よし、ようやく「一坪の海岸線」ゲットだ。」

「早速「複製」で3枚にしようぜ。」

キルアの言う通りクローンで2枚増やした。

「オレ達はコピーで十分だ。」

「うむ、オリジナルを有する資格は君にある。」

と順当に俺がオリジナルを買った。まあほぼ俺1人でやったからな。

その後、約束通りクズ達を現実世界に返すために「挫折の弓」で全

員現実世界に戻してやった。

「ゴン、相談があるんだが。」

ツエズゲラが呼んで来た。同盟の申し出か。

「オレ達は手を組むことにした。」

「お前達もオレ達と組まないか？」

オレの予想ではこの先ゲンスルー組との一騎討ちとなる。だが戦闘力では圧倒的にこちらが不利だ。オレの修行不足を抜きにしてめ奴の足元にさえ及ばない。それがお前からゲンスルーの能力を聞いて得た印象だ。

奴はあきらかにはじめから人を殺傷する目的で念を修めている。戦闘における心構えが根本的に我々と違うんだ。」

ツエズゲラが熱弁する。俺も基本的に敵を殺傷したりする目的で能力を作っただけだ……。

『他プレイヤーがあなたに対して「交信」を使用しました。』
バインダーが突然出てきた。

『……久しぶりだな……。誰だかわかるか？』

「何の用だ？ゲンスルー」

『嬉しいね覚えててくれたのか。まずはおめでとつと言っておこうか。』

「……何のことだ？」

『くくく、とぼけてもムダだぜ。「一坪の海岸線」手に入れたんだろ？ たった今「名簿」で確認した。

そこで取引だ。お前達の生命の安全は保証する。かわりに「一坪の海岸線」をよこせ。』

「……ふざけるなっ。」

『くくく、ガチンコの戦闘でオレ達に勝てるかどうか試してみるのも面白いかもな。』

取引に応じるなら一時間後にマサドラの入り口までツエズゲラ1人で来い。現れなければ宣戦布告とみなし力づくでカードをいただく。

どこへ逃げてもムダだぜ……。「同行」は山ほど持っているからな……
くくくく。」

まさしく悪役だな。にしてもわざわざ交渉するなんて我慢強いんだな。俺なら始めから奪うけどな。

「アスタ、アマナ、マンヘイム、ニツクーキユー、カズスール……お前達の「15人の仲間」だった連中……そうだろ？」

バインダーで確認してみな。もうここにはいない……この世にもな。」

一応バインダーを出して確認した。確かに全員のマークが黒くなってる。

別に良いけど。ていうかむしろ感謝だ。アスタを殺ってくれてマジ感謝。

「……………それと、ゴン、だったな。「奇運アレキサンドライト」を持つてるそうだな。ツエズゲラの次はお前らだ。」

……………あれ？原作と違うね？

別に声出して無いし、もしかしてついでに言っただけ？監視してれば俺達も見えてるだろうし。

確かに自分達が狙ってるカードを持つてんだから声をかけともおかしく無いのか？

「ゲンスルーは君達の実力を知らない。ゆえに「一坪の海岸線」のオリジナルを持つているのはオレ達の方だと思っている。

首飾りをしている君なら経験があるだろ？カード交換の際に「聖騎士の首飾り」は「贋作」を見破ってくれるが……「複製」や「擬態」で変身した有効なカードも解呪してしまうという欠点がある。

奴等はオリジナルを狙っているんだ。オレ達のな。オレ達が出来る限り時間を稼ぐ。その間に体を回復させる。」

少し原作と違うな。まあ怪我は一切してないし、せいぜいが俺の才一ラ切れくらいか。

「同行」しただが、奴等の「同行」から逃げ切れれば相当の時間を稼げるだろう。だが逆に時間が経ち過ぎれば奴等が目標をそっちに変えることも考えられる。おそらく1週間…！それ以上はムリだ。」

別にキラアとかはそこまで焦っていない。別に怪我は無いしな。でも勝てる根拠も無いからちよつと焦っている。

その後は原作通り取引として3週間逃げ切つたら奇運アレキサンドライトを譲渡するとした。

別に関引なんて必要無いけどここで時間を稼いでくれないとバツテラの恋人が死ぬ前にクリアしてしまう。

それではアイテムに大天使の息吹と魔女の若返り薬、ブループラネットでクリアした後のバインダーが埋まってしまふ。

まあ別に良いんだけどさ、コピーすれば済むし。でもツエズゲラゲーム放棄前にゲンスルー達からカードを奪うと今度はツエズゲラと戦うハメになるだろうから面倒だ。

勝手に殺し合つて下さい。

「3週間ね。」

俺が言つと

「まあそこそこの時間はあるわね。」

ビスケが答える。作戦を考えるだけなら確かにそこそこある。

「それでどうするんだ？ゴン？」

キラアが聞いてきた。基本的に方針は何時も俺が決めてたからな。

「ゲンスルー達は奇運アレキサンドライトを持ってる俺を狙うだろうから今まで通り俺は別行動を取る。」

「でも1人で大丈夫なの？」

ビスケが聞いてきた。流石にゲンスルー組は結構強いからな。

「ああ、むしろ1人が良い。その方が気兼ね無く殺れるからな。」
そう言って返す。短い時間だが多少にらみ合い

「……………ふう。分かったわさ。あんたに任せるわ。」
とビスケは折れた。

「それじゃ、お前達は修行の続きを頼むわ。もしかしたら3週間後には俺達がクリアしてるかも知れないからな。」

そう言ってマグネティックフォースで飛んだ。

後はひたすら待ちだ。念のためマサドラには近付かず、バインダーでツエズゲラの動向を逐一チェックしてれば良い。

52 呆気ない決着2

順調に原作通りに進んでいる。

マサドラに行くとかボマーに殺されるといふ噂が飛び交っているから誰もマサドラには近寄らない。

ちなみに現在はゲンスルー組とツエズゲラ組の追いかけてこの真つ最中らしい。スゲエ勢いでツエズゲラやゲンスルーのバインダーからアカンパニーやリターンが無くなっていつてる。

何という無駄…。

しばらく追いかけてここが続き、遂にツエズゲラ組がリーブを使ってゲームから出た。同時にゲンスルー組もリーブで追いかけたけど…。にしてもツエズゲラも悲惨だよな。微かな希望をかけて戻ったら警備兵はいないし、依頼人から「もういいんだ。」発言なんて同情するよ。

ツエズゲラ達がゲームから出て10日目。

そろそろかな？と思っていたら予定通りバインダーが現れてコンタクトを使用したことを知らせて来た。

『ゴレイ又だ待たせたな。』

「どうなった？」

『もうすぐツエズゲラが出て240時間経つのは知ってるな？』

「ああ。」

『先に言っておくがツエズゲラ達は戻らない。』

「何故だ？」

『ゲンスルー達がシソの木の前で張ってるんだ。ツエズゲラ達はその事実を知らないが事前の打ち合わせで決まっただけだ。』

あいつらはゲームの外に出た後はオレからの使者が潜伏場所に行か

ない限りゲーム内には戻らない。「安全だ。戻っても大丈夫」という伝言を伝えない限りはな。」

後は原作通りツエズゲラ達が持っていたカードはほとんどがフェイクと交換していてゴレイヌが持つてる事を教えて貰って終了だ。現在ゲンスルー組はマサドラにいる。どうやらアカンパニーを補充して俺達が逃げても大丈夫なようにしたいらしい。

残念ながら標的の俺は『完全なる隠匿』を使ってお前達のすぐ側にいるのに。

ゲンスルー組はカードを買った後に森に入り

「奴等の「同行」は3人合わせて5枚。「再来」は1人1枚ずつ。

つまり全部で「同行」6回分。

こっちは7枚あるし行くか？」

ゲンスルーが仲間と話し合っている。

最初はゲンスルー組がアカンパニーで飛んできた瞬間を拘束しようかとも思ったが、不意をつくためにこちらから仕掛ける。

まさか追う対象から勝負を仕掛けられるとは思っても無いから油断しきっている。今がチャンス。

ゲンスルー達がターゲットを振り分けていたその時に『理不尽な支配』を発動して3人共強制的に絶の状態にして拘束した。

「な、何だこれは!!!？」

ゲンスルーが驚く。サブとバラももぐがどうにもならない。何せ念のために幾重にも拘束してるからな。これが決まったらまず抜け出すのは不可能。

俺は『完全なる隠匿』を解いて姿を現す。

「よお、何か俺に用があるらしいからこっちから来たぜ？」

と軽く声をかける。

ゲンスルー達は急に現れた俺にビックリしたが、自分達の状態の原因が分かったからか冷静になってきたらしい。

「おいガキ。これは何だ？今すぐ解け。」
と命令してきた。

このまま話し合いをする必要も無いので「黙れ。」と命令した。
俺はわざわざ自分の能力を自慢気にペラペラ喋る三流小悪党とは違って例え死に行く奴等でも自分の能力は喋らない。もしかして蘇ったり死者から聞き出す能力者がいるかも知れないからな。この世界ならあり得る。

「ム、グググ!!!」

など喋ろうと頑張ってるらしいが黙れという命令のせいで何も喋れない。

「さて、じゃあ先ずゲンスルー、バインダーを出せ。」
と命令した。

「……ブツク!」

とゲンスルーは言ってしまった。ゲンスルーは何故自分がそんな事を言ったのか分からないが、バインダーを出した以降はまたしゃべれなくなった。

俺はゲンスルーのバインダーから自分が持っているカードを奪う。この場でコンプリートしても仕方ないから最後のメイドパンダをフリーポケットに入れる。これでコンプリートイベントは起きない。

「さて、じゃあお前達にはもう用は無いな。」
と言い放つ。

その言葉に3人は動揺する。今まで自分達がしてきたように始末されるのでは？と分かるのだろう。

「お前達多分親友同士なんだろう?」

そう聞くと拘束されてる状態だから俺の質問を無視出来ない。3人共頷いた。

「そうか、そうか。親友とは良いものだ。ずっと一緒にいたいだろうか？」

また3人は頷く。

「そうだよな。だから3人一緒に逝け。」

3人共脳と心臓の活動を停止しろ。」

そう命じたら3人一緒に倒れて動かなくなった。そして少し経つと消えてゲームオーバーとなった。

グリードアイランド編のラスボスも逝くときやアツサリ逝ったな。

53 ゲームクリア

それじゃ、ラストイベントのクイズ大会と行くか。

このまま突入しても良いけど一応原作通りにアイツ等にも知らせるか。

「同行」使用。キルア。」

「ゴン！！無事だったか！！」

とキルアは喜んでいる。

「ほんつと、よく勝てたわね。」

とビスケは驚いている。実力から見ればゲンスルー組の方が圧倒的有利だからな。

「ああ、賭けに勝ったのさ。」

とだけ言う。確かに賭けではあったな。あのタイミングを突かなきゃもしかしたら死んでた可能性すらあった。

「それでゴン。ゲンスルーからカードは奪ったのか？」

キルアが聞いてきた。そっちの方が気になるらしい。

「ああ、バッチリだ。」

そう言つてバインダーを出した。

「とりあえず全種類集まったけど最後の1枚はまだ指定ポケットには入れてねえ。」

「何で？」

キルアが聞いてきた。

「一応お前達と一緒にラストイベントを迎えたくてな。仲間だし。思つても無い事を言う。後々説明すんのが面倒だったからが本当の理由。」

それを知らないキルアは嬉しそうに、ビスケは意外そうに俺を見る。

「じゃ、やりますか。」

とフリーポケットに入れてたメイドパンダを指定ポケットにセットした。

『プレイヤーの方々にお知らせです。たった今あるプレイヤーが9種の指定ポケットカードをそろえました。それを記念しまして今からグリードアイランド内にいるプレイヤー全員参加のクイズ大会を開催いたします。』

問題は全部で100問！指定ポケットカードに関する問題が出題されます。正解率が最も高かったプレイヤーに賞品としましてN.O.O.O「支配者の祝福」が贈呈されます。みなさまバインダーを開いたままでお待ちください。』

「指定ポケットカードに関する問題か…。」

「なるほどな、おそらくカードを奪っただけのプレイヤーじゃ答えられない様なクイズになつてはるはずだぜ。クリア条件とか関連キャラのセリフとかな」

「だとすると私とキルアは無理だわね。カード集めてないから。」

「だな。ゴンは自信あるか？」

キルアが聞いてきた。何せ指定ポケットカードは全部俺が集めたんだからな。

「ああ、8〜9割は答えられるから多分大丈夫だ。自力獲得枚数トップのツエズゲラはもうここにはいないからな。」

それを聞いて二人は安心する。何せ俺にかかっているからな。

その時キイイインという移動スペルを使用した時に鳴る音が聞こえた。

「誰か来る！」

とキルアが警戒してそつちを見たら

「ちよつとこつちからもよ!?!?」

とビスケは別方向から来る奴等を見ている。

「どうなってるんだ!? 次々来るぜ!!!」

とキルアもまた別方向から来るのを見ている。

そしてザシュツ、ザシュツと次々着地した。気付けば10人以上に囲まれていた。

「安心しろよ。邪魔しにきたわけじゃないんだ。むしろ協力といつていいだろ。」

1人が話しかけてきた。

「もしもボク達がクイズでトップになってカードを手に入れたらそれを25億で買ってもらいたい。」

君らにしてみれば成功報酬の5%だし、法外って程の額じゃないだろ?」

と言ってきた。コイツらバッテラがもう諦めた事を知らないからな。まああの状態のバッテラなら払ってくれそうだが。

「ああ分かった。あんた等がトップになったらな。」

そっちのアンタもか?」

と顔に絆創膏を貼ってる奴に聞いた。

「え? あ、いや…まあそんなとこだ。」

と明らかに挙動不審。ベラム兄弟に脅されてるからな。悲惨な事だ。

「おめでとう! おれ達はまあ、野次馬みたいなもんだ。できればカードがそろったバインダーをちよつとだけ見せてくれないか?」

と言つて来た奴等もいたからキルアに監視させつつ見せてやる。

見せてやったら「おお、スゲー!」とか興奮しながら見てた。どうやらカードを記憶してるらしい。入手条件やヒントが書いてあるカードがあるからな。

「他の連中も最後のカードでの取引が目的か。」

「ゲームも大詰めにきて少しでも報酬のおこぼれにあずかるってわけだわね。」

キルアとビスケが話してる。俺は無視してバインダーを見ながらクイズを待つ。

『それではこれよりクイズの出題を始めます!!』
というアナウンスが聞こえたので周りも自分達のバインダーを見る。ちなみにキルアとビスケは何もしない。何せ一坪の海岸線以外は何も知らないからな。

クイズは大体は分かった。何せツエズゲラの記憶を読んだからな。それでも何問かは分からなかったから勘で答えたが。

『終了……!!』

それではこれより最高得点者を発表いたします!!

最高得点は100点満点中97点!!

プレイヤー名、ゴン選手です!!』
と流れた。あと3点か……。まあ一坪の密林とかが分からなかったからな。

「やったな……!悔しいが完敗だ。おめでとう。」
とさつき話しかけて来た奴等が祝福してくる。

ギエーという聞いたことの無い声を響かせながらフクロウなんだが分からない鳥がやってきて手紙を落としていった。

その手紙を受け取るとカード化して支配者からの招待になった。

「ふーん、1人で行くらしいな。」

俺がカードを見ながら言うと

「じゃあ城の近くで待ってるよ。」

「んふふふ。これで約束通りブループラネットはいただきよ。」
とキルアとビスケが言う。やだけど契約だからな。3つのポケットの内1つは決まっている。

キイイインとまた誰かが来た。まあ誰か分かるが。

「ぐへへへ。」

「お！持ってる持ってる！！あのガキマジで全部そろってるぜ。」
ベラム兄弟が来た。明らかにモブキャラの癖に。

「おいお前、もう用済みだ。消えていいぜ。」

と絆創膏を貼ってる男に言う。

「は、はいっ。」

と言った後に男は走って行った。

「よオ…。カード全部かけて勝負しようぜ。2対3でいいからよ。」
「悪いがこれは強制だ。けけけ。」

と自信満々に言ってくる。何でそこまで自信があるのだろうか？

面倒だから二人とも首をハネてやった。別にアカンパニーは持っているしリーメイロにも行ったことあるし。

招待状をカード化解除して読む。

「えーと、城下町リーメイロね。行ったことあるから合同で行くぜ。」

「
そう言ってる3人で周りから離れて

「同行使用。リーメイロ。」

でリーメイロに飛んだ。

「じゃ、行ってくるわ。」

と行って二人と分かれて城に入った。

「ようこそ、グリッドアイランド城へ。」

と金髪でソバカスを浮かべた青年が現れた。

青年の案内で一室に入ったら中は重度の引きこもりの部屋みたいに
ゴミや物に溢れていた。もちろんゴミの発酵したクセエ匂いもする。

「んー？おーー入れ入れ。」

と髪がボサボサでくわえタバコでゲームをやっている中年が声をか
けてきた。

「こちら最高得点者のゴン君。」

と青年が俺を紹介する。

「おー待ってた待ってたぞ!!」

ジンの息子だつてなお前!!こつち来て座れ座れ!!」

と言いやがった。本当ならこんなゴミ屋敷に足を踏み入れるのは嫌だがあのバインダーを手に入れるために入る。

「すみませんが、どこに座れば?」

と聞く。何せ床一面ゴミだらけだ。中年が座っている所以外は全部埋まっている。

「ん?空いてるトコねーか?じゃ作れ作れ!!こーやってよ!!」

と言って中年はゴミを蹴り飛ばしてスペースを作る。

俺はそこに座る。

「えーとバインダーは…。」

あれ?どこやった?」

とゴミを漁ってる。せめてバインダーはゴミに埋めるなよ。

「…お、あったあった。

ほらよ。」

ようやくバインダーを発掘して開き、中からカードを取り出して俺に渡してきた。

「「支配者の祝福」最高得点者への褒美だ。」

と渡されたカードは確かに凄い褒美だ。何せ城と人口1万人の城下町を得るんだ。まあ超弱小国にしかないがな。

「ふっふっふ。先に言っておくけどよ。その城や町にはジンに関する手掛かりは何もないぜ。」

と中年は言ってきた。

「だろうね。まあ別に興味無いから良いけど。

ぶっっちゃけオヤジが生きてようが死んでようがどうでも良い。俺にとっちゃ俺を捨てた奴なんだからな。」

その言葉に今までであった和やかな雰囲気は消えて沈鬱な空気になる。

「……まあ、確かにお前にとってはそうだからな。」

と中年は言っ。

「…ドゥーンさん本題の続きを…。」

と青年に言われたので気を取り直して

「おっといけねえ。」

お前さんこれで100種そろったわけだな。よってもう一つ！イベントが発生する。」

そう言ってまたゴミを漁りだした。

「えーと、アレはどこ置いたっけか………あー、あつたあつた！」

と今度は箱を発掘した。そしてその箱を俺に渡した。

「開けてみな。」

と言われたので開けたら3つのカードポケットがあった。

「そのバインダーには指定ポケットカード3枚を入れることができる。そのバインダーに入れたカードは現実世界へ持ち帰って使用することができる。」

ただし！同じ番号のカードを複数入れることは出来ない。あくまでもお前のバインダーの指定ポケットに入ってる100枚の中から3枚選ぶこと！」

と注意事項を説明された。

「さて、これで晴れてエンディングなわけだが。一般用とお前専用。どっちのエンディングがいい？」

と聞かれたので

「一般用で。」

と即答した。

「何でだ？お前専用エンディングを見たくないのか？」

「別に興味無いし。ていうか俺専用なんて本当にあるのかよ？」
と疑わしい目で見える。

「うーん、まあお前専用何か嘘なんだけどよ。」

ただ……お前がクリアした後なら教えてもいいと言われてるがあるんだが……。聞くか？」

と聞いてきた。原作と若干違うがまあ良いか。

「別にいい。想像はつく。多分このゲームについてなんだろう。さつきも言ったが別に興味無いからこのままエンディングに行こうぜ。」

俺がいったからか青年の方が

「……ではこれからクリアを祝してパレードとパーティーが行われま

す。その後港へ向かってください。そこでクリア報酬となる3枚のカードを選択しゲームは終了です。」

その言葉を聞いて俺は城から出た。ジンの話なんか興味無いからな。

その後はオープンカーに乗せられてパレードに行った。そしてパーティーで飯を食い、今は3人でホテルの部屋にいる。

「この中に入れる3枚を決めたら港へ向かってくださいってさ。」

おれがスペシャル？バインダーを出して言う。

「おー。」

とキルアは関心しながら見る。

「とりあえず1枚は契約通り「ブループラネット」だよな？」

とビスケに聞く。

「ええもちろん！若返り薬も捨てがたいけどやっぱりコレだわさー。あー早く現物を拝みたいもんだわさー！」

と興奮しながらブループラネットを見る。

「俺はどうしようかなあ。」

とキルアが悩んでいたが。

「は？お前は無しだ。」

と言っただけだ。

「ええ！？何でだよゴン！！！」

とか文句言われた。

「当たり前だろ？ていうかお前ゲームクリアのために何かしたか？」と俺が言ったらキルアは少し考えていたが何も出ない。

何せここに来てすぐに修行三昧だったし、一坪の海岸線でも特に何もしてない。

「…確かに…オレ何もしてねえな。」

とキルアはガツクリした。

「つーか実質俺が全部集めたんだから残り2つは俺が使っぞ？」と聞いたら二人も納得。本当に全部俺がやったからな。

そして俺は残りのポケットに闇のヒスイと死者への往復葉書を入れた。

「ん？「闇のヒスイ」は分かるけど何で「死者への往復葉書」何だ？」

とキルアが聞いてきた。

「まあ、後々役に立つんだよ。」

とだけ答えた。本当に後々とんでもない価値に跳ね上がる可能性がある。

その後、港に向かった。

「ゲームクリアおめでとございます。」

それではあなたのバインダーの中から3枚カードを選んで下さい。」
そう言われたので3枚を渡し、指輪も渡した。

「選んだのは31「死者への往復葉書」、73「闇のヒスイ」、81「ブループラネット」。」

以上の3枚で本当によろしいですか？」

「ああ。」

その後は受付が操作して

「では指輪をお返しします。お疲れさまでした。」
指輪を受け取る。

「さようなら、またのご来島をお待ちしています。」
そう言われて現実世界に帰った。

「おかえり！」

とビスケが出迎えてくれた。

「早く早く！！バインダー出してみてよ！！」
ビスケがねだる。

「ブツク。」

と唱えたら今までのバインダーではなく、スペシャルバインダーが出てきた。

「おー出た！」

と興奮したビスケがブループラネットのカードを取り、「ゲイン！」と唱えたらブループラネットが出た。

「キヤー！ー！！これよこれだわさー！！」
夢にまで見たブループラネット！！

ビスケが狂喜乱舞している。そんなに欲しかったのかよ。

「それで、ゴンののは？」

とキルアが聞いてきた。別に隠す必要は無いから闇のヒスイのカードを取り出して「ゲイン」と唱えた。

「おーこれが闇のヒスイか。」

とキルアが闇のヒスイを見ながら言う。真つ黒なヒスイでどこか危なさはあるが美しい。

「これで俺に危機が降り注げば誰か別の奴にその危機は移る。」
そう言うキルアは

「それつてもしかして…オレ？」
と聞いてきたので笑顔で

「そうならないように俺に危機が降り注がない事を祈れ。」
と言う。キルアは必死に何かに祈っていた。

その後はビスケとは別れて俺とキルアはホテルに泊まった。そしてその夜、俺はゲートでバツテラの所に行った。

「やあバツテラさん。」

恋人の映像を見ながら泣いていたバツテラに声をかける。

「……なんだ？1人にしてくれ。」

侵入したことに一切触れずにただ言う。重症だな。

「いやあね。契約通りクリアしたから500億ジェニーを受け取りに来たんですよ。」

「……なら弁護士に話してくれ。金は弁護士を通じて払わせる。頼むからもう帰ってくれ。」

どうやら金は問題無く入って来そうだな。これで第一目的クリア。

「ところで聞きましたよバツテラさん。貴方がグリードアイランドをクリアしたがっていた理由を。」

お気の毒です。何千億ジェニーもかけてここまでしたのに間に合わずに。」

と如何にも気の毒そうに告げる。バツテラは何も言わないが。

「そこでどうでしょうバツテラさん。このアイテムを買いませんか？」

とバインダーを出して死者への往復葉書を見せる。バツテラはまだ反応しない。

「このアイテムは貴方が求めていた大天使の息吹には劣りますが、なかなかのレアなんですよ。何せ……死者との手紙のやり取りが出来るんですから。」

その言葉に初めてバツテラが画面から目を離してこっちを見た。

「……死者と手紙のやり取りが出来る？」

「はいそうです。この葉書に亡くなった人の名前を書き、手紙をし

たためておくと次の日には返信葉書に返事が来るんですよ。」「
そう言つて葉書を1枚渡した。バッテラは震えながら葉書を持つ。
「どうです？貴方の恋人は何年も昏睡状態で何を言つても反応すら
してくれなかつたでしょうけど、この葉書なら彼女と手紙ですが
やり取りが出来ます。」

彼女が応えてくれるんですよ？貴方に。欲しくありませんか？」
そう言つとバッテラは俺にすがりつき

「売ってくれ！！幾らでも出す！！」

と言つてきた。ここでコイツが破産する金額を言つても良いが、そ
れではあまり収益にならないから

「ではこの葉書を500枚セットで500億ジエニー。」

また欲しくなつたご連絡下さい。」

と葉書500枚の代わりに500億ジエニーの小切手を貰つた。

バッテラは急いで彼女の名前を書き、手紙を書いている。

これでバッテラが生きてる限り金をムシリ取れる。葉書を買つたため
に仕事も精を出すだろうから取引は長続きするだろう。

500日、つまり1年半あればバッテラの会社なら500億ぐら
いは軽く稼げる。

これでバッテラが生きてる限り金は手に入る。

もしも病氣になつたら大天使の息吹で治してやるよ。

それに魔女の若返り薬も飲ませればかなり長生きもさせられる。

彼女の代わりに長生きしてくれよ？

俺のために。

54 さらに原作よろこそ自由(終)

それでは最終段階と行くか。

ヨルビアン大陸、バルサ諸島の南端にゲートで移動した。
そして円を1キロぐらい広げてくまなく探す。

しばらく搜索していたらヒットした。しかしヒットしたのは女王ではなく魚だかコウモリだか分からないが何か混ざりあったような兵隊蟻だった。

丁度人間の兄弟を襲っていたが何もせず、巢を突き止めるために尾行した。

人間の兄弟を殺した兵隊蟻はその死体を持って移動し、大きな洞窟に入った。円で洞窟内を搜索したら内部には大量の卵や女王らしき生物がいたので洞窟に侵攻。

まだ組織体系は成って無いのか兵隊蟻が散発的に防衛のために攻撃をしてきたがまだ念も知らない生物でしかないので皆殺しにした。
ついでに天井にぶら下がっている卵群も破壊した。

そして残るは最深部にした女王だけになった。女王は何かわめいていたが分からないので無視して首をハネた。

念のためその後体を切り分けてガソリンをかけて焼いた。骨すら残らず焼いたので多分大丈夫だろう。

ちなみに狩りに出掛けていた兵隊蟻も殺した。女王をわざわざ即死させずになぶりながら殺したから助けを呼んだのだろう、結構な数の兵隊蟻がやって来たので皆殺しにした。

それでも女王をなぶり、1日待っても何も来なくなつてから女王も殺した。

これでカメラアnant編も無くなっただろう。

そして長らくお荷物だったキルアとの関係にもピリオドを打つ。

ゾルディック家には念のために念をキツチリ教えたし、多少は経験も積ませたとして契約終了を電話で宣言した。

シルバからは

『分かった。ご苦労だった。』

との了解を得たので行動を移す。

翌日、

「キルア、写真撮ろうぜ。」

と声をかけた。

「写真？何で？」

キルアは不思議そうに聞き返す。まあいきなりだもんな。

「まあ良いじゃねえか。」

グリードアイランドも無事クリア出来たし、お前の念の修行も粗方終了した。それを記念してだよ。」

と言って誤魔化した。

その後写真館にいった正式な写真のように写真を撮った。キルアはこんな初めてらしく緊張していたが、何枚か試し撮りして慣れたのか最後は俺とのツーショットで笑顔で写っていた。

そして俺は縁切り鉄のカードをコピーして実体化させてその写真を切った。

縁切り鉄の効果は会いたくない人の写真を切るとその人と2度と会わずに済むようになる。

しかしその写真に写っている人全てに有効（本人は除く）。

だからわざわざ正式に写真館にいった万が一にもキルア以外が写ら

ないようにした。

これでキルアともオサラバだ。

二度と会う事は無い筈だ。ようやく自由だ。

翌日、キルアはホテルをチェックアウトしていた。どうやら深夜に出ていったらしい。

これから実家に帰るのかハンターとして動くのかは分からないが、これで俺との縁は完全に無くなったから問題無い。

ちゃんとゾルディック家から許可も得たんだから狙われる可能性は低い。誰かが俺の暗殺依頼をしない限りは。

よし、これで俺に関係するフラグやイベントは全クリした。後は有り余る資産を使い隠居生活だ。

出来るならこの世界でも北郷商社でも創設したいがこの世界でトップを取ると面倒だからな。

まあ、いざというときはバッテラの死後に代理人を立てて会社を操るのも良いな。それなら俺が狙われる可能性は低いし。

まだまだ可能性は無限だ。

何せ俺はまだ12歳。

小6の年齢だからな。

54 さらば原作よろこそ自由(終)(後書き)

この小説を最後まで見ていただきありがとうございます。

次回作では北郷が今度はNARUTOの世界に転生します。

タイトルは『リアル忍者 北郷』です。

あんまり見せ場や北郷のセリフがありませんが北郷らしく動きます。
近日中に公開する予定ですのでよろしければこちらもお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7542s/>

狡猾なゴン

2011年8月8日07時30分発行